
ジンニスタン 砂漠と海の物語

二宮酒匂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジンニスタン 砂漠と海の物語

【Nコード】

N6066Q

【作者名】

二宮酒匂

【あらすじ】

古代ギリシアに似た人族の文明と、中世オリエント世界に似たジン（砂漠エルフ）族の文明が戦争を続けている世界。小国の王子ペレウスは人質としてジン族の帝国にとどめられ、ジンの姫ファリザードにいたづらられて屈辱の日々を送っていた。仲間のはずの同じ文明の人族までがかれをいじめの標的にしている始末。幸いにして折れない意志にだけは恵まれたペレウスは、逆境をはねかえすべく努力をはじめ、それを見事に結実させる。かれをみる周囲の人間の目も変わり始める……しかし、戦争は思わぬほうへと転がっていくの

だった。砂と大海が舞台、異種族間恋愛のロマンティック・ファン
タジー。 どん底からはい上がっていく成長系 戦争 恋
 じわじわ盛り上がります ヒロインの絵を一話冒頭に貼りつけ
ました

1・最低の出発点(前書き)

1・最低の出発点

作画・Garuku様 無断転載禁止

> i 2 2 4 4 4 — 3 0 0 5 <

かれらは残忍であり、かれらは狡知に長ける。

かれらは傲慢であり、かれらは意地が悪い。

かれらは恨みぶかく、かれらは忘れない。

それらの風聞は真実であっても、真実のすべてではない。

かれらは強く憎悪する一方、愛するときも深く愛する 種族の
特性であり、その情愛はきわめて濃い。

褐色の肌と優美な容貌をもち、魔法の技術と長い寿命をもつ種族
である。

古代ファールス末期の人族の賢者、イブン・アリーの「ジ
ン族の生態」より。

かれはジン族による新ファールス帝国が建国されたとき、
ジンを分析したこの書を著したかどで 剣 によって殺された。

その赤レンガづくりの城館は、オアシス都市イスファハーンの中
心に位置していた。

庭にはナツメヤシやイチジク、レモンにオレンジの木、薔薇や水
仙やチューリップやキンポウゲが満ちあふれている。眺めは美妙に
して目を楽しませ、樹花の香気は鼻を甘くくすぐる。訪れる者はこ

の麗しい庭園にみとれて飽かず立ち尽くしていることだろう。

……ただし、猛烈に暑い午後の日差しの中でなければだが。

(なんの用だか知らないがさっさと終わらせてくれ、ファリザード)
炒りつけるような日光に、十二歳になる王子ペレウスはうんざりしきっていた。

ゆるく波うつ黒い髪の毛、黒い瞳　少女のような顔立ちと細い体格で、美少年といってもよい繊細な風貌の少年である。ただし、強情そうなしかめ面で口をひきむすんでいることが多く、そのために険のある顔立ちとなっていた。

汗が目に入りかけて、ペレウスは眉を寄せてまつげをしばたいた。

(ファールス帝国の内陸部だと、太陽さえも意地悪い)

いや、客観的にはイスファハーンは美しい。富強をほこるファールス帝国においても有数の、豊かなオアシス都市だ。
天をつくレンガ造りの尖塔や、いくつもの大理石のアーチ門をもつ館、玉ねぎ型の屋根の寺院がたちならび、建築の都としてつとに名高い。

だが王子ペレウスにはどうでもよかった。ペレウスはたいいとも不機嫌だった。かれにとって、この異国の都市イスファハーンは蛇の巣も同様なのだった。

この一年、不快きわまりない日々を強いられてきたのだ。遠い地からきた少年使節のひとりとしてここに送りこまれて以来ずっと。

(砂漠の太陽とファリザードの悪意とどちらがきついかわからないな。……とにかく、こんなところは嫌いだ)

かれと同格の使節である、周囲にいるほかのヘラス人少年たちも、苛立ちをかるうじて隠す表情になっている。

ただしペレウスとちがい、かれらの面には同じくらい恐怖の色が濃かったけれども。

ヘラス諸都市からファールス帝国へおとずれた賓客　じつは和平交渉のあいだの人質　であるヘラス人の有力者の子たちは、冷汗と暑さによる汗の双方をかきながら戦々恐々と庭に立ちつくしているのだった。

人質たちを立たせた前では、ファリザードが快適にねそべっている。

その少女は木陰にひんやりした大理石の寝台をはこばせて、小さな身にまとっていた透けるような薄物を脱ぎ、大胆にさらした肌に香油を塗らせているのだった。

ファリザードはペレウスと同年齢の十二歳。ジン族の大貴族の娘だった。この館は、イスファハーン一帯をおさめる彼女の父の城館なのである。

「最近」

女奴隷にマッサージを受けながら、美しくも幼いジンの姫はとうとう口をひらいた。

「ヘラス側の傭兵たちが、この一帯を荒らしまわっている。わが帝国とは休戦中じゃなかったのか」

人族のどんな赤子よりもなめらかな小麦色の肌が、香料入りのオ

リーブ油につやめいている。その一方で、庭にたたさされている少年使節たちをみまわす金色の瞳は辛辣な光をうかべ……花弁のような唇からでる言葉は毒をふくんでいた。

「おまえたちヘラス人というのが救えない愚者であると、また証明されたな。あと何人殺されたら気が済むのだらうね。千人？ 一人？ それともヘラスの都市国家のどこかひとつ、皆殺しにしてみせなきゃだめなのか？」

ファリザードはしゃくにさわるいいかたをして、呆れたように頭をふった。はちみつ色の短めの髪がさらさらと揺れる。いつもの、人族をごく自然にみくだす態度のほかに、怒りの気配がみえかくれていた。

（おまえが戦っているわけじゃないだろ）と心中で反発するペレウスをよそに、ファリザードは玻璃の器に手をのばし、盛られた干しイチジクをとって白い前歯にくわえた。それから、もごもごといった。

「まったく、休戦協定をそちらから破るなんて、天井知らずの愚行にしか思えない。それとももしかして、西方住まいのアーダムの子（人間）らは、この戦争をつづけて勝ち目があると思っているのか？」

ファリザードの嫌味に、ペレウスは気づかれないように拳をにぎりしめた。

（戦ったらヘラスはきつと勝つ、第一次ファールス戦役も第二次ファールス戦役も、自由の土地がファールス帝国を打ち負かしたじゃないか。

戦ったら……父上や叔父上がかならずおまえらみんな殺してくれ
る)

だが、そう考えたとき、父王の声が耳奥によみがえってきた。
あの勇敢な父王が苦渋の面持ちでぼつぼつ語った話が。

『わかってくれよ、ペレウス。飾らずいおう、おまえは和平交渉の
あいだ人質として帝国に送られる。こちらから講和を打診したのだ
から、かれらの要求はもつともだ。

講和はぜつたに必要なのだ。

ヘラスがファールス帝国に、最終的に勝てる見込みはない。

よいか、ペレウス、おぼえておきなさい。今いちど、ヘラス諸都
市をすべて連合させたとしても、帝国の人口はこちらの十倍をかる
がると超え、その富は二十倍にも達しよう。

まして、ヘラス諸都市は、この敗亡のまぎわにあっても連合した
とはいいがたい。結束はわれらの苦手なものなのだ』

…… 結束が苦手　ここへきて、それは痛いほど身にしてみた。苦
々しく、ペレウスは眉を寄せて、セレウコスを見やった。

セレウコス。ヘラス第一の都市アテーナイの、ほかより年長のそ
の少年は、ふだん指導者を気取っていばりちらす態度からは想像も
つかないへどもどした様子で、ようやく反論をはじめた。

「待つてくださいよ、それは本当にヘラス側の傭兵ですか？」

「わが帝国の兵が、なぜわが領民を殺す！？」ファリザードが、猫
のようにしなやかで華奢な上体をがばつと起こした。

ふくらみはじめた乳房の先に桃色の乳首がつんと尖っているのが
見えた　が、目のやり場に困るなどと照れている余裕はヘラス側
のだれにもなかった。

フアリザードの激怒の声がひびいた。

「やつらはわが父上の民の穀物と財貨と家畜を持てるかぎり奪って持てないものはみな焼いている！ わが民ごと焼いているんだぞ。同じアーダムの子らであっても、ヘラス人よりずっと従順で良き民をだ。

掠奪、強姦、破壊、拉致、おまえらヘラス人が、この戦争でヴァンダル人の畜生どもを雇ってやらせてきたことをぜんぶやっているんだ」

「盗賊だつてそのくらいする。帝国のこんな内陸まで、ヘラスやヴァンダルの兵が来るもんか」

ペレウスは反感をおさえかねて、ぼそりといった。

だがつぶやきは、フアリザードの尖った耳にしつかり吸いこまれたようだった。まだ子供ながらぞつとするほど整った美貌のなかで、金の光を放つ瞳が剣呑にほそまった。

「だまれ、小便王子！」

ペレウスのゆるく波うつ黒髪の下で、男子にしては繊弱な白い細面がかつと燃えた。

数瞬のあいだ周りが沈黙して、それから笑いがさざ波のように広がった。ぎこちない笑いではない。遠慮ない笑いで、しかも徐々に笑い声が大きくなっていく。周囲の少年たちは悪意をこめてペレウスをあざけていた。

死ねばいい、とペレウスはうつむいて唇を噛んだ。

すべての蛮族バルバロイは死ねばいい。ヘラス諸都市を滅ぼそうとするファールス帝国のジン族。別名を暗黒エルフ、または砂漠エルフとい

う　はもちろん、「十字軍」などと唱えてファールス帝国に喧嘩を売り、ヘラスを大戦争にまきこんだヴァンダル人もも。

だが、いまのペレウスにとってそれ以上に息の根を止めてやりたいのは、ここにいる同じヘラス人、民主政の都市アテーナイや都市テーバイの豚どもだった。

セレウコスがとりわけ盛大に笑いながらファリザードに話しかけた。かれは明らかに、ペレウスをみんなで笑いものにすることを、少女をなだめる好機として扱っていた。

「小便『王女』のことを許してやってくれませんか。ほら、ご存知のとおり、こいつは顔が女の子みたいなことだけが取り柄なんですから」

その言葉に、少年たちの笑いはさらに沸き立ったが、ファリザードは微笑もしなかった。

「ペレウスといったな、その小便王子。上の口からなにか出すときは、小水よりは価値のある言葉を排出しろ」異論を唱えられたことがよほど腹にすえかねたようであった。

「焼き討ちされた村落では、ヴァンダルの『騎士』が身につけるような全身甲冑を着込んだ賊徒が目撃されている。そんなものをただの賊が着ると思うのか？　昼は日光で蒸し焼き寸前、夜は氷漬けになりそうな沙漠を、金属の鎧をがちり着こんで渡ってくるのは、狂人でなければヴァンダルの兵だけだ。

わかったら口をつぐめ、小便。二度とそっちからわたしに話しかけるな！」

きつくさげすむ口ぶりで吐き捨てる同年齢のジンの少女の前で、ペレウスは屈辱に真っ青になった。

が、ファリザードを香油で按摩していた髪の毛の長い女奴隷が、顔をあげて、気づかれないよう一瞬だけペレウスに視線をおくり、片目でぱちりと瞬きしてみせた。

奴隷の娘　ゾバイダの手のひらが、ファリザードのくびれが目立ちはじめた腰のあたりを丹念に這いまわりはじめる。ファリザードが、ん、と甘い声をもらして陶然と弛緩した。くすぐったげに両足を交互にぱたぱた上げ下げし、彼女の種族をあらわす尖った耳をぴくぴく動かす。ファリザードが、むき出しの丸いお尻までもじもじよじりはじめると、さすがに見えていられなくなつて赤面した少年たちは気まずげにそっぽを向いた。

執拗で恨みを忘れず、狡猾で残忍で尊大で、気まぐれなくせに激しい　他の種族がささやく暗黒エルフジン族の悪評のなかでも、淫乱という評判はこのほか有名である。

この砂漠の豹のような美しい種族は、長い長い寿命の大半を、戦いか肉欲にふけるかで過ごすのだと。

(外見だけがきれいで、中身はねじけているのがジンってやつらだ)

ファリザードへの恨みごととはともかく、ペレウスは周囲の注意が散つたことにほっとし、ゾバイダに感謝の目を向けた。歳上の娘は、かすかに笑みを浮かべてかれに応えた。

奴隷ではあるが、ゾバイダだけがいつもよくしてくれる。ここに来て最初に、彼女をかばう出来事があったからだろう。

もっともそれは、同じヘラス人の少年たちからまれる発端にもなつたのだが……

……

フアリザードが賊のことでヘラス人たちを呼びつけてなじったのは、単なる当たり散らしであつたらしい。

按摩のうちに、大理石の寝台の上でくうくう寝息をたてて昼寝しはじめたジン族の姫を残し、やれやれといった面持ちで少年たちは館のほうへ引き返した。

だが薔薇のつる這う赤レンガの塀をまわりこんだとたん、ペレウスは背中を突き飛ばされた。

前のめりにたたらをふんでふりかえると、セレウコスが取り巻きとともにいやらしい笑みを浮かべていた。

「おいおい、王子さま、あの奴隷女に何をしたんだ。熱心に色目を送ってきていただろう。すました奴だと思つてたが、だいぶ手はやいな。」

色遊びは故郷の島でおぼえてきていたつてわけか」

ゾバイダとの目線のやりとりを気づかれていたようだった。

（無視しなければ）ふいと顔をそらして足早に歩みさるうとした……が、すでに囲まれていた。セレウコスがにやけ顔を肩越しにぬつと突き出して、「あの奴隷とはもうやつたんだろ、本当のことをいえよ」と歯をむきだした。

ペレウスは勇気をふるいおこして、セレウコスをにらみつけた。

「ぼくはそんなことはしない。彼女とはそんなことは一切ない。セレウコス、あんたも背負つてる都市の体面というものを考えたらどうだ。」

そついう……あちこちに……彼女にまで迷惑がかかるようなおふざけを口にするな」

また殴られるかと思った　　が、セレウコスは大仰に肩をすくめ、「みんな聞いたか。こいつらは清らかな仲だそうだが」と声をはりあげた。

まるで友達として扱ってでもいるかのように、セレウコスがペレウスの肩に腕をまわしてくる。

「やってないだと？　嘘つけよ。おまえと奴隷女がいつしよにいるのを見たやつがいるんだぞ」

ペレウスはどきりとした。

それもまた事実だ　　ゾバイダとは、人目を盗んでたまに落ちあっていた。

セレウコスたちが邪推するようなことはない。しかし、数歳ほど歳上の、異国の少女とささやかな秘密を共有していることに、まったく胸の高鳴りを覚えていないわけではなかった。

それでも、ペレウスは重ねて言い切った。

「してない！　彼女のことですれ以上妙なことをいうなら……」

「……『ジン族にいつつける』。臆病者の言葉は聞きあきたよ。」

ペレウス、ペレウスよ、俺にはわからんな。あの若い奴隷はなかなかそそる身体じゃないか。肌はオリーブ色で腰にはむっちり肉がついていて、遊び相手にはちょうどいいだろ。

しかも、どう見てもおまえに惚れてるぜ。おれたちのおかげだ、感謝してほしいね。

それでだ、なんで手を出してないんだ？

ああ、わかった。おまえ童貞だろう。それで母親以外のおっぱいを吸うのが怖いんだな」

どつと嘲笑がわいた。ファリザードの前で笑われたときよりもっと盛大な笑い。

真つ赤になるペレウスの横で、セレウコスが「もしかして、信じられないが」と、はつとばかりに目を見開いて唇をすぼめた。

「まさかとは思つが、まだ精通してなかったりするの、おまえ？」

ペレウスは下唇をかみしめた。

（こんな下劣なやつが世の中にいるなんて、ミュケナイの王宮にいたころは思わなかった）

いつその場でむしゃぶりついて叩きのめしてやりたい。だが無理だ。

セレウコスは十五歳。集まった者のうちでは最年長で、身体もちばん大きい。

十二歳のペレウスが取っ組み合いで勝てる相手ではなかった。それに、ペレウスに味方するものはいないが、アテーナイのセレウコスは取り巻きが何人もいるのだ。

やりもしないうちから怯えているのではない　やったのだ、一度。

そして、数人に取り押さえられてさんざんに殴られ蹴られ、羊の糞を顔に塗られた。最後まで抵抗の意志を失わずにらみつけているのが精一杯だった。

（宮殿にいたころ、地理や詩歌じゃなくて、拳闘や格闘パンクラチオンを学んでおけばよかった。もっと市井に出て、世の中がこういうものだとしておけばよかった）

ペレウスは、ヘラス都市国家のひとつ、クレタ島にある都市ミュケナイの王子である。ミュケナイは、都市アテーナイに取って代わられるまでかつて「紺碧の海」を支配していたのだ。ミュケナイ王族の矜持は『ヘラスでもっとも古い血筋』という由緒であり、それはペレウスも誇りにしていた。

だが、ファールス帝国のジン族や、ここにいる民主制の都市の息子たちは、珍種の動物ほどにもその血に敬意を払わなかった。いや、セレウコスたちは、かえって悪い方向にその血をあげつらう傾向があるくらいだ。

ペレウスは狙い打ちにされていた。

.....

最初からそうではなかった。一年前、和平交渉の人質としてイスファハーンに来たときは、まだ。

いや、民主政の連中とは互いに関心をもっていなかったというのが正しいが。

しかしそのころから、セレウコスの我が物顔の態度は目についていた。偉大なる都市アテーナイ　ヘラスの名声を高めた都市。人質にされるくらいだから、そのアテーナイの有力者の息子なのだろう。かれはその母都市の威勢をかさにきて、控えめにいつても驕りたかぶっているように見えた。そしてまた、実際に都市テーバイや都市コリントスといったアテーナイ傘下の同盟都市からきた少年たちは、セレウコスの機嫌をそこねまいとおもねっていた。

いつしかかれらは異国にあって徒党を組み、ジン族の目の届かな

いところでは好き放題にふるまうようになっていた。

ヘラスが恋しくてたまらないペレウスたち一部の者とちがい、かれらはほとんど帝国に馴染んでいった。それは悪い意味での順応であった。異国の酒を浴びるように飲み、街に繰り出して騒いだ。自分たちがジン族にでもなったかのように、異国の奴隷や下民を徹底的にさげすんだ。そして、とりわけ異国の女を好んだ。セレウコス、ファールス帝国の美しい女や少女たちに関心をしめした。

娼婦を買うだけならまだしも、セレウコスはイスファハーン公の所有する奴隷にまで手をだそうとしたのだ。黒髪のゾバイダに。

ある日、屋敷内で、アテーナイの少年がゾバイダに言い寄っているところに出くわし、ペレウスは顔をしかめた。セレウコスはどう見てもぶどう酒の飲み過ぎで酔っ払っており、ゾバイダは身にまとった布をにぎりしめられて離してもらえず、円柱に押しつけられておびえていた。そのように見てとり、ペレウスは声をかけた。

『すこしお酒を過ぎしているよ、セレウコス。そういうことはやめたらどうだろう』

最初は穏やかに話しかけたのだ。

しかし、撃肘するものがそれまでいかなかったセレウコスの増長ぶりを甘くみていた。かれはきよんととしてペレウスに目をむけ、ヘラス人とみてとるや、たちまちに顔を怒りで赤黒くした。

『なんだ、ちび。アテーナイの代表できたおれに意見しようというのか。道理をわきまえない貴様はこの田舎者だ？』

『ミユケナイのペレウスだ』

『ミユケナイ？ ああ、昔、王妃が牛とまぐわって怪物を生んだところだな。おまえも人の恋路にちよっかいを出さず、どこかの牝牛を相手にしている』

伝わる神話まで持ち出されて挑発され、かちんときて、ペレウスは言い返したのだ。

『アテーナイの民主政が影も形もなく、その土地にレンガの建物すら数えるほどしか建っていなかったころ、ミユケナイはすでに大船団で紺碧の海を制覇して、クレタ島に大理石の宮殿を築いていたんだ。』

成り上がり者ほど、成り上がったのちは下々への寛容を忘れるのだな。品位のそなわった真の支配階級であれば奴隷にやさしくしてやるものだ。まして彼女はおまえの持ち物じゃない。無理を強いようとするならジン族を呼んでくるぞ』

……ゾバイダを助けたことを、まちがっていたとはペレウスは決して思わない。

けれど、やはり子供だったのだといまならわかる。

セレウコスはいったん赤黒い顔のまま引き下がったかにみえたが、恥をかかされたかれが復讐しにくるだろうことを、もっとわきまえておくべきだったのだ。

それから数日後の夕刻前、酒神バツカスにかけて仲直りしようぜ』と、セレウコスはぶどう酒の革袋を手に、書をつみあげたペレウスの部屋に来たのである。

『悔いているんだ。おまえのいうとおりだよ、あんなことをするべ

きじゃなかった。これからはつつしむことにする。ヘラス人同士で仲違いするのもよくないよな、これからの友誼のために酒を酌み交わそう』

ペレウスも最初は警戒していた。だが、セレウコスの押しは強く、いかに自分が反省しているかを、涙までにじませて切々と説いたのだ。

（不品行が故国に伝わるのが怖いのだろうか）とペレウスは推測をめぐらし、そして、最終的にかれの言葉を信じた。愚かにも。

たぶん、セレウコスがこういったのがとどめだったように思う。

『おまえと飲み交わすからと、あの奴隷の娘に謝るついでにもらってきた酒だ。あやしいものなんか入ってないよ、ほら、先に飲んで見せてやるから』

……たしかに、ぶどう酒はただのぶどう酒だった。

あとから知ったことでは、ゾバイダにもらったというのは嘘だったが。とにかくそのとき、ペレウスは、じゃあ一杯だけならと金の杯をあおったのだ。

その酒は美味しかった。そして、故郷の味がした。

セレウコスがいった。『知っている味だろう？ そいつはミユケナイからイスファーン公に贈られた酒らしいぞ』

子供のペレウスは、父王には水で薄めたぶどう酒しか飲ませてもらえなかったが、このとき飲んだ酒は原酒の濃厚な風味だった。

ただ一杯で白い頬を染め、とろんと瞳を溶かしたペレウスに、セレウコスは裏表なさそうな明るい笑い声をあげ、『そら、うまいだろう。もっと飲んでくれよ』と、自分も飲みながらどんだん注いだ。レモン水で割るのもいいぞ、こっちはシナモンの粉を入れて燗をつ

けて飲むやり方だ　　などなど、手をかえて次々ペレウスに飲ませ
てきた。

ペレウスは、警戒心がほぐれていくのを感じていた。いつしかセ
レウコスに心を許して、勧められるままに飲んでいた。いちどアテ
ーナイの図書館には行ってみたいんだ、あそこの蔵書はすごいって
聞く　　泥酔状態となって、そんな打ち明け話をするほどに。

尿意をおぼえて、便所に行こうとよろめいて立ち上がったときだ
った。『どこへ行くんだ、もう飲まないのか』とセレウコスが聞い
てきた。『うん、そろそろ……』そう答えたペレウスに、セレウコ
スは『ふうん、そうか』とつぶやくと、いきなり飛びかかってきた。

驚くひまもなかった。十五歳にしては屈強なセレウコスは、生ま
れてはじめて原酒を飲んでふらついていたペレウスを、たちまち組
み伏せた。

かれはのしかかり、ペレウスの腹にどすんと尻を下ろして動きを
封じると、片手でペレウスの口をふさいできた。その一連の動作は
いやに手慣れたものだった。そしてペレウスの間近に、ごつい顔を
近づけて笑った。鼻息荒く鼻孔がふくらみ、その目は暴力の快感と
……恐ろしいことに情欲にきらついていた。

『実をいえばなあ、男娼を抱いたことくらいはあるのだ。そう悪い
ものでもなかったぞ。おまえの顔の造作は、あのとときの男娼よりず
つとおれの好みだ』

そのとき感じた恐怖をなんといえはいいのだろう。ペレウスは酔
いが消し飛ぶほどにおののいた。

ヘラスにはたしかに男が男児を愛する風習がある　　だが、ペレ
ウスは、自身がセレウコスの寵童にされるなどまっぴらだった。必
死にもがき、口をふさいでくる手に爪を立ててかきむしった。ひっ

かかれる痛みを気にもせずセレウコスはまだ片方の手を伸ばしてきた。肩口にきたその手は、乱暴にペレウスの長衣ヒメタイオンを引っ張り、はぎとろうとした。

『おれを奴隷女の前でこけにしゃがった罰を与えてやる。これなら人に告げ口できるものじゃあないだろう？』

奴隷にはけ口を見出すのがだめなら、王族が肩代わりしてくれよ。「下々への寛容さ」でもってな』

腹の上に座りこまれていて動きがとれず、ぶどう酒を飲み続けたことにより膀胱は圧迫されていて……そして、ほかのどんな屈辱より、犯されることだけはいやだった。

漏らした。

ペレウスが尿でじんわり腰の前の布を濡らしたとき、すぐにはセレウコスは気付かなかったが、湿った感触が尻に伝わったことで飛び上がるようにしてかれから離れ、罵った。

そして、

『みんな見るよ、これがミュケナイの神々しき「ヘラス最古の王族」だぞ。酒をたつぷりきこしめしたあげく、服を着たままだらしなくお漏らししやがった』

暴れるペレウスを力まかせに引きずり、セレウコスは部屋から出て叫んだ。庭で格闘の練習をかねて取っ組み合いの遊びをしていたヘラス人の少年たちの前に、かれを放りだしたのだ。

ペレウスが小便を漏らしたという話は、セレウコスと取り巻きたちによって次の日には屋敷じゅうに広められていた。

どういふわけかヘラス人だけでなく、ファールス人までが知るようになっていた。

ファリザードによって、それをペレウスは教えられた。

ヘラスの少年たちに応接しながら、毎日ものうげに長椅子に寝そべり、話を聞き流しながらお菓子をかじっているだけだったジンの姫は、その日は身を起こしていた。

そしてペレウスを見るや、『酔っ払って漏らしたんだってな』と手をつって嘲弄したのだ。

ジンというのは、意地悪い種族だという話だった。

傷ついており、それでも誰かに真相をいう気になれなかったペレウスは、その瞬間からファリザードをセレウコスの方に憎み、そしてジン族全体をあらためて憎んだ。

.....

思い返すだに、屈辱が酸のように胸を焼く。

ペレウスはあごをひいてぎりとお歯をかみしめた。それは強情なかれの癖だった。

（腕力で勝てなかつと、何度袋叩きにされようと、かけらも気弱になつてたまるものか）

その決心の矢先、セレウコスが笑顔を、こちらの鼻先をかじりとりそうなほど近づけてきた。

「ところでペレウス、ここしばらく、おれたちからずいぶん逃げ

まわってくれたじゃないか、なあ」

間近からペレウスは憎悪をこめてその顔をにらみつけ、昂然と吐き捨てた。

「おまえたちといっしょの場になどいられるものか。魂が腐る」

いささかもひるんだ様子のないかれの罵りを受けて、セレウコスの笑みが醒めた表情になる。

「……あいかわらず愚かで生意気な野郎だな」

いきなりの殴撃を食らう 腹部 予想して腹を固めていたため苦痛は軽減できたが、それでも息がつまる。ペレウスは体を折つてうめいた。

「なにをふらふらしてんだよ、坊主」セレウコスの取り巻きたちが追従してさんざめき、ペレウスの肩をどやしたり頭を小突いたりしてくる。

「何日かな？ 四日かそのくらいは、おまえの綺麗な顔をまともに見ていなかったぜ。そろそろ会いたくてたまらなくなっていたところさ」

「おいおい、おまえやっぱこのペレウスに妙な気を起こしてたんだな」

「まあまあ、わからなくもないさ。この小便王子ときたらついでいるのが怪しいくらいひよろひよろ野郎だからな」

投げかけられる嘲笑の渦中で、ペレウスは腹をおさえて貝のよう

に口をつぐんだまま、鼻にしわを寄せた。ひとつ確認する。

（こいつら民主政の都市のやつらは、ヘラス人だがぼくの敵だ）

それはつまりこのイスファハーンにいるヘラス人のうち、半分が敵ということだった。

のこり半分は王政の都市からきた子たちだったが、かれらが味方というところというわけでもない。

王政都市の子らは、たまに気の毒そうな目をペレウスに向けはするものの、いっさい関わってこようとしなかった。

実際今日まで、かれらはまったくかばおうとしてくれなかった。いまもだ。目をそらして先に行き、ふりかえろうとすらない。

ヘラス第一の都市アテーナイの者の機嫌を損ねるなど自分たちの都市から言い含められているのかもしれないが、それにしても……

（いや、他人になにか期待したり、信頼したりするのが間違いなんだ）

ペレウスはいきなり地を蹴って人の隙間をぬうように囲みを飛び出した。伸びてきた手を払いのけて逃げる。足だけは速かった。服装は、以前はヘラス風の長衣を身につけていたが、からまれるようになってからは、つねに走りやすい半袖の短衣にしていた。

おもしろがって民主政都市の連中が追いかけてくる。

ペレウスは庭に流れる何条もの細いせせらぎをとびこえ、館に背をむけて灌木の木立に走りこみ、齒を食いしばって走りつづけた。

（民主政都市のやつらは敵だ。ジン族とおなじように敵だ）

敵には、いつか目にも見せてやる。

(戦い方を、だれかから学ばなければ)

走るうちにペレウスは決意していた。これまで、ぼくはあまりに無為に生きすぎた。歌や物語や学問なんて、多少知っていたからどうだというんだ。

歌にうたわれる英雄のような勇士に、自分がならなければ さ
しあたり、セレウコスを叩きのめせるくらいの。

いつかは將軍である叔父上にかわって戦場で兵をひきい、ファールス帝国の脅威をヘラスから一掃できるくらいの。

1・最低の出発点(後書き)

ミクロビーンズ(まめちしき以下の話) 第一話

ファールスは「ペルシア」の語源になったイランの一地方名。

ペルシア人みずからは、アールリア人の地という意味の「イーラーン」の呼称を古くから使ってきた。

2・挽回開始（前書き）

王子ペレウス、ゾバイダから紹介を受け
市において出会いを果たすこと

2・挽回開始

イスファハーン公の庭園は常識はずれに広く、しかもいちいちせい驚をこらしてある。

木立がひらけた場所に置かれた、紅玉髓をあしらった黒檀の長椅子。足元には花々が咲きにおい、小鳥たちの歌が降ってくる。

そこに、ペレウスとゾバイダはとなりあって座っていた。

放されているノロジカの群れがペレウスの目の先でぱつと散って逃げた。

木立の中からのそのそ歩いてきた一頭の雄ライオンが、ペレウスとゾバイダの前にねそべってあくびをしはじめた。

「獅子シールの泉」から、イスファハーン公の娘のために連れてこられたというライオンの牙は長く鋭かった。だが、ペレウスは怯える気にはならなかった。

この一年で、いいかげんファリザードのペットには慣れてしまっていた。それにそのライオンが、赤子のころから飼われているうえ去勢されているため、非常におとなしくて人馴れしていることも知っていたのだ。

猫のように芝生でごろごろ転がっている獣を指さして、長い黒髪を後ろでたばねたゾバイダがたずねてきた。

「ヘラスにも、いますか、ライオン？」

「いたと聞くね、昔は。古い壺に、絵が、描かれてるよ」

となりあって腰かけたペレウスとゾバイダの会話は、ややたどた

どしいものだった。

なぜかというところ、ペレウスはファールス語を使い、ゾバイダはヘラス語を使っているからである。

ペレウスは、この十五、六歳ほどの女奴隷とはたがいに言葉を教えあっていた。

当たり前だが、ジンも人間も含めたファールス人は、自分たちのことば……つまりファールス語で話す。

ただ、少年使節たちを応接する役目を任されているというファリザードだけは、流ちょうなヘラス語で会話している。が、ペレウスにはそれはむしろ、ヘラス人たちにファールス語を覚えさせないためではないかと思うときがあった。

なお、セレウコスとその取り巻きたちは、かれらなりにファールス語をいくつか覚えていた。「やろうぜ」「酒をもつてこい」「おれたちはヘラスの重要人物なのさ」などなど、奴隷や娼婦に向けてという言葉。

ペレウスはそれよりはずっと役にたちそうな言葉を学んできた。奴隷であるゾバイダの知識のかぎりではあるが。

（気づかれないうちにファールス語を完璧に覚えて、必ずヘラスのために役立てなければ）

なんとといっても敵国の重要地域のひとつなのだ、ここは。街角のささやきや風聞からさえ、貴重な情報があるはずだ。その意味で、ゾバイダのレッスンは貴重だった。

だが、この秘密のあいびき自体をいつしか楽しむようになっていく自分があるのも確かだった。

（すべての蛮族は死に絶えればいい、でも……）

ゾバイダだけは別だ。

同じヘラス人少年たちに嫌がらせや殴打を受ける日々のなかで、ペレウスの心の支えになっっているものがあるとしたら、それは故郷への愛と、ゾバイダの示してくれる親切だった。

こっそり言葉を教えてくれることだけでなく、彼女はことあるごとにペレウスのために便宜をはかってくれた。

たとえば、ペレウスを食事の席につかせまいとセレウコスが努力していた時期があった。口での嘲弄や挑発のほか、食卓の下であざができるほど足を蹴ったり、隙をみて虫や汚物を皿になげこんできたりという子どもじみた嫌がらせ。だが、人を心底うんざりさせるときに、大人びたやりかたである必要はない。ペレウスはじゅうぶんにうんざりして、セレウコスが飽きるまでおなじ食卓につかないことにしたのである。

そのときも、ゾバイダが食べ物差し入れてくれたので、ペレウスは飢えずにすんだのだった。

ペレウスがゾバイダを見てみると、彼女はそれに気づいて、風に流れる髪を後ろで紐にまとめながら首をかしげた。肉感的にぼってりした唇が微笑をつくった。

「どっしました?」

「あっ……いや……」

いつも世話になっているね、と礼をいえばよかったのだが、あやうく「きみの笑顔ってきれいだ」と痴れ者じみたことをいいそうになっってしまう、ペレウスは顔を赤らめた。

足元のキンポウゲをサンダル先のでつつきながら、照れ照れと考

える。

いつかミケナイに戻るときに、どうかして彼女にいつしよに
来てもらえないだろうか。彼女をゆずってもらえるなら、あの憎ら
しい性悪わがまま娘のファリザードに頭を下げたっていい。

そこで、顔をひきしめた。

(いけない、こんな浮ついたことを考えていたら。
ぼくはセレウコスみたいな人間にはならないぞ)

「そうだ。ゾバイダ、たずねなくちゃならないことがあったんだ」

ペレウスはヘラス語に切り替えた。互いに、相手の母語を話すと
なるとまだたどたどしいが、聞いて解するほうはかなり上達してい
る。特訓のことを考えなければ、会話の効率はこちらのほうがよほ
どよい。

「ゾバイダ、だれか知らないかな？ 戦い方を教えてくれる人を。
もちろんないしよでだよ」

「ないしよで？ 戦い方をですか？」

同じくファールス語にもどしたゾバイダは、唐突な問いに面くら
ったようにのけぞり、それから視線を宙にさまよわせた。

「……ファリザード様は勇ましい行いにあこがれておられますので、
この館には刀術や弓術の指南役がおられますが」

「ジン族にはちょっとでも知られたくない。ほかのヘラス人にはな
おさらだ」

すこし強い調子でペレウスがいうと、ゾバイダは、かれがなぜそんなことをいいたしたかの理由を悟ったらしかった。「……すみません、わたしのせいで」彼女は申し訳なさそうに肩をちぢめた。

「いや、それは……あいつらが悪いんだよ。きみのせいじゃない。この話はやめよう。それより、心当たりはあるかな？」

驚くべきことに、即答された。

「あります」

「……ほんとに？」

「うってつけの人がいるんですよ」

こんどのゾバイダの笑みに合わせるかのように、視界のはしでライオンがまたあくびをした。

.....
.....
.....

イスファハーンの街中は、市場の立つ日とあってにぎわっていた。ファールス帝国の大貴族はのきなみジン族だが、平民のほとんどは人族である。人間の特徴として、長命の種族よりずっと生きいそぐようにあくせく働くという点があり、それはヘラスも帝国も変りなかった。

乾いたほこりっぽい熱風がかけぬける、日干しレンガをしきつめ

た路地には、いくつもざるや器が並べられていた。

露天商が、みずみずしげなイチジクや瓜をこれみよがしに置いて「さあ果物だよ、新鮮なキュウリだよ」と叫んでいる。焼かれる仔羊や鳩のおいが香ばしくただよってくる。

取り引きされる水牛や馬やらくだのいななきもどこかでひびいている。

馬具のほかにくだ用鞍や鞭、針や糸やひもや麻縄、羅紗に更紗に絹の布、陶器に玻璃器に銀の器、塗り薬、飲み薬、回春剤、グールよけのまじない札……

値引き交渉の声がかまびすしい。

モスクから礼拝の時刻を告げる鐘が鳴ると、交渉中の人間をのぞく全員がひざまずいて祈りをささげだす……そのなかにあつて立っている異国人、つまりペレウスは、この風景のなかで自分がいやでも浮き彫りに目立っていることを意識させられた。

街中に出るのははじめてというわけではなかったが、異国情緒の強い情景に、帝国へきて一年経つたいまでもペレウスは完全にはなれることができていない。

（それでも、このファールス人たちがなにをいつているか多少わかるんだから、いままでの日々がまるきり無駄ってわけじゃないな。ゾバイダのおかげだ）

そうは思いながらも（早く目当てを探さないと）とペレウスは見回した。

（ゾバイダのいうことでは、たしか、サルを連れてうるうるしている男を探せばいいんだった）

注意してあたりを確かめていたペレウスの目に、そいつはすぐに見つかった。といってもサルのほうが。

……いまだ値下げ交渉で店主相手にがなっている欲深い客に、そつと尾の長いサルが近寄り、手をのばして気づかれぬように衣服をまさぐっている。店主には獣が見えているはずだが、なにもいない。

なんだあれ、とあつけにとられてから、ペレウスは気づいた。

(サルにすりをやらせてるんだ。店主とぐるなんだ)

そのほかのファールス人は拝跪してかれらの神をあがめており、気づいていない。気づいていたところで、ひざまずいていない不信心に注意してやるうとは思わないのかもしれない。サルの飼い主はなかなかうまく考えているらしい。

この不正義を見ているぼくはどう対応するべきだろうか、とペレウスが迷って立ちつくしたときだった。

後ろから、ふんと異臭がおったかと思うと、いきなり口をふさがれた。驚きに目を見開いたとき、頭上からファールス語がひびいた。

「ここはひとつ見逃してもらおう、子供。おれたちも食わなきゃならんのでね」

肩こしに見上げた。ペレウスがこれまで見た内で、もっとも汚い乞食がそこにいた。

頭にまきつけたターバンヘムターは茶色っぽくなっていて、ぼろぼろの服は半ば腐っている。ひげは手入れなど一切されず伸び放題、肌には黒い垢が三層にもつもって元の色がわからない。そしてその体

臭たるや、野良犬並みだった　犬はまちがいなくこの男より清潔にしているであろうけれど。

ただ、すらりと背が高く、その目は澄んだ空色をしていて、落ちて着いた低い声は美しいと行ってよかった。

口をおさえる乞食の手をはがし、ペレウスはいった。

「『よき卵が六個、腐った卵も六個』」

びっくりと男の眉が動いた。男はにわかには用心するように、空色の瞳でペレウスをつくづくと見つめた。

「……その合言葉、だれから聞いた？」

ファールス語をどうにか駆使して、ペレウスは聞いた。

「ゾバイダですけど……あの、ゾバイダの遠い親戚ですよね？」

「……なんの用だ」

「武術を教えてくれる人がいるかと聞いたら、こちらを紹介されて」

「は　　はあ？」

「お願いします。強くなりたいんです」ペレウスは真剣に頼みこんだ。とにかく、すぐにでも力をつけて、セレウコスやファリザードを見返してやりたかった。

「そつだ、ゾバイダから手紙を持ってきています」

サルにすりをやらせていた乞食の男は、疑念に満ちた目でペレウスの出した手紙　陶片のかけらに炭で書いたもの　を受け取り、読み始めた。

それを待ちながら、ゾバイダのことがちよつとわからなくなった、とペレウスは頭の隅で考えていた。奴隷なのに文字が書けるのは珍しいし、市中の者と通じるおかしな合言葉を知っているのも不思議といえは不思議だった。

といつても、深刻におかしいこととはあまり思わなかった。このときは。

読み終わると男はペレウスを一瞥し、きびすを返して「こつちに来いよ」と路地を戻り始めた。サルが駆けてきて男の肩にするすると登った。

歩くことしばし、ほどなく男は、街路とおなじ種類のレンガでできた、崩れかけたひとつの人家の戸をあけて入っていった。

そのあとをなんの疑問もなくついて入っていき　そして、ペレウスはいきなり壁におさえつけられた。

「ゾバイダがなにをを考えておまえをよこしたか知らんが」ペレウスに汚い顔を近づけ、男は一節ずつ区切るようにいった。「おまえの行動いかんでは、おれの命にかかわるんだ。できれば、考え直せ」

「……………あの、どういふ……………」

「おれの教えられる戦い方は、この市中では使えん。ファールス人に見られたら困るんだ」

「別に……………見せびらかしたいわけではありません。身を守るすべを学びただけです」

(もしくはは、ただ、嫌なやつらに復讐してやりたいだけだ)

男は、長々としたため息をつき、「いくつか約束しろ」と念を押した。

「習い覚えたものは実際には使うな、よっぽど必要があるときだけだ」

「はい。必要があるときだけにします」

「おれは剣術しか教えられないぞ。いいのか？」

これにはとまどった……できれば拳闘や格闘あたりを学びたかったのだ。だが、剣はそれらより実地的だし、どのみちいつかは学ぶなにより、考えてみれば、身体の大きいセレウコスに勝つには、拳闘や格闘ではたぶんだめだろう。剣ならまだ望みがあるはずだ。セレウコスに決闘をいどむときは互いに木剣でやれば、重傷までは負わないだろう。

ペレウスがうなずいたのをみて、男は腹をくくったようだった。

「おれのことにはだれにもいうな。ゾバイダにも迷惑がかかるぞ」

「はい、けっして」

「……あと、おれがこのくそつたれた街から出ていくのも手伝ってもらおう」

「え？」

意味がわからずとまどった少年にかまわず、男は、「エル・シッ

ド、水をもつてこい」とサルに命じた。

忠実なサルが、部屋のすみの水がめに飛びつき、ひしゃくに水をくんで男にさしだす。

男は、ペレウスをおさえつけたままターバンを脱いだ。

ひしゃくを受け取り、水を見つめてしばしためらったあと、それを自分の頭にぶっかけ、ひしゃくを放り出して、顔までごしごしと手でこすった。

ペレウスはあんぐりと口を開けた。

黒くなった汚い水がぼたぼたとひげから落ちていく。水をかけた箇所に見れたのは、茶色い髪、そして白い肌……ヘラスのさらに西方や北方に住む人種の肌の色。

（ ヲァンダル人！？ ）

3・修行(前書き)

ペレウス、異国の地で異国の剣をまなび
風変わりな特訓にころげまわる羽目になること

3・修行

がらくたの中にあつた盾には、表面に古代ファールスの神が描かれていた。その「日輪に翼」の紋章を、サー・ウィリアムの一撃が打った。

(剣術じゃないよ、これ！)

剣も持たせてもらえない剣術があるか。

ペレウスは齒を食いしばって、重い青銅の円盾を左手一本でかかげた。右手は わきをしめて身体にくつつけるように縛られていた。

滅びた神殿の高い採光窓から、長方形の光がさしこんでくる。

崩れかけていることに目をつぶれば、悪い場所ではなかった。幾本もの円柱にささえられた天井は高く、剣を振り回せる程度には広い。鈍い音が石壁にひびく。

都市イスファハーンの一角にある、その砂色の石とレンガ造りの建物は、たんなる古い納屋ではなかった。かつてジン族の征服の前、ファールス人が崇めていた光と火炎の神にささげられた神殿であつたという。古代神に代わって「唯一なる主神」を崇めるようになった現在のファールス人は、無関心というよりあからさまにこの場所を忌んでおり、がらくた置き場にされていた。

そこはいま、ウィリアム(サーを付けるとかれはいう)というヴアンダル人の乞食がねぐらにしており、またペレウスの修行の場にもなっていた。

汚い下穿きに汚い長衣を身にまきつけた、乞食衣装のサー・ウィ

リアムが踏みこんできた。ひび割れ、一部は粉と化している床のタイルを踏みしめ、木剣を薙いでくる。

「きちんと盾で受ける、へぼ従士！ 本来なら門外不出の真夜中城の剣術だぞ。それを教えてやってるんだから一撃ごとに感謝を新たに受けて止める」

キャストル・ミッドナイト

（なにがミッドナイト流剣術だよ！ 一月かけても片手盾での受けしか教えてくれてないじゃないか！）

盾をかまえたペレウスは心中で罵ったが、まあ実際、防ぐだけでせいっぱいである。しかも盾での防御に専念していてさえ、ぺらぺらしゃべるサー・ウィリアムが無造作に繰り出す剣を、十のうち七程度しか防げない。ヴァンダル人が半分でも本気になれば一剣すら受け止められないだろう。

それにしても木剣で打たれるのはひどく痛かった。少年はうなりをあげる斬撃に怯え、盾をかかげながらよろめいて後じさった。

サー・ウィリアムが、せせら笑った。

「なにをへっぴり腰になってる、ちゃんと受け止める。そら、足が前に出過ぎだ」

男の手首がひるがえり、鞭のようにしなった木剣がペレウスの太ももを痛烈に打つ。痛苦が肉にしみわたった。悲鳴をあげて腰が砕けた瞬間、足を足で払われて、ペレウスは盾ごと床に転がった。

（もう動けない、左手も上がらない）汗まみれで、うつぶせになり荒い息をついていると、信じられないことに背中を木剣の先で強烈に突かれ、また悲鳴をあげさせられた。

「だれが寝ていいといった？ これが本物の斬り合いの場ならいま

ので死んでるぞ、おまえ。さあ受ける」

いたぶることを楽しんでいるに違いないヴァンダル人は、にやにやしながら踏みこんで大上段から斬り下げるかまえを見せた。

とつさに転がり、盾で地を押しはね起きた。右手が使えないため、最初のうちは倒れてしまったら身を起こすのにもたついていた。即座のはね起きをこなせるようになるまで打たれっぱなしだったのだ。

ペレウスはどうにか重い盾をかかげ、真っ向から斬撃を受けた。盾をもつ手がしびれ、指の股に裂けるような痛みがはしって、少年はみたび連続で苦痛の声をあげた。

「……よし、一ヶ月もかかったが防御だけはほんの少しさまになってきたな。ここらで一息つくか。エル・シッド、このど下手糞が持ってきた酒の袋をとれ」

木剣を肩にかついで偉そうにサー・ウィリアムがいう。サルのエール・シッドがペレウスの荷物をかきまわし、らくだの膀胱でつくった酒袋をとって主人にさしだした。

荷物を勝手にあさられてもペレウスはそれに反応する気力もなかった。水がめに這って近寄り、生ぬるい水をひしゃくで一口飲むや、半死半生で床に倒れた。

……とたんにサー・ウィリアムが、恥ずべきものを目撃したかのように眉を寄せた。

「こら、従士、騎士が横たわらないうちから寝よつとするとはいなにごとだ。いまずぐ立て」

従士　　なんだか知らないが、騎士につく小姓のようなものらし

い。「真夜中城の剣は身内にしか伝えない決まりでね。そこを曲げて教えるんだから、せめて従士になってもらおうか」と腹のたつ条件をだされたのだ。

由緒正しきヘラスの王族が蛮族の小姓にされるなど屈辱の極み、と最初は憤慨したのだが、どうせたいした束縛はないと踏んでけつきよくはししぶしぶ呑んだ。

呑んだ自分を罵りたい。いつのまにか弟子と師としてきっちり上下関係があることになっている。

恨めしげなペレウスの目の前で、サー・ウィリアムは酒袋に口をつけてごくごく飲み……

「なんだこりゃあ、そこらで売っている馬乳酒じゃないか！ 昨日まで持ってきたぶどう酒はどうした、このクソガキが」

「い、いいかげん、イスファーン公の家令に、睨まれたんです、よ。ヘラス産ぶどう酒、を、あなたの要求どおり、毎回、酒蔵から持ち出していたら……！ たっぷり嫌味をいわれましたよ」

立ち上がるうとして子鹿のように四肢をぶるぶる震わせつつ、少年は怨嗟した。

この若いヴァンダル人は、一日一袋、ぶどう酒を持っていく端から水のようにごくごく飲んでいたので。ヘラスの至宝である最上級のぶどう酒なのだから、せめて味わって飲めといたい。

顔をしかめたサー・ウィリアムは、

「ちっ、ぶどう酒に免じて手加減していたが、今日からは情け無用でいくぞ。どろどろしたレモン水みたいに酸っぱい馬乳酒を持ってきやがって」

八つ当たり気味に、鍛錬をさらにきつくすると宣言した。ペレウスは無言でうなだれた。

(この都で会う人間は、ほとんど意地が悪い)

修行がはじまってからの最初の二週間は地獄だった。あれは筋肉痛などという生やさしいものではない。三日目の朝など、冗談抜きで、床から起き上がれなかつたくらいだ。

腕を固定するバンドもない盾をにぎらされる手のひらには、血豆が次々でき、それは片端からたちまち潰れた。取っ手が血でぬるぬるしてすべると訴えると、おざなりに手に布を巻かれたうえで盾を拾わされた。

周囲に気づかれないう、サー・ウィリアムは肌が露出するところは打たないでくれたが、そのかわり服で隠れるところは斟酌せず打ちすえてきた。ペレウスの体はすっかり棒状のあざだらけになっていた。

サー・ウィリアム　ゾバイダが紹介してくれたこの若い男は、ヴァンダルの一部族、島国にすむアングル族の「騎士」という階級であるという。かれは、持てる武芸をペレウスに文字どおり叩きこんでくれていた。

ヘラスの最強の戦士であるラケダイモンスバルタ人の子息たちでさえ、こうまで苛烈な武技教育は受けないだろうというほどの徹底したしごき方で。

「おかしい……、これ、剣術だよね。剣術しか教えられないっていったじゃないか、あんた」

ペレウスは氣息奄々でたずねた。「そうだが？」と悪びれないサー・ウィリアムに重ねて文句をつける。

「ぼくが持たされているのが剣じゃなく、武器ですらなく、盾だつてことはこのさい置いておくとしても……そっちの攻撃も、めっちゃくちゃじゃないか！」

「問答のまえにいつておくが、騎士には敬意を払った言葉づかいをしる、従士くん」

「……足を払ったり、つかんで引き倒したり、いきなり短刀を突きついたり！ 剣以外の攻撃を平気でしてくるじゃないですか！ 格闘術だか剣術だかわかりません！」

「実戦で、敵が細かい分類を気にするか？ 相手をひっくり返せば一気に有利になるんだよ。ことに、防御力の高い重い鎧を着ている相手だったら、転がしたうえで、こう、隙間に剣先をつきおろす。組み合つて密着していたら短刀だ。」

「そういった攻撃技はそのうち伝授してやる。ごたごたいわず守りの構えから完璧にしる」

「ヴァンダルの騎士みたいながちがちの全身甲冑を着た相手と戦うわけじゃ……」

ぶつくさこぼしたペレウスに、サー・ウィリアムがにやりと笑いかけた。

「へえ、おまえが憎む相手はやはりファールス人か？ それならたしかに、やつらは軽い装備で戦うからな。」

おっと、いまさらとぼけようとするなよ。まわりに隠れて強くなるつとめる理由なんて意趣返しと相場がきまっている」

ペレウスは沈黙した。セレウコスのことを思い浮かべる。まさか、真つ先に復讐したい相手は同じヘラス人なんだとはいいいにくい。あのわがまま娘のファリザードはとても嫌なやつではあったが、彼女相手とセレウコス相手では、抱く憎しみの種類がちがう。ジン族の姫ファリザードにはもう関わりたくないが、アテーナイのセレウコスにはこれまでの礼をしてやらねば気がすまなかった。

サー・ウィリアムがすこし考えて口にした。

「ファールス人の毒矢と槍と三日月刀は、この砂の地ではたしかに厄介だ。やつらは踊るように戦う。おれたちの全身甲冑では、足を砂にとられて体力を消耗し、周囲をかるがるはねまわって鎧の隙間に斬りつけてくるやつらに疲れきって、不覚をとつちまうことがまあ、ないとはいえないな。」

「だがな、それでも、おれたち騎士は鎧を身につける。なぜならおれたちの戦法のみならず生き様にあつては、防御こそがかなめだからだ。おれたちは罪なき者を護り、おれたちはすべての女性を護り、おれたちは誇りと名誉を護る。そのかぎりにおいて、神がおれたちを護ってください。たとえば身は殺されようと魂は護られる。」

酒をあおって、その「騎士」は歌うように祈った。

「神よわれらを護りたまえ、異教の敵から護りたまえ、砂と風から護りたまえ、獅子と蛇から護りたまえ、三日月刀から護りたまえ」そして最後に小さく、そそくさと謎めいた言葉。「わが身を闇から護りたまえ、深き夜から護りたまえ」

男は指で十字をきるしぐさをしてから、ペレウスに釘をさした。

「おまえの意趣返しだが、ぜったいにやるなとはいわんさ。気にく

わないやつってのはいるものだからな。

だが、騒ぎを起こすなら、おれがこの街の市壁を無事に出ていつからにしろよ。それも手伝ってもらうぞ」

そうだ それにも手を貸すことになっているのだ。

ファールス人は、交易によって昔から見慣れているヘラス人はまだしも、戦争でしか接してこなかったヴァンダル人は骨の髄まで憎んでいる。ヴァンダルの騎士とばれば、サー・ウィリアムは首を斬られるか吊るされるだろう。かれはいますぐにでもこの街から逃げ出したいようだった。

しかし、都市イスファアーンをぐるりととりかこむ長大な市壁は、ヴァンダル傭兵をふくむ賊の一団が外で暴れまわるようになってから、出入りの見張りが格段に強化されている。なかなか逃げ出せるものではない。

(そもそもなぜこの人はここにいるんだろう?)

そこでまた浮かんだ疑問そのままにペレウスは訊いた。

「……あなたはヴァンダル人なのに、この敵地のどまんなかでなにをしているんですか?」

(まさか、外の盗賊の間諜^{スパイ}じゃないだろうね)

サー・ウィリアムは、あからさまにごまかそうとした。

「おや、自分を柵にあげて妙なことをきく。おれの目の前にも、なぜか敵地にいる異国人の子供がいるんだが」

「ぼくは……ぼくたちは人質です。ヘラスとファールス帝国は和平

交渉に入っています。それがまとまるまでこの街のジンの貴族に預け置きされることになっているだけです」

「まとまるかな？ ジン族は恨みを忘れないときくが」

「無責任な。ひっかきまわしたのはあなたがたヴァンダル人でしょ
う」

ペレウスの声は激しそうになった。

『ペレウス、聞きなさい』 人質としての出立のまえ、ペレウスにそういった父と叔父の声が耳によみがえってきた。

『向こうに行く前に、「ファールス戦役」のまことの歴史を王族としておまえに教えておかねばならん……』

3・修行（後書き）

マイクロビーンズ

ミュケナイ（ミケーネ）、アテーナイ（アテネ）などの名前であからさまだが、ヘラスの元ネタは古代ギリシア文明である。ヘラスの呼称自体もギリシアを指す。

実際は、ミュケナイ文明は都市アテーナイの最盛期の数百年前にはとっくに滅びているが、この話はフィクションなので好き勝手している。

都市ミュケナイとクレタ島の文明を＋してある。

4・ふたつの剣（前書き）

ヘラスと帝国の戦争の発端と

ファリザードが敵対的な態度をとる理由のこと

4・ふたつの剣

父王と叔父はかく語った。

『第一次は不意をついてヘラス側から攻めた。いや、ヘラスの都市テーバイが勝手に攻めた。最初はこちらの侵略だったのだよ』

『……………帝国がしつこく挑発したんじゃないのですか？』

『違う。交易のいざこざはあったが、帝国はわれらをとるにたらないものと扱っただけだ。彼我の実力のままにな。』

しかし、帝国が鼻先であしらったのはテーバイ、民主制の都市だった……………テーバイの民はおろかにも、わが都市に侮辱をあたえた蛮族に報復しろと激昂し、反対を叫ぶ政治家を民会によって追放したのだ。

民意をうけたテーバイの將軍クレオメネスは、海沿いにある帝国のいくつかの街を落として勝利宣言したが、その直後に占領地を放棄し、略奪した財宝だけを手にあわてて引き返した。残っていれば、帝国各地から殺到してくる大軍に皆殺しにされたのは間違いない。た。あれほど愚劣な「勝利」はめつたにないぞ。

第二次は、大がかりな復讐戦を挑んできたファールス帝国の巨大な拳に、ヘラスすべてが粉碎されかけた。ペロポネソス半島にまで攻めこまれたが、ヘラス諸国は歴史上はじめて団結し、帝国が苦手だった海戦に戦力を集中することでかるうじて帝国をしりぞけた。国土は焼け野原になったが、ともかく滅びずにすんだ。というのが真相だ』

ペレウスはその話を聞いたとき大いにとまどったものだ。

ずっと幼いころから、吟遊詩人がハープをひきながら歌う「クレ

オメネスの栄光」や「サラミスの海戦」、「自由諸都市の凱歌」を、お気に入り之歌として聞いてきたのに。

だが、父王も、将軍である叔父も、「そんな歌は、民みずからが甘く味付けした歴史にすぎない。真実は苦い」といいきった。

『現在の第三次戦役は……ヴァンダルの蛮族どもこそ呪われよ。ヘラスはとつくに帝国との戦争にこりていたのだ。それなのにヴァンダル人どもが十字軍などと称してやってきて、勝手に帝国と戦端をひらきおつた。外交的にへたをうってヘラスは巻き込まれ、今日の滅亡寸前の惨状におちいつたのだぞ。』

勝ち目がなさそうだと知るや、ヘラスにあとを押しつけて、ヴァンダル諸王はさっさとそれぞれの故国に引き上げた。あとに傭兵や、遍歴の騎士などという、戦場のハゲワシどもを残してな。

ヘラス諸都市はむろん帝国に何度も講和をもちかけたとも。ところが、あの恨みを忘れないダークエルフ共は簡単にわれわれを許さうとしない。

やつらはなんといったと思う？

われわれは前の戦争でもヘラス人に親を殺された、子を殺された、連れ合いを殺された。おまえらが忘れようがこつちはよく覚えているぞ、当時から生きていけるからな。さあ、いまこそ貸しを取り立てに行くぞ。くりぬかれた一個の目玉につき二個の目玉を、折られた一本の歯につき三本の歯を、取られたひとつの首につき十の首をもらう。それがわれらジンの流儀だ、と』

(敵とみなした相手には、きわめて残忍でしつこいジン族……)

ペレウスはぶるりとふるえた。百年をかけても恨みを徹底的に晴らすのが暗黒エルフだと言い伝えられている。仇本人だけでなく子孫にまで累をおよぼすことも珍しくないのだと。

(ほんとうに、講和は成立するのだろうか?)

疑念と懸念がないまじり、ペレウスは暗たんたる気分になった。

感情は拒否していたが、理性では「敗北という形になっても和平が必要だ」とわかっていたのだ。

父のいうとおり真実は苦い　ペレウスのやるせない感情は、怒りとなって眼前の騎士に向いた。

「ヴァンダル人の兵が十字軍の名のもとにおこなってきた非道こそが、帝国の憎悪の火をつのらせているんです。なにが『護るのが騎士』……」

ペレウスは言葉をのみこんだ。それまで意地悪くはあったが磊落らいらくな態度をくずさなかったサー・ウィリアムが、痛いところをつかれた顔になったから。

その男はだまりこくって目を伏せた。そして何もいわなくなった。沈黙にペレウスが耐えられなくなりかけたころ、かれはだしぬけに認めた。

「ああ、そうだ。戦争で、敵の民にやったにしても、あれは……いくらなんでも、ひどすぎた」

にぎりしめた酒袋を口にあて、かれはごくごくとおおった。酔ってすべてを忘れようとするかのように。エル・シッドが主人の肩のぼって、慰撫するようにかれの頭をたたいた。

直前まで誇らしげであったその騎士の打ちしおれように、ペレウスはショックをうけた。

にわかに関心がつってきて、ペレウスはそれ以上責める気にはなれなくなった。

すると、黙した少年の様子を見てとって、サー・ウィリアムがすかに笑った。

「相手が弱ったとたん攻撃を止めるとは甘いなあ、おまえ。それに若い。ものすごく若い。国を出たときのおれよりも若い。

忘れるなよ、哀れみは真の騎士に必要な資質だ。だが戦闘では哀れみのゆえにためらえば死ぬ。だから、剣を手に行っているときにだけは哀れむな、けっしてな」

その茶色い髪青年は、酒臭い息をはいて説教した。空色の瞳がどんよりと酒精によどんでいる。

いつもより早く酒がまわりきっているようだった。サー・ウィリアムは、ペレウスが騎士に叙任されることをめざしている本当の従士ではないということ、すっかり忘れてしまっていた。

かれは、「だが」ともごもごと続けた。

「いまは剣で立ち会ってるわけじゃないから……その哀れみを受けておこう。おれのことはいっさい聞かないでくれるとありがたい。いつかこちらから話すおりもあるだろう」

しまった、とペレウスはつかの間、思った。質問を封じられるまえに、「ゾバイダとはどんな関係ですか？」と聞いておけばよかったのに。

サー・ウィリアムは見たところ不潔でのだくれの乞食だが、若い戦士らしく均整のとれたたくましい身体をもっている。そして、酒を抜き、ひげをそって風呂に入ればじゅうぶんにハンサムなのではないかと思われた。

ペレウスがほのかな想いを向けている奴隷娘のゾバイダと、この騎士とが、本当はどんな知り合いなのか、ペレウスとしてはとても気になっていたのである。

けれど、ペレウスは、いじめられることで少々歪んだとはいえ、基本的には行儀のいい子だった。そして、サー・ウィリアムに少しずつ親しみを感じはじめていた。

かれは左の盾をかまえ、騎士にたずねた。

「まず“防御”を身につければいいんですね？」

「ん？ おお、そうそう。よし、再開だ。」

盾をかまえた姿勢ですばやく回れ右、回れ左を百回ずつ。身体の軸をくずすなよ」

「あ、それと……」

「なんだ？」

「毎回すこしずつでいいので、ヴァンダル人の言葉 あなたの使
うのはアングル語でしたっけ。それを教えてくれませんか」

「……なんでだ？」

「護るために存在するという騎士と、その護る土地と、その信じる
神の話を、もう少しよく知りたいんですよ。ぼくも故国を護りたい
んです」

手にした盾の表面をみる。古代ファールスがジン族に征服された
とき滅びた炎の神の紋章を。

ヘラスが帝国に蹂躪されるようなことになれば、諸都市にある壮
麗な神殿も捨てられ、壊され、太古からヘラスの文明とともにあっ
たヘラスの神々も抹殺されるのだろうか。

断じてそんなことはさせない。

「守りにこそ重きを置く武術というのなら、もう文句はいわず本腰いれてやってみますよ」

イスファハーン公の館、庭園の砂場にしつらえられた武芸修練場。

少女のもつ漆黒のダマスカス鋼の鋭利な刃が、黒い稲妻のようにひらめくや、相手の持つヘラス式の短槍が二つに断たれた。

返す刀でファリザードは、三日月刀の刀尖をつきつけた。歳上で背がずつと高い少年の眼前に。

「わたしの勝ちだ、今回も」

部屋着である、薄衣だけの裸に近い格好ではない。若草色の胴衣のうえから手首までつつむ真紅染めの長衣をはおり、すその締まったゆつたりした白スボンと絹の靴を身につけて、ファリザードは運動のための服装になっていた。

刀をつきつけられたセレウコスが、だらだらと汗をながしながら卑屈な笑みを浮かべた。ヘラスの歩兵の兜かぶとと鎧をつけたかれは「ま……まいましたよ」といって、断たれた槍をほうりだした。それから、全面降伏のあかしに円盾をも腕からはずし、砂の上へたりこみ、せいぜいと荒い息をついた。

かれほどではないが胸をあえがせながら、ファリザードは、いつものさげすみの目でセレウコスを見た。かれと、修練場に雁首をそろえてなりゆきをみていたほかのヘラス人少年たちを。

「ヘラス人というのが、かくも情弱の民とは思わなかった。これでは二巡目だぞ、わたしがおまえら全員に勝ったのは」

「お嬢様が強すぎるんですよ。それに、その名刀がすごい」

侮辱すると、即座に卑屈なおべっかが返ってくる。当然だと優越感をくすぐられる一方、セレウコスへの嫌悪感がこみあげる。フアリザードは黙って愛刀を鞘におさめた。

（父上はなんで、こんな誇りのかけらもないやつらに、わたしを…）

この一年、フアリザードは父から、かれらヘラス人少年使節たちの饗応を任されていた。

十二歳のフアリザードとは年齢が近い少年ばかりだったが、仲良くなかった者など皆無だ。

そもそもかれらは人族のなかでも、汚らしい性質のものばかりとしかフアリザードには思えなかった。

どいつもこいつも仲間内でかたまり、街へ出て遊び呆け、父上の良民に対してすぐ問題を起こす。報告によれば日ごろから娼館にいりびたりの者が半数もいる。

弱い相手に強く出るくせに、ジン族に対してはこびへつらい、裏にまわってひそひそと陰口を叩くだけ。

露骨にフアリザードにおもねってくるのは「あの話」を知っているからかもしれない。

この、ヘラスの有力者の子からなる少年使節のうちのだれかが、彼女と結婚できるという話。

汚らわしかった。虫唾が走る。

(ヘラス人なんか、戦争をつづけて徹底的に負かしてしまえばいい)

こいつらといて胸がすくような時間は、言葉でやりこめ、武技で完膚なきまでに打ちのめす瞬間だけだ。それもほんの一瞬で、すぐにむかむかがつる。

フアリザードは、本音では、この愛刀を与えてくれた母方の伯父の意見に賛成だった。「和睦など帝国には必要ない、今回のヘラスとの交渉はばかっている」という意見に。

けれど彼女の父、イスファーン公は、宮廷において、ヘラスとの和平を強力に推進する派閥の筆頭だ。娘としては、父の意向に従わざるをえない。

父からは、気に入った者を夫として選ぶがいいなどいわれたが

……

けれど、どうしても嫌。こんなやつらのだれかに与えられるのだけは嫌だ。

ジン族は、人族よりもさらに感情を重視する。当人たちの意に添わぬ結婚は、人族ならば多々あると聞き及ぶが、ジン族は自然な心の動きに従うのだ。

それでも政略結婚がないわけではない……ことに、帝王スルターンの縁戚につらなる名家のひとつ、イスファーン公家に生まれたからには、フアリザードも覚悟はしてきた。

父上とわが一族のためになるのなら、自分はどんな好かないジンにでも嫁いでみせる。

でも、人に嫁げというのは、ひどすぎた。愛する父がいったのでなければ、侮辱と受け取っていただろう。

それも、戦争をしかけてきた異文明の民と和睦するためにだなんて……こっちの完勝寸前なのに。

それに、わたしは七十年ぶりに生まれた、一族のただひとりの女兒なのに……

「ジンは子がとても少ない。ことにイスファーン公家には現在、女兒はほかにひとりもない。だから、おまえはうちの宝物なのだよ」と、父に幼いころに聞かされたことがあった。

家族以外で、事情を知っているひとにぎりの貴族はみな、ファリザードをおもしろがる目でみるか、かわいそうにと同情の目で見るかだ。いや、父以外の家族でさえそうだ。

いちばん若い兄が父上に意見してくれたことがある。「攻撃をやめて、自治を許してやるともちかけるだけで、ヘラス諸都市は狂喜して帝国に臣下の礼をとるでしょうに。なぜ、ファリザードまでくれてやらなければならないんです。あの子がかわいそうですよ」と。

（きつと父上はもう、わたしのことがぜんぜん可愛くないんだ。わたしは父上にとって宝じゃなかったんだ）

美しい双眸に、じわりと屈辱と悲しみの涙がたまった。ファリザードはそれを見られないうちにときびすを返し、少年たちの前から急ぎ足で去った。

毎日ひとりずつを相手に武芸勝負をいどみ、ヘラス人使節全員を打ち負かす　そのうつぶん晴らしのころも、二度目となるとあまり気が晴れなかった。

（真剣での手合わせをせまるだけで、腰が引けているんだから。

あんな、ねずみほどの勇気もない者たちにくら勝っても無意味

だった)

もつとも、厳密には、まだひとり戦っていない者が残っている。王族でありながら酔っ払って小便を漏らしたペレウスとかいうやつ。ほかのヘラス人みたいに徒党こそ組まないが、例によって、酒を毎日持ち出して、市内のどこかに消えていくという。セレウコスたちとおなじように、馴染みの娼妓かなにかをつくって、そこにしげこんでいるのだろう。今日も姿が見えなかった。

あれのことは数に含める気にならない。どうせまともな手合わせになるはずもない。

伯父であるホラーサーン公に贈り物として与えられた三日月刀をすらりと抜く。

軽く、鋭利で、柔軟でありながらきわめて丈夫な、この世に百振り程度しかないダマスカス刀の一本。

吸いこまれそうなほど黒い刀を見てファリザードはつぶやいた。

「わたしがもし、あの小便王子みたいな恥をさらしたら、いさぎよくこれを胸に刺して死ぬのに」

貞節や名誉をまもるためであれば、女性の自決は唯一神も許している　ファリザードの脳裏に、らちもない考えが浮かんできた。

(いつそ、父上のまえでこの刃を自分の首筋におしあてて、「ヘラス人と結婚させられるのは耐えられる恥辱ではありません」と訴えてみようかな)

しばらく思案したのち、ジン族の少女は、沈んだ思いを払おうとするかのように刀を横に薙いだ。

ぬぐいがたい鬱屈をこめて、緑の木立のなかでそのまま演武を展

開する。

幹や枝のあいだをぬって華麗なステップを踏みながら、すばやい斬撃を縦横にめぐらし、幾重にも剣閃をかさねる。刃が風を切る快音は一振りごとに高まり、木々の葉だけが正確に切られて舞い散っていく。

武術指南役の教えどおり、**迅**^{はや}く。**峻烈**^{しゅんれつ}に。火のように**烈**^{はげ}しく。

彼女の教わった剣は、ジン族の正統の剣技 息もつがせぬ攻撃
にこそ重きを置く剣。

4・ふたつの剣（後書き）

ミクロビーンズ

この物語のヴァンダル人という人々は西欧人にあたる。実際の歴史上、中東ではヨーロッパ人をまとめてフランク人と呼んだ。フランクもヴァンダルもとはゲルマン民族の一部族の名前。

5・皮剥ぎ公(前書き)

敵のこと

5・皮剥ぎ公

数百年前のこと。

帝国のホラーサーン地方の大領主、アル・シャムシール 剣 ことアーデイルは、戦で自分の皮膚にかすり傷をつけた人間種の部族を、幼子のみをのこして虐殺した。

死体の皮をのこらず剥いで家畜小屋にしきつめ、そこに生き残った孤児たちを奴隷として住ませたという。

以来、皮剥ぎ公とも異名をとるかれは、スルターン 上帝に次ぐジン族の階級・マイド 妖王であり、いまもホラーサーン公として君臨しつづけている。

サー・ウィリアムに稽古をつけてもらうようになって五ヶ月あまりがたった。

きついが、楽しい日々だったと、あとになってからペレウスは思ったものだ。

修行開始五十日目あたりで、盾とともに片手剣をもつことを許された。

サー・ウィリアムは、みずからあまたの攻撃法やその組み合わせをいちいち実践しながら、ペレウスを厳しく教導した。

「片手盾は、敵の攻撃をただ受けるだけの防具ではない。打撃用の武器であり、隙について敵の体や武器をおさえこむ道具だ」

「大ぶりの斬撃は、なるべく真正面から受けるよりかわすか受け流せ。つぎの一瞬がこちらが致命傷をあたえる機会となるが、この機

会を本当に有効に使える者は少ない。日ごろからの地道な練習だけが確実性をます」

「手首への突きはとくに気をつける。小手先への攻撃でも、動脈を傷つけられたら致命傷になる。腱が傷つけば武器をにぎれなくなるぞ」

必死にくらいつこうとするペレウスの体型は、変わりつつあった。細身はあいかかわらずだが、女の子並みに華奢で貧相な体つきから、エスクロニア従士の若者らしくひきしまった肉体へと。

ことに、子供には重すぎるほど重い盾をもたされつづけた左手は、右手よりたくましいくらいに変貌していた。

廃墟となった神殿のほこりっぱい薄あかりのなかで、炭が赤く熾おこっている。

呪縛にとらわれ、動けぬ王に、

ターン・ワザランの魔の騎士は問うた、

すべての女が望むものは何ぞ？

陶製の火鉢のうえでゆっくり焼肉の串を回しながら、サー・ウイリアムが故国の言葉で朗々と吟じていた。

午前いっぱい午後をの大部分をついやした武術の修行が、ひととおり終わったあとだった。

ペレウスはいつものようにひどく疲れて、倒れた石の柱に腰を下

ろしていたが、眠くなることはなかった。修行のあと、サー・ウィリアムが故国の言葉でつむいでくれるヴァンダルの騎士物語が、最近、いたくお気に入りになっていたのである。

……この数ヶ月のうちに、あつという間にアングル語には慣れてきた。騎士物語にはまり、せつつきながら聞いていたおかげだろう。ゾバイダに教えてもらったファールス語より上達が早かったくらいだ……もつとも、ゾバイダとは互いの言語をまったく知らず、教えあうところから始めたのにくらべ、サー・ウィリアムとのあいだには、すでに半分会得していたファールス語が介在していたわけだ。

「それで、王はどうなったの？ 魔の騎士の謎かけ、答えはなんなの？」

もともと物語好きのペレウスは、少年らしく目をきらきらさせて続きをうながした。サー・ウィリアムはにかつと腹の立つ笑いをみせた。

「続きは明日だ」

「またですかそれ！ いつもいつも、気になるところで切らないでくださいよ」

むつつとふくれたペレウスに、あぶっていた馬の焼肉の串を一本わたし、サー・ウィリアムはふんふんと鼻歌を流した。

その肩に駆け上ったサルエル・シッドが、主人の耳をひっぱって肉の切れはしをねだる。小さな肉片を吹き冷まして、手わたしで与えているサー・ウィリアムに、少年は片眉をあげていった。

「……ご機嫌ですね」

「故国の言葉で好きなだけ語れるってのは気分いいもんだ。ありがとうよ」

思ってもみなかったことに礼をいわれ、ペレウスはびっくりした。いささか照れ、「べ……べつに。こつちが頼んだことですし」などとぼそぼそいいながら串をかじる。

ペレウスはこのヴァンダル人……いや、アングル国の騎士と、すっかり親しくなってしまうていた。不覚にも。

上機嫌のまま騎士がいった。

「おまえの剣の筋は悪くない。おまえの年頃のおれよりは強くなっているだろう」

こんどは褒められて、ペレウスは赤くなった。

「不気味ですよ、なんで急に……これまでそんなこといってなかったじゃないですか。むしろ、ひどいいわれようだった気がするんですが」

ど下手くそだの才能のかけらもみえんだの、しごかれながらぼろくそに罵られていた覚えがある。

若い乞食騎士は、口元を馬の脂で汚しながらうそぶいた。

「気にするな。罵りながら従士に稽古をつけるのは騎士の楽しみのひとつでね。気分爽快だからやっているだけだ」

その飾らなさすぎる言い草でペレウスに目を剥かせたあと、かれは考えながらいった。

「ちつと早いが、おまえには両手剣を持たせてみよう。……ミッドナイト流の本分はそっちだ、騎士の武技もな」

いよいよ本格的に、騎士の武芸の粋である剣を学べるんだ。ペレウスは興奮が血管を力づくよく脈打たせるのを感じた。

……が、サー・ウィリアムは「どうしたものか」と上方に視線を向けてつぶやいた。

「肝心の両手剣がない。ヴァンダル式のあれは目立つから、イスファハーンの市壁のうちがわに持ちこむわけにはいかなかったんだよなあ」

「……木剣でいいんでは？ いま教わっている片手剣だって木剣ですよ」

「両手剣は重い。その重さに慣れておくことが重要なのだ。」

よし、市場で鉄の棒でも探してみよう。運がよければ、おれたち式の両手剣が置いてあるかもしれん」

ペレウスははしやぎ声をあげかけた。

だが、サー・ウィリアムが「最近ではファールス人どもが、賊の討伐に血道をあげているそうだし。殺された賊の武器が売られてるかもな」とつけくわえたのを聞いて、どう応じればいいのかわからず沈黙した。

以前からイスファハーン近郊に出没する賊は、ヴァンダル人の一党だともっぱらの噂であった。

が、ペレウスの困惑に対し、サー・ウィリアムは同胞の末路をさほど深刻に気にとめていなさそうだった。

「なにしてる？ 行くぞ」かれは火鉢にふたとして皿をかぶせ、エル・シッドを肩にのせて立ち上がった。

市場にひとつの死が待っているとは、思わなかった。

フアリザードはよく来る市場の果物屋の前に立っていた。裸に近い部屋着でもなく、刀をふりまわすときの男装でもなく、通常の女児のように丈の長い胴衣と長衣を身につけている。

伴をつれず、こうして気楽に市内に出ることがよくあるのだ。主に気晴らしとして買い食いするためであり、そのための小銭までわざわざ安い銅貨で持っている。

アンズ、ザクロ、イチジク、ぶどうと店前に並べられた新鮮な果実を、どれにしようかなとじっくり観賞する。

ひとさし指を当てたつやめかしい唇が、われ知らず楽しげな微笑の弧を描いていた。

「フアリザード様、こちらの桃はいかがですか。昼前に入荷したばかりでしてな」

物心ついたところから顔なじみである果物屋の老爺が、前歯の抜けた笑顔もほがらかにすすめてきた。

「うん。とてもおいしそう」

少女は、自分の館に寄宿しているヘラス人たちにはけっして見せないような、無邪気な笑いで応えた。

数えもせず多めに小銭をわたして、小ぶりだがよく熟れた桃をひとつつかみとり、やや行儀わるく店先でかぶりつく。彼女は果物が好きだった。

幸せそうに果肉をほおぼる少女を、孫娘をみるような目で老爺がここにこながめている。

通りを行きかい、値引き交渉でどなりちらしている人々も、一瞬ちらりと微笑ましげな視線を少女にむけていく。領主の娘はよちよち歩きのところから、この市場界隈の常連なのだ。

ペレウスたちは誤解していたが、ファリザードはすべての人間を嫌っているわけではなかった。

たしかにファールス帝国の一般的なジン族の感覚としては、人は異種族であり、自分たちに支配される者であり、自分たちより一段劣る存在だ。

しかし、人間がほかの動物を愛でることができるよう、その意味ではジン族は人を慈しむことができた。それは、人が忠良な犬をかわいがるのに似ているであろう。

……ただし、親愛や慈愛の情を向けることができるのは、忠実で良き犬　つまりジン族の支配下にあることを受け入れたファールス人だけであり、もつといえれば自分の一族の支配する領民だけだ。

こちらを噛み殺そうと群れをなして攻撃してくる野犬はけっして愛さない。ヴァンダル人やヘラス人は、ジン族にとってそういう種類の、撲滅すべき犬だった。

そして、人に慣れた犬であろうが野犬であろうが、人にとって犬との結婚など通常は考えられるものではないように、ジンにとって人を伴侶にすることは常識外のことだった。

イスファハーン公が画策する、娘とヘラス人との結婚は、ジン族

の通念では犬との結婚にひとしいのだ。結婚話がなければ、ファリザードはヘラス人使節たちにああまで当たることはなかっただろう。異種族とは仲良くできることもあるが、恋愛感情を抱くなどはありえない。そういうことだった。

数軒となりのパン屋の太った女房がわざわざ寄ってきて、大声で少女に話しかけた。

「ファリザード様、蜂蜜菓子の新作がありますよ！ 試食してもらえますかい」

「食べる！ ちょっと待っ……」

快活に叫びかえしたファリザードの声が途中で途切れたのは、開門を告げる鐘のためだった。

市場のだれもが、いっせいにひとつの方向をみた。

イスファハーンをとりかこむ茶色い市壁　その西側の門が、市場からは一望できた。砦と鐘楼の役をはたす二基の尖塔ミナレットをつけた巨大な門。

午後の大気を重くふるわす鐘につづき、人の頭より倍も巨大な、太古貝の笛が鳴らされた。

ウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

ウウウウウウウウウウウウウ

それは軍勢入城の合図だった。

縦横二十ガズメートルずつある巨大な石の扉が外側に開き、鎖巻き上げ式の格子ががらりと上げられ、馬蹄がずしゃりと門前の広場にふみこんだ。そうして、二百人ばかりのかれらがやってきた。

まず楽器を手にした奏者たち。旗持ち。弓を鞍につけた軽騎兵。鎖かたびらをつけた重騎兵。顔面を、怪鳥をかたどった恐ろしい面頬で守り、玉ねぎのような形の兜にターバンエマーメを巻いている。その兵士たちは、急行してきたのか全員が馬に乗っていた。

楽団以外は沈黙をまもり、市民に顔を向けもしない。たった二百名の軍勢ながら、かれらは圧倒感をまとって、イスファハーン公の館へ通じる道のあるきはじめた。

旗には、黒い剣の紋章がかかげられていた。

その紋章がひるがえるのをみた瞬間、市場におのきまじりの緊張がさつと走った。ファリザードの横でパン屋の女房があえいだ。

「なんてこつた、アーデイル公ですよ。ホラーサーンの皮剥ぎ公……」

その呼び方で、ファリザードが複雑な表情になったのをみて、「……おい」果物屋の老人がパン屋の女房をとがめる声をだす。中年女ははつと口をおさえ、いいわけをはじめた。

「いえね、ファリザード様、伯父さまを悪くいったんじゃないですよ、ただ……」

「……いいよ。本当いうと伯父御おじいのことは、わたしも怖い」

ファリザードに刀をくれた母方の伯父というのは、ホラーサーン公のことである。それにもかかわらず、ファリザードは伯父が苦手だった。ジン族と人族とを問わず、かれを苦手でないものがあるだろうか？

そのジンの大貴族の名は、帝国だけでなく大陸諸国にとどろいて

いた。ファールス帝国でもっとも危険な妖王マードという評判とともに。
古代ファールスを滅ぼした征服戦争のときから武将であり、生ける伝説であるかれは、ファールス帝国の地方軍閥における第一位の者である。

アル・シャムシール
剣 と呼ばれて恐怖されているのは、理由あつてのことなのだ。

そしてかれは、対ヘラス戦の最強硬派として、和平にもっとも強く反対している男でもあつた。そのかぎりでは頼もしいのだが……
少女は苦笑して正直に吐露した。

「伯父御については、近寄るより、遠くから武勇をたたえていたいな」

「ええ、そうそう、そんな感じですよ。あ……フ、ファリザード様、また店にいらっしやうしてくださいね」

懲りずにまたいったパン屋の女房は、果物屋にいらまれてそそくさと退散していった。

軍列の先頭が市場にふみこんだとき、市民のだれかが地にひざまずいた。唯一の主神への礼拝のときのように頭を地につけることまではしない。これは、大領主級の高位のジン族、つまり妖士イフリートや妖王マリックなどにむける礼である。

つぎつぎと自発的に市民がひざをおつていく

この街の領主であるイスファハーン公相手におこなうときと違い、その礼は敬意からではなく、気圧されてであつた。ひざまずかねば何をされるかわからない。剣 の名とその統率されきつた沈黙の軍勢には、そのような危惧をいだかせる異様な威圧感があつた。

タカが軍勢にさきがけて市場の上空を舞っていた。

見上げて、伯父御はタカが好きだった、とファリザードは思い出した。

5・皮剥ぎ公（後書き）

ミクロビーンズ

滅びた古代信仰と、火と光輝の神は、ゾロアスター教およびその主神のアフラマズダー神が元ネタ。
対極に、暗黒の神アンラマンユがいる。

6・転機（前書き）

迷える騎士サー・ウィリアム過去の一部を語り、
ペレウス、ファリザードに目をつけられること

6・転機

ひざまずいて頭をたれる群衆の前を、伯父の軍勢が行進してくるのを見て、ファリザードは決心した。

(隠れよう)

ジンでありイスファハーン公の娘であるファリザードは、むろんひざまずく必要はない。だが、周囲の者たちが身を縮めるなかでひとり立っていれば、すぐみつかってしまう。そうすれば、「なぜおまえは伴をつれずこんなところにいる、ファリザード」と、伯父はあの凍てついた刃のようないつももの雰囲気で問いただしてくるだろう。

ホラーサーン公は、義弟であるイスファハーン公とまったくちがい、ジン族と人族が親しくまじわることをけっして喜ばない。「わたしは顔見知りの領民たちの店で買い物するのが趣味なのです」などといえるわけがなかった。

こっそり館にもどろうと身を返しかけたとき、ファリザードの目に珍妙な光景がとびこんできた。

小さなサルが屋台の柱にとりつき、横にたちどまったひとりの通行人のふところに手をつっこんでいた。宝石をあしらった短剣を抜き出そうとしている。男は軍勢の行進のほうに心を奪われており、サルに短剣を盗まれようとしていることに気がついていない。

ファリザードは顔をしかめた。彼女の父の領地で、ささやかとはいえあきらかな不法行為が白昼堂々とおこなわれている。

「あの小猿はなに？」

果物屋の老爺が頭をかいてため息をついた。

「じつは、前からあの手合いが出没しておりまして……獣をしこんで、すりを働かせるんですな。なげかわしいことですが、その、狙われるのは礼拝の時間るとき拝跪はいきしていない不信心者が多かったもので、ついつい放っておりました」

「でも、今回は不信心者への盗みではない。見逃してやる理由がない」

不愉快そうにファリザードはつぶやいた。近いうちに館の衛兵を派遣して、本格的にサルの主をつきとめて裁く必要がありそうだった。

だがそのとき、影が電光のごとき速さで空から地へつつこんできた。

タカの急降下に、ファリザードをふくめ、みなが息をのんだ。サルが驚いて短剣をなし、逃げようとして背をむけるかむけないかのうちに、タカの爪はその獣をとらえていた。暴れるサルを地におさえこみ、翼をおおうようにかぶせて、猛禽もうきんは殺しの爪をぐつと握りこんだ。

骨がぱきぱきと折れる音　断末魔の痙攣とともにぐつたりしたサルをひつつかんで、大きなタカは勝ち誇るように力強く宙にまいあがった。

ファリザードは嘆息した。罰を受けるべきは、あんなことを教えこんだ飼い主であって、あの哀れな動物ではなかった。タカは屋根のひとつにサルをはこび、捕食の「食」の段階にうつるべく、その死体をあらためて足でおさえつけた。

肉が引き裂かれる光景をみるにしのびず顔をそらしたとき、ファ

リザードはまたも予想外のものを……相手をみた。

(あいつは)

あの恥さらしのヘラス人王族、ペレウスが路上にいた。かれはほけつと突っ立って、屋根の上の夕力をみつめている。

(あの馬鹿もの、何やって……)

その立つ位置がまずかった。軍勢がいましもかれの立つ区画に踏み込もうとしており、かれの周囲の人間はひざまずこうとしている。かれの姿はいやでも目立つことになっていた。

伯父御はあいつを問題にするだろうか、とファリザードは気を揉んだ。剣は、容赦のなさど厳格さにかけては、ほかのジンの追随を許さない。

あんなやつでも、彼女の家の食客だ。なにより、殺されるのはさすがに寝覚めが悪い。もう眼前で死をみたくなかった。

だからといって、わざわざそばにいつて声をかけてやったり、伯父の軍勢に「そいつを殺さないで」といつてやる気にはなれなかった。

どうせ、あの少年、今日もまた遊びまわっていたのだろう。せつかく忘れていられたヘラス人への嫌悪感がよみがえってくる。

(あんなやつを救うには、これでじゅうぶん)

ファリザードは、手にしていた食べかけの桃をかれに投げた。

熟れた桃はかれの頭に当たってつぶれるだろう。かれが果汁にまみれた愕然とした顔でこっちを向いたら、さしまねいてやる。ファリザードが行くのではなく、かれが来るべきだ。

少年が生意気にも怒ってこちらに来たとき、状況を教えてやるつもりだった。思いきりさげすんだ表情と口調で。

ところが、想定した状況は起こらなかった。

その少年は、ファリザードがけっして予想しなかったことに、きわめて機敏に反応した。自分への攻撃を鋭く感じとってか、即座に桃の飛んでくるほうに顔をむけたのである。

それだけでも意表をつかれたが、かれのつぎの行動は、ファリザードの目をさらに丸くさせた。

ペレウスは一瞬で、左足を軸に体を回転させ、盾で防ごうとするかのように左腕をかかげ 飛んできた桃を反射的につかんだのだ。

クズリという獣が、後ろにまわりこもつとする敵に鼻面を向けるときの動き。それに似た俊敏な、防御の身ごなしだった。

果物を投げたのがファリザードだと気づくや、ペレウスは、きつとばかりにこちらをにらんできた。そして手の中のかじりかけの桃に目をおとし、いきなりそれを投げた。

ファリザードに投げかえずのではない。いまもサルの肉をついばもつとしていたタカに投げた。

猛禽は驚き、つかんでいた獲物を離して舞い上がった。怒りの鳴き声が降ってくる中で、サルの体が屋根のふちからずり落ちた。突如として、ひとりの乞食が路地裏からとびだしてくるや、死体を抱きあげ、身を返して出てきた路地裏に消えていった。

呆然として、そのサルの飼い主であろう乞食を目で追おうとしていたファリザードは、はっとしてペレウスに視線をもどした。

その少年の姿も、すでにかき失せていた。黙々と軍勢が通ってゆ

く街路の両端には、ひざまずくファールス人たちがいるばかりである。

「……ふうん？」

ファリザードは自身も屋台の裏にかくれながら、手についていた桃の汁をぺろりと舐めた。

「武芸の心得、あったんだ」

金の瞳が、ほそまりながら物騒に輝く。

食う肉もないとうかつにも捨ておいていた小さな虫が、じつは丸々太った美味しそうな獲物だったと再発見した、豹の子の目。

「エル・シッドがおれの命令なしで勝手に盗もうとしたのははじめてだった」

神殿に戻り、冷えた火鉢をはさんで二人して腰かけていた。

小さな死骸を胸に抱いてゆっくり撫でながら、騎士は呆けたようにぼそぼそしゃべっていた。

「こいつは、いままでの盗みから学びとって、価値のありそうなものを持ってくればおれが喜ぶと知っていたんだろう。」

まったく、利口なのか馬鹿なのかわからねえなあ。この馬鹿め、軍勢行進で鐘が鳴って人々がひざまずくのを、いつも盗みをやった礼拝の時間と混同したんだ」

「サー・ウィリアム……」のどがつまったような声で、ペレウスは

かれに話しかけた。「エル・シッドを、埋めてあげましょう」

「そうだなあ……こいつは三年もおれの盗みの相棒で、話し相手で、従士で、友達だった。おれの国だと友達が死んだら葬ってやって、祈るんだ」

「ぼくの国でも。たぶん、どこでもそうですよ」

泣き笑いのようにぎこちなくゆがんだ表情をつくり、ペレウスはうなずいた。かれも悲しかった。その小さなサルは、ペレウスにもだんだんなついて、少年の手から食べ物を受け取るようになっていたから。

……神殿の裏に出て、砂利つばい土を、割れた青銅の壺のかけらをつかって掘りかえす。墓穴に、エル・シッドの体を横たえて埋め戻し、死骸が掘り返されないよう大きな石を上においた。

祈りをささげた　ヘラスとアングル、それぞれの地のやり方でそれが終わると、一気に虚脱したようにサー・ウィリアムは肩を落とし、「潮時だ」ともらした。

「この街にいるのは潮時だ。エル・シッドがいなきゃ、おれは食っていけない」

「……ぼくが授業料を払いますよ、いままでのぶんも含めてきちん」と

できるかどうかかわからないが、なんとかして金を稼いでみよう。少なくとも、ヴァンダル人であるせいで表立って働くことすらできないサー・ウィリアムより、ペレウスは立場的に恵まれている。

だが、サー・ウィリアムは力なく首をふった。

「だめだ。なぜ使節が、日々の食糧や金をそこまでして手に入れようとするのかと、ファールス人に怪しまれるに決まっている。

ヴァンダル人とつながりがあると知られれば、おまえにも、おまえの国にもまずいことになりかねないぞ」

自分の身だけならともかく、故国のことをもちだされるとなにもいえない。

「じゃあ……じゃあお別れですか、エル・シッドだけでなく、あなたとも」鼻がつまる。この人たちはぼくの友達だったんだ、とペレウスははつきり悟った。身を切られるように辛かった。この街では、ほかに友達はゾバイダだけだったから。

「街から出るのを手伝うという約束でしたよね。ぼくは何をすればいいんですか？」

「いや、ペレウス、その約束はそれほど本気でいっていたわけじゃない。心配せずとも、おれは自分で」

「盗みの相棒でこそありませんでしたが」ペレウスは強い口調でさえぎった。「ぼくはエル・シッドとおなじくあなたの話し相手で、従士で、それにちよつとは友人みたいなのところがあつたと自負していますよ。お別れのとときくらい手伝わせてください」

騎士は、鈍い動きで首をまわして少年をみつめた。ややあつて「わかった。具体的なことはそのうち頼もう」と、かれはいった。ペレウスは話題を変えた。

「……あなたは、やっぱり、傭兵なんですか？」

「……ちがう、騎士だ。この地にきたいちばんの理由は、求め探すものがあつたからだ。が、十字軍に参加することが騎士としての誉れでもあつたからだ……くそつたれ、雄々しく戦つて、負けたときは死ねばよいだけだと思つていたのに」

その騎士は両こぶしをにぎりしめて独白した。

「折があれば話す」と以前、サー・ウィリアムがいつていたことをペレウスは思い出した。どうやら、いまがその折だとかれは判断したようであつた。

「戦うだけであれば、簡単だつたんだ。だが、戦い続けるためには金と食糧が必要だつた。

故国は遠すぎる。食糧なんぞ運んでこれないし、無理に運ぼうとするとどんどん出費がかさむ。背後のヘラス人が援助してくれたのは最初だけで、たちまちそれは打ち切られた。傭兵どもに払う給金が尽き、部下や馬に食わせる糧秣すら尽きた。

だから、敵から奪つてすべて満たそうということになった。気づけば軍のすべてが盗賊になつていた。ファールス人の町や集落を襲い、掠奪で食つていくことしか考えなくなつていた……敵の民を拉致して奴隷商人に売つて金をつくることだけはするまいと思つていたのに、王たち自身が率先してそれをやりやがった。上が腐つて、下がそうならないと思うか？

おれの従士までが……たまたま道で行き会つたファールス女が美しかつたからという理由でレディをさらつて慰み、そのうち小づかいかせぎに奴隷として売りとばしていやがった。それを知ったときおれはやつをたたき斬つて軍を出た。エル・シッドを市で買ったのはあのときのことだつた」

ペレウスは（あなたたち最初から来るべきではなかつたですね）

と感じたが、きつい言葉を口にはしなかった。かれはもうじゅうぶんに傷ついているから。

それに、話を聞くかぎりヘラスにも失態はあった。中途半端な援助など最初から一切せず、十字軍などやめるとかれらを教え諭すべきだったのだ。……どうせ、いつものごとく、ヘラスの諸都市のどこかが勝手にやったのだろっけれど……

「前に、剣をとれば敵にはけっして哀れみをかけるなといったな。あれは取り消す。

それで十字軍が哀れみを忘れた結末が、あの極悪非道だったならば……おまえのありようこそが正しいのかもしれない、甘いペレウス」

「……この街を出て行ったあと、アングルの国に戻るんですか？」

「故国にはまだ戻れないんだ」

サー・ウィリアムは、軋むようなうめきじみた言葉をもらした。

「帰るのがいちばんいいとはわかってるんだ。度を越した蛮行で、この地においておれたちは忌まれる者になっている。とどまりたくなんてないよ、おれだって。

だが、いまさら引き上げられない。わが血筋にかかった呪いを解かねばならん。どうしてもここにいなきゃならんのだ」

妙なことをぶつぶついいだしたかれに問いただすのははばかられ、ペレウスは続きを待った。だが、騎士はそれ以上しゃべろうとしなかった。

翌日の昼前。

イスファハーン公の館

庭園の修練場。

なんでこんな状況に、とペレウスは立ち尽くしていた。汗がにじむ。涼しい風がこずえを揺らす本日は、さほど暑くはないのに。

(なぜだ!?)

円形の修練場をとりかこんでほかのヘラス人少年たちが勢ぞろいしている。

その前で、ファールス人少年の着るような服を身につけたファリザードが、ひざの腱をのばして準備運動を丹念におこなっていた。

幼いジンニアの生命力あふれる肢体が、柔軟にたわみ、曲げられ、伸ばされている。

端麗な面をペレウスに向け、長い耳をびくびく上下させ、彼女は笑った。挑戦的に。

「好きな武器をとれ」

6・転機（後書き）

マイクロビーンズ

キュウリは中東では果物の一種。

7 はじめての決闘 上 (前書き)

ペレウス、ファリザードの挑戦を受け
ヘラスの名誉のために盾をかまえること

7. はじめての決闘 上

「アーダムの子らは増えすぎる」^{人間}

イスファハーン公の館の薄暗い客間にひびく、感情のない低い声。

「それが根本の問題だ、義弟よ。^{おとこ}
かれらは毎年産み、増え、たちまち世代を変えてまた産みはじめる。」

対してわれらジン族は、長く生きるとはいえ、ひとつのつがいが二十年に一度産めばひんばんなほうだ。『^{ラム・コフル}子宮錠』の存在ゆえに…もつともそれこそが、ジン族が地上の管理者として人よりすぐれている証でもあるのだが」

ドーム型の高い天井の下、唐草紋のじゅうたんが敷かれた上でむきあう男たちの陰影^{マイト}。それぞれ長椅子で寝そべるように足をなげだした、ふたりの妖王。

義弟と呼びかけられた影が、ものうげに指摘する。

「しかたあるまい、ホラーサーン公。唯一神の経典が、人族に説いているのだ。
産めよ、増やせよ、地に満てよと。」

ヴァンダル人の歪んだ教えもわれらの正しき教えも、根元はひとつの経典だ。世界のどこであれ、唯一なる主神は、人族に地上の支配権を与えようと決めたのだよ」

「では、そう決めたとき主神は狂っていたに違いない」

帝国ではけっして許されないはずの流神^{とくしん}の言葉を平然と吐いたの

は、ホラーサーン公と呼ばれたその影である。
亡き妹の夫であるイスファーン公に対し、
るような声をだした。

アル・シャムシール
剣 は、霜がおり

「われらは長い命を持つ。われらは経験をたくわえ、われらは賢い。それなのに、ネズミのように考えなしに増えるというだけで、人族がわれらの上に立つのか。」

「ばかっている。義弟よ、わしは征服時代の古いにしえから生き、人のすべてをじゅうぶんに見とどけた。国また亡ほろびまた興おこり……何度くりかえせば気がすむのか、アーダムの子らは？」

剣 は手をふった。

「人の発想がときに役に立つのは認める。人族に有用な者、善良な者がいることも認める。」

だが地上の管理者になるには、やつらには致命的な欠陥がある。爆発的に増えることそれ自体だ。しかも短い命ゆえ生きいき、百年単位の視点をもって考えることがほとんどできぬ。

ひとたび人族にじゅうぶんな土地と食糧を与えてみるがいい。その割り当てが足りなくなるまでやつらはたちまち増える。世界のほかの生き物を滅ぼし、森を切りひらきながら、増えても増えてもまだ増えようとする。そして終末に破滅がやってくる。どの文明も行きつくのはそれだ。『飢饉・疫病・戦乱・死』だ。

人口の限界をむかえて社会を破綻させ、生き延びるために他者をおしのけ、奪い、殺し……まわりをまきこんで荒廃しきってからまた最初からやり直そうとする。こんなやつらを愚劣な種とよばず、なんとよぶ。こたびのヴァンダル人の侵略にも、その人族の宿業が遠因として関わっていることだろう。

むしろわれわれジン族が、やつらを『管理』してやるべきだ。持つてよい子の数を厳しく定めるべきだ。ホラーサーンのわが領地で

は人口調節に成功しているぞ、イスファーン公。わしは厳格さでもって、民に長期間の平和と安寧あんねいをさずけたのだ。

ヘラスやヴァンダルの地にも、帝国がそれをもたらしすべきだ。最初だけ炎と剣で征服し、のちには正義と法によって支配する。征服と管理こそが長い目でみたとき、平和につながってゆくだろう」

ホラーサーン公の声音は淡々としていたが、こゆるぎもしない意志がこもっていた。イスファーン公は黙って聞いたのち、疲れたようにじぶんの首筋を揉んだ。

「あなたへの恐怖でたもたれる平和と安寧か……人族は自由を求めろぞ、われらジン族とおなじように。」

征服されるヘラス諸都市やヴァンダル人は、帝国に対して最後まで抵抗するだろう。かれらの十字軍に対し、われわれが戦ったように」

「人族にわれらと同じだけの自由を求める資格はない」無造作にかれは口にした。「自由を手にしてよい者は、それを適切にあつかう知恵をもつ者だけだ。人族の好きにさせていれば、この世界はいずれ破綻する」

「…… 剣 よ、百年以上かけて議論してきたが、あなたと意見をともにすることはできないようだな。わかっていたことだが」

剣 は答えた 無表情に。

「そうだな、われわれはどちらもわかっていたのだ。わたしはおまえと話をしにきたのではない、義弟よ」

「では、あなたは何をしにきたのだ、ホラーサーン公？ あなたが

わが街に伴ったのは二百騎だが、わたしの聞いた話によれば、三万もの大軍を自領から発して西進させているそうではないか」

「やるべきことをやりに来たのだ。上帝の意を遂行スルターンするために。」

最初は、この地の賊の一掃。それから、しぶとくすすむ最後の十字軍国家、アレツポの『聖ゲオルギウス騎士団』なる犬どもの皮を剥ぐ。

そのあと、ヘラスを踏みつぶす」

砂をまいた木立のなかの修練場。

青空のもと、ファリザードの抜いた黒刀の表面に、火が波打つような紅い刃紋が鮮やかに浮いた。

その色はたちまち金色に、黄色に、青に、紫に、オレンジ色に、そして純白に移り変わった。

「この刀の名は ハフト・ラング 七彩 というのだ」

誇らしげにそれをかかげてみせている少女の前で、ペレウスは走って逃げるべきかどうか思案しはじめている。

朝起きてからずっと、サー・ウィリアムをどうやって市壁の外に出せばいいのかを考えていた。とりあえず今日も騎士のところについてみようと思ったところで、ゾバイダが「あの、お嬢様が……」と部屋に呼びに来たのである。

頭痛を感じながらとりあえず合わせた。

「……きれいな刀だね」

「ふふん、ジン族の技術の粋だ。大地の火で、ダマスカス鋼を七十

七夜かけて魔術鍛造したものだ。美しいのは当然として、こいつの価値は切れ味にある」

その切れ味をぼくで試すつもりか、とペレウスはぞっとしない思いを味わった。相手は気まぐれかつ戦い好きで有名なジン族だ。なにをするかわからない。

が、セレウコスのとりにいたヘラス人少年　王政の都市の子
がためらいがちに口をだした。

「ペレウス、心配なくていい。彼女の腕はたしかだ。君を傷つけることはしないよ……」

「どうかな。わたしだって手元が狂うことはある」

もてあそぶようにそういったファリザードが、「さあ、はじめようか」とペレウスに声をかけた。

修練場の奥まったところにある、レンガ造りの武具置き小屋を指さしながらいう。

「はやく得物をえらべ。あのなかにはヘラス式の武具もひとつとおりそろえてある」

(ひどい話がどんどん進行していく)

ペレウスはげんなりした。これがセレウコスと戦えという話なら、願ってもない復讐の機会とよろこんだかもしれないが、ファリザードを相手にするつもりはなかった。このジンニアの皮肉、冷笑、さげすみのまなざしにはうんざりしきっていたが、セレウコスに向けているような種類の憎悪は抱いていなかった。彼女はほかのヘラス人にもひとしく意地が悪いことを知っていたので。

少年は意を決してきつぱりいった。

「断る」

ファリザードは眉を上げた。それからきゅっと寄せて不快感をしめした。

「……断る？」

「なんだか知らないがいきなり呼びつけて武器をとれだって？ ぼくになんの得がある」

「腰抜けめ。得がなければ戦えもしないのか」

間髪をいれず罵声が飛んでくる。刀を肩にかつぎ、ファリザードは氷結しそうなほどに視線の温度を下げ、さらにつづけて罵ってきた。

「『貴種の恥と民の恥とは平等の重さではない』イブン・アリーがかくいったように、義務と名誉を背負うからには、民の上に立つ者は戦いをおそれてはならず、醜態をさらしてはならず、誇りを墓までひきずっていかねばならない。」

おまえは貴種失格だな、ミュケナイのペレウス。まわりから小便とばかにされるおまえに、恥をそそぐ機会をあたえてやっているのだぞ。わたし相手に善戦できたなら、多少は見なおしてももらえよう」

その言いぐさにさすがにむっとしながらも、ペレウスは（我慢しろ、我慢）と念じた。うっかり乗せられてはたまらない。

「……やりたきゃほかの奴と好きなだけ戦ってくれ。失礼するよ」

いらいらしながらペレウスはきびすを返そうとした。

が、舌打ちしたファリザードがいいはなつた言葉に足をとめた。

「ヘラス人など全員こんなものか。もういい、どこへでも行け」

「……全員？」

ペレウスはふりかえってファリザードの顔を見、勢ぞろいしているヘラス人少年たちを見回した。王政都市の少年たちが目を伏せ、ペレウスをいじめてきた民主政都市の少年たちが羞恥をこまかすようににらんでくる。

まさか、すでにみんな負けたのか。

ミケケナイの王子の表情に気がついたファリザードが、ふっと美唇を嘲笑にゆがめた。

「そうだ、全員だ。おまえ以外のヘラス人はそれぞれ二回ずつひざまずかせておいた。だれもかれも、焼くまえの練り小麦粉ほどの歯ごたえもなかったぞ。

あとはおまえだけだ。

おまえがわずかでも持ちこたえれば、そのがんばりのぶんだけヘラスの名誉が回復されるかもしれないな」

我慢できなかった。

「……わかった。やる」

故郷の名誉を守れるなら、やる。

武器庫にはたしかにとりどりの武器や防具があった。ファールス人の武器はもちろんとして、ヘラス式、驚いたことにヴァンダル式までも。

かれが鉄板をはった円盾と片手剣のみをもって出てくると、ファリザードがおやといった顔をした。

「ほかの者みたいに槍を選ばないんだな。それに、鎧はつけないのか」

「……鎧をつけていないのはそっちも同じだろう」

槍は習っていない。というより攻撃の技術そのものをろくに身につけていない。

なら、まだしも持ち慣れた武器のほうがよかった。

盾を持ち上げるペレウスをまじまじ見てファリザードが「ふうん」と興味深そうにいった。

「ほかのやつらは刀をみせるとだれしも鎧をとってきたのに。おまえって蛮勇の持ち主か、変わった奴のどっちかだな」

（盾だけで子供にはじゅうぶん疲れる重さなのに、鎧までつけたらへたばっちゃうよ）

とにかく、サー・ウィリアムとの稽古のときとなるべく同じ条件でやりたかったのだ。

そうだ、とペレウスはファリザードに話しかけた。

「ぼくが勝ったなら」

「ん？」

「きみになにかひとつ、要求をのんでもらう」

ペレウスはサー・ウィリアムのことを念頭にそういった。

あの騎士を市壁の外に無事に逃がすことが、当面の重要事だった。ファリザードの 領主の娘の協力があれば、それはきつと成就するはずだ。

どうやってそれを行うかは、勝ったあとにゆっくり考えよう。勝てるとすればだが。

しかし、ペレウスがそういったとたん、少女は過敏な反応をみせた。

「な……なにかって何をだ！」

身を守るように左手で体を抱き、右手の刀の先を突き出しながら、彼女は後じさった。ファリザードの瞳に怒りと警戒と、わずかにおびえの色が浮いているのを見て、ペレウスはいたく傷ついた。

セレウコスが鼻にしわをよせ、横から胸間声をはりあげた。

「きさま、下劣な意図でヘラス人の名誉を汚すつもりか！」

ここにいたって、ペレウスの堪忍袋の緒も切れた。体ごとセレウコスにむきなおって怒声を返す。

「彼女やおまえがなにを誤解したのかだいたい想像がつく、セレウコス。あんたは自分の鏡像にそれをいうがいい。

そして彼女は疑いなく、ぼくをあんたの同類だと思っているにちがいない。あんたらが娼館通いで、この街でのヘラス人の評判を美しいものにしてくれたからな。ご乱行についてはたっぶり耳にして

きたぞ。

ヘラス人の名譽だと？ あんた、よくそんなことがいえるな。その図体でこんな小娘に、それもファールス人に負けておいて！」

セレウコスの顔がどす黒くなった。かれの顔色に関心はないようだったが、ファリザードもまた、同年齢の少年に小娘といわれたことにむかつ腹を立てたようだった。

険悪さを増した場の空気をやぶって、ファリザードが低くいった。

「おまえも負ける。すぐに大地に口づけさせてやる」

彼女は華奢な肩から刀をおろし、だらりと下げた。その足元が浮き、沈み、小さな跳躍を繰り返しはじめた。

たん、たん、たんと軽やかなリズム 踊るかのような。その高さがしだいに上がり、滞空時間が長くなっていく。

ペレウスはごくりと固唾を飲んだ。ファリザードの跳躍は人にはありえない種類のものだった。ひざをほとんど曲げずに、半ガズ^{ネットル}ほども軽々と跳んでいる。

セレウコスの横の少年が弱々しくペレウスにいった。

「ペレウス……彼女はジン族だ。人より運動能力が高いんだ。それに、あの刀は名だたるダマスカス鋼だし……」

だから、一対一でぼくらが負けても、ヘラスの恥ってわけじゃないと思うよ。もちろんきみが負けたって……」

「ぼくはそうは思わない」ペレウスはぎつと歯をくいしばった。

書物で読んだことがあった。人の筋肉は重いが、砂漠エルフであるジン族をふくめてエルフ種の筋肉は異常に軽い。だからエルフ種

は、人族がけっして実現できないような敏捷さうごかしで駆け回れるのだと。しかし、体重の軽さは戦闘において、利点ばかりではないのだとも。

『自分の得意とする戦いに相手を引きこめ』　サー・ウィリアムが口にした教えのひとつが鮮やかによみがえってくる。

(そうします)

ペレウスは腰を落とし、しっかりと盾をかまえた。

かれもまた戦闘準備に入ったのをみとどけたとき、ファリザードの跳躍が、高さを誇示するようなものから、低く間隔が短いものに戻って行く　たん、たん、たんたんたん

そしてつぎの変化は急激だった。姿勢をひくめて縦から横へと、彼女は跳躍を変えた。

(回りこむつもり)

そう思ったときには、横から斬撃が降ってきていた。

驚愕してペレウスは盾で受けた　思考が命じるよりさきに体がおのずと向きをかえて、受けていた。

意外そうなファリザードの顔が間近にある。ひとつめの横とびがかれが目で追ったとき、すでに彼女はもうひとつ地を蹴っていたと知って、ペレウスはぞっとした。予想よりだいぶ速い。

(あぶなかった。神々よ、ありがとうございます)

サー・ウィリアムがこの心での感謝をきけば、「おれだ、おれ。

礼ならヘラスの神々なんぞではなくおれにいえ。防御や回避が無意識にできるまで体に動きをしみこませてやったのはおれだぞ」と自

分を指さして主張したかもしれなかった。

逃れるように距離をとって離れたかれを、ファリザードが不満げにねめつける。彼女は彼女で、いまの一撃を受けられたことに舌を巻いていた。これまでは、この技を初見の者は例外なくこれで負かしてやれたのに。

「……いまのは寸止めしてやるつもりだったんだから、そう怯えなくてもいいぞ。もっとも、このつぎは保証しないけれど」

彼女は、優位をしめそうと強いて笑みを浮かべた。

しかし、ペレウスが剣の平で盾をぺちぺちと叩く挑発をしたため、その笑みはすみやかに消えた。

うなり、ファリザードはまたも地を蹴った。わずか二回の跳躍で背後にまわりこみ、先ほどよりももっと素早く斬りつける……しかし、今度は予測していたペレウスは、余裕をもって向きを変え、またもしつかり受け止めた。

それだけでなく踏みこんで盾を押し出し、彼女をはじき返した。

ファリザードはあわてて左腕で重い盾の直撃をふせいだ。だが軽さゆえに子猫のようにたやすくふつとび、砂を散らして転がった。

観衆であるヘラス人少年たちが啞然としていた。

8 はじめての決闘 下 (前書き)

ペレウス、ジンの子に勝利をおさめるが
その直後、災厄にみまわれること

8・はじめての決闘 下

顔をしかめてよろよろと身を起こし、口にはいった砂を吐き出しているファリザードに、ペレウスは冷たくいった。意識して、わざと嫌味に。

「つぎは寸止めにしてあげようか？」

憤怒に、少女の瞳が燃えた。

ペレウスはわざと傲然たる態度で見下した　ひとつのことに気がついていた。

(こいつ、意外に単純だ。挑発に弱い)

砂を払いもせず立ち上がったファリザードがまたも地を蹴る。鋼と鉄が火花をちらした。鉄の盾表面は傷ついてへこんだが、対してダマスカス刀は刃こぼれひとつしなかった……ひるみを覚えたが、それを面にださずペレウスは煽りを重ねた。

「唇に砂がついてるぞ　地面への口づけはそっちが先だったな」

ファリザードは盾の押し出しをくらわなないようにとんぼをきって距離をあけ、すさまじい目つきでペレウスをみて、

「……ちよつと待ってる！」

彼女は　七彩　を鞘におさめ、武具置き場まで走っていった。そしてダマスカス刀に代わって、三日月刀を模した木刀を手に戻ってきた。

肩をぶるぶる震わせて、ファリザードはいった。

「か、刀が特別だから負けたなんて後からごねられたくない。おまえはやっぱり、これで思いっきりぶちのめしてやる」

これはよほど腹をたてたな、とペレウスは目をほそめた。

(それ、後半が本音だろ)

ファリザードの魂胆は見え透いていた。

予想以上に堅固な守りにぶつかって、これは寸止めで勝負をはっきり決められる相手ではないと彼女は悟ったのだ。

かといって、いっさい手加減なしでやれば、ダマスカス鋼の利刃では相手を本当に殺してしまいかねない。彼女は、ペレウスに怒りを遠慮なくぶつけ、好きに打ちのめすために木刀を選んだのに間違いなかった。

ペレウスにとっては、彼女の怒りは好都合だった。

(怒って、目をくらませたままでいてくれ)

かれがサー・ウィリアムにつけられてきた稽古は、まだ防御中心の段階だ。うっかり攻勢に出ようとすればぼろが出るだろう。

ファリザードがそれに気づいて、距離をとって頭を冷やし、かれを始末する方法をじっくり思索しだせば終わりだった。

彼女には攻めさせる。そしておまえは防ぎつつける 騎士
のアドバイスが聞こえるようだった。 ぜったいに冷静に立ち戻らせるな

そういうわけでペレウスは「ジン族の剣技なんてたいしたことな

いな」と続けざまに煽った。

「おおかた、みんなおまえの父親に遠慮して負けてやっていたにちがない。そこに気づかず、調子に乗っているのは痛々しいぞ」

ちよつと面白いくらい簡単にフアリザードは激昂した。

「このつ……小便王子、盾のかけに隠れるしかできないくせに！」

怒りのあまりどもったその罵りはかなりの真実をふくんでいた。ペレウスが満足にこなせるのは防御だけだから。

しかし彼女は、自分の言葉を吟味することなく突っこんできた。

「お嬢様、そいつの手ですよ、あまり怒ると」

「口をはさむな、ヘラス人の助言なんかいるか！」

セレウコスが余計なことをいったが、頭に血がのぼりきっているフアリザードがそれを怒声で一蹴したのはありがたかった。

少女は斬りつけてはとびのき、狙う部位を頭、首筋、胴、腕、太ももと変えて技をくりだしてくる。

興奮した山猫が角をつきだすガゼルのまわりをかけめぐるように、彼女は跳び、跳び、稲妻のようにじくじくに跳び、死角に回りこもうとしつづけた。

だが攻撃のすべてが、文字通りの鉄壁のまえにはばまれた。どんな方向から木刀がこようが、ペレウスはそれより速く身を回し、盾でことごとく受けてみせた。

キャッスル・ミッドトナイサー

真夜中城の騎士ウイリアムの教えに忠実に、ペレウスは正しい歩法を使って下がりながらかわし、前へふみこんで間合いをつぶし、

足を入れかえて体を回した。

「がんばれ、ペレウス！」

場にいきなり興奮した大声がひびいた。セレウコスの隣の少年が叫んだのだった。ぎよっとしたセレウコスが手をのばしてその少年のえり元をつかんだ。

「なにをいってやがる、黙れ！」

その少年はセレウコスを睨みあげ、かれの胸ぐらをつかみ返した。

「あんた、ヘラス人の誇りを酒といっしょに飲んじゃったのか、セレウコス！ ヘラス人がファールス人と渡り合っているんだぞどっちを応援するかなんて決まってるだろ！」

その言葉が、王政の都市からきた少年たちの心でくすぶっていた火を目覚めさせた。

かれらは、意を決したかのように前へにじり出て、つきつきとペレウスに声援をおくりはじめた。

「負けるな」「あぶない、持ちこたえろ」「ヘラス」「ヘラス！」

「ミユケナイ！」「ぼくたちの神々にかけて勝て！」「ヘラス！」

熱のこもった叫びはしだいに大きくなっていった。

「ヘラス！」

その騒ぎに参加せずむつつりと押し黙っているのは、民主政の都市からきた少年たち。セレウコスの取り巻きであったが、かれらも、こんどばかりはセレウコスに同調しなかった。

ヘラス人たちの声が高まるほどに、ファリザードは後にひけない

とばかりに歯をくいしばり、ますます苛烈に剣をふるってきた。鞭でもあるかのようにその木の三日月刀は伸び、しなるかと思われた。

しだいに防ぎきれなくなり、攻撃がペレウスの身にかすりはじめた……それでも、決定打は当たらない。

めまぐるしい猛攻を間一髪ですべて受け止めながら、ペレウスは一心に念じていた。耐えろ、耐えろ、耐えろ

王政の都市の少年たちに公然と歯向かわれて、絶句しているセレウコスの姿を、ファリザードの肩越しに見た気がした。

(こいつらは甘やかされすぎなんだ)

だから、自分の思いどおりにならなければすぐ冷静さを失うんだ。ファリザードにしるセレウコスにしる。

ペレウスも、怒りを我慢するよう育てられたとはいえないが、皮肉にもこのイスファハーンに来てからの日々が、ミュケナイの王子にある程度の忍従を教えていた。

……実際にはファリザードの怒りは、ヘラス人との結婚話からんでいるためだが……そこまではかれの知るよしもない。

(サー・ウィリアムはいつていた)

憤いらだつて冷静さを失えば、戦士の攻撃力はいったん火のように燃えあがる……ただし、荒れ狂ったぶんだけ体力ははやく尽きるのだとそれに、嵐のような手数で攻撃されてはいたが、ペレウスは重圧をさほど感じなかった。ファリザードの打ちこみは速く鋭いが、軽いのだ。体重をのせて打ちこもうにもその体重があまりないから。武器が、触れれば切れるような利刀だったならば、そういう斬撃で

も脅威だが……

（本物の刀でなければジン族なんか怖くないぞ。当たったってサー・ウィリアムとの稽古のときほど痛くない）

恐怖が邪魔しなくなれば、大胆な防御ができた。ペレウスは存分に歩法を発揮して間合いをあやつった。主導権をにぎり、あとは待つだけでよかった。ファリザードの体力が尽きるのを。

そして、そのときは訪れた。彼女のふるう刀や駆けまわる脚の速さが目にみえて落ちていった。

ファリザードは焦っていた。これは彼女の知らない戦いだった。これまで疲れるまで戦うことなどなかった。開始直後から、ダマスカス刀で相手の槍の木製の柄を断ち、服ごと相手の皮を薄く切つて、戦意喪失させて勝ってきたのだ。それなのに、この異質な相手は斬らせることも、あきらめることも決してなかった。

とうとう、息を切らしていったんだがろうとした彼女に、ペレウスははじめて片手剣を手に打ちかかった。

あいにく、かれの打ちこみはやはりお粗末だった。

ファリザードはとびすさるのをやめ、迎えうった。全身のばねを使うようにして上方を薙ぎ、ペレウスの袈裟けさ斬りの攻撃を、三日月刀ではねのけた。だが……ペレウスにとって重要なのは、彼女が足を止めていることだけだった。疲労が、ファリザードの足のおもりとなっていた。

それが決着につながった。

突進してぐいぐい押しまくり、間近から足をはらってファリザードを転倒させ、三日月刀を盾でおさえつけてのしかかる。それは、

やってみればとても簡単なことだった。なにしろ、彼女はとても軽かったから。

手を取りあってよろこぶ王政都市の少年たちの歓呼がはじける。ペレウスは苦しそうに息をつくファリザードの腹の上にまたがり、勝者の体勢として彼女ののどに片手剣を擬した。

蜂蜜色の髪をほつれさせたファリザードは、負けたことが信じられないかのように、呆然と下からペレウスを見上げていた。

「あとで、ひとつ聞いてもらうぞ、いうことを」

(検問を受けず、サー・ウィリアムをこの街の外に出すために)

ペレウスの宣告を聞いてファリザードの表情から血の気がひいた。彼女はくしゃっと顔をゆがめ、唇を開いて震えた声をだした。

「……いやだ……そんな条件、呑んでいない……」

「喧嘩を売ってきたのはそっちだろ」

あえぎまじりに弱々しい声をだす彼女に、ペレウスは強い口調でたたみかけた。

今日の勝利はあの騎士のおかげだ。かれを無事に逃がすためには、ここで引くわけにはいかなかった。

「一方的に挑戦して侮辱までしてきたくせに、自分が負けたときにはなにも代償を払う気がなかったのか？ それこそ恥知らずだろう」

「いや。いや、嫌……ヘラス人のいうことを聞くなんてぜつたいに嫌だ……！」

ファリザードはかたくなに拒絶した。

水晶のような涙があふれ、目尻から流れはじめた。

しゃくりあげた彼女の姿にペレウスは驚愕し、困惑した。彼女が自分と同年の女の子であることを、ミュケナイの王子はとつぜん実感させられた。

(どうしよう)

彼女と戦ったのは、挑戦されたためであり、ヘラスの誇りのためだった。

こうして勝者の要求をつきつけているのは、友達のためだ。サー・ウィリアムの安全のための……でも、この子は泣いている……さきほどまでであった勝利の興奮は、風のまえの霧のように散ってしまっていた。すでに周囲の歓声もやんでいて、あたりには気まずい空気がただよっていた。

「な……泣くなよ。ぼくはべつに」

歯切れわるくそう言いかけたとき、ペレウスの横腹を、内臓までひびく衝撃がつかぬいた。

ファリザードの上からふつとび、わけもわからぬまま苦痛に体を折ってのたうちながら、ペレウスは顔をあげた。

そこに、ひとりの背の高い男がいた。砂よけのマントを羽織った、褐色の肌のジン族が。

いや、厳密には、ひとりではない。同じくらい背が高い、武装した五人の兵士たちがそのまわりにつきしたがっていた。鎖かたびら

に怪鳥の面頬をつけた者たち。

横からペレウスの肋骨のあたりを蹴り飛ばしたのは、兵士のだれかだとかれは気づいたが……それにもかかわらず、その場では、ひとりの男が周囲のすべての印象を圧倒していた。

仔羊毛織ラムスウールの赤い胴衣。黒い真珠をはめこんだ耳飾り。金糸銀糸の刺繍でアラベスク紋様を描いた絹の靴。

ひとときわ目立つのは、腰の両側に佩はいた、きわめて無骨な造りである二本の刀。柄までが黒い鋼でできた、一對のダマスカス刀。

そいつはペレウスにちらとも目をむけず、少女にむけていった。

「なぜハフト・ラング 七彩で斬り殺さない、ファリザード。わしは、ちゃんばらごつこのためのおもちやを与えたつもりはない」

ファリザードもまた、涙の筋を頬につけたまま、固まっていた。

「お……伯父上……」

「最初に刀を抜いていたのに、後から鞘にしまったそうだな。刃は殺すためにあるのだぞ。おまえも親とおなじで、どうも甘いな。」

イルバルス、その子供の耳をむしれ。ひとつでよかるつ」

一瞬、聞いたことが理解できなかった。

それから、さきほどペレウスを蹴転がした兵士が大股に近づいてきて、長い指をかれの左耳にからめた。その指には異常な力があつた。

耳が、八エの羽でもむしるようにやすやすと引きちぎられた。肉が裂ける感触ののち、赤い痛みが脳のすぐ横で炸裂した。

熱い血が首筋まで濡らしている。イルバルスと呼ばれたジン族の兵が、ぽいと耳を放り出した。ペレウスはそれを見ながら、自分が奇妙に平静であるのを不思議に思った。

……平静だと思っただけだった。現実のかれは、叫んでいた。

ぬるぬるした赤い液体を噴きだす左側頭部をおさえつづくまり、絶叫していた。

だれもが言葉を失うなかで、ファリザードの声だけが、ちぢみあがりながらも訴えていた。

「伯父上……そいつは……そいつはわが家の客です、ヘラスの王族のひとりで」

「だれだろうと、人族だ。高位のジンに手を上げた人族は報いを受けさせるのが古いならわしだ。成人であれば皮を剥ぐが、そうでなければ手を切りとるだけですませる。しかし、おまえのほうからからんだ結果ならば、さらに減じて耳一つが妥当だろう。」

おまえは中途半端な覚悟で勝負をしようとするべきではなかったし、こいつは売られた喧嘩に応じるべきではなかった。それだけだ」

ふざけるな。どこが妥当だ。

ペレウスはぎりぎり歯噛みした。だが、言葉はのどで凍りついて出てこなかった。なにかいえば、こんどはあっさり殺されるだろうと肌で感じていたから。

その男が、尋常ではなく怖かった。

「わしは散策している。おまえの父にそう伝えておくがいい」

とおりすがりに雑用を済ませたといった感じで、兵士をひきつれてその男が去っていく。最後までペレウスのみならずヘラス人たち

に一瞥いちへつも与えることはなかった。

ファリザードが、傷をおさえてうずくまるペレウスの横に来る気配があった。おびえた声がささやいた。

「は……はやく手当てしなければ」

彼女がペレウスを立たせようとする。

片耳を失った少年は血まみれの手で、差し出されたファリザードの手を強くふりはらった。

「ぼくに触るな、ジン族め！」

9 ・脅迫（前書き）

ペレウス、イスファハーン公の理想に感銘を受けたのち、
家出しようとするファリザードを脅迫すること

9・脅迫

「やってくれたな、アーデイル、あの狼め^{おおかみ}」

^{ハータム・カリー}寄木細工の椅子に腰かけ、前に立ったペレウスをひきよせてかれの耳の傷痕を検分していたイスファアーン公が、唐突に声を荒げた。父親のとつぜんの怒号に、室内にひかえていたファリザードがびくつと肩をこわばらせる。

被害者側のペレウスものけぞりたくなつたくらいである。イスファアーン公はジン族の例にもれず美形ではあるが、エルフ種には珍しいことにぽっちゃりした体型で愛想がよく、温和そうに見える人物であつた……が、その怒りにはさすがに齡四百年をこす妖王^{マイリド}の気迫がこもっていた。

「責任をもつてあずかつた者に危害をくわえおつて…… 剣め、ヘラスとの和平交渉などつぶれてかまわんとのもりでやったのだろつが、そうはいかんど。こんど宮廷に出仕したとき、帝国に外交的失点をもたらしたと上帝の御前で糾してやる。

ファリザード！」

イスファアーン公はいきなり娘の名を呼んだ。部屋の扉を入つたところで子うさぎのように身を小さくしている彼女に、「なにをしている、ここへ来い」とさらに雷喝をあびせる。

「はい……父上」

長い耳を力なく垂らして、死人のような顔色の少女がのろのろ父親に近づく。

イスファハーン公は娘の頬を叩いた。力をこめてはおらず、叩かれた箇所がわずかに赤くなる程度の叩き方だったが、はつきりとはりどばした……ファリザードが、なめらかな頬をおさえて呆然としている。ペレウスは落ち着かない気分で父と娘を交互にみやった。かれはファールス語をひそかに身につけているため、父娘の会話はつつぬけなのである。

イスファハーン公ムラードは、きびしく娘を詰問した。

「わたしはおまえに、日ごろの使節の対応のすべてをまかせた。それが真剣での決闘さわぎを起こしたあげく、こうなった。申し開きをしてみる」

頬をおさえたファリザードの瞳にみるみる水滴がたまる。二度目に見る彼女の涙に、ペレウスはいたたまれなくなってきた。

「わ……わたし……ヘラス人の接待役なんてしないって何度もいいました……それなのに、父上がいいてくれなかったから……」

「それでふてくされて、刀で虐待することを思いついたというわけか？

みるがいい、ペレウス王子のこの耳を。この傷は一生残るぞ。直接手をくしたのはおまえの伯父上の部下だが、これはおまえの愚かなふるまいに端を発したことだ。

あのダマスカス刀はとりあげる。たぶん伯父上に突き返すのがよいだろう。ああいうものを持つのはおまえにはやはり早すぎた。自分の部屋に戻れ」

盛大に雷を落とされたファリザードは「父上なんてだいきらい」とぐすぐす泣きながら出ていった。傲慢にそっくりかえっていたときの印象がのこっているだけに、自尊心をぺちゃんこにされた姿が

なおさら哀れである。ペレウスは彼女に同情しそうになってきた。

（あいつ、たぶん悪いやつじゃなくて、中身が相当に子供っぽいやつなんだ）

そう気づくと、昨日、修練場で耳をひきちぎられた忌まわしい事件の直後、ファリザードの手を「触るな、ジン族め」とふりはらったのは、ちよつと衝動的にふるまいすぎたようにも思う。

あの瞬間は本心からそうしたのだが……イスファハーン公にこうして呼ばれ、眼前でファリザードが叱られるのをみたあとは、あまり彼女に恨みは残らなくなっていた。

それに、かれの耳をちぎったのはジン族だが、治療したのもジン族の技術だ。貴重な植物を幾種類もつかって練り上げたどろりとした軟膏は、なんらかの魔術がこめられているのかとおどろくほどよく効いた。傷はいまも痛みはするが、すでに回復にむけて皮膚がはりはじめていた。

イスファハーン公が、疲れたようにぐったりと椅子で背をまるめ、「ふだんからもつすこし厳しく育てるべきだったかもなあ」とぼやいた。

「状況は確認した。きみにも軽拳はひかえてほしかったが……だが、その傷についてはすまなかつた、ミュケナイのペレウス。

娘にはあのようにいったが、きみの怪我はわたしの責任だ。接待役をファリザードに任せた時点でまちがいだつた。同年代の子たちと仲良くなればよいと思っていたのだが、いっかなその兆しはないようだ」

「あのう……無理があつたとおもいますよ。ご令嬢はあからさまにヘラス人を嫌っていますから」

「いや、あれとて最初からヘラス人にあれほどの拒否感を示していたわけではない……わたしの手伝いのために、ヘラス語をおぼえようとしてくれていたくらいだ。あれがああなっただのは、きみたちが来るまえ、わたしが不用意にとある話を伝えたのが原因だ。」

……まあ、その話はいまはいい。

ファリザードは、わたしの宝だ。妻の命とひきかえにさずかった、わたしのはじめての女児だ。

われわれジン族は、生まれてから二十年ほどは人族と同じように成長し、そののち肉体の老化が止まるが、いずれにしろ百歳未満であればまだ成熟しきってはいないとみなされる。十二歳というのは、昨日生まれた赤ん坊も同然なのだ。

それもあつてつい、あれのことは猫かわいがりにしすぎた。叱つたことさえほとんどなく、手をあげたのはさきほどのあれが最初だよ」

顔をしかめてイスファハーン公は、分厚い手をにぎったりひらいたりしていた。叩いた手のひらのほうが痛いというように。

「そんな宝を手放してでも、わたしは人族とのあいだに和平を結びたいのだ」

「手放す？」

「ああ……ひとまず、あれをヘラスに留学にやることも考えている。各地をまわって見聞をひろめ、アテーナイやミユケナイの大学アカデメイアでそちらの文化と学問に触れるのがよからう。きみたちの素晴らしい文明への理解をさらに深めれば、ファリザードはいくばくかの敬意をヘラスに払うようになるだろう」

故国についてそういつてくれるのはうれしかった　イスファハーン公のその言葉だけで、ペレウスの側でもジン族への敵意がおおはばにやわらいだ。

しかし、ファリザードのあの様子では、まずヘラスへの出立からして納得しそうにないなとペレウスがひそかに考えていたとき、イスファハーン公は不思議なことをだしぬけに口にした。

「ペレウス王子、魔術師の宣告というものを信じるか？」

「せ　宣告？　予言のようなものですか？」

ペレウスはとまどった。イスファハーン公は厳粛にうなずいた。

「そうだ、ファールス語では宣告ホクムだ。

ジン族の古老には、わたしやホラーサーン公より古く……：征服戦争のさらに以前、無道時代ジャーヒリヤから生きている者たちがいる。ファリザードが生まれる前、そのひとりに告げられたのだ。

生まれるのが女兒であれば、その子は人族とのあいだに信頼をきずき、いま起きている戦を終わらせる役割にかかわるだろうと。

ばかっていると思うか？　思うだろう。じつさい、かれらの宣告は具体的なようできて、ときに奇怪な道すじをたどり……：ねじまがつた結果をもって、強引に宣告の成就と呼ぶことさえある。

しかし、この宣告はわたしの生涯の目的とあまりに合致しているのだ。人族とジン族が将来にわたって対立せずすむ道を模索するのは、わたしの長年の願いだった。」

熱をこめてイスファハーン公は語りだした。

「人族は増加し、その文明は進歩し、いずれはわれらを圧する勢力に育つだろう。歴史の流れだ……：それは止められない。何度没落し

ても、人族はいあがつてくるのだから。

わたしは、ジン族は人の勃興をみとめて、融和の関係をきずかねばならないと考えてきた。われわれがまだ優位であるいまのうちにこそ、こちらから手を差し伸べておくべきだと。許すことは、われわれジンにとって苦手なものだが、われわれはそれを身につけねばならんのだ」

ペレウスはぼかんと聞き入った。

そんな構想を持つジンがいるなどと想像もしていなかった。だが理屈よりもなによりも、イスファハーン公の目の真摯な色が、ペレウスの疑念を大きくとりのぞいた。

(この人は本気でヘラスとの和平を願っている)

けっしてジン族を信じ切ったわけではないが、イスファハーン公個人に対しては好意がふくれあがるのをペレウスは感じた。

ひざを屈して和平を乞わざるをえないヘラス諸都市を、このひとならば温かく抱き起こしてくれるだろう。実質上の敗北といえど、和平は屈辱ばかりではなさそうだった。

「ぼくにできるなら、力のかぎりお手伝いします、ムラード様」

使命感を胸に申し出たペレウスににこりと笑み、イスファハーン公はそれから眉をくもらせた。

「とはいえ、前途多難だがな……和平派に敵対する者が手ごわい。その政敵とはわたしの義兄だ。きみの片耳を奪ったホラーサーン公のことだ」

そういわれて、ようやくペレウスはあの男がヘラスにも名がひび

いている「皮剥ぎ公」ことアーデルだったと知った。高いわし鼻、無慈悲な声を思いだすと、背筋が氷をさしこまれたように冷えた。

「……失礼ながら、ファリザードと剣を合わせたとき、ジン族なんてさほど怖くないぞといったんは思ったのですが……そのあとに現れた、あの方たちは……」

「怖れるべきだ。その印象は正しい。今後、きみがどんな戦士になるうが、齢百年以上を生きたジンとは一対一では戦わないほうがよい。

きみを傷つけたのは妖士イフリートイルバルスだ。かれは鋼の鎧ぎょりんの魚鱗を指でちぎる。正直なところかれは、血筋のおかげで妖王マイリトの位を得ているわたしより強い。妖王の名に恥じぬわが義兄にいたっては、そのイルバルスが四人いようと瞬時に斬り殺してのけるだろう。

しかし、あの義兄の真の怖ろしさは戦士としての強さではない。かれは、和平と真逆のやりかたで、人族の脅威を未来永劫とりのぞこうとしている。征服し、管理してしまえという意見をもっているのだ。

そして、帝国のジン族は、数をひかえめにみても半分以上がそれに賛成している。ヘラス人やヴァンダル人に復讐しろと叫ぶものたちは、喜んで 剣 を支持するだろう。

わたしにしろ、もし近い身内から戦死者が出ていたら、けっして和平などいいいださなかったかもしれない。なにしろジンというのは憎むのも愛するのも極端なのだ」

剣 がファールス帝国スルターンの上帝でないのは帝国以外の国の幸福だとかれはしみじみいった。

「義兄は、帝国でもっとも偉大なジンのひとりであり、同時にもっとも狂っているひとりだ。一面ではジン族らしさを煮詰めたような

男であり、べつの一面ではまったくジン族らしくない妖王だ。

具体的にあの男が体现するのは、ジン族の冷酷な面だ。これから上帝の命で、將軍としてのかれに掃討される砂漠の賊や、都市アレツポに国家をきざっているヴァンダル人がそれを思い知ることになる。

ヘラス諸都市もまたかれの残忍な刃に直面することになるまえに、すみやかに内側での意見をまとめ、帝国との和平を締結することをわたしは望んでいる」

少年が退出したあと、ガラスをはめこんだアーチ状の窓枠のそばに近づき、イスファハーン公は不審げにうなった。

「しかし、上帝の意を受けての出兵？ 陛下がこうも簡単に兵権を剣に与えたまうとは妙なことだ」

イスファハーンを守る、赤茶色の長大な市壁。築かれた五つの門の、そのひとつの前である。

「お父上になにも告げてないんだろ？ どこへ行くつもりだよ、こらっ」

「う、うるさい、手をはなせ！」

巨大な石扉の内側で、ちよつとした騒ぎが持ち上がっていた。

二十名ほどの衛兵たちがやれやれといわんばかりの表情をしている前で、ペレウスはファリザードの愛馬、黎明の手綱をつかんでひ

きとめている。

かれはこんどこそサー・ウィリアムに会うために市内に出たのだが、少ない小づかい（貧しい故国ミユケナイからの仕送り）の範囲で、食べるものをなにか持っていこうと市場で物色していた。ちょうどそこで、伴をぞろぞろつれたファリザードが馬にのって門の前に来るのが目に入ったのだった。

市場のファールス人がささやき交わすのをペレウスは聞いた。いわく……

「ファリザード様、また遠乗りかねえ」

「しかしこんなときに砂漠に出るのはどうかね。せつかく 剣が賊の討伐にいらしているんだから、それが済むまで待てばよかろうに」

「お館様に叱られてもしたのかね。昔から、すねたら乳母の村まで逃げる子だったからなあ」

「だれかお館様に注進してきたほうがいいんじゃないか？」

首をつっこむのもどうかとは思ったが、「あれはわたしの宝だ」といったイスファハーン公の声が耳にのこっていた。怒られたことでファリザードがすねきって危ないところに行こうとしているなら、その父親のために止めなければならなかった。

「市壁の外は危険なんだろう？ 賊がますます猖獗しやうけんをきわめているっていうじゃないか！」

「賊も父上も関係ない！ おまえはいちばん関係ない」

まぶたを赤くはらしたファリザードは、頑固に見上げるペレウスから弱り気味に目をそらす。生まれてはじめて敗北したことで、ファリザードはかれに対して苦手意識を植えつけられてしまっていた。彼女はしよげきった声をだした。

「たのむから放っておいてよ。おまえはわたしを負かしたし、わたしが怒られるのもみたじゃないか。もう満足だろ？ こっちはもうおまえになんか関わりたくない」

「ちよつ　なにその勝手な言い草！　あの決闘さわぎもそれ以前も、からんできたのはそつちからだったる！？　それにどう考えてもぼくのほうがかつむった災難が大きいよ、耳は生えないんだぞ！」

「み、耳のことは悪かったと思ってる……手綱を放してつてば！　わたしは村に帰っている乳母に会いにいくだけだ！　ちゃんと衛兵だっているし、賊が出没している方角とは真逆の方向にいくんだから」

「そつはいつたって……」

ペレウスはあることのために困惑した。

「……ぼくには勝者の権利がのこっている。きみに勝ったことの見返りをまだもらっていない。なのに、それを叶える前に留守にしておらつちや困る」

それを口にする、ファリザードが、怖れていたことをやっぱりいい出されたとはばかりの絶望的な表情になった　しかしペレウスは、この件では、もう斟酌くせしやくしてやるつもりはなくなっていた。

少年はサー・ウィリアムを、ファリザードの権力　父親の七光

りだが　をうまく利用して市壁の外に出すつもりでいたのだ。

傷心の彼女が乳母のところ滞在して、しばらくイスファハーンに帰らないなどということになれば、それを待っている期間のぶんだけサー・ウィリアムが飢えかねない。底をつきかけているペレウスの小づかいではいつまでももたないのだ。

「せめてもうすこし人をつれていきなよ。ぼくも行く。すぐ支度するから待ってて」

「な……な……」突然の申し出に、ファリザードが口元をわなわなさせている。

（ぼくの荷物持ちとでもいつわって、サー・ウィリアムを今日、市壁の外に出そう。領主の娘といっしょなら、きつといちいち身をあらためられることなく検問を通りぬけられる。砂漠にでたら、適当なところでこっそり逃げてもらえばいい）

ほんとうに検問を身元あらため無しで通れるかは賭けのようなものだ。だめだったならば、正直にイスファハーン公にわけを話し、騎士の安全を乞うという手もある。ただしそれもうまくいくかわからないし、本当に最後の手段だが。

ファリザードが焦りながらもどうにか拒否しようとした。

「だ、だから勝者の権利だなんて、そんな厚かましいことわたしは承諾していない！」

開き直られそうになって、ペレウスは窮した。そのあげく、

「……きみがいないあいだ、大きな声で触れ回ろうか？　領主の娘はじぶんから挑んだ決闘でヘラス人に負けて、しかも代償をばらう

のをいやがって逃げっぱなしの卑怯者だって。きみへの評価は、領民のあいだで下落するんじゃないかな。

『貴種の恥と民の恥とは平等の重さではない』だっけ？ 領主の娘が醜聞をばらまくのはよろしくないよね」

やけくそというか、駄目もとである。

最後こそひどい事態になったが、あれはしょせん子供の喧嘩だったのだ。代償うんぬんとさわぐほど大したものではないし、ファールス人は慣れ親しんだ領主の娘の肩をもつに決まっている。そもそもペレウスは表向き、ファールス語を話せないことになっているのだから「どうやって触れ回るつもりだ」とつつこまれたら言い返せない。

が、ファリザードはあっさり惑乱してくれた。微妙に泣きそうになって馬上から抗議してくる。

「そんなの脅迫だろ！ 卑怯なのはおまえじゃないかあ！」

（あれ……おかしいな、ダークエルフというのは狡猾だって話だったんだけど……）

こんな素直で大丈夫なんだろうかこの子 と、安堵どころか呆れすらとおりこして、余計な心配までわいてくる。

以前、ちくちく皮肉る側にあつたときはあれだけ小悪魔じみたひねくれ具合を發揮していたくせに、防御に回らされたとたん彼女はいっばいいいっばいの有様になっていた。

10・予兆 上 (前書き)

ペレウス、サー・ウィリアムの家名を知り、
かつファリザードの言葉に狼狽させられること

砂漠に行く旅では、食事の時間が最大の楽しみである。

涸れた川にそって夜営することがきまったのち、ファリザードの護衛隊の騎兵たちが、イスファハーンからともなってきた一匹の羊をみるみるうちに解体していった。

夕食はたっぷり干し果物やらくだの乳にくわえ、パンに羊肉の細切れをはさんだもの、香辛料をふった羊の腸のシチュー、それに串にさした羊のあぶり肉が出ることになるう。

にぎにぎしい夕食の準備に背をむけ、ぽつねんと大きな岩に腰かけて、ペレウスは地平線のかなたを見つめている。

岩と礫砂れきさと地表に結晶した塩　その大地が砂漠である。砂ばかりの砂漠よりも、こうした「荒れ地」といったほうがふさわしい砂漠が多い。どちらも不毛の地ということでは似たようなものだが。

そんな荒涼たる風景も、ひとつの取り柄があった。漫然とながめながら考え事をするには向いている。

(サー・ウィリアムはちゃんと逃げたかな?)

ペレウスのとっさの思いつきは、できすぎなほどにうまくいったといっている。

里帰りした乳母のもとにいかうとするファリザードにくつついて検問を抜け、騎士を逃がすというその計画は、なんの引っかかりもなく進行した。

そう、不自然なくらいになんの問題も起こらなかった。

あのあと、かれは「ぼく個人の荷物運びを探してくる」という名

目で市門のまえでフアリザードを待たせ、最後の小づかいで人夫の着るような安い服を購入した。

それがすむと今度はサー・ウィリアムの隠れ家にかけてそれを頭からかぶせ、適当な荷物をもたせて大急ぎで市門にむかった。

荷物運びの人夫といつわったサー・ウィリアムの身元をあらためられることを怖れていたのだが……その心配はなかった。三十人の兵士をふくめ、五十人ほども人が増えていたのである。兵士たちの水や糧食やテントをはこぶらくだ使いや人夫がどつと増えたので、ペレウスの連れてきた人夫にも、さほど注目しようという兵はいなかった。

イスファハーン公が、家出する娘のために護衛を増やしてさしむけてきたのであった。

あのかた、ちょっとばかり娘に甘すぎやしないだろうか、とペレウスは思う。

街を出て最初の夜に、騎士とは別れた。

『これでさよならですね、サー・ウィリアム』

野営のテントから離れた満天の星の下、ペレウスが握手のためにだした手を、騎士は強くにぎっていったものだ。

『おまえは望外なほど良き従士だった、ミユケナイのペレウス。まさかこうも早くイスファハーンとおさらばできるとは思わなかったぞ』

それからにやりと口のはしを吊り上げた。

『あの街にはよろこんで尻をむけてやるが、おまえの特訓を半ばで

打ち切らなきゃならんことだけは惜しいなあ。もつすこし剣を伝えてやれたらよかったんだが。

そのうちまた会うこともあるつき。そのときやりのこした稽古をつけてやるよ。

あと、きちんと名のつておこじ」

せき払いしてかれは最後に告げた。

『オーモンド家のウィリアムだ。サー・ウィリアム・オーモンドがおれの名前だ』

背を向け、水袋と食糧のはいった袋を肩にかつぎなおし、かれは岩と砂のかなたに歩み去っていった……

(かれが砂漠に最近出る賊とはちあわせしたりしませんように)

「どうした、一人きりで」

少女のせせら笑いが聞こえてきたので、祈りを断ち切ってペレウスはふりむいた。

イスファハーンを出てから数日、すっかり調子をとりもとしたようにみえるファリザードが、腕を組んで背後に立っている。

「飲み物、食べ物ごと荷かつぎ人夫に逃げられるなんてやつぱり情けないやつだな。

あわてて市場で日雇いを選ぼうとするからそういうことになるのだ」

逃げられたんじゃない、逃がしたんだ　ペレウスはファリザードに聞こえないようにひとりごちた。そののち、顔をしかめてぶっ

きらぼうに彼女にたずねる。

「……なにか話が？」

この数日、妙なことになっている。

かれの視界を、ひんぱんにファリザードの姿がうるちよろしていた。

ペレウスが隊から少し離れて歩いていけば、横に馬を並ばせてちらちらと横目でみてくる。休息や食事のため腰を下ろして一息けば、離れたところからも言いたげにこちらをじっとみつめていたりする。

居心地がわるいことこの上ない。

このジン族の大貴族の娘が、意外なほど単純な性格なのだわかってから、前のように嫌ってはいないが、敬遠したい気持ちは変わっていない。

そしていま、ついに話しかけてきたジンニアは、「はん」とばかにしたように唇をつりあげた。

「話なら、おまえのほうにこそあるんじゃないのか。これから水と食べ物はどうするつもりだ。わたしの乳母の故郷まで、あと三日は砂漠に行くぞ」

ペレウスはぐっとつまった。

去るサー・ウィリアムにうっかり持たせすぎて、自分のぶんが今日、底をついたのだ。このままだとファールス人たちに「わけてください」と頼むことになるだろう。

(いや、でも、飢えくらいなんとか村まで耐えられれば……おなじ

ファールス人でも村人の慈悲にすぎるほうが、ファリザードの護衛にもものを乞うよりましだ)

水については、一日先のところに湧き水があるというので、かわきに苦しむことはあってもどうにか耐え切れなくはないだろう……だが、ペレウスの考えを読んだファリザードが先回りしてきた。

「いつとくが、湧き水だって確実じゃないんだぞ。年によって涸れていたり湧いていたりする。涸れていたらどうする？ 水は食べ物とちがって、三日断つのも危険だぞ。とくに砂漠を行くときなんかはな。」

なお、近くに父上の旗手があずかっている城があるけれど、そこに寄るつもりはない」

「……それで、きみはぼくになにをさせたいんだ？」

どうせ「ほしければ頭を下げてたのめ」とか、そのあたりの意趣返しだろう。こちらをひんぱんに気にしていたのも、荷物の量を確認して、ペレウスに恩を着せる時期を測っていたにちがいない。

はたせるかな、彼女は口にした。

「わたしの衛兵の荷駄のなかから水と食べものをめぐんでやる。だから……」

(ほら来たよ)

「だから？」思ったとおり、屈辱的な条件をつけられそうなので、ペレウスはうんざりした。

しかしペレウスの色眼鏡での予想はずれた。

ファリザードは勇気をかきたてるように息を吸い、一息にいった

のである。

「『勝者の権利』とやらをひっこめろ」

「……え？ ひっこめる？」

「そっちが勝手にいいだしたことだろ。一回負けたくらいで、おまえの思うがままにされるなんて、そんな一方的な話……わたしは受け入れるつもりなんてない。だから、これで全部差し引きにしろといってるんだ」

「えっと……」

ペレウスは噛み合わないものを感じた。

「イスファハーンを出るならいつしよに連れていけ」という要求を彼女に呑ませることで、かれは「勝者の権利」をとつくに駆使している。サー・ウィリアムをともなつて市壁を出た時点で、ペレウスの目的は達成されたのだ。

だが、どうやらファリザードは、大きな誤解をしつづけていたらしい。

少年が、人気のない砂漠まで強引についできたのは、つまりそこで要求をつきつけるつもりだと。

「こ……こんなところまでついてきてわたしに何を要求するつもりか知らないが、もうこんな脅迫は終わりにしろ……でなきゃ水はやらない。それにここにはわたしの兵もいるんだぞ、忘れるなよ。なにかしようとしたら痛い目みるのはおまえだからな」

そういう彼女はよくみれば腕を組んでいるというより、優美な細

身をすっかり抱いて震えを押さえていた。強気なことをいいながら声が弱々しくなり、とがった耳が落ち着きなく上下して、内心のおびえがあらわになっている。

ペレウスは憤慨をつきぬけて虚無感と哀愁を抱きはじめた。

かれ自身、「どうせ水と食糧のないぼくの足元をみて、かさにかかった物言いをするつもりなんだろう」と直前まで思っていたので、ファリザードのひどい思いこみに文句をいえる立場かは微妙なのだが、それにしても……

むきになって訂正する気力もなくなり、あっちへいってとばかりに力なく手をふる。

「わかった。わかったから。きみはそれをすみやかに忘れていい」

「ほんとだな!？」

歡喜の声がややしゃくにさわり、じろりと彼女をにらんで、「じゃ、そういうことで、さっそく水をわけてもらうかな」とペレウスは手をだした。ほんとうをいえば、のどの渇きは、すでにかなり耐えがたかったのである。

いそいそとファリザードが、革紐で首からさげていた吸い口つきの革袋をはずして手渡してくる。

ふたをあけ、ぐいとあおる。生ぬるくなっていたが、節約を考えずに飲む水はとても美味かった。

「……あ、もうひとつだけ」ふと思い出して、口元をぬぐいながらペレウスはつけたした。

「夜が寒いけどぼくにはいっしょに寝る相手がないので、毛布

「とたんにファリザードが「やっぱり」とばかりに恐怖をありありと顔に浮かべ、腰を落としてかかを浮かせ、いつでも飛びのける体勢をとった。」

「いやだ、おまえとど、同衾どうけいなんてしない！」

さすがにペレウスのひたいに青筋が浮きかける。これでも故国では王子として敬意を払われながら育ってきたので、強姦魔のごとき扱いをされて立腹したのだった。

「毛布っていったら、その長い耳はまさに『無用の長物』なのか、おいっ!？」

「い、いっしょに寝るなんていうから」

「砂漠の夜営ではたがいの体温であたためあうのが普通なんだから！ぼくはそうじゃないから凍死しそうなので、きみの毛布をわけてくれていってただけだよっ」

砂漠の夜の寒さをなめていた。いちおう革の天幕はあるが、明け方などは骨に沁みそうなほどなのだ。

ファリザードはたつぷりの毛布にくるまってぬくぬく寝ているらしいが、隊の全員がそんなかさばる荷物を持っていくわけにもいかないで、原始的な保温方法でやりすごす。つまり、それぞれの天幕では兵たちが同僚と身をよせあって眠る。

ペレウスはあいにくひとり寝である……やむなく昨夜までは、兵がつれてきた羊をかかえて寝ていたのだが、その羊はたつたいま、夕食の材料となって昇天した。

「……よし、それでこんどこそほんとうに終わりだからな。もうなにも聞かないからな」

疑いぶかく確認してきたファリザードに、ペレウスははいはいと投げやりにうなづく。聞き流しながらもういちど革袋の水をあおった。少女が念をおしてきた。

「この先、おまえと結婚しろとかいわれたって、ぜったいしないからな」

砂漠では貴重な水を噴きだしそうになった。

純情なペレウスは真っ赤になってむせこんだ。せきの合間に切れ切れに抗議する。

「ばかつ……さつきといい、きみの発想はどうなって……なんてぼくがそんな要求……」

「……聞いてないのか？」

「なにをだよ!？」

「ならいい、なんでもない! 夕食と毛布はあとで天幕にとどける!」

とつぜん、ペレウスとおなじくらい、かっ顔に血をのぼらせて、彼女は離れていった。

なんだったんだと少年はため息をついて、それから、小さな天幕を張るために立ち上がった。かれひとりで張るのはむずかしく、つぶれかけの不恰好な天幕になるのが常のことである。そんな惨めな

ものでも、手間取るので早いうちに取りかからねばならないのだっ
た。

11・予兆 下 (前書き)

妖王の娘ファリザード、ミュケナイの王子に悶々として
一方で暗雲たちこめはじめること

11 予兆 下

走るように足早に離れながら、ファリザードは胸を押さえて思った。

これでもうあいつのことで悩まずにすむ。

この数日、いつなにを要求されるかと、不安で胸が高鳴ってたまらなかった。砂漠に出てから……いいや、かれがファリザードに勝ったときから。

恨まれているならきつとひどいこと、とんでもないことを突きつけられるだろうと思った。耳をちぎられたペレウスが、彼女の手をふりはらったときの目つきが忘れられなかった。

彼女は、強烈なさげすみと敵意のまじった目を向けられたことが、あのとしまでなかった。

それまで知っていた人族とかれはぜんぜん違う、と彼女には思えた……彼女の愛する領民たちも、館のほかのヘラス人少年たちも、ファリザードの機嫌をとろうとこそすれ、そんな突き放す目で彼女を見たことはなかった。

夜ごとに毛布をかぶって震えた……うとうとすればすぐ、ペレウスあの目つきが夢に浮かび、すぐ目覚めた。

いつか来るはずのしっぺ返しと、その内容のことを考えて、まんじりともできなかった。

もし、もしあいつが体を求めてきたらどうしよう。

ううん、どうやら真面目なやつみたいだからそんなことはいわないかもしれないが、「帝国とヘラスとの講和交渉をまとめるために、

結婚に納得してもらおう」とはいわれるかもしれない。自分の名誉の範囲では高潔でも、国のためとなればそういうことを平気でいってもおかしくないのだもの。

それを面とむかってあいつに切り出されたらどうしよう。

負けたときみたいに強引におさえつけられたうえで、きみはぼくと結婚しろ、なんて正面からはっきりいわれたら。

想像すると怖くて、心臓がドキドキするさくて、頭がぼつと失ってしまうくらい血流が速まった。

怖くてたまらないのに、毛布がいらなくらい顔が熱くなって、何度も寝返りをうつうちに、明け方をむかえる夜が続いていた。

その苦悩が、こんなにあっさりと終わった。それにあいつはフリザードがヘラス人のだれかと結婚させられるという話すら知らないらしい。

深い安堵のなかに、拍子抜けしたというようなおさまりの悪い感覚がある。

少女は左の胸を強くつかむ。動悸はなかなか終わらなかった。

同時刻。

列柱そびえる砂色の大広間　襲撃者たちに占拠された、砂漠のなかのひとつの城。

領主^{ロード}プレスターの持つ長大な両手持ちの黒剣が、横殴りにぶうんとうなった。

そのダマスカス鋼の大剣は、受けようとしたジン族の戦士の三日

月刀をへし折り、鎖かたびらを裂いて、細い木に斧をうちこむよりたやすく胴体をはね切った。

傭兵をひきいて砦を攻め落としたアングル人は、黒い兜かぶとの面頬めんほおのなかから、くぐもった黒い嘲笑をひびかせた。

「四人目

『生き残りの五人のうち、だれか一対一でおれに勝てば、城の者の命を助けよう』と名誉にかけて誓ってやったのに、片っぱしから死んでいくとはどうしたわけか？」

それに死体は答えず、落下した上半身がみがかれた石の床にぶつかり、血と臓物の汁をふりまいて転がり伏す。ほかの屍たちと同じように。

一部始終をみとどけていた砂漠の城の城主は、ひくひくと頬をひきつらせた。その左腕は城が陥落したときの攻防で切りおとされ、きつく巻かれた包帯は赤黒く変色しきっている。

出血でいまにも倒れそうになりながら、気丈に足をふんばって決闘をみまもっていた城主は、ついに憎悪の声を発した。

「賊め、息子を……ヴァンダルの犬めが……殺してやる」

「『殺してやる』？ そのファールス語はおぼえてしまった。十字軍なんぞをやっていたときから聞きあきている」

甲冑とマントにおおった肩に大剣をかつぎ、アングル語で、プレスターはさらに笑う。相手が理解するかどうかはおかまいなしに。

「男も女も、みんないう。助けてくれ。殺さないでくれ。おまえたちになんでもくれてやるから。」

ときにはこうくる。『家族だけは』と。わたしはどうなってもよい。わが夫だけは妻だけは、息子だけは娘だけは生かしてくれと。そこで目の前で、そいつが助命を懇願した者を刻んでいると、そのうち叫びはこう変わる。殺してやる。殺してやる。犬ども、ぜったいに殺してやる、と。

だれひとり実行できた試しはない」

血をきるために振られた大剣の尖端が、砂漠の城の城主の胸に向いた。

「さて、ジンの貴族よ……五人目となり、息子たちと兵どものあとを追え。

高貴な者に対する礼儀として、おなじ城持ち領主のおれが首をはねてやるう。平民の首をはねる斧ではなく、名誉あるわがダマスカス鋼の剣で」

言葉はつうじなくとも挑発はつうじる。

怒号をあげて城主はすすみでた。のこった片腕で、息子の三日月刀を拾いあげて。

広間の壁沿いに観戦している、五十人ばかりの襲撃側の兵たちが、やかにやしなから賭けをはじめている。どちらが勝つかという賭けではない。ジンの城主が何合もちこたえるかという賭けだった。賭けの賞品となるのは、城にいた女たちをみなで味わうときの順番である。

ひとりだけが冷めきった声をかけた。襲撃者側にくわわっている、長衣をまとったジン族の男。

「そろそろ遊びすぎだ、プレスター。気をひきしめろ、その城主は

イフュート
妖士だ。あなどっていると片手でもおまえの首を引きぬくかもしれんぞ」

それに応えて、みたび嘲笑が広間に放たれた。

「こんなやつらをあなどるなと？」

あの悪魔のような 剣アル・シャムシールとその配下の戦士どもは避けざるをえなかったが、ここいらの……イスファハーン公領のファールス兵は、ぬるすぎる」

領主
ロード・プレスター・オーモンド アングルの地の真夜中城の
城主 は、ジン族の城主を「さあ来い、来い」とあざけた。

「おれは夜だ。きさまの上に夜が来たぞ」

夜には翼があるという。世界をおおう黒い翼が。
そしてだれの上にも、舞い降りる。

12 パウサニアス(前書き)

ペレウス、都市クレイトールの少年パウサニアスに接近され
持ちかけられたとほづもない話に驚愕すること

12・パウサニアス

砂漠のなかには点々と、旅人や隊商が利用できる泉が存在する。そのひとつの手前で、騎乗の者も徒歩の者も、隊の全員が足を止めていた。

ジン族の衛兵隊長が、先行していた兵たちを問いつめている。

「涸れているわけではないのに泉の水が使えない？ どういうことだ」

肩をつかまれたひとりの兵は、いささかひるんだ様子で「それが、水が塩からいのです」と報告した。隊長が困惑を浅黒い顔にあらわす。

「ばかな、地下水の湧き水だぞ。それに塩砂漠の砂が入らぬよう、椰子やしの木々と風防柵がめぐらされている」

「わかりません。とにかく飲めないんです」

なんてこつたと隊長は毒づき、ふりむいて隊に叫んだ。

「全員聞け。水にあまり余裕がない、むだに使うな。これからは急いで先に進むぞ」

ペレウスはファリザードからもらった水袋をにぎりしめて気を重くした。

（また節約と強行軍か）

パウサニアス　今回のファリザードの砂漠行に同道している、ペレウス以外の唯一のヘラス人少年　が横でヘラス語にいい直して伝えてくれる。

「泉の水が塩からくて使えないので、急いで先へ進むそうだ」

パウサニアスはそののち分析をはじめ。

「地形のどこかが崩れて、地下水脈に地表もしくは地中の塩が流れこんだのだろうか。いや、そのほかに考えられない」

かれはペレウスの一歳上の十三歳で、王政都市クレイトールの出身である。先日決闘さわぎのとき、最初に「がんばれ、ペレウス」と声援をおくり、セレウコスにいいかえしてくれた少年である。学者肌で、ペレウスよりさらに痩せてひよろひよろしていた。

敵国語を解することをいまだ隠しているペレウスとはちがい、パウサニアスは帝国の地に来る前からファールス語を学んでおり、公然と話している。

仲良くなつたあとの話によれば、「ファリザード様が砂漠に出ると館に報せがきたとき、イスファハーン公が娘に衛兵をつけるというので、見聞を広めておこうと混じらせてもらったのさ。ペレウス、きみの通訳もつとめてあげよう」ということだった。

じつはぼくもファールス語を話せるんだよと、ペレウスはかれにすっかりいいそびれていた。

かれと親しくなつたのは昨日のことだ。

湯たんぼがわりにペレウスが抱えて寝ていた羊が、食用としてさばかれてしまった夕方の話である。

一人寝の寒さはファリザードに提供させた毛布で乗り越えるつもりだったが、おもわぬことに、ファリザードにつづいてパウサニア

スがかれのところを訪れた。

『天幕を張るのを手伝うよ。ふたりいるだけでだいぶ違っ』と話しかけてきたパウサニアスに、ペレウスは当初、不信感をすてきれなかった。

同じヘラス人に陰湿ないじめを受けてきた記憶は、薄れこそしたが忘れてはいない。

直接手をだしてきたアテーナイのセレウコス以下、民主政都市の少年たちは論外であるが、王政都市の少年たちも、傍観しているばかりで助けしてくれなかった。

その恨みが、ペレウスに冷たい、ひねくれた物言いをさせた。

『いまになってぼくになんのつもりだい、都市クレイトールのパウサニアス。こちらには特に用はないよ』

『聞いてくれ……きみに許してほしいと思っている。王政の都市からきた者たちはみんなそうだ』

『なぜだ？ ぼくがファリザードとの立ち会いに勝ったとたんいきなり「許してくれ」とはどうしたわけだい？』

このときペレウスは、気づかないうちに冷笑的な態度になっていた……が、パウサニアスのつぎの言葉はかれを絶句させた。

『きみはあれでヘラスの名誉を守った。そして、王政都市の子たちの面目もほどこしてくれたんだ。』

ぼくら王政都市の子供たちは、これからはきみを中心に固まって民主政派に対抗しようとおもっている。きみがぼくらを許してくれるならばだが』

あつげにとられたのち、ペレウスはついで眉をひそめた。

『……どうということ？ イスファハーンにいるヘラス人同士が、個人間の喧嘩という程度じゃなく、派閥をつくつていがみ合うわけ？』

『もう派閥はできてしまっている。民主政派はとつくにセレウコスを中心にまとまっているんだ。どんなろくでもないやつらの結びつきだろうと団結は力だ。』

ほくら王政都市の子たちだけがてんでんばらばらなんだ。民主政のやつらはほくらの政治体制を『僭主制』『独裁制』とよんで差別し、ことあるごとにいやがらせしてくる。それなのにこっちは対抗できない。めいめい我慢してやりすこすだけだ……

ペレウス、きみがいちばんひどい目にあわされていたのは間違いない。でも、きみほどじゃなくても、あいつらにはみんなうんざりさせられてきたんだよ』

いいわけにもならないけれど、とパウサニアスは言葉をついだ。

『ぼくはここに来る前、ヘラス最強の都市アテーナイの代表には逆らうなと、母都市の議会からいい含められていた。アテーナイにらまれるようなことになれば、母都市が不利益をこうむるからと。みてみぬふりをしてきたのは、それがゆえだ。ほかの少年たちも似たり寄つたりだとおもつ。』

でもそれももう限界だ。ほくらがどれだけおとなしくしていようと、もう王政都市と民主政都市の子供たちの対立路線は避けられない。

ほくらも、だれかを指導者役として固まる必要がある。それにはきみが最適だよ』

ペレウスは目をしばしばまたたかせた。度肝を抜かれていたので

ある。

(指導者? どうしてそんな話に?)

『ぼ……ぼくは十二歳だよ。パウサニ阿斯、秀才と名高いきみをはじめ、ぼくより年長の者が何人もいる』

『現在、きみより資格のある者はいないだろうと、ほかの王子たちとは意見が一致した。ジン族との一対一の勝負に勝ったのはきみだけだ。民主政都市アテーナイのセレウコスではなく、王政都市ミユケナイのペレウスがヘラス人全体の面目を保ったんだ。そして、きみは精神の面でもぼくらのだれより強靱だとおもっ。

きみはセレウコスたちにあれだけひどい目にあわされても、けっして折れなかったし、自分を曲げなかった。あの武術、セレウコスに復讐するためにじっくり身につけていたんだらう?

あいつらに復讐したいのはきみひとりじゃない。復讐のことがなくても、民主政のやつらはぼくらの都市の利益を積極的にそこなおうとしている。ヘラスへの報告書は、「代表団の監督役」「書記官」を勝手に名乗っているセレウコスたちを通さなきゃならないんだぜ。あいつらがここでしていることを報告なんてできないんだ。

遊んでいるだけのあいつらが、報告書のなかでいかに自分たちを持ち上げ、ぼくらをどれだけこきおろして悪し様に書いているか知れたもんじゃない』

唾棄したげに、一瞬パウサニ阿斯は顔をゆがめた。その吐露された憎しみはたしかに本物と思われた。

かれは、とまどっているペレウスの手をとって熱心に説いてきた。

『ペレウス、手を組もう。これは子供の遊びじゃない、ぼくらは次世代をになう王族だ。ここからはじまる結束は未来において、民主

政都市に対抗する王政都市の同盟につながっていくはずだ。

『きみがその発足したばかりの王政都市同盟の、当面の指導者になるんだよ』

13・歴史の宿業（前書き）

ペレウス、古代ファールスの宿業を知り、
ファリザードに道の変更を上げられること

13・歴史の宿業

人と馬とろくだが縦列をなして砂漠をすすんでゆく。

日射に焼かれた大地をふみしめると、塩の結晶がサンダルの下で乾いた破砕音をひびかせた。パウサニアスがぼつりといった。

「遠い昔、古代ファールスの全盛期以前には、ここは緑の土地だったらしいよ。」

「あなたの山並みまで、歳経た巨人のような高い木々が天を衝いていたそうだ」

「ならんで歩み、らくだをひいているペレウスは、かれの話に興味をそそられて問い返した。」

「森だった？　じゃあなんでそれが、こんな不毛の地になったんだろっ」

「人族の愚かさのせいだと、ジン族の記した書物は記録している。」

古代ファールスの諸王朝が、森を切り開き、焼き払って畑をつくることを民に認めていたからだ。人の数が増えるほど、森は減り、畑に変えられていった」

「……畑？　畑なんて、このへんには……村々のまわりにしかないよ」

「逆だよ、ペレウス。地下水がわきでるところだけ畑が砂漠化せずに残り、人々はそのに村を置くしかなくなったんだ。」

森を畑に変えて、しばらくはたしかに作物がとれた。けれど、やがて何も育たなくなり、荒れていった。このあたりの大地は、もと

もと生えていた木々がなくなればすぐ乾いていくらしいね」

「……なんで森の木々を切ることを禁止しなかったんだらう？ 古代の諸王朝は」

「砂漠化はゆっくり進んだからね。初期王朝はあまり焦らなかった。いいや、問題視すらしなかった。」

中期王朝は何度か伐採禁令を出し、森林を守るため、地方長官をかねる監督官を中央から派遣して見張らせた。けれど、当時は人の数が一気に増えた時期だったそうで、人々が飢えないようにするためには新しい畑を開墾するしかなかった。民は監督官たちの目をぬすんで木々を伐り、または公然と反乱して森を切り開いた。ときには監督官自身が反乱を指導した。その反乱者たちにはかれらなりの正義があつた……『飢える民を中央の悪政から救わねばならない』とかれらは一様となえて決起したんだよ」

「そんな……ずっと長い目でみたら、森林破壊こそが自分たちの首をしめることにつながっていたのに」

「百年先のことより今日や明日食べるもののことしか考えられないよ、人族の大部分はね。」

話の続きだけど、古代ファールスの後期から末期はもうぐだぐだだった。中央の力が衰えて、ファールス各地の地方長官たちは好き勝手に独立国をつくって攻めあつた。そして、民を食べさせられない国は、民にそむかれ、他国に攻めこまれてすぐ滅ぶ。民の森林開墾をいまさら禁止することなんてできなかつた。

外からやってきたジン族の征服が、混乱と際限のない砂漠化に終止符をうつたといわれている」

日々の勉強を絶やさなかつたパウサニアスは、ファールス語を解

するだけでなく、ファールス文字の書物すらこともなげに読み解いているようだった。

かれの秀才ぶりにペレウスは舌を巻き、感心して聞き入っていたが、最後の一言には眉を寄せた。

「……まるで、ジン族の征服がよかったようにいうじゃないか」

「ファールス人のためにはよかったんだろう、実際」

「そんなばかな」ペレウスは聞き捨てならないと反論した。「あの時代、ジン族によって古代ファールスの人種はたくさん殺されて、それまでの生活のしかたを変えさせられ、その信じていた神々は悪魔として捨てられた。そしていまもなお、この地の民はジン族にひれ伏さなければならぬ。そんなことをよかったっていいのか、パウサニアス？」

「かれらの自由にさせておけば、もっとひどいことになっていたよ、ほぼ確実にね」

パウサニアスはすげなく断言した。ふだんは気弱そうなくせに、学問や歴史分析の話となるとこの少年は人が変わり、活き活きとしてしゃべりまくるのだ。……あと、政略を語るときも。

「群雄割拠していた古代ファールス各地の地方長官たちが、『われわれはお互いのいさかきをひとまず止め、森を守ろう。武器をつくるための炉に必要な薪まきをとらず、新しい畑を切り開くこともひかえよう』といったかい？」

かれらが砂漠化をふせぐなどという大義を実現するため団結できたと思うかい？」

「……いよいよ危機の瀬戸際まできたら、そうしたかもしれないじゃないか」

ペレウスは抗弁をこころみだが、パウサニアスの口早の指摘にたちまち押し流された。

「ぼくらヘラスの『自由な』各都市をかえりみてごらんよ、ペレウス。口のうえでだけ大義に同調して、裏では互いを出し抜こうとしている。」

古代ファールスの人々もきつとおなじだったろう。隣国との争いに不利になるとわかっていながら森林の伐採をやめるなんてできなかったに違いない。

ジン族……あの砂漠エルフたちがぼくら人族を『長期の視点をもつことのできぬ愚者』とさげすむのは理由があるのさ」

かれの断定調の語り口に、たじたとなりながらもペレウスはどうにも面白くない気分である。

「パウサニアス、きみはちよつと人族をこきおろしてジン族を賛美しすぎじゃ」

ペレウスが子供っぽく口をとがらせてそういいかけたときだった。軽やかな馬蹄の音がひびくと、青鹿毛の黎明号サハールにのつたファリザードがふたりの横にならび、ぐいと手綱をひいて愛馬をとめた。

ペレウスは警戒した。昨日まであてにしていた泉が使えなかったことで、「ほらな、わたしが水をめぐんでやったことで助かったろう」と勝ち誇られるんじゃないだろうかと思っただのである。

が、ファリザードはむしろかれより気まづげな面持ちを浮かべたのち、声をはりあげてせつついた。

「これから涸れ川を離れる！ 高いところへ移動して歩くから、ちやんとついてこい」

「え……なんでわざわざ？」

砂漠のこのあたりでは、涸れ川を離れると、岩が多かったり起伏があつたりして地形が荒れている。

若干ヘビが多いという問題はあつても、水がなくなって干からびている川の底がいちばん歩きやすいのだ。

ファリザードは西の空をさして、その疑問にきつぱり答えた。

「あの雨雲をみる。まもなく雨がふりだすんだ」

たしかに、空の一角に雲がにわかになきおこつていて、それは恐ろしい速度で広がっていた。

「そうか、砂漠にも雨がふるんだつた」

「ああ。珍しいが、ごく稀に集中してふる。そうすると涸れた川に短時間で水が戻る。ここはたちまち洪水のありさまになるぞ。おまえたち溺れたくないだろう」

説明に納得してペレウスはうなずき……ふと思いついた。

「そうだ、雨水が革袋に貯められるかも」

それを聞いて、ファリザードがぎくりとした表情になる。その彼女の様子でペレウスもあることに気づいた。

泉は使えなかったが結果として新鮮な水は補給できることになつ

たわけで、「ほらな、わたしのめぐんだ水があつて助かつたろう」は通用しなくなった。ファリザードのほうで、「やっぱりあの取り引きは無しで」とペレウスにいいだされることを怖れているようである。

「そ、それと豪雨を避けるというので、やっぱり父上の旗手の城に寄ることになった！ 決めたのはわたしじゃないからな、昨日の話と違つと文句をいうんじゃないぞっ」

いいわけがましく一息にまくしたて、なにかいわれるまえにと彼女は手綱をめぐらしてすばやく逃げていった。パウサニアスがぼかんとして、疾駆する背を見送りながらペレウスにたずねてくる。

「……昨日の話つてなんのことだい、きみ？ ぼくの前にファリザード様がきみのところに？」

「たいしたことじゃないよ」

そういいながら、ファリザードの今しがたの狼狽を思い返してついで、ペレウスはくすりと笑った。

（都合が悪い話なのにわざわざ自分で伝えにくるなんて、意外に律儀なやつ）

あんな生意気な子だが、たわいもない一面を知ってからちょっとした可愛気を感じなくもない。ただその余裕の笑みも、パウサニアスが横で感嘆するまでだった。

「すごいなあ、ずいぶんファリザード様と打ち解けたじゃないか」

「……えー？ どのへんがそう見えただ？ 前よりはましだけど、さすがに友好的とはとてもいえない態度だろ」

「あの方が進路変更を教えにきてくれるなんて想像もつかなかったよ。嫌味か、例の決闘の誘い以外に、彼女が自分から直接ヘラス人に話しかけようとする事なんてなかったぞ。用があれば使いをよこして伝えるかこっちを呼びつけるだけだった」

「そこらへんが改善されたのはぼくもちよつと見直したけど……」

「……ま、もしかしたらきみ相手限定の変化のような気もするけれどね」

声をひそめて、なにごとかをに合わせるようにパウサニアがささやく。ペレウスはすこし考えた。

「そうかも。市門を出るまえに、彼女に『おまえに関わるとろくなことになるからもう関わりたくない』みたいなことをいわれたよ。ぼくはどうもちよつと怖がられてるみたいだ。

いずれにしても、打ち解けたなんてとんでもない勘違いだよ。イースファーン公に怒られて鼻っぱしらを折られたから、態度が慎重になっているだけさ、あの子は」

ペレウスのわけ知り顔の言葉に、パウサニアがなぜか苦笑した。

「いや、きみ、そういうことでは……たしかにそれもあるかもしれないが……」

「それはそれとして」

ペレウスはパウサニアスの要領をえない話を断ち切り、かれをじろりと横目でにらんだ。

「フアリザード様？ きみも都市クレイトールの第九王子だろう、パウサニアス。」

イスファアハーン公そのひとの名に外交礼儀として『様』をつける場合はともかく、その娘ごときにそこまでへりくだる必要があるのかい。ヘラスの王族として、もっと毅然としていなよ」

そうペレウスが忠告すると、パウサニアスはなにかが笑壺に入っただよように、本格的にくっくつと笑いをもらしはじめた。

「きみはほんとうに気むずかしくて強情でがんこなほど誇り高い『古い王族』なんだなあ、ミュケナイのペレウス」

ペレウスはむっとした。

（おや、以前フアリザードには誇りに乏しい小便王子と罵倒されたけれど、パウサニアスには頑迷がんめいな骨董品よばわりされるのか）

「悪いかい？」

ぶつきらぼうにペレウスがいうと、パウサニアスはとつぜん、ひどく真剣な顔になった。

「べつに悪くない。ただ、まわりがきみと打ち解けにくくなってしまふ。そうしたいと思っただけでね。」

ペレウス、むくれず聞いてくれ。指導者には強固な意志と、人を受け入れる度量の両方が必要だ。きみはすでに強い精神を持っている。これからのために、度量をも身につけてほしいんだ」

「……自覚はあるよ。たしかにぼくは強情だし、人当たりのいいほうじゃない」

ペレウスは一転して消えいりそうな小さな声になって答えた。

このときかれは、パウサニアスが最初に話しかけてきたとき、とげのある皮肉を投げつけたことをおもって恥じ入ったのである。

「ねえ、パウサニアス、未熟なぼくが王政都市同盟の指導者っていうのはやっぱり無理があるよ。」

セレウコスたちには小便王子とこの先もあげつらわれるだろうし……ぼくよりほかに適任が……なんならぼくは、頭のいいきみを支持するけれど」

「また辞退の話か？ アテーナイをしのぐ都市は武力ではスパルタ、権威ではミュケナイしかないんだよ。イスファーンには都市スパルタの使節はこなかったんだから、セレウコスの母都市に対抗できる格をもつのは歴史の古いきみの都市だけだ。」

それと漏らしたことなんて、きみの敵以外は、きみが思うほど気にしないよ。十二歳のときの、酔っ払つての一度の失敗くらいはね。ぼくについては、補佐する役回りのほうが好みなんだ。おもてに出ずいろいろやれるしね。」

あきらめてかつがれなつて、ペレウス」

「指導者というより、きみたちの傀儡かいらいにされるんじゃないかって予感がしてきたんだけど」

らくだの手綱をひきながら、ペレウスは嘆息した。

その頭上をみるみるうちに雨雲がおおっていく　肌寒く、そして暗くなつてゆく。

彼方に、ファリザードがいった城砦の壁がみえてきていた。

14・虎口（前書き）

一行、知らず虎口に踏み入り、
たちまちにして窮地におちいること

14・虎口

砂漠の城につくころには、隊の全員が夕の雨に濡れそぼっていた。暗い曇天から落ちてくるしたたりは、勢い強く大粒のものだった。しかもその勢いは刻々と強まっていく。

（あの王子は列を外れずついてきているかな）

ファリザードは鞍のうえで肩ごしにちらりとふりむいた。蟻ありの行進のように黙々とつきしたが、背後にしてきた谷が目にはいる。

その谷はさつきまで涸れた川で、道として利用していた……なのには、流れる水が土色にうねって、荒ぶる怒涛となっている。川の音と雨の音のどちらがより激しいかわからなかった。

砂漠の大地は、水がもたらされるときでさえ苛酷だ。

衛兵隊長が軍馬を走らせてくると、主君の娘の馬にならばせて、案ずる声をかけてきた。

「ファリザード様、雨よけの皮衣はほんとうにいららないのですか？
体が冷えますよ」

「だいじょうぶ。ニザーム卿の皆はすぐそこじゃないか。みんなが暖まるための炉や風呂を馳走ちそうしてもらえるはずだ」

騎乗したまま濡れねずみになった少女は顔をもどし、いまや目前にせまった城を指さした。

この砂漠の城 名もなき砦とりでのひとつ は、イスファハーン公家イフールトの旗手をつとめる妖士、ニザームが長らくあずかっている城だ。

今回イスファハーンをとびだした経緯がみつともなく、たずねられたくもないので、ファリザードはこの城に立ち寄るつもりはなかったが……この雨ではやむをえまい。

岩山の湧き水を利用したこの砦はかなり大きい。

かつては城壁の外にまで耕作地が広がっていたそうで、城壁内には畑や兵舎や牢獄だけでなく寺院や浴場すらある……ただしいまは、大半の建物には人が入っておらず、緑の色もほとんどない。

湧き水が極端に減り、深い井戸からくみあげられる程度の水量しかなくなつたため、かつてにくらべて人が少なくなつたのだ。イスファハーン公家が旗手のひとり到这里を与えたのは、さびれかけた砦を守るためというより、忠実な臣下に城をひとつやろうとしたからである。

(……あれ?)

衛兵たちに周囲をかためられて橋に馬をすすめ、雨水がたまりつつある空堀をわたり、開かれた門と落とし格子の下をくぐつたところで、ファリザードたちは足を止めた。

どうも様子が妙だった。先行した先触れの兵が、まだ門楼のうえへと呼ばわっていた。

(なんで第一門だけ開いて、第二門が閉じられているんだらう? これでは混乱してしまう)

ファリザードの隊は、先頭が城になかば入つたところで行く手をふさがれた格好だった。そのうえ、「待て」の合図が隊のうしろまですぐには届かないため、第一門をくぐって続々と後列の者たちが入ろうとしてくる。

小さな曲輪くわのなかで、押し合いへし合いしながら立ち往生するはめになっていた。

衛兵たちはいらいらしながら叫んでいる。

「なにをふざけている、第二門を開ける。われわれはイスファハーン公家の者だ。この悪天候ゆえにしばしの逗留を乞いに来た。

門を開けるといふのに！」

返答はなかった。四方をかこむ胸壁は、一行をあざけるように黒々とそびえたち、沈黙していた。

密集状態にいらだつた兵士たちが、鉄の鉞つよをうった第二門をこぶしで叩き鳴らしはじめる。

「こら、乱暴なふるまいはよせ」と叱責する隊長の後ろで、ファリザードはふと胸壁をみあげた。

なめまわすような視線を感じたのである。少女の肢体にはりついたその視線の感触はひとつではないようだった。まわりを囲んだ矢狭間のそこかしこから、何者かがこちらを凝視しているのが感じられた。

（なんだろう、雨で薄まっているみたいだけれど、かすかにへんなにおいもする）

ジン族の感覚は鋭い。ファリザードが薄気味の悪さをおぼえはじめたとき、出しぬけに門楼の上から声があつてきた。

「最近は砂漠に賊が出る。日が落ちたのちは、身元を証明しないかぎりよそ者は入れん。

まことにイスファハーン公家……薔薇びばの一族ならば、その旗印をみせてみる。でなければ門は開けられん」

狭間胸壁に立っているのは、暗さゆえはつきりとはわからないが、砂よけの布を顔に巻き、鎖かたびらを着こんだ兵士のようだった。

思ってもみなかった要求に気分を害した衛兵隊長が、さきほど「乱暴なふるまいをするな」と部下を叱ったことも忘れてどなりかえす。

「主家に対して門をとざしたあげく旗印をみせろだと？ 賊は遠方を荒らしていて、われわれはそれに背をむけて遠ざかってきたのだぞ。われわれをよくみる、荷を背負った人夫が半分近くをしめている。これが賊の一群にみえるのか！」

「奪った荷を背負った賊かもしれない。なにぶん、視界が悪いので後ろのほうまではわからぬな。旗印がないなら入れるわけにはいかん」

胸壁に立って駄目出しをするその門番らしき兵士の声は、陰鬱でありながら奇妙によくひびいた。衛兵隊長が激昂した。

「門番め、これ以上ファリザード様を雨にさらすようなことになれば、きさまのその態度はかならずニザーム卿に話して」

「よせ、もつともだ」 急激にたかまる違和感をおさえこみながら、ファリザードは制止した。「門番の役割はまさにこれなんだからしかたない」

「……わかりました。ここは旗印をみせて堂々と通り、とつちめるのはそのあとにいたしますか」

しぶしぶ了承した衛兵隊長が、門番に聞かせるよう大声でそうい

った。こころえた衛兵たちが獣皮をかぶせた長持ながもちをあけ、旗をとりだして手で広げる。

赤地に金糸で刺繍された、「黄金の薔薇ひば」の、イスファハーン公家の家紋。雨風にけぶった薄闇のなかにあっても、その紋章は燦然さんぜんとかがやいた。

数瞬の無言のうち、門楼の上から「おお、たしかに」と声があがった。

「となるとそちらのご令嬢は、イスファハーン公家のファリザード様ですね」

蛇がしゃべるとすればこうであろうというような、冷たくぬらつく声音　総毛立つものをファリザードは感じた。

（こんな声の者が、この城にいたのだろうか？　おかしい。なにかおかしい）

疑念をいだかせる門番の声が、曲輪に淡々とひびきわたった。

「無礼をお許してください。しばしお待ちを」

それにこたえ、隊長がふんと鼻をならす。

「急げよ。雨に打たれながらでは気は長くないぞ」

そのときファリザードは、さきほどから嗅いでいたにおいの正体に気づいた……彼女の一行がおちいつている状況にも。

彼女らは四方を壁にかこまれた場所で、身動きに苦労するほど密集し、みおろされていた……脊髄が凍るような恐怖がにわかには

リザードをとらえた。

とつさに手をのばして隊長の腕を押さえ、彼女は焦った声でささやいた。

「引きかえそう！」

その唐突な言葉に、隊長は「なんです、ファリザード様」とけげんな顔をした。そののんきさに腹をたてる余裕もなく、ファリザードは必死にせつついた。

「戻ろう、いますぐ第一門の外に出よう！」

「戻る？ 豪雨の砂漠へですか？ ファリザード様、どういうことです」

「血のにおいがただよってくる！」

彼女のまえでペレウスが耳をひきちぎられたとき、嗅いだに嗅いだに、脳裏に鮮やかなあの記憶が、雨に溶けたほんのわずかなにおいを識別させた。

隊長が身じろぎをとめ、小鼻をひくひくさせて大気を嗅ぎ、そしてその顔色もまた変わった。

しかし、あまりに遅すぎた。

後方 第一門の外から、突撃ラツパが鳴りわたった。

猛った呐喊とっかんにつづき、馬蹄の音が雨音を押しつけた。いくつもの絶叫と断末魔がそれにつづいた。

相手がだれかはわからなかったが、なにが起こったかは明白だった。

た。

何者かに不意打ちされた。こちらに害意をもつ者たちが城壁の内と外にひそんでいた。縦列の後ろ半分を襲われた。

（襲われたのは荷駄をはこぶ人夫たちやらくだ使いが大半で、まともな武器も持っていない　すぐに衛兵をむかわせて助けないと！）

「外に！」

叫んでファリザードは馬首をめぐらし、急ぎ足で第一門から出ようとした　が、恐慌にとらわれた隊後方の者たちが、逆にどつと城壁のなかに入ってこようとする。曲輪内にはいよいよ人馬がひしめき、駆け出るどころか、数歩進むことさえおぼつかなくなってきた。

「プレスターのいうとおりかもしれん。おまえらイスファハーン公領のやつらは、兵も民も平和呆けて、どこまでも愚かだ。」

城内の様子を検分もしないうちに、城の虎口（門にちかよる敵兵を殺すための仕掛け）に自分から頭をつっこみに来るとは、敵のことながら呆れはてる」

門番　ではなかったその賊の男が、うずまく混乱を見下ろしながら、胸壁の上で独白していた。

「皮剥ぎ公アーデルの軍や、西方の戦の最前線に出ている軍にくらべれば、おまえらは赤子のようなたわいなさだ。」

それだからわれわれはイスファハーン近郊からこっちに逃げてきた。剣　が伴ってきたのは二百名とはいえ、あの精鋭どもの前に立つなど正気の沙汰ではないからな」

語りながら、偽の門番の手が合図すると、狭間胸壁にぞろぞろと弓をもった兵があらわれた。

そのうちの一名が、手にしていた毬まりのようなものを曲輪に投げこんできた……それはファリザードの愛馬黎明サハールの鞍に一度ぶつかってはねかえり、石畳に転がった。

ジン族のものである血まみれの首　ファリザードは衝撃と戦慄にあえいだ。

(ニザーム卿……)

「その城主も愚かだった。夜襲への備えがないも同然だったぞ。

この規模の城壁を手抜きなく見張るためには、歩きまわる五人以上の歩哨を胸壁の上に配置しておくべきだったのに。夜番はこの大手門に一名、裏門に一名がいるだけだった。それも、腰をおろして酒をなめ、目を光らせていたとはとてもいえないありさまだな。

こっそり胸壁に這いあがり、後ろからしのびよってそいつらののどをかき切るのはたやすかった。そのあと、門を開けてわが方の兵をなだれこませ、城を占拠させるのも」

“門番”とおなじく黒布で顔をおおった賊兵たちが、ゆうゆうと弓をひきしぼって配置につく。胸壁の上から下の曲輪へと射線を集中させられる、絶対的な優位をたもった位置。

一行をのぞきこむようにかがみこんだ“門番”が、「終わらせようか。武器を捨てる」といった。

「ファリザード姫を置いていけ。姫を人質としてよこすか、姫ごと全員が犬死にするか選べ。

よく考えろ、だが急げ。雨に打たれながらでは気が長くないのは、こちらもだ」

15・襲撃（前書き）

賊により雨の砂漠に血がふりまかれ
ペレウス、ファリザードの嘆願に命救われること

その騎兵たちの全身をおおう甲冑は、どうみてもヴァンダル式のものだった。

遠い故国からきて「十字軍」を称した者たちの装備。雨をはじく銀や黒色の甲冑が、軍馬にまたがって殺到してくる。数は十名ばかりだが、それはじゅうぶんにも重くまがまがしい威容だった。

こんなときでなければペレウスは、異国風の騎馬武者を興味ぶかく観察したかもしれない。

あいにく、そいつらが槍をかまえてキヤロツン襲歩でこちらに突進してくるときに、じっくり観察する余裕などというものはない。

最初、ずっとひそんでいたらしいその騎兵の小隊は、城壁の陰からごくさりげなく現れた。あっけにとられたペレウスたちから離れたところで馬を旋回させ、手際よく一列にならんだ。そして、いきなり拍車をかけ、空堀にそって走りはじめたのだ。

明らかにペレウスたちのいる縦列の横腹につっこむかまえた。

『足並みをそろえた重騎兵の一斉突撃は、巨大なハンマーのようなものだ』

かつて酒をかつくらしいながらサー・ウィリアムが、美々しい騎士物語とは相反する「現実の戦場の話」としてたれた教えが、警鐘となってペレウスの頭にひびきわたる。

『うつかりその前にいあわせた歩兵はご愁傷さまだな。転がったところで腹を馬に思いきりふみつけられると、腸がとびでて苦悶のう

ちに絶命する』

ペレウスは頬をひきつらせた。これが話にきいた、ヴァンダル人お得意の「重装騎兵の一斉突撃」であることは疑いないとおもわれた。

「なんだ、あれ」

列のほかの人々とおなじく、ぽかんとみていたパウサニアスがつぶやいた　いや、かれらは反応できず固まっているのだった。

ペレウスのみが、得ていた知識のおかげでかるうじて麻痺から逃れていた。

恐慌の叫びがのどまでせりあがってきたが、ペレウスはそれをおさえ、サー・ウィリアムの教えという頭のなかの引きだしをもう一度開けた。こうした場合の打開策はなんだったろう。

『地形も障害物もさまたげにならないならば、勢いにのった重装騎兵団のまえにたちはだかれるのは、槍をもった歩兵の一群がおなじ重装騎兵のみだ。それ以外のやつらは死にたくなきゃ逃げる、だな』

槍？　甲冑？　ペレウスはみまわした。

そんなものが味方側のどこにある？　そもそも衛兵は先頭のファリザードのまわりに集中し、後方のペレウスたちのまわりにいるのは荷かつぎ人夫ら非戦闘員ばかりだ。槍持ちがいたところで、不意打ちに対応する時間もない。

『死にたくなきゃ逃げる』

どうにか冷静でいられたのは、そこが限界だった。かれはそれまで話せることを隠してきたファールス語で「逃げる」とつぶやき、

「逃げるお！」

もう一度、周囲のためにこんどは絶叫し、パウサニアスの手をひいて縦列からかけたした。

かけたした直後に背後で、災禍の嵐がまきおこった。

鎧をきこんだ人馬の突進　速度と質量がうみだす圧倒的な衝撃力　それが、第一門の外にはみだして長々とつづいていた縦列の横腹をなぐりつけたのだ。閉じた箱に頭をつつこんで動けなくなつた蛇の胴体をけとばすかのような横撃だった。

走りながらふりかえってペレウスは戦慄の光景をみた。

鋼が肉を蹂躪していた。

賊　おそらく賊だろう　の騎兵たちは、最初の突撃で長槍を馬やらくだにつきたて、もしくは体当たりし、地に投げ出されたらくだ乗りや衛兵たちを馬蹄にかけていた。

(乗り物から殺しているんだ)

これまたサー・ウィリアムのいったことだ。

『青二才で功名しか頭のない騎士は戦場で強い敵との一騎打ちを求め、高名な敵を求め、突撃のときには馬上の人間をねらう。だが老練で戦慣れした兵ならば、多くはかたまつて行動し、弱い敵から叩くことで戦列を乱させ、平然として相手の馬を殺す。獣の本能をもつそいつらのほうがずっと危険なのさ』

こけまろびそうになるパウサニアスをひっぱって、ペレウスは城門前から離れようと走った。一気に汗をふきだしたパウサニアスが「ばかな、こんなばかな」とくりかえしていた。

「あれがイスファーン近郊に出ていたヴァンダル人の賊なんて、そんなはずはない……ぼくらは賊の出没する地方を後ろにしてきたんだぞ」

「先回りされたんだろ！」

「そんなはずがないよ！」

砂漠の道には決まったルートがある、とちゅうに水が湧きでていくか否かが、通れる道を決定するんだよ！ この日数でやつらがぼくらに先回りするなら、ぼくらのたどってきた道を通るしかなかったはずだ！ 気づかぬうちにそばを追い越されたとでもいうのかい！？

「理屈を考えるのはあとにしるよっ、あいつらから離れないと！」

ペレウスがそうどなったとき、川と化している谷のほうから、二十名ほどの軽装騎兵がぱらぱらと駆けてくるのが見えた。砂よけの黒布を顔をふくめた上半身にまきつけ、小さいが強力な合成弓を手にした弓騎兵。

「あの格好はファールス人だ」

とたんに自失状態から立ち直り、パウサニ阿斯は、「それなら味方だ、助かった」といいながら、かれらにかけようとしてペレウスの前に出た。

その少年の眼前に、散開した軽騎兵のひとりが走りでるや弓をひきしぼり、ひょうと放った。

矢は飛電のごとく走り、パウサニ阿斯の胸の真ん中をつらぬいた。

希望は瞬時に消しとんだ。都市クレイトールの少年の命とともに。

パウサニアスがおどろきの表情で、あ、と目と口を大きく開け、足をとめてかくんとひざを折り、雨を吸った砂にうつぶせに倒れこむ。その一切を、ななめ後方からペレウスは凝然とみおくっていた。

唇が意思をはなれて動き、つぶやいた。

「パウサニアス？」

あまりにあっけなくかれが死んだので、ペレウスにはこれが現実とは思えなかった。

(……こんな……殺されたのか、ほんとうに?)

だが、まぎれもなく現実であり、展開はペレウスを放っておいてはくれなかった。パウサニアスを殺した軽騎兵が新しく弓に矢をつがえようとするのが、視界の端で認識できた。

……やむなく死体の手を離し、ペレウスは方向転換してふたたび走った。背を射ぬかれる恐怖が、めくらめつぼうにかれを駆り立てた。

だれもが混乱しきっていた。城門のなかに逃げこもうとする者、城門から出てこようとする者、橋のうえで押し合って空堀に落ちる者。

重騎兵にけちらされて逃げようとした者たちが、包囲するように散らばった軽騎兵に弓で仕留められ、再度城門のほうへ追いこまれていった。

羊でも追いたてるように賊の包囲はちぢまり、ファリザードにもなってきた一行は、橋のまえへと集められていく。

そのありさまはもはや狩りの様相を呈していた。

（なんでヴァンダル人の重騎兵と、ファールス人の軽騎兵が組んで
いる！？）

ありうるはずのない賊の構成。だがいぶかしむゆとりはない。
いま明らかであり問題なのは、賊兵のその組み合わせがこちらに
とって最悪のものであり、死をもたらししてくることだけだった。

城門にかけよっても中には入れないことを遠目で悟った者たちは、
たがいに背をあずけあった。狼の群れに囲まれた野牛の群れが、円
陣をくんでみずからを守るように。

ただし、この敵は狼の群れよりはるかに危険であり、狩られるも
のたちは野牛ほど強くはけっしてなかった。

ペレウスも円陣を組んだ中にいた……いつのまにかかれは、足元
の衛兵の死体から円盾をひろってかまえていた。となりに立った衛
兵の盾とならべて、せめてもの防御壁をつくっていた。

だが効果はあまりないだろう。敵の重装騎兵の第二の突撃は、円
盾の壁をやすやすと粉碎するであろうし、軽騎兵の矢は盾の壁の隙
間をぬってこちらを殺傷するだろう。

大きな軍馬にまたがった黒い全身鎧の賊兵　おそらく重騎兵た
ちの指揮官　が、耳ざわりな命令の声を発した。

ちぢみあがって死を待つペレウスたちのまえで、重騎兵がまた横
一列にならんでゆく。

つぎこそ死ぬ、とペレウスは悟った。絶望に盾をかまえる手から
力がぬけていく。

そのとき、一時的に誇りを捨てる選択肢が心に浮かんできた。

(身分を告げて、人質になるといおう。身代金をとれるかぎり、捕虜は殺されることはない。きつとだいじょうぶだ)

命乞いするのはたしかにみっともないが…… かんがえてみれば屈辱には慣れている。

命があればあとから復讐もできる。

(まず生き延びなくては。そして生き延びられたら、パウサニアスの仇をはじめ、今日のむくいをいつかかならず受けさせてやる。借りを返そうとするのがジン族だけだとは思っなよ)

周囲の生き残りたちの命もなるべく助けなければ ペレウスが口をひらこうとしたときだった。

「やめろ！ もうやめろったら、わたしが捕虜になるといつているだろ！」

城壁の内側から、ファリザードの懇願のひびきを帯びた絶叫がした。雨の勢いがすこし弱まり、離れた場所の声が届くようになっていた。

「だからやめろ、これ以上だれも殺すな！」

それにつづいて、門楼の上から、「まあ、よからう。軽騎兵ども、矢をおさめろ。プレスター、攻撃は待て」と、低い声がひびいた。

黒い鎧の指揮官が、面頬の奥から舌打ちをもらし、籠手をはめたこぶしをあげて何事かをいった。重騎兵たちが手綱をしぼって馬の猛りをおさえる。

ペレウスは瞠目した。いま発言した、門楼の上にいる顔に黒布を巻いた者は賊の首領なのだろう。かれは軽騎兵にはファールス語

で、そしてプレスターと呼ばれた重騎兵の指揮官にはアングル語で呼びかけたのだ。

だがペレウスの注意は、賊の首領らしき者が見つかった言語よりも、ファリザードがつづけた叫びのほうにすぐさま向いた。

「わたし以外の全員をいまずぐ逃がせ、それが人質になつてやる条件だ！」

「全員はだめだな。おまえの衛兵どももとどめ置く。あとから奪い返しにこられたらかなわん」

そのにべもない返答に対し、「兵にはよく含ませるつ、そんなことはさせないからかれらも解放しろ」とファリザードが必死にいいつる声がした。だがそのうち、どうやら彼女は折れたらしかった。「……安全を保証しろ！ ひとりでも死なせたら承知しない」と妥協の声がとどいてきたから。あるいは、まわりの衛兵たち自身から説得されたのかもしれない。なかった。

「それさえ守るならおまえらのいいぶんを飲む！ わたしの身代金がいくらだろうと」

「金貨十万ディーナール。薔薇の公家の女兒の価値としてはそれも安かるう」

首領がそっけないいい方で金額を口にしたとたんに、場が凍りついたように静まりかえった。異国人のペレウスでさえ、それが聞くだけで肝をつぶすようなとほもない額であることは理解している。しかし、ファリザードの声にはいささかもためらいがなかった。

「十万ディーナール。承知した。それで、わたしが連れてきた者た

ちのだれにもこれ以上危害をいっさい加えないと誓え」

「よかるう、話がまとまった。賢い姫で助かったよ」

「……城門の外にいる荷かつぎ人夫たちは即刻解き放て」

「わかった。かれらの身の安全を、われわれの唯一神のふたつの目にかけて誓う」賊の首領が天を指した。「日輪ひのわと月輪がちりんにかけて、誓うとも」

首領はつぎに胸壁の上で方向転換し、ペレウスたちにむきなおつていいわたしてきた。

「そういうことだ。門外にいるイスファアーン公家の下僕ども、おまえたちはいますぐきた道を戻って帰るがいい。
雨がふっているうちに、砂漠を歩くための水をたくわえておくことだな」

そう呼びかけられたことで、いましも殺されようとしていた、ペレウスのまわりのファールス人たちが一気に緊張をゆるめた。

かれらは、ファリザードが人質となることで自分たちの安全があがなわれたと知って、まずは一様に、救いがもたらされたことへの安堵を顔に浮かべた。

それから、危険から一刻でも離れたいというように足早に移動をはじめめる。かれらのために退路をあけた賊の軽騎兵のあいだを、おどおどとおびえながら。

しかし、その直後から表情はさまざまに変わっていった。人夫たちはやれやれ助かったと肩の力をゆるめていたが、泣きそうなほど悲痛に顔をゆがめた者もあり……ことに衛兵に多かったのは、

苦渋をかみしめる表情だった。自分たちが守るべきであったフェアリザードに、逆に守られるしかなかったのだから。

ペレウスもまた、慙愧かんがいに下唇をかんでいた。

これまで彼女を誤解していたことを認めなければならなかった。

(どれだけ生意気でも、口先でとがったことをいおうとも、あの子はやはり父親の娘だ。ぼくが思っていたよりずっと善良な心を持っている)

イスファハーン公のことに考えが及んだとき、責任感につきづつかされた。

盾を手にしたままかれはくると方向転換し、去っていく者たちのなかから衝動的に走りだしていた。

城門へ、彼女のもとへむかって。

16・和解（前書き）

ペレウスとファリザード、和解の握手のようなものを交わすも
直後に賊の悪辣さに痛い目を見せられること

いやな笑いを目元に浮かべている賊の軽騎兵のそばを夢中でかけもどり、ペレウスは開け放たれた城門内にとびこんだ。まだとどめ置かれているファリザードの衛兵たちの視線が、いつせいにかれに集中してくる。

曲輪の奥と左右にすばやく目をめぐらせ、上方をあおいで、少年は状況をのみこんだ。

（そうか、奥にもうひとつ門があつて、そつちが開かなくなつていたんだな。これでは袋小路だ、先に進めるわけがない。そのうえ頭上の胸壁からは弓で一方的にねらわれている）

城にそなわつた罫を、賊は完璧に利用していた。おそらく、こちらが城に接近していることをかなり早いうちに知って準備していたのだろう。

ほぞを噛んだのち、ペレウスは顔をもどした。

正面、衛兵たちに囲まれて、馬に乗ったファリザードが呆然とかれをみていた。ペレウスが近づくと、衛兵たちがたがいの顔を見あわせてわずかに空間をあけてくれた。

ペレウスの姿に、ファリザードは「生きてたんだな」とつぶやいたのち、われにかえつたように身を震わせ、鞍からかがみこんだ。賊に聞こえないようささやき声で叱咤してくる。

「なにやってる、はやく人夫たちといっしょに去れ。ミユケナイの王族だと知られたら、おまえも人質にとられるぞ」

「ファリザード」

ペレウスは間近から鞍上の彼女をみあげた。まだ迷いながらではあったが、かれはひとつの提案をした。

「……ぼくも残ろうと思う。きみを放ってイスファハーンに帰れない」

少年の申し出に、ファリザードは息をのみ……つかの間の絶句ののち、「なにいつてる、ばか！」と声をうわずらせた。

荒い口調　ただしその声音は立腹しているというより、動転して泣きそうな響きを帯びていたけれど。

「帰れ！　おまえが残ってなんの意味があるっ」

「このままじゃ、きみのお父上に申し訳がたたない」

「おまえのぶんまで身代金が増えられることになる。父上はミュケナイに請求書をまわしたりせず、責任を感じてそれを払うぞ。よい迷惑がかかる」

ペレウスは固まった。考えてみれば当たり前のことだが、失念していた。考えつつかれは「それなら」と言葉を継ぐ。

「身分を隠して」

「それこそ論外だ。人質の待遇を保証するのは身分と身代金の多寡だ。身分を伏せて平民をよそおえば、どのような扱いを受けるかわからない」

「でも、この衛兵たちだってその危険は同じだろう。かれらはきみのそばに残るじゃないか」

「残らされるのだ。帰せるものならかれらも帰す。かれらは、わたしの家に仕え、わたしを守る義務を負っているのだから構わないといつてくれてはいるが……」

おまえは違う、我が家のしもべではなくいちおう客だ。おまえには義務もないし、おまえがもし命を落とせばイスファーン公家の不名誉になる」

かれを追い返そうとして懸命に言いつのるファリザードの指摘は、ことごとく的を得ていた。

ペレウスの頭が徐々に冷えていく。彼女のいうとおりだとかれはほぞを噛んだ。かれがここに残っても、なんの役にも立たぬどころか、みなを困らせるだけになるだろう。

(思いつきでいうんじゃない、ぼくはばかだ)

十二歳の少女を、残酷な賊のただなかに置いていくことは気が進まなかったのだ。なにか力になれるものならなりたかったのだが……無力感にうちひしがれかける。そのかれの目の前に、ファリザードがなにかを腰からはずした。「おまえの手でこれを父上にわたして」と彼女はいった。

「持っていたら、いつ賊に取り上げられるかわからないから。おまえに任せる」

鞄におさめられた七彩がハフト・ラングペレウスの鼻先につきだされていた。

ペレウスは逡巡しながらもその鞄をつかんだ。渡しながら、ファリザードが「いいな、帰るんだ」と念を押してくる。

それから、「……あの、それと……」と、

「残るといつてくれて、ありがとう。気づかって申し出てくれたこと自体は、感謝する」

はにかみながらの礼 宝刀とともにそれを受け取ったとき、ペレウスは唐突に意を決した。

少年は刀を小脇にかかえ、少女をみあげてきっぱりいった。

ファールス語で。

「お父上はきみをかけがえのない宝といつていた。かれはきみを取り戻すために持てる力すべてを注ぎこむはずだ。」

だからきみは早いうちにお父上のもとに帰ってこれると思うよ、
「ファリザード」

それまでヘラス語でのみ会話していた相手が、いきなり帝国の言語で話したことで、ファリザードも衛兵たちも意表をつかれた表情になった。ペレウスは「いままで隠していてごめん」と暴露を続ける。

「ぼくはファールス語をこっそり学んでいた。」

打ち明けてしまうけれど、スパイするつもりだった……ヘラスのため、なにか役立つ情報をきみたちファールス人の会話からひそかに収集しようとしていたんだ。でももう、姑息なことはやめにする」

ペレウスは握手のための右手をさしのべ、真摯に語りかけた。

「いまはもう、きみたちとの戦争を続けたくないと思心から思っている。これからはきみやお父上を信頼して、和平成立のために尽力したい。」

きみがイスファアーンに帰ってきたら、ぼくら、もうすこし仲良くやろう。友達になろうよ、ファリザード」

少年の手が差し出されたとき、赤熱した鉄に接近されたようにフアリザードはびくりと身を震わせてのけぞり、それからみるみるうちに顔を火照らせた。

困りきった様子でペレウスの手をみつめ、彼女は手綱をにぎって自分の左手をそろそろと伸ばして、手のひらと手のひらを重ねるように合わせた。

ぎこちなく目をそらし、蚊の鳴くような声で彼女はいった。

「ともだち……うん。そのくらいからなら……友達くらいなら、許してやっても……いい」

右手と右手ではなく、右手と左手。へんな握手のかたちだな、と思いつながら、ペレウスはうなずいてフアリザードの手をしっかりと握った。とたんに「に、握るな」と少女の羞恥の声があがる。

「も……もういいだろ、放して……」

ふたりをとりかこむ衛兵たちがあるいは面白そうに口の端をつりあげ、あるいはけしからんとばかりのしかめ面になった。フアリザードの衛兵隊長がふんと鼻を鳴らし、注意してきた。

「こら、ヘラス人の王子。フアリザード様が困ってらっしゃる。子供同士とはいえ男女が気安く触れあうものではない」

「ああ、ごめん」

思い当たってペレウスは手をひいた。文化が違うことを失念していた。握手という習慣がないのかもしれない。あるいはひよっとして、この地ではぶしつけなことなのかも。

いずれにせよこれからは、もっとよくファールス人の文化を知っておかねばならないだろう。

まだ恥ずかしそうにしているファリザードが、手綱をちよつと引いて馬をかれから離れたとき、陰々たる声が曲輪内に告げてきた。

「いまより第二門を開ける」

落とし格子の上がる音がきこえ、それから、石の第二門が重々しくひらきはじめた。

開いた門のその向こう側に、賊の首領が立っていて、「まずファリザード姫ひとりこちらに来て」と呼びかけ、顔をおおった黒布をとった。全員が驚愕に目をみはった。

とがった耳に秀麗な目鼻立ち。青年にも見え、また意外に老いているようにも見える、年齢不詳の妖しい美貌。明らかにジン族の容貌。そしてそいつがファリザードを呼んだ声は、あの賊の首領のものだった。

衛兵隊長が鼻にしわを寄せた。

「きさま、ファールス人……それもジンだったのだな。ただのヴァンダル人の賊より呪うべき輩だったか、裏切り者め」

隊長の歯ぎしりめいたうなりを黙殺し、ジン族であった賊の首領は冷たい視線をひたとファリザードにあてた。

「ファリザード姫から城内の一室にお連れする。衛兵どもはそのあとで営舎に軟禁させてもらう」

「あつ、待て」

ファリザードがあわててペレウスを指で示した。

「まだひとり、人夫が立ち去っていない。こいつも逃がす」

ペレウスを一瞥し、興味なさそうに首領はいい捨てた。

「小僧ひとりか。勝手にどこへでも行け。だが先に逃げた人夫どもなら、馬やらくだを走らせてとっくに遠ざかっているぞ。追いつきたいなら急ぐのだな」

「……あの畜生のいったことではあるがそれだけは正しい。急げ、ヘラス人」と衛兵隊長がペレウスの肩をたたいてうながし、その部下たちも一樣にうなずく。ファールス人たちは、この短時間でペレウスに前よりも好感を抱いたようだった。

ファリザードが鋭い視線でさつと首領の顔を射抜いた。

「約束は守れ。衛兵たちにもいっさい危険をくわえるなよ」

「無用の心配だ。唯一神の両眼である日輪と月輪にかけて誓っただろっ？」

だいいち、すでに人族の人夫どもを解放しているだろう。口封じするつもりならだれひとり逃がしていない。おまえの父親をさらに怒らせるとわかっていながら、いまさらわざわざ捕虜を殺す意味がない。

来い」

再度うながされて、ファリザードが覚悟を決めたように息を深く吸い、吐いた。彼女は鞍から軽やかな身ごなしで下り、ちよつとペレウスをみて「それじゃ、また」と小声でいった。

みずから愛馬をひいて賊の首領のもとへむかっていく彼女を見送り、後ろ髪をひかれる思いでペレウスはきびすを返した……第一門

からでていくつもりだった。

落とし格子がいきなり落ちて閉まった。第一門と第二門の双方で。

愕然としたペレウスの背後、第二門の落とし格子のむこうから、「なにをする、自分で歩く、放せ！」とファリザードの警戒の聲が届いてきた。

ふりむいてペレウスはみた 彼女のまわりに集まってきた賊兵たちが、その手から手綱をうばいとり、彼女の両側から腕をきつくつかんで動きを封じていた。主と離されたところで曲輪内にふたたび閉じ込められた衛兵たちが、憤怒の形相で第二門に押し寄せ、「貴様ら、何だこれは！？ ファリザード様になにをする！」と格子を叩きはじめた。

その怒号のむかう先 賊の首領が、ファールス語ではなくアングル語で、

「キル・ゼム・オール
全員殺せ」

耳に入ってきたその一言に、ペレウスのすべての思考が消し飛び、筋肉が凍りついた。

賊がわざわざアングル語でつむいだその命令を聞き取ることはできな きた しかしそれでも、反応を起こすまでにほんのわずかな間が空いてしまった。そしてかれ以外に、この場の味方でアングル語を解するものはいなかった。

ファールス人のいでたちをした頭上の賊兵たちだが、ごく簡単なアングル語ならば解するらしく、かれらは矢をつがえた弓をぎりぎりひきしぼり、

「守」

叫びかけながら衛兵たちのもとへペレウスが駆け戻ったとき、矢群がふりそそいだ。

死をともなつて、豪雨のように。

落とし格子のむこうの曲輪で、惨烈な光景が展開されていく。

ファリザードのいる城内側へ、三十名の衛兵の断末魔のうめきと、新鮮な血の臭いが流れてくる。胸壁のうえの賊兵たちは、背負う矢筒からとりだした矢を弓につきつきつがえ、下に向けてまだ放ち続けていた。

拘束されたファリザードの声……制止の懇願、生存者への呼びかけをまじえた絶叫が城門一帯に響きわたっていた。

賊兵ふたりに両側から腕をつかまれ、動きがとれず足をばたつかせるファリザードは、泣きわめきながら賊の首領をのしりはじめた。

「卑怯者、下種^{げす}、人殺しっ……嘘つき、この嘘つきっ！」

それを聞き流しながら、首領が物憂げにうそぶいた。

「覚えておくと役立つぞ、姫。この世では、だれもかれもが嘘をつく」

「よくも……恥知らずな……！」

「アイマダンド・オ・カンタンド・オ 来たりて破壊し、スーフタンド・オ・クシユタンド 焼き払い殺し尽くせり」。おまえの伯父である 剣 が征服時代に、このファールスの地でおこなった虐殺はか

くのごとく評され、この七の七の七の七倍ものおびただしい血を流したよ。

わたしは土着のジンの部族だ。征服時代にわれらをこの地から追った新しいジン族　ホラーサーン公家にもイスファーン公家にも、わたしはかけらほどの愛情も抱いていない」

もがいて暴れるファリザードが、瞳にあふれそうな涙と憎しみの光を満たしながら糾弾した。

「日輪と月輪にかけて誓ったくせに、殺す意味がないといったくせに！」

「悪いが日輪と月輪への誓いなど、わたしにとってはねずみの糞ほどの価値もない。

おまえら侵略者どもの『唯一なる主神』とやらはわが崇信の対象ではないからだ。その名において偽りの誓いをなそうが、それをふみにじろうが愉悦しか覚えん。

わたしが司祭として仕えさせていたのはまったく別の神だ。このファールスの地に太古よりいませる御方だ。六つの腐った卵を産む神だ。すなわち悪思と虚偽と背信と、無秩序と熱と乾きの神だ」

アン・ラ・マ・ユ
古代の暗黒神の名を聞いたことはないか？　とその司祭を名乗るジンは問い、

「殺す意味についてだが、わたしはそれについても嘘をついていたことを告白せねばならない。

こいつらを殺す必要があったのだよ。わが神は血の贄にえをこそ受けとってください。応えて力を与えてください。

それをいまからみせてやろう。落とし格子を上げる。　プレス

ター！ おまえのダマスカス鋼の剣をここへもってこい」

屍の山、流血の沼

積み重なるように横たわった衛兵たちの死体の下で、
矢のつきたった盾を手に倒れていた少年が、瞳を開けた。

17・奔流 上 (前書き)

ペレウス、邪宗の秘蹟を目の当たりにし
過去の屈辱が義侠心をよびさますこと

17・奔流 上

曲輪の地面が、人馬の屍からにじみ出る血によって赤い水溜まりとなっていた。うめき声がどこから聞こえるから、他にも生存者がいるのかもしれない。

(ぼくは……生きている?)

いまだ信じられず、ペレウスはまたたいた。重い屍と血臭にうずもれながら、かれはどうやら命拾いしたようだった。

アングル語の命令を聞き分けられたかれだけが、最初の致命的な矢の斉射に対応して盾でふせぐことができたのだ。

直後にいきなり、顔面を射ぬかれた衛兵隊長の体が覆いかぶさってきて、ペレウスはつぶされるように倒れこんだ……それがよかつたのだ。かれに折り重なった衛兵たちの死体が、鎖かたびらを着た肉の壁となってくれたから。

だが、安堵などできようはずもなかった。

頭上の賊兵たちはようやく射ちおろすことをやめたようだったが、それにもかかわらず、悪夢はいまだ継続していた。

ふたつの門の落とし格子が上がる音が聞こえ、そして忌まわしい馬蹄と鉄靴の音がした。

重騎兵をふくめ、賊兵たちが曲輪のなかに入ってきたのだとペレウスは悟った。いきなり、細く聞こえてきていたうめき声が血も凍る叫びに変わり、それきりぶつつりと止んだ。

(とどめを刺して回っているんだ。立たないと……)

立って戦えば殺される、それは間違いない。だが、あいつらが来

るのを待っていたら、一矢も報いられず死ぬのだ。
命乞いするにしろ、戦って雄々しく死ぬにしろ、立たねばなら
ない。

奮起し、死体をおしのけて立ちあがった　　と思った。

それは幻想だった。気づけば、あいかわらず息を殺し、死体のな
かで震えている自分だけがいた。

（立てない）

奥歯が鳴るのを必死にこらえながら、ペレウスは愕然として考え
た。ぼくはこんなに臆病だったのか？　心も体も、萎縮しきってし
まっている。少年はぎゅっと目を閉じた。

（ばか、立て、立て。どれだけ死んだふりをしようかと、賊兵が間近
で生死を検分に來たらばれるのは必至なのに）

しかし、結果としては、そのためらいがしばしかれを助けた。瀕
死の者にとどめを刺してまわる賊兵がペレウスのもとに來るまえに、
賊の首領の声がはりあげられたから。

「プレスター！　おまえのダマスカス鋼の剣をここへ持ってこい。
それと愚図ども、城内に置いてある荷物のうちから　悪思の扉　を
運んでこい」

ペレウスはおそろおそろ薄目を開けた。呼ばれ、馬から降りて歩
みよっていくのは、ヴァンダル風の両手剣を抜きつれて肩にかつい
だあの重騎兵の指揮官だった。

二ガズメイトルはある背の高い男で、そいつの鎧も兜も黒、手にした剣も
黒。

黒い剣　　夜のような、黒曜石のような大剣。

（ダマスカス鋼？）

ダマスカス鋼で造られたヴァンダル風の剣など、ペレウスはみたことがなかった。そいつが耳ざわりな軋む声でアングル語を発した。

「扉　が開くのか？　今宵は新月じゃないことを忘れていやしないな」

「おまえこそ忘れているだろう、プレスター。新月そのものは条件ではない。

必要なのは闇だ。近くに炎がなく、日輪も月輪もみていないとき、われらの神は応えるのだ。このとおり雨は止みかけているがまだ空は曇っており、太陽も月も姿はない」

「わかったよ、ジオルジロス」

アングル語でなされた賊たちの会話に、そのとき噛みつくようなファールス語が割って入った。

「ジオルジロス……古代に使われた名のひとつだな。蛮族の言葉で話していてもそれが貴様の名だと知れたぞ、悪党め！」

落とし格子の向こうに、ふたりのジン族の姿がみえた。賊の首領と、両側から賊兵にはさまれて拘束されたファリザード。

ファリザードは両腕をつかむ賊の手にあらがって身をよじろつとしながら、涙をあふれさせた目で、許さないとばかりに賊の首領をにらみつけていた。

賊の首領　　ジオルジロスというジンが、おもしろがるような表

情になった。

「うむ、古名だ。この名の者はもうわたししかいない。

ではわたしがジンの古老だとも察しはつくだろう。わたしはおまえの父の倍をはるかに超えた時間を生きているのだぞ。それなのにその口調、イスファハーンの姫は礼儀というものを知らぬのか」

「無為に長生きしたのみで信義のかけらももちあわせぬ輩につくす礼儀などないっ、とうの昔に、貴様は砂漠とともに干からびているべきだった！」

衛兵たちを殺されたファリザードの怒声に、ジオルジロスが冷たい微笑をうかべた。

「薔薇の家の生まれにしてはなかなか気の荒い子犬だ。そういえばおまえの母方はホラーサーン公の妹であったな。 剣 の姪なら、このじゃじゃ馬ぶりも納得がいく。

薔薇の公家と剣の公家のかけあわせとは面白い。本来の探し物は片鱗もみつからなかったが、この地に来た甲斐はまずまずあったな。最後にこんな戦利品を手に入れるとは。

おっと、そうがなるな。これからめったにないものをみせてやるから、黙ってみている。そら、来たぞ」

四人がかりで賊兵が、籠にはいった何かを運んできた。ファリザードを引きずるようにして、のこりの賊たちが曲輪のなかにふみこんでくる。

そしてその何かは、曲輪の地面に置かれた。死んだ衛兵たちのかたわらに投げ出されるようにして。ごとんと、重々しい音がした。

ペレウスも、屍のはざまからそれを見てとることができた。

巨大な鳥の卵にもみえる、楕円形の黒い球体だった。直径は一抱えほどの大きさで、黒琥珀にも似てわずかに透きとおっているが、中心はけっして見透かすことができなかった。ゆらゆらと、黒い煙のようなものが内部でうごめいている。不吉な力をペレウスはその球体を感じた。

「……なんだ、それは……」

ペレウスと心を同調させたように、ファリザードが球体を見つめながら息苦しげにたずねた。ジオルジロスが答える。

「なにといつても、ダマスカス鋼の玉だ。わが神の力をこめた宝器だよ」

またしてもその魔法の金属かとペレウスは思い　ふと疑念を抱いた。

（……ダマスカス鋼は鳥の羽根なみの重さしかないんじゃないじゃなかったのか？）

運ばれてきたとき、それは四人の男にかつがれており、とうてい軽い物質にはみえなかった。

ファリザードの表情にもおなじ疑問が浮かんでいたのか、ジオルジロスは「ダマスカス鋼の本来の利用法を知らないのか、小娘？」といった。

「軽く鋭利な刃に鍛えられる物質とだけ思っていたのかね？」

この金属の最大の特徴は、魔術の媒ばいであることだぞ。魔法を起し、起こした魔法をこめておける。閉じこめた力を呼び覚ます方法も、別のダマスカス鋼との接触だ」

ジンの古老があごで指し示す　扉の宝玉　は、衛兵のむくろが矢傷から流す血溜まりにひたされていたが、そのとき不気味に収縮したようにペレウスにはみえた。

いや、気のせいではなかった。黒い玉は心臓のように鼓動を打ち始めていた。地面に溜まっていた血液が、黒い宝玉の表面を這いあがっていき、球体のすべてをおおう前に吸いこまれて消えていく。ず、ず、とすする音さえも聞こえはじめた。ペレウスは怖気だった。

(血を飲んでる……蛭ヒルのように)

「この宝玉は命を吸うほど重くなり、力をたくわえる。そろそろよからう、プレスター。やれ」

ジオルジロスがうながすと、重騎兵の指揮官がうなずいて大剣を抜いた……それもまたダマスカス鋼の剣だった。ヴァンダル風ではあつたけれど。

プレスターと呼ばれたそいつが、ダマスカス鋼の宝玉にダマスカス鋼の剣先を擬し　貫いた。

宝玉の輪郭がぶれ、ぐにやりと歪み、そして溶けた。

闇色の液体が広がっていく。半径一ガズメートルの黒い円が曲輪の地面に展開していた。

ペレウスもファリザードも、凝然と声もなく見入っていた。ジオルジロスが満足気にうなずいて、曲輪に馬をひいてきた軽騎兵たちをふりむいた。

「扉が開いたぞ。もっとも近いオアシスを死の泉に変えてつなげた。さあ行け、騎兵ども」

オアシスを死の泉に変える　ペレウスは思い当たった。

(あの泉だ)

今日、雨が降るまえに立ちよった砂漠の泉。塩辛くて飲めなくなっていたあのオアシス。

(ぼくらがきた道の途中に騎兵を送りこむって……これは……)

最悪の想像が心にふっと浮かぶ　ジオルジロスのつぎの台詞が、その危惧が正しいものであったことを証明した。

「逃げた人夫どもは早くわれわれから離れようと馬を集めて急行していったそうだ。そろそろあちらに通りがかるころだろう、ひとりのこらず始末しろ」

命令によって賊の軽騎兵たちが列をつくり、馬をひいて続々と黒い水にとびこんでいく。

黒い水はタールの底なし沼でもあるかのようにどろりと揺れてかれらを呑み、だれひとりとして吐き出さなかった。

三十名あまりの軽騎兵の大部分がとびこんでいったのを確かめてから、ジオルジロスがむきなおった。

「そついうわけで悪いな、ファリザード姫。やはりだれもかれも徹底的に口を封じさせていただくことにした」

身動きのとれないファリザードが「殺してやる」と声を震わせた。

「　貴様らにはかならず罰をくだしてやる、邪教徒」

ファリザードはいまだ昂然と顔を上げ、ジオルジロスをにらんでいた……だが変化はあった。いましがたの超自然の光景と、いよいよおちいった救いのない状況に、その瞳にいまではおびえの色がちらつきはじめていた。

それでも彼女は強気に、あるいは強気をよそおって吐き捨てた。

「ぜったいに捕らえて父上の法廷で裁かれるようにしてやる！」

それはせめてもの矜持を保つためと、死んだ臣下たちのための言葉だったのだろうけれど……わざわざ面とむかって告げたのは無思慮な強がりというしかなかった。（だめだ、ファリザード）とペレウスは肝が冷える思いでそれを聞いていた。

（人夫たちを一度逃がしてこちらを油断させた……衛兵を殺したあとから、邪悪な力をもって先に逃がした人夫たちを始末した……きみの目の前にいるその狡猾なジンは、イスファーン公家に対し、平然とつばを吐いている。きみを傷つけることも、なんとも思わないかもしれないんだぞ）

果たせるかな、賊の首領ジオルジロスは彼女に醒めた目をむけていった。そろそろこちらも片付けるかともいった調子で。

「きゃんきゃんと騒がしいことだ。先々のことは知らんが、今日の罰はわたしがおまえに与えよう。奴隷として売るならば、いささかその態度を矯正しておく必要もあることだし。」

ジオナサン、この姫を教育するように。顔は避ける、売り値が落ちる」

「いつものようにやりゃいいんでしょ、ジオルジロス」と重騎兵のひとりが進みでた。屈強な体格のその男は籠手こてをはめた拳をにぎり、

少女のみぞおちに無造作にたたきこんだ。

前のめりに体を折ったファリザードの瞳がみひらかれた。

彼女の顔色がいつぺんに土気色に変わる。足の力が抜けたようにすとんと地面にひざをつき、彼女はぱくぱく口を開けた。呼吸が吸えないかのようにならぬ。

「あ……………かはっ……………？」

「大人の力で胃を殴られるのははじめてだろう。身の内にしみわたるその苦しさをよく覚えておけ。手間をかけさせるなら、それを何度でも味わうことになるぞ。」

おまえのこれからについてだが、ほんとうのところイスファアハーン公に引き渡すつもりはない。奴隷として売ってもそこそこの儲けにはなる。ジンの子供にはめったにお目にかかれないし、そのうえイスファアハーン公家の女兒となれば、育ったのちはファールス帝の後宮への献上物にされるのが慣例というふうな極上品だからな」

その絶望的な宣告すら聞こえないのか、ファリザードは腕をつかまれたままへたりこみ、丸めた背を震わせて苦痛に悶絶している。小さな身にかけられていくジオルジロスの声は、あまりに淡々としすぎていて、温情というものを微分もふくんでいなかった。

「われわれ傭兵はたらきにはげむ者にとっても、金よりはさすがに命が大事だな。」

たしかにイスファアハーン公はおまえという愛娘の身柄をひきとるためなら、だれよりも多額の身代金を出さう。しかしながらわれわれがうかつにかれに接触すれば、かれは取り引きが終わるやいなや全軍をくりだしてでもわれらを追跡し、捕らえて縛り首にしようとするだろう。ジンの怒りとはそうしたものだ。制約がなくなつたとたん復讐に走る。

そういうわけでわたしは、これ以上この地にいるのは危険だと判断した。われわれはここから速やかに去る。おまえの衛兵は死に、荷かつぎ人夫たちもこれから死ぬ。われわれがおまえを連れていったことを知る者はいない」

「わ……わたしを……どう、へ……」

「おや、しゃべれるか？」

遠国とだけいっておこうか。おまえのような、血筋が高貴で見目のよい子犬であれば、ヘラスの都市の議員なりヴァンダルの王侯なり、大金をはたいて買ってくれる客をみつけるのは造作もないのだよ。

和平派の筆頭であるイスファーン公も、消えた娘が敵地に拉致されて虐待されていたと知れば、主張をたちまちひっこめるだろう。戦争は続き、さらなる血がふりまかれ、それはわが神の力をさらに取り戻させるだろう。われらに傭兵としての稼ぎ場を提供するだろう」

ジオルジロスがそうまとめたとき、ファリザードの腹を殴った重騎兵が、甲冑をがちゃがちゃならしてかれに歩みよった。耳ざわりなアングル語で首領に話しかける。

「おかしら、お願いしていいですか。このお姫様の面倒は躰しんふくめておれがみておきますから、役得ということでごちよつと味見させていただけませんかね」

「だめだ。そいつは大事な商品であり、ベカール純潔性を残しておけばそのぶんだけ高く売れる。強姦がしたいならほかの女にしる、ジオナサン」

「そんなすげないことを。」

おれが好みの種類の穴にしばらくありつけていないことは知っているでしょう。おれはこのくらいの年齢相手でないとは勃たないんですよ。

せつかく奪ったこの城には子供がいなかったの、同僚のやつらが城の給仕女相手に腰をふってるのをしらけて眺めてなきやならなかったんですよ。そこへいまになって、こんな極上品を間近にみせつけられるなんて、とてもとても辛抱できやしませんって。

膜が無事ならいいんでしょう？　ほかの楽しみ方をしますよ。ちょっとだけ好きにさせてくれるなら、次もその次もおれのぶんの略奪品分配はなしでいいですよ。

ねえ、すこしだけ。たのんますって。触るだけでも。どうせいつぶんくらいは売る前に処女膜をきちんと検分しなきゃならないですようが」

獣欲をおさえかねて、息荒くしつこく食い下がる部下に、ジオルジロスがうざったそうに眉をしかめた。

とつとつ肩をすくめて賊の首領はいい捨てた。

「壊さない範囲でやれ。まかりまちがって姫の膜を破ったなら、おまえの頭の鉢を叩き割ってやるぞ。必要ない傷を体に残しても殺す」

「おう、礼をいいますよ」ジオナサンが声に喜びをにじませ、「ではさっそく」といいだした。

「……おい、すぐに手をつける気か？」

「我慢の限界ですからね」

その賊兵はいそいそと身を返してファリザードのもとへ寄っ

く。ペレウスは震えながら顔を伏せた。みるに忍びなかった……違
う、この期に及んでも足が萎えたままの自分が情けなくて、面をあ
げられなかったのだ。

だが、ほどなくして、「いやだ、触るな」と少女の声が聞こえて
きた。抵抗しているらしく、先刻よりずっと弱々しいがもがく気配
それから、「黙れ」とジョナサンのアングル語が聞こえ、同時
にまた殴打の音がとどいてきた。

直後に少女のえずきの音。

「吐きやがった、こいつ」ジョナサンが心底楽しげにつぶやいた。
「加減してやれよ、かわいそうに」と賊兵たちがいいながら合わせ
て笑っていた……混じって小さく、ファリザードのすすり泣きが聞
こえてきて、ペレウスはシヨックを受けた。

ぼくはこの光景を知っている、とかれは奥歯をかみしめた。
のしかかってくるきたセレウコスのおぶらぎった目。無理やりいいよ
うにされる屈辱。どうしようもない本能的な恐怖。

おなじなんだ、いまのファリザードはあのとときのぼくと。

ぼくはあのととき、失禁することで助かった。屈辱と引き換え
にもっと大きな屈辱をまぬがれた。

でも、彼女が嘔吐しようとしてどうしようとして、あの賊たちは手を
休めそうにない。

彼女がなにをしようと思わないし、だれも彼女を助け
ない。みんな死んだんだから……ぼく以外。

ぼく以外。

拳を握りしめる　左手にまだ盾を持っていることに気がついた。
そして右手に、鞘に入ったままのダマスカス鋼の刀　ハット・ラング 七彩　をも。

その感触が引き金だった。瞬間的な意志の力をかきたて、ペレウスは四肢を突き動かした。

まだ左手に持っていた盾を地面につっぱり、片ひざを立て、口に鞘をくわえて　七彩　を抜き、駆けだした。

（これは狂気だ、狂気の沙汰だ）　理性がどこかで警鐘を鳴らしていた。（だからなんだ、もう走りだしてしまった）

ペレウスは全体重をかけて刃をつつこんだ。しゃがんだ体勢からふりむこうとしたジョナサン首筋に。

ほかの賊兵たちは、あんぐり口を開けながらもあわてて反応していたが、かれのみはファリザードの下穿きを脱がせるべく没頭しており、ペレウスに気づくのが遅れていたのだ。

鎖かたびらごと頸動脈をダマスカス鋼が切り裂いて、血が冗談のように噴き出し、宙に赤い橋をかけた。

剥いた目玉でペレウスをみつめながらくずおれた男の向こうに、ズボンの紐をゆるめられて下腹部をあらわにされかけたファリザードがいた。唇が胃液で、頬が涙で汚れていて、うるんだ目が状況の変化についていけず呆然としていた。

18・奔流 下 (前書き)

ペレウス、ファリザードとともに賊の魔手をのがれんとして
活路を求めるべく死地にとびこむこと

フアリザードの腕をつかんでいた軽装の賊兵のかたわれが、怒号して彼女から手を放した。そいつは三日月刀を鞘ばしらせ、ふみこんでペレウスに斬りつけてきた。ペレウスはそれを盾で受けてはねかえしたが、そばにいた別の賊もまたフアリザードを放し、抜く手もみせない速さで横手から一刀を浴びせてきた。

無我夢中で体を回し、ペレウスは第二の斬撃もきつちり受け、同時に 七彩 をつきだして賊の腹を刺した。

はさみうちで少年をたやすく殺せると確信していた賊兵が、黒布から露出した目に驚愕をうかべ、刀をとりおとして腹を押さえた。

もうひとりの賊兵もたちまちおなじ末路をたどった。背を向けたペレウスの首筋に斬りつけたのに、少年は独楽が回るように身を返してみたび盾で守り、三日月刀で賊兵の下腹をかつさばいたのだった。

サー・ウィリアムによって叩きこまれたペレウスの盾使いの技術は、もはや血肉にとけこんだ技と化している。半年近くにもわたる日に数時間の反復練習と、騎士と相對しての受けの特訓によって、防御に限定すれば並みの大人の兵士をしのご力量が身についていた。賊兵ふたりは、相手を見かけどおりの子供とあなどったために生涯の厄日をむかえることになったわけである。くわえてペレウスの攻撃の拙劣さは、鋭利きわまる宝刀がおぎなっていた。ただ当てるだけで刃が相手の服ごと肉に沈みこむような刀なのだ。

軽装の賊兵ふたりが腹腔を裂かれ、はみだしかけた内臓をおさえてのたうちまわる。その凄惨な情景に、ペレウスはみずから手を下したことなく真つ青になっていた。人を殺したのは今日が初めて

だった。ふたたび足が萎えそうになる。

しかしこんどは、震えていられる余裕はなかった。

扉 をくぐらず曲輪にいる賊兵は七名ばかりを残すのみだったが、かれらは続々と白刃を抜きつれていった。かれらはもう驚きの色もみせず、怒声もあげず、ただ刃と同じ冷たい殺意を目に光らせているだけだった。この場に残っていた重騎兵の指揮官、プレスターと呼ばれていたやつが、ダマスカス鋼の両手持ち大剣を、黒水にひたした状態から抜いた。

ゆつくりと円状の 扉 は収斂して閉じ、黒い宝玉に戻っていた。

曲輪にいる重騎兵 馬を城外においてきているためいまは重装歩兵だが の面々は、慌てることなく、脱出路をふさごとく二つの門のまえに陣取った。プレスターみずからが大腿で闊歩し、第一門のまえにうつそりとたちはだかり、

「小僧、貴様、その武芸をいったいどこで身につけた？」

懐疑の声をかけてきた。

答えは返さず、血に濡れた 七彩 を手にペレウスは腹をくくった。

「立って！」

急いで下穿きの紐を結んでいるファリザードに声をかける。それからすばやく、あることをペレウスは彼女にささやいた。

「……一か八かだけれど、やれる？」

まだその足取りはよるめいていたが彼女はペレウスをみつめ、「やる」と短く了意をしめた。ペレウスはうなずいた。そうだ、やるしかないのだ。これはそういう状況だ。

（ぼくらはとつくに死の淵を走っている　わずかでも止まれば暗黒が追いついてくる）

大剣を肩にかついだプレスターが、もう一歩ずいと進み出た。

「ちよつとおれと剣を交えてみる、小僧」あからさまに遊んだ調子での提案だった。「その剣の筋をたしかめさせる。もしおれに勝てば娘とともに逃がしてやろう。どうだ、悪い話じゃなからう？」

（なにがあってもこいつと戦っちゃだめだ）

その男の一挙手一投足に細心の注意を払いながら、ペレウスは下がった。直感的に悟っていた。この相手はまずい。不意をつけたとしても、一太刀いられる気がまったくくない。剣に覚えたさまざまな戦慄ほどではないが、肌が粟立ちそうになっている。

さつきささやいたとおりやるぞと、ファリザードに目配せする。無言でうなずき返した彼女が死んだ賊兵の刀を取る　鞘を拾い、呼吸をあわせてくるりと重装歩兵たちに背を向け、ふたりで駆けだした。

（その重い甲冑では疾走はできないだろう）

もっとも危険な剣士であろう敵から離れ、ペレウスたちの走る先は、ジオルジロスのもとだった。

そのジンの古老は子どもたちが突っこんでくるのに対し、「わたしを人質にでもとるつもりか？」と阿呆らしそうに瞳を細めた。かれはひざをたわめたかと思うと、面倒を避けるように一息に胸壁に

とびあがった。ジン族ならではの身ごなし。

「その子犬二匹をさっさと捕らえなおせ」

物憂げな命令が曲輪にふってくる。ペレウスはかれをみあげなかつた。最初からそのジンは目的ではなかつた。

ジオルジロスのいた場所の後ろに、黒い宝玉が転がっている。

『……閉じこめた力を呼び覚ます方法も、別のダマスカス鋼との接触だ……』その一言を覚えていた。

（ 七彩 だって、ダマスカス鋼だ！ ）

しかしながら、そう甘くはいかなかった。拍車をかけて、横から速足で突進してきた騎馬の兵がいた。子供ふたりは度肝を抜かれて馬蹄にかけられぬようとびすさつた。重騎兵は馬首をめぐらして、ふたりと宝玉のあいだに馬体をもつてたちふさがつた。

そいつが乗っている馬は、ファリザードの愛馬、^{サハール}黎明号だつた。

しまった、とペレウスは計算ちがいで脳裏を真っ白にしかけた。重騎兵たちは城外にじぶんの馬を置いてきたようだから、とっさにすばやい動きができないはずと思っていたのに。

（奪われたファリザードの馬を使われることを想定していなかつた。どうしよう？ 十数える間に残りの兵が殺到してくる）

しかし、意外な形で救いが来た。

「黎明！」

少女のあげた呼び声につづいて、かん高い音が鳴りわたった。ペレウスはふりむいた。ファリザードが指笛を鳴らしていた。それに応えて、それまで賊の重騎兵におとなしく乗られていた黎明号がとつぜんさおだちになり、主でない者をふるいおとした。馬の尻の後ろにころげ落ちた賊兵は、うめいて立ちあがるうとし……黎明号に兜のうえからではあるが頭を蹴りとばされ、昏倒してつぶした。

ペレウスはつい黎明号をまじまじみあげた。

(おとなしい牝馬だと思っていたんだけど)

主人以外の者が乗れば合図でふるいおとすよう馬を調教する技術が、ファールス人にはあるときく。今のはそれだろう。

ここまでで数瞬　ペレウスはすぐにわれに返った。そんなことを考えている余裕はない。子供たちの目論見に気づいた賊兵が鉄靴を鳴らしてやってくる。

「手綱をとって！」

ファリザードにうながすと、ペレウスは黒い宝玉に駆け寄り、七彩　を突っこんだ。

宝玉が崩壊するようにぐじゅっと溶け、黒水が広がり、円状の扉　がふたたび足元に展開した。それは人間の体液にも似た粘度と温かさで、たちまちペレウスたちを引きこんだ。重い黎明号が真っ先に沈む。ひきつった表情のファリザードが馬の首に抱きついてとにも消えていった。ペレウスもすぐに首まで沈んだ。

「馬鹿か、小僧？　わがほうの主力はその先に行っているのだぞ。どのみち逃げられはしないぞ」

ジョルジロスの呆れ声を聞きながら息をつめ、本能的なおぞましさと不快感にペレウスは耐えながら頭まで一気に潜り

そして、位相が反転した感覚があった。

目を開けると水中に逆立ちした姿勢になっており、足元に揺れる水面がみえていた。そばで馬の足が水をかいている。賢い黎明号は、さっさと体勢をなおして首を水面に突きだしたようだった。

ペレウスは自身も体勢をいれかえ、顔から浮上した。

視界に入るのは泉の淵をとりまくナツメヤシの木々

(朝に通過してきた泉だ)

唇をなめると水は塩辛く、やはりあの飲めなくなっていた隊商路の泉だと思われた。

ペレウスは首をめぐらして、愛馬にしがみつくファリザードを確認した。動揺して水を飲んだのか、彼女ははげしくむせていたが、無事ではあった。岸にはいあがり、ペレウスは手綱をとって彼女と馬をもまた泉から出した。

(ほんとうに移動した。なんてことだ)

ひとまずあの城を脱したにもかかわらず、ペレウスは扉の宝玉のことを思っただけで済んだ。

あの賊たちが内陸部にこつ然とあらわれることができた理由、イスファハン公領の警備隊に追いまわされながらなかなか捕まらない理由、ファリザードの一行に先回りすることができた理由を、かれは知ったのである。

(なんとしても賊の得体の知れない力のことを、イスファハーン公に伝えないと)

そう考えながら 七彩 を彼女に返したとき、泉がごぼりと沸き立つように揺れた。

はっとして子どもたちは身をすくめた。

(城のほうから追ってきた)

ファリザードがとつさに鞘に入れた 七彩 を鞍につけ、「あぶみに足をかけて上がれ！」とペレウスの背を押した。まだ持っている盾を捨て、ぎくしゃくと慣れない動きでペレウスが鞍によじのぼったとき、濡れねずみとなった賊が数名、獰猛なうなりをあげて泉から頭をつきだした。

ジンの身軽さで馬上にとびのつたファリザードが、ペレウスの前におさまって手綱をとった。少年が少女の胸に腕をまわすや、泉のまわりにめぐらされた木立と柵のすきまをかけぬけ、黎明号は喧騒のなかにとびこんでいた。

そこにも流血が待っていた。

周囲の砂漠は戦場……いや、殺戮の場に変じていた。先に通りぬけてきた軽騎兵たちが、川沿いに逃げてきた人夫を待ち伏せて殺している真つ最中だったのだ。

川が轟音をあげて流れるそばを、賊の軽騎兵が駆けまわり、哀れな人夫たちの乗った馬群を水辺へと追いたて、逃げまどうその背を矢で射ぬいていた。

「人夫たちが……」

黎明号の手綱をさばきながら、やっとのことでファリザードがつ

ぶやいた。彼女はどうしようとはかりに悲痛に表情をゆがめてペレウスをふりあおいだ。少年はむつつりと首をふり、「とまっちゃだめだ。逃げなきゃ」といった。

ファリザードはそれでも思い切れないようだった。

「か……かれらはわたしの気まぐれでここに来たんだ。

それにわたしは領主の一族だ。領民を保護する責任だつてあるのに、そのわたしが死んでいくかれらを見捨てて目の前で逃げるなんて」

「いまのぼくらに、逃げる以外のなにができるんだよ？ 人夫たちといっしょに殺されてやるか、あらためて生け捕りにされて賊どものおもちやになるくらいしかない。

貴種の誇りはけっこうだが、こつちのほうが弱ければ、強がろうとしてもなんにもならない現実はさつきわかっただろ！」

声を荒らげてペレウスは叱咤した。

ファリザードの愚かな優しさ、もしくは無駄な責任感に腹が立っているのではなかった。怒りは、矮小な正論をふりかざすしかない自分の小ささに対してであり、最善の道をほかにみつけられない無力さにだった。

かすかに嗚咽めいた音をのどから漏らし、ファリザードは顔を伏せて川沿いに馬を走らせはじめた。

けれど、逃走に専心したからといってそれで逃げられるわけではなかった。すぐさまこちらに気づいた賊の数騎が、馬首をめぐらせ追いつがってきた。

彼我の速度をはかり、（ふつうに走っていれば追いつかれる）とペレウスはみさだめた。

黎明号は体格が小さい。かしくく優美な馬だが、力強いほうでは

ないのだ　それゆえ、ふたり乗りではおのずと足が鈍る。遠からず賊の馬に並走され、ペレウスたちは鞍から引きずり落とされるだろう。

（馬を走らせやすい川沿いをはなれて、高地に逃げる？　いや……だめだ）

隠れるにちょうどよい岩陰が都合よくみつかるならいいが、そうでなければ坂をかけあがることで黎明号が早くへたばるだけだ。

やはり、たつたひとつしか、この窮地をのがれる道はない。

「ターバンをもらうよ！」ペレウスはファリザードの頭の濡れた布を取り、右手と歯をつかって器用にほどいた。

その長い布で、彼女の胴と自分の胴を手早く結びつける。「な、なにしてるんだ？」と馬を駆りながらファリザードが疑問を口にした。それにていねいに答えるかわりに、ペレウスは指示をとばした。

「馬ごと川にとびこんで！」

「川！？」

仰天したファリザードが横手をむいて泥の色の水流をみやる。横に流れる滝のような川の勢いに、彼女はおののいて首をふった。むき出しになったはちみつ色の短髪が振り乱され、飛沫が飛ぶ。

「むり　ぜつたい無理！　わたし泳げない！」

内陸部のファールス人は騎馬は巧みでも、泳ぎを知らない者が多い。それゆえに足の立たない水はかれらにとって死に直結するものであり、恐怖の対象だ。だからこそ、賊の軽騎兵も、ふたりや人夫たちを川に追いこむかたちの半包围をかけてくるのだ。

だが、ペレウスは、二の足をふむ様子の少女に強くいきつた。

「ぼくは泳げる！ ヘラス人は海の民だ」

かれにとつて、荒れ狂う水は活路にみえていた。

都市ミュケナイは島にあり、王宮は海に面した丘の上にあったのだ。ペレウスは多くのヘラス人とおなじく、幼いころから水に親しんでおり、泳ぎは取り柄のひとつとあってよかった。といつても故国ではだれもが当たり前前にこなすことなので、自慢にもならないのだが。

「だいじょうぶだから川に入って対岸を目指せ！ きみはただ静かにしていればいい！ いいか、焦るな、水に沈みそうになったら息を吸って、目を閉じて、体の力を抜いておとなしくしているんだ。

ぜったいにもがくな、取り乱すな！」

「そ、そんなのできない……溺れたらきつともがいてしまう……！」

「溺れても苦しくても暴れるな、そのばあいはすみやかに意識を失つてくれ。ぼくが対岸まで連れて行く。そのために布で連結したんだ。

ぼくを信じろ、蘇生法だって知ってる。岸に引き上げたあとでちゃんと生き返らせるから！」

勢いで無茶なことをいつている自覚はあった。

それでも、怖じけづきながらもファリザードは従ってくれた。やけになったように川にむけて矢のように馬を走らせ、乗り入れ

奔流の勢いに足をすくわれ、黎明号が最初の数歩でいきなり転倒した。

巨大な力が横殴りにぶつかってくる。少年が水練の技能を發揮する余地などなかった。馬体ごと波濤に揉みくちゃにされ、なすすべなく押し流されていく。岸で馬をとめた賊兵たちの姿がみるまに遠ざかっていった。

少女の体ごと馬の首に腕をまわして必死にかじりつきながら、ペレウスは目元をひきつらせた。もしかしてこれはまずくないだろうか。

泳ぎの達人だろうがなんだろうが、人が渡れるような水勢ではない。

完全に濁流に吞まれる寸前に思った。

(いささか考えが甘かったかも)

18・奔流 下 (後書き)

次の十九話「ふたり旅」との間にEX1「小夜の寝覚め」が入るため、時系列通りに読みたいという方はそちらからどうぞ。目次の下のほうにEX1が載っています。

19・ふたり旅（前書き）

窮地を脱したペレウスとファリザード先へ進み
語らううちに親しさを増すこと

19・ふたり旅

進むほどに砂漠の大地は、塩や岩石や枯れ草ではなく砂地が目立つようになってきていた。

柔らかくもりあがる砂丘を、らくだと馬の一頭ずつが越えていく。

「ペレウス、あれをみるがいい。あれこそ唯一の主神のふたつの眼だ」

鞍の前に乗り、らくだの手綱をとるファリザードが片手をあげ、西の空にかがやく赤い夕陽を指した。

ついで、東の空にほのじろく浮かぶ月を。

「主神は昼も夜もわれらを見守ってくださいさる。

それゆえ、神の両眼である日輪と月輪にかけて誓われたことは、けっしてくつがえしてはならないんだ」

少女の話を、後ろに座ったペレウスはふむふむとうなずいて脳裏にきざみこむ。

ふたりが乗っているこの二瘤ふたこぶのらくだは、朝方に砂漠をさまよっているところを捕らえたのである。木製の鞍がついていて、弓と矢筒までが鞍にとりつけられていた。自分たちとおなじく砂漠の雨で氾濫した川に流され、乗り手が死んで獣だけが生き残ったのだらう。船のように揺れながら歩くらくだのかたわらに、忠実な黎明号サハールが並んでいる。ファリザードのいうところによれば、いざとなれば馬はらくだの三倍もの速さで走れるが体力的にはらくだに及ばない。

「間近に危険がせまるまで黎明には乗らず休ませておくべきだろう。この子についてはからだいじょうぶ」とファリザードはいつてい

た。

そうこうして、もともとの目的であった村を目指すうち、ペレウスはファールス帝国の文化を彼女に説いてもらうようになっていた。ちなみにファリザードはもうヘラス語ではなくファールス語で話しており、母語だけあってさすがにその語り口はなめらかなものだった。

（サー・ウィリアムもそうだったけれど、心置きなく母語で会話できるとなるとやっぱり気分が軽くなるのかな。

それだけでもないだろうけど）

友達として心を許してもらったということだろう。

完全にぎこちなさが消えたわけではないが、いまのところ彼女はこれまでよりはるかに友好的な態度をしめしている。語りながら笑みすら浮かべることがあるのだ。

そして、その新しい関係はペレウスにも居心地がよかった。かつては忌み嫌っていた帝国の文化も、このように良き語り手を得ると、すべてが興味深く……

（なかでも、宗教についてくわしく知っておくのは重要なことだ）

神話や神々は文化の中心にあるものなのだから。

……もっともファリザードいわく、この世には「神々」などなくただひとりの神しかおらず、残りはぜんぶ悪魔邪神のたぐいだそうだけだ。

昼に最初にその話を聞いたときは「じゃあヘラスの神々も邪神だったのか」とペレウスは腹をたててファリザードに詰問し、「もちろんだ。多神教で偶像崇拜だから邪教だ」というきっぱりした即答

をいただいた。

当然のごとく喧嘩に発展したのち、神学論争はひとまず棚上げと
いうことで決着している。こうしてファリザードが唯一神について
講釈するときは素直に聞くだけにしていた。

「“両眼”を目にするとき、そこは神聖な場となる。朝方や夕方の
時間帯、太陽と月の双方が出ている下は、聖なる力の強まるときな
んだ。

そして厳粛な場ともなる。

誓いはもともと破つてはいけないものだけれど、ことに両眼の光
の下で交わされた誓いを破った者は、恐ろしいむくいを受けると伝
えられる」

「ふたつの光の下、か。

なんだか意外だな。ジン族って、闇に親しみ、闇を崇める種族だ
と故国で読んだ書物にはあったのに。きみたちってまっくらな場所
でも目がみえるんだろ」

「誤解だ。わたしたちは暗闇を崇めることはしない」ファリザード
は首をふった。「体の構造が人族より暗さに適応しているのは認め
るし、夜は夜で心が落ちつくのも確かだけれど、夜はあくまで親し
い友であって主ではない。ましてや闇を崇拜などはぜったいにしな
い、すくなくとも現在のファールス帝国のジン族は。」

そのヘラスの書物は嘘を書いている……もしくは、古いんだ」

「古い？ ……ああ、そういうば、古代ファールスのことを書いて
いる書物だったかも」

「それだ。五つの公家の先祖たちが真の宗教をもたらず以前の無道
時代、この地の人族は炎の神を崇め、先住のジン族は闇の神を崇め

ていたから
「

そこでファリザードは押し黙った。理由はペレウスにはよくわかった。

一昨日、彼女の一行を襲った賊……ふたりが命からがらその手から逃れた賊のことを思い返しているにちがいはなかった。その賊の首領はジオルジロスという古名を持ち、暗黒の神の司祭と名乗っていたのだ。

ふたりが仲間を失い、ふたりきりで安全な地へと逃れるべく歩き続けなければならないのは、あのジンの古老のせいだった。

(……ヘラスの神々は邪神じゃない。でも、あの生贄を要求する古代神はまぎれもなく邪悪な存在だった)

先住のジン族だったというかのジオルジロスにとって、よその地から来て古代ファールスの打倒にかかわった新ファールス帝国のジンは、憎むべき侵略者なのだろう。それでも、ペレウスには賊に同情してやる気はかけらも起こらなかった。

なにしろ僥倖もいいところなのだ、二日前のあの日に助かったのは。

荒れ狂う川に飛びこんだ結果として、ファリザードは溺れて死にかけ、ペレウスも肺に息をためてなるべく浮こうとするだけで精一杯だった。

ほんとうに死んでいただろう。流れが湾曲して水勢が弱まるところで、黎明号が奮迅のはたらきを示してくれなければ。

黎明は、ふたりをつかまらせたまま対岸まで泳ぎ渡ってくれたのである。

幸運のたまもので、流されてくる数多の障害物にぶつかることもなく、相当下流に流されたのちにふたりと黎明は上陸できたのだっ

た。

洞窟へと逃れ、一夜を明かしたのち、ファリザードが計画を立てた。

『イスファハーンに引き返そうとするのは危ない。賊が張っている可能性が強いし、飲める泉が途中にない。水がなければ人は数日で死ぬ。』

やはりもとのわたしたちの目的地である村を目指し、そこであらたな護衛隊を編成してからイスファハーンに戻るう。

村は西の方角にある。ここからまっすぐ行く道と、南回りに弧をかいて行く道があるな』

『どっちが早い、ファリザード？』

『断然、まっすぐの道だ。南回りは四日はかかるが、西への直進だと、砂漠を二日急げば夕方前には目指す村に着く。水を補給する必要もないかもしれない。』

でも、その道はいまとなつては危険だ。避けなければならない』

『なんで？ 砂嵐がよく起こるとか？』

『ひとつのオアシスがあるんだ』ファリザードは懸念をあらわすように声をひそめた。オアシスは砂漠のなかにあつて生命を守るものはずなのに とペレウスは不審に感じたが、オアシスの名を聞いたとき疑問は氷解した。

『そのオアシスは、獅子シールの泉と呼ばれている』

『……ライオンが出るオアシスの名だったね、たしか』

『出るところじゃない。群れになって徘徊している。』

獅子の泉は獣のための聖なる地だから周辺で狩猟をするな　と
いうのが古来からのならわしで、つねに一定数が生息しているんだ。
あるていど大勢の人間がふみこめば襲われることはまずなく、た
いていは獅子たちのほうが一時退散するから、二十人以上の規模の
隊商などはときどき利用する……でも、わたしたちは、子どもがた
つたふたりだ。

……そして、行ってみてもし獅子がいなければ……それは、獅子
の泉に一定の数以上の人間がいるということだ』

ファリザードの口調がおのずと緊迫したことで、ペレウスは気づ
いた。

このあたりで大勢の人間が砂漠をかけまわっているとしたら、あ
の賊どもである可能性が高い。

『四本足の危険な獣に出会うのはいやだし、二本足の獣どもとなる
ともっと願い下げだ。』

では南回りの岩山沿いしかないね、ファリザード』

そういうことで、進路が決まったのだ。

不安はむろんつきまとう。不安だらけとわかっていい。

それでも、それをいつてしまうのは避けてきた。

(賊のことは、いまは口にしないでおこう)

憎しみをかきたてるだけならよいのだが、一方ではまた奴らに出
会うかもしれないという恐怖で浮き足立ってしまいそうになる。

話の流れを変えるべく、ペレウスは質問した。

「五つの公家っていったよね。政治の仕組みについてもよく知りた

いんだけど。

えっと……この帝国って、上のほうは一人の上帝と、五つの公家と、十七人の太守によって統治されているんだったね。基本は五公スルターンがもちまわりで上帝の座につくんだろ？」

「もちまわり、というのとは違うな」

ペレウスの話題転換を受け、気をとりなおしたファリザードが鞍にすわったまま上体の向きを変えた。彼女の顔がペレウスの眼前に来る。胴体を大きくひねって肩ごしにふりむいただけであるが、ジン族の体の柔らかさにペレウスはぎょつとした。

（ほんとに猫みたいな身体機能の種族だな）

ペレウスに向きなおったファリザードの顔は、小首をかしげて説明のしかたを考えているふうである。

「五公家は征服時代以前からある、もつとも古い五つの家系だ。その当主たちは上帝となる資格を有し、自分たちのなかから上帝を決める権利をもつ。

あらたな上帝を決めなければならぬとき、五公家の当主たちは会し、おたがいのうちから上帝を選ぶ。最終的に過半数つまり三人の票をあつめた者が上帝となる。

逆に、公家は上帝を退位させることもできる。それが起こりうる条件は、五公家の当主のうち四人が退位勧告することだ」

「なるほど、上帝自身の出身家系以外の四家か。でも待つて。もし上帝が退位させられることに納得しなかったらどうなるの？」

それを不満としてほかの四公を攻めたりしたら。あ、仮定の話だから怒らないでほしいんだけど」

その質問にファリザードは「知らないのか、ペレウス？」と目をみはって、「そういう例が過去にあるじゃないか」と答えた。

「百二十年前、ヒジャーズ公家のムタワツキル帝、通称“背信帝”が、直属する十七人の太守すべての軍を招集して、ほかの四公を滅ぼそうとしたことがある。

内乱のちヒジャーズ公家は敗北し、背信帝の血につらなる者は族滅された」

「族滅!？」

ペレウスは思わず動転した声を出した。

「そんな……ヒジャーズ公家ってきみらの本家筋じゃなかったか。いちばん由緒正しい……そうだ、たしか『太陽と月』が紋章だったと記憶しているよ。」

それに、現にまだヒジャーズ公家は存在してるじゃないか」

「ただひとり、当時五歳にもならない幼子がいたんだ。その子が長じたのち、他の四公の許しをえてヒジャーズ公家を継いだ。その子以外はひとりのこらず抹殺されたよ。」

……たしかに残酷だけど……上帝とはいえあまりに無理を通すことはできないこと、暴君となれば公家の結束に潰されること、それを後世に示さねばならなかったと父上はいつていた。それでこそただひとりの上帝が暴走することを押さえられるのだと。

五公制度こそがファールス帝国の柱なんだ」

微妙に誇らしげなファリザードは胸をそらして歌うようにいった。

「ヒジャーズ公家は太陽と月。正宗の家であり、その紋章はわれらが教えをつかさどる。」

ダマスカス公家は魔石。紋章は叡慮と魔術鍛造の技をつかさどる。ホラーサーン公家は剣。紋章は苛烈さと武をつかさどる。

サマルカンド公家は塔。紋章は堅牢さと建築の技をつかさどる。このように、五公の紋章はそれぞれの家門の特徴と伝統をしめしている。」

ふうんと感じ入ったのち、ペレウスはなんの気なしに訊いてみた。

「ところでイスファハーン公家は薔薇だったよね。どんな特徴と伝統があるの？」

とたんに、胸を張っていたファリザードが余計なことをいってしまったという顔になってもぞつきはじめた。ぽそりと小さく、

「……女だ」

「女？」どういう意味がよくわからない。ペレウスはあくまで大真面目に「どういうことさ」とたずねた。

ファリザードはしかたなきげにいった。

「その……イスファハーン公家はどういうわけかめつたに女が生まれない。そのかわり、たまに生まれる娘は、ジン族のうちでもとりわけ美しく価値があると言い伝えられてきた。」

だから征服時代以前からほかの四公の家系はもちろん、大陸の列王から求められたんだ。古今に比類なき魔術師と名高いかの帝王、スライマーン・ベン・ダーウド（ダビデの子ソロモン）にもわが家は妃を提供したんだ。

その歴史から、新ファールス帝国の建設後は、女性の象徴である

薔薇を家紋に採用したわけだ。『美、愛、複雑な姿』が薔薇のつかさどるものだ」

「そんな由来なんだ。……ん？ 待つてよ、もしかしてきみってそのイスファハーン公家の女兒か？」

そこに気づいたときのかれの「え、こいつが」といわんばかりに愕然とした顔は、ファリザードの機嫌をいちじるしく悪化させた。

「おまえはわたしが男児にみえていたのか？ たしかにこの砂漠渡りの服は男のものと同じにあつらえさせてあるが、本気で確認が必要なら目薬で顔を洗ったほうがいいぞ」

「いや……」

口をとがらせた男装の少女をみやって、ふっとペレウスは醒めた微笑を浮かべた。

ペレウスにとつて、友情を築いたとはいえファリザードはやはり生意気な小娘である。

同い年の少女に対しわりとひどい認識だが、基本的にかれが好ましく思うのは、奴隷の娘ゾバイダのような年上の女性である。包みこむ優しさと匂いたつ女らしさをもつ大人びた女性に惹かれるのだ。皮肉屋でじゃじゃ馬で精神年齢も肉体年齢もまだ子供でしかないファリザードに、異性的な意味での関心はない。

もっとも、彼女はつつけばいちいち反応してくれるので、からかう楽しみにはちよつと目覚めかけている。

このときもペレウスは、謹言なかれにはめずらしくにやつと口の片端をあげた。

「『美、愛、複雑な姿』か……なんと叫んだものだろう……きれい

なおとき話を耳にしたあとで現実が目に見えたというか「

「ど、どういう意味だその失礼千万な言いぐさはっ！ よくみる、どうみても薔薇姫と呼ばれるにふさわしい美少女だろ！」

おいペレウス、なんで笑い出すんだ、こっちみる、おいっ」

赤くなったファリザードが、怒り心頭にこぶしでぽかぽかとペレウスの脚を叩いてくる。

ペレウスは誤魔化すべく口元を覆い、頬の内側を噛んでいたが、ここにいたってそれでも足りず、笑いの発作が横隔膜をつきあげそうになった。

(複雑さだって？ よくも悪くもこの子にそれはないよ)

重なる薔薇の花弁が複雑性を象徴しているのだろうが、ファリザードのどこにそのような複雑さがあるというのか、本気でわからない。

打ち解けて以来、彼女の単純とっていいほど素直な一面はますます鮮明になってきていた。

(悪いことじゃない、率直さだって美質だ)

ペレウスはかれなりにこの「旧知の、新しい友達」が気に入りに入っていたのである。

ぶんむくれる様すら無性にかわいらしくて、頭を撫でてやりたいくらいだった。

(こんな妹が欲しかったのかもな、ぼく)

鼻をつねりにきたファリザードの手をふせぎ、攻防をくりひろげ

ながらペレウスは晴朗に笑った。

20・夜語り（前書き）

ペレウス、夜の砂漠でファリザードと来し方を語り
ともに明日への決意を新たにすること

荒れ地状の礫砂漠から砂の砂漠に出てからは、一日二回に分けて睡眠時間をとるようになっていた。眠るのはもっとも暑い正午から午後にかけてと、真夜中前後である。

どちらの休憩でも交互に眠り、つねに片方は見張りとして起きておかねばならない。

フアリザードにいわせれば、こうするのがもっとも良いのだった。

『水のことのみ考えるなら夜に動き、昼間は眠ることに専心するほうがよい。』

だが、わたしたちを探しているだろう賊がいる。ただでさえ見晴らしのききやすい砂漠で、明るい昼間にふたりして眠りこけるのは危険だ。そばに迫られてから目覚めてもどうしようもない』

『そのために見張りをたてて交互に眠るんだろ？ やっぱり、ふたりとも昼間にだけ休めばいいんじゃないか？ 涼しい夜にどんどん進もう』

結果的にはおなじ時間をかけておなじ速度で進んでおなじ距離を稼ぐとしても、日中に進めばそれだけ水の消費量が増えてしまう。ペレウスはそれを危惧したが、

『ペレウス、どのみち半日以上ぶっとおしでは歩けない。数刻ごとに足を止めて休みをはさむ必要がある、そのついでに睡眠をとるのだ。』

そうでないとい体力の消耗がきつすぎる。人も騎獣も』

『でも 水はろくろく残ってないよ。だいじょうぶなのか？』

『だいじょうぶだ。らくだのおかげで、これまでほぼ順調に距離を稼ぐことができた。』

生命に関わるようになるまでに確実につぎの水場にたどりつく。そうだな、明日には泉に着くはずだ。

そこから村までは二日だ』

砂漠の夜が来ていた。

「そろそろ慣れなよ、ファリザード」

それも緊張されるとこつちまで恥ずかしくなってくるだろ　と
はペレウスはいわずにおいた。

「う、うるさい、はやく眠ってしまえっ」

横向きに寝たかれの腕のなかに、弓を抱いてがちがちになったファリザードがいる。彼女は背を向けてはいたが、ペレウスが温かく眠れるようぴったりくっついてくれていた。

金砂銀砂を散らしたかのような星天の下である。ふたりは砂丘の陰に浅く穴を掘り、横たわっていた。ファリザードと反対側の上には黎明号が寝そべっていて、ペレウスはひとりと一頭にはさまれる格好である。こんどは、かれが休む番なのだった。昼の休憩ではおもにファリザードが、夜にはペレウスが眠るのだ。

砂漠に出てからこつち、賊の襲撃をくらうまでは山羊や羊の毛でできた天幕で寝ていた。

天幕の寝心地に当初は慣れず難儀したものだが、こうしてそれす

ら失ってみると屋根のあったことのありがたさが身に染みてくる……
(などと思っていたけれど、これはこれでけっこう温かいな。砂もいまはまだ昼の熱を保っているし)

歩いてきた疲れもあって、すぐに眠りが訪れそうだった。

そのこと自体はありがたかった。実をいえば

「……ペレウス、ネズミが合唱しているみたいに腹がきゅーきゅーうるさいぞ。その音を止める」

「無茶いうな、二日なにも食べてないんだからしょうがないだろ。きみだってそうだろう」

そう、実をいえばひもじくてたまらなかった。水は小さな革袋とはいえなんとか確保していたが、食料までは手に入れられなかったのである。

道中、ふたりが会話を続けてきたのは、耐えがたい空腹から目をそらすためでもあったのだ。

「それを思い出させるなというのに。おまえは眠ればすむが、わたしはこれから見張りだ。話し相手もなく空きつ腹に耐えるんだぞ」

話すこと、そして眠ることだけが飢餓感をまぎらわせる方法だった。

黎明号までやつれた感じになってきている　むしろ、らくだに乗っていけばよかったふたりより、荷物はないとはいえ歩かねばならなかった黎明号のほうで消耗が激しいはずだ。

人馬そろって飢えており、ただ水だけは革袋からきちんと摂っていた。水の不足はただちに生命に直結するからで、摂らないとどう

しようもない。

「元気なのはただけである。なお、らくだはこちらが休むあいだ、走れない程度に前足二本を結わえている……とはいえ動きまわれる程度には間隔をゆるめてあるので、その獣はうるうる歩いて、そこらのまばらな草を食んでいるのだった。明け方にはふたりから半ファルサング（約2.5km）も離れ、捕らえるところからやり直しになるかもしれないがやむをえない。繋ぎ止める杭もなにもないのだから。」

「あのらくだから乳をしぼれたらよかったのだが……おおいに腹の足しになるのに」

自分で思い出させるなどいっておきながらぶつぶつぼやいているファリザードに、ペレウスはふとあることを提案した。

「おなか締めつけておいてあげようか？　少しは気にならなくなるってどうよ」

サー・ウィリアムから、「冗談か本当かいまいち判然としない」「食い物がない夜をしのぐ方法」を聞いたことがあったのである。はたしてファリザードは興味をおぼえた声で聞き返してきた。

「締めつける？」

「うん。クッションかなにかを凹めた腹に押しあてて、ひもか何かできつく縛るらしいんだけどね。」

いまはふたりいるし、ほら、こんなふうに」

ペレウスは彼女の細いお腹にまわした腕に力をいれて、ぎゅっと

巻き締めた。とたんに「ひゃあああ!？」と裏返った声をファリザードがあげ、じたばた暴れはじめた。

「やややめろ! しなくていい、いらないっ! 放せっ!」

あわててペレウスは腕を放した。ファリザードがあたふたと砂の上を転がって逃げる。

背を向けてはあはあと狼狽の呼吸を荒くつむいでいる少女の様子に、少年は気まずさを感じた。特になんとも思わず気軽にやったことだったが、ここまで過敏に反応されればさすがに戸惑わざるをえない。

ファリザードが起き上がってかれに向きなおり、目を三角にしてにらみつけてくる。

「いきなりなにをする!？」

夜目にもその顔が、尖った耳の尖端まで真っ赤になっているのが見える気がした。

まさか射たれはすまいがその手の弓矢が怖い。ペレウスはとりあえず謝った。

「わ……悪かったよ」

だがどうも釈然としない。

「だけどきみ、ジン族だろう」「ついつい口に出し、

「それがどうしたっ!？」

……まさかペレウス、おまえもジン族がつつしみの足りない種族だという悪質なうわさを信じているんじゃないなあるまいな」

返ってきたその言葉に耳を疑い、ぽかんと間抜け面をさらしてから、ペレウスは懐疑的につぶやいた。

「……あれって嘘だったのか？」

たちまち顔に血をのぼらせたファリザードが嘔みついてきた。

「ほんとうなわけあるか、侮辱もいいところだ！ 他種族が流布させた破廉恥なでたらめだ、わたしたちに貞操観念がないとでも思っているのか？」

「だって、屋敷内でよく裸に近い格好してたじゃないか」

「あれは伝統的な部屋着だ！ 薄物姿を見られるのと、肌に触れるのとはぜんっぜん別の次元だ！」

「そ、そうかもしれないけど」

ペレウスはたじたじとなりながらも、自分が心の奥で納得しているのを感じた。

これまでも、あれ、と思ったことはあったのだ。ファリザードと決闘したときや、砂漠に出たからの会話のうちに、「この子はもしかしたら耳年増なだけではないだろうか」とかすかながら疑念を抱いてきた。

少なくとも直接接触に関する反応をみるかぎり、ファリザードはむしろ初心はつこなほうである。

（よく考えれば、ヘラスもどちらかといえば裸体をみせることにはおおらかな文化じゃないか。

それなのに表面のことだけでジン族を自分たちより淫乱と決めつけてきたのは、敵対する文明を貶めたいという意識がぼくの中にあつたのかもしれない)

本気で和平を目指す以上、こつした悪しき偏見は改めなければならぬだろう。ペレウスはなだめるようにこくんとうなずいてみせた。

「わかったよ。ジン族につつしみが欠けるといふのは、まったくいわれない中傷、または誤解だつたつてことだね。つまりきみらは私的な領域で薄くさっぱりした服装を好むだけだ」と

が、ペレウスの確認の問いに、ファリザードはぐつと詰まった。興奮を一瞬で冷まし、彼女はなにやらばつが悪そうに両手の指先をからめあわせた。

「誤解は誤解だが……：そういわれるようになった心当たりがまったくないか」と微妙かも……：」

「……どっちだよ、けつきよく」

「だから、誤解を生むような事情はなくもないというだけの……：わたくしたちにはラヘム子宮統コフルがあるので、そのう」

「ラヘムコフル？ コフルってファールス語では錠だっけ？ なにそれ？」

「……もういいだろ、この話！ 婚前の娘が話すことじゃないんだ、イスファハーンに帰ったら父上に聞けっ」

強引にファリガードが話をうち切ろうとした。ペレウスは得心が
いかない。疑問をどうしてもはつきりさせておきたい性質たちなのであ
る。

そういうわけでかれは頼杖について半眼になり「ちえっ」とむく
れた。

「以前に小便王子とあれだけ連呼してただろ。この期に及んで淑女
ぶったつてさ」

四つん這いでそろそろとかれのそばに戻ろうとしていたファリザ
ードが凍りついた。動きが凝固し、彼女の手のひらの下の砂がにぎ
りしめられてじやりっと鳴った。

予想とちがう態度に当惑し「ファリガード？」と声をかけた少年
のまえで、少女は砂の上に座りなます。ややあつて、砂に染みて消
えそうなほど小さな声が聞こえた。

「悪かった、ペレウス」

さつきとは別の羞恥 深刻に恥じ入った響きがその声にはあつ
た。

ファリガードのしおらしい謝罪にかえってペレウスのほうがあわ
てた。いまさら責めるつもりでいったわけではなかったのだ。

たしかに昔は恨みに思っていた。嘲笑され、面罵されて彼女に憎
悪に近い気持ちを抱いたこともあった。けれどいまとなつては……
さまざまな経緯を経て仲良くさえなつたいまでは、ぼろっと口に出
せるくらいには過去は気にならなくなっていた。かれの中でファリ
ガードへの負の感情は風化しきつていたのである。

「ええと、べつにそのことはもう」

「ううん、はじめをつけたいんだ。聞いて。」

わたし、あのころはヘラス人が大嫌いだったから……ヘラス人をすぐ見下げようとしたし、馬鹿にできる機会があったら喜んでそうしてきた。

おまえのことは、一度酔っ払って失敗したことだけ見て情けない奴だと思いこんでいた。けれど、そんなのはたいしたことじゃなかったっていまならわかる。

わたしは、わたしのわがままで砂漠に連れだした者たちを賊にむざむざ殺させてしまった。一方で、おまえはあの混沌の場からひとりとはいえ救いあげることができた。助けられたのはわたし自身だから礼をいわねばならないとは別に、わたしは……おまえに謝らねばならない。

貴族の資格がなかったのはわたしのほうだった」

ファリザードの吐露に、ペレウスはなんと反応したものかわからない。

漏らしたのはほんとうは酔っ払っての失敗じゃないんだけど

……

悪いのは襲ってきた賊だ、きみがそつも責任を感じることはないと思うけれど。

いいということがつきつき頭の中に浮かび、口にのぼる前に心のうちに散っていく。同性に襲われた事実を語るよりは、酒による失態だと思っただけでもらったほうが良かった。みずからを責めるファリザードが欲しいのは安易な慰めの言葉ではない、と気づいてもいた。

「ずっと間違った態度をとってきて、ごめんなさい」

彼女が沈痛な声でそういつてから、ようやくペレウスは口をはさむことができた。

「もういいってば。ぼくはほんとに気にしてない。きみもあまり深刻になるな」

面映ゆげにそっぽを向き、ペレウスは砂の上に起きあがると「そんなことより」と切り出した。

気恥ずかしさが限度に達して話をそらした格好だが、要件があるのもまた確かだった。

「目指す水場に明日には着くんだったね。これはその前にどうしても話しあっておかなきゃならない。

ぼくらには警戒しなければならぬことがある。あの賊どもの移動能力のことだ」

「……あれか。邪教の妖術をこめたダマスカス鋼の宝具　扉の宝玉　と呼んでいたな」

悄然としていたファリザードの緊張が別種のものに変わる。

会話をやめなかつたのは空腹をまぎらわせるためだけではない自分たちを追っているかもしれない賊への恐怖を忘れるため。そのほうが、比重としては大きかった。

(けれど、いつまでもこの話題を避けて通れない)

ペレウスは罫にはめられた日のことをこと細かに回想しながら、確認するようにいった。

「あいつらは泉を飲めない塩水に変え、　扉　の出口にしていた。宝玉が溶けた妖術の扉をくぐると、ぼくらは一瞬で塩水の泉へと移動した」

「あれはまさに邪悪の業だ」フアリガードが忌まわしそうに吐き捨てた。「泉は砂漠渡りの者たちにとって生命の綱だ。それを汚してまわるだなんて」

「あの妖術がこの地に与えた害は、ただ泉を飲めなくするだけじゃないぞ」ペレウスは指摘した。「あいつらはこのイスファーン公領で無道をほしいままにし、守備隊の兵に追われながらも半年以上もまともに尻尾をつかませることがなかったんだろ。いくらきみの家の領地がヘラスすべてを合わせたより広大だからといつても、こつまで捕捉を逃れつづけているのは妙だと思っていたんだ。」

だが、あの力があれば話は別だ」

空間を飛び越えることができるならば、たとえ数に勝る軍に追跡されても、追いつかれる前に姿をくらますことが可能である。

賊の一群を見失って右往左往している守備隊を置いてけぼりに、移動した先の別地点でまた襲撃をくりかえす。これでは、賊の秘密を知らないかぎり捕らえようがない。

「フアリガード、あらためていうまでもなくあの力は厄介だ。」

あれは明日、ぼくらを脅かすかもしれない。ぼくらが水場に着いたとき、やつらが妖術を使って、先回りして待ち構えている可能性がある。そうなれば」

おしまいだ。その言葉を寸前でペレウスはのみこんだが、フアリガードはあえて聞かずとも続きを理解したようだった。彼女も暗くうつむいた。

向い合って座りこんだふたりの周囲で、夜の闇が濃度を増した気がした。

軽率だっただろうか、とペレウスはこぶしを固めて砂を凝視した。

（話しあう必要なんて、ほんとうにあったのか？ できることなんてないのに。ぼくは……どうにもならない不安に耐えきれず、ファリザードを巻きこんで少しでも心の負担を減らしたかっただけじゃあないのか？）

考えに沈んでいたため、ファリザードが忍び足の猫のように音もなくにじり寄っていたことに気付かなかった。

そろりと伸べられた手でひざ頭に触れられて、ペレウスはようやく驚きを覚えて顔をあげた。彼女のほうから触れてくるのは珍しかった。

「前へ進むしかないんだ、ペレウス」ファリザードの決然とした表情が眼前にある。「水は尽きたのだ。いまさら立ち止まることも引き返すこともできない。

わたしたちにできることはただひとつ、覚悟することだけだ」

過酷な現実を彼女はあえて突きつけてきた。

ペレウスは深々と嘆息し、それから彼女のいうとおりに腹をくくった。

先へ進めばひどい目にあうかもしれない。けれどここまで引き返せば間違いなく渴きで死ぬ。

「それでも、死ににいくんじゃない。少しでも、生の可能性が高いほうに賭けるといふことだ」間近で彼女がいう。

「仇をとるとおまえがいつたろう　血の貸しを取り立てるため生きなければ」

一呼吸おいて、ペレウスは強くうなずいた。

「そつだ。死者たちの仇をとるためにも、生きなきゃならない」

互いの瞳をみつめて一語一語誓うように

「復讐と裁きのため、イスファハーンに帰ろう、ファリザード」

「かならず、わたしとおまえとで」

21・初恋 上 (前書き)

ファリザード泉にて憩い、懊悩し、
おのが心をついに定めること

21・初恋 上

水場は、砂漠に峨々たる荒れた山地のふもとにあった。

というより、椰子の木しげるその泉は谷間にあったのだ。両側に岩山がせまる谷には水の流れた痕跡がある。雨のときだけ水が戻る涸れ川の一部が、つねには泉となって残っているのだろう。

もっとも、ペレウスとフアリザードにとって泉の成り立ちはなんでもいい。ひとつのことだけがかれらには重要だった。

この岩のプールのような谷間の泉に、賊の姿はなかった。

弓矢と七彩ハット・ラングを持って慎重に泉に近づき、そのことを見極め　　子どもたちは歓声を爆発させて水辺に駆けよつたのだ。

水は命の味がした。

(最高級のぶどう酒より美味しい)

泉のふちにかがみこんだペレウスは、無我夢中で澄んだ水をすくって飲みながら思った。となりではフアリザードが同じ姿勢でわれを忘れてのどを潤している。らくだや黎明号もふたりに並んで口を水面につけ、むさぼるように飲んでいた。

生命力を補充する快さがあった。軽い脱水症状により煮詰まっただろどろしていた体液が、清らかな水で希釈されてゆく心地。

存分に水を味わったあと、ふたりはようやく顔をあげてひと息をいれた。

楽園かと思紛うばかりだった。大岩が転がる泉のふちには、青々とした草木や苔が繁茂しており、日光を漏らす木々の葉は頭上でさやさや鳴っている。

荒漠とした砂漠ばかりみてきた後では、緑がことに鮮烈に感じら

れた。ペレウスは心を浮き立たせた。

「緑が多いね、この谷間だけ」

「それこそオアシスたる所以だ。あ、ペレウス」

ファリザードが上方のナツメヤシのこずえをあおいで嬉しげな声を出した。

「みてみる。椰子の実が生っている」

苦もなくファリザードは木に上り、ペレウスの眼前に黄色っぽい実や明るい赤色の実を落としてきた。砂を洗い落とすのもそこそこにふたりはかぶりつき、しばし無言で腹を満たした。

ひと心地ついてからはさらに多くの実を落とし、黎明号やらくだにも与える。

騎獣たちがぼりぼりと果実を噛み砕く音を聞きながら、どちらからともなく笑みを交わした。

昨夜、「泉は待ち伏せがあるかそうでないかふたつにひとつだが、前へ進むしかない」と悲壮な覚悟を決めたのだったが、どうやら杞憂に終わったようだった。

「もう心配なさそうだね、ファリザード」

「ああ。けれど用心するにこしたことはない。水をくんで椰子の実を集めたら早いうちにここを通り過ぎ、村へ向けて出発しよう」

「そうだね。でも、ちょっとだけ待ってもらっていいかな」

ペレウスは首をかたむけて自分の服のにおいを嗅いだ。砂漠の乾

いた気候では、汗は出る片端から蒸散するためさほど臭わないのだが、やはり数日も同じ服を着ていると異臭がまとわりつく。

泉に目をむけて、ペレウスはこの地を領する大貴族の娘にいちおうのお伺いをたてた。

「ここで体と服を洗ってもいいだろうか」

ファリザードが腕を組む。考えているように見せかけているが、いたずらっぽく瞳が輝いていた。

「砂漠の泉は公共物だ。ほかの隊商や旅人がこのあとすぐ訪れる場合を考えたら、沐浴はあまりいただけないな。」

「……でも、たぶんほかの旅人なんてすぐには来ないだろう。いまだけ公德心を忘れてしまってもいいかもしれない」

そついいながら彼女は自分のマントを外した。着た切りであったこの数日にうんざりしていたのは彼女も同様だったのだろう。水浴びに大いに乗り気のようだった。

「よし、行ってくる」

許可されたと判断してペレウスは手早くマントをはずし、ヘラス風の半袖の短衣も脱ぎすて、腰布一枚になり。そこで、息をのんで固まったファリザードに気がついた。

長袖の胴衣を脱ぎかけて手をとめている少女は、うろたえきった様子で「ば、ばか、乙女の眼前でためらいもなく脱ぐやつがあるか」とかれに背を向けた。ペレウスは瞬間的に彼女と同じくらい頬を赤くし、なにをいつかと腹を立てた。

つい故郷の浜辺で泳ぐときとおなじように脱いでしまったのはこちらの落ち度だが……

(自分はぼくらの目の前で肌に香油を塗らせていたりしたくせに、いまになってなんだよ、その恥ずかしがりようは)

だいいち、

「先にマントを脱いだきみにいわれたくないよ！」

「わかった、わかったから離れたところで浴びてこいっ」

「いわれなくとも！」

憤然として脱いだ服をつかんだペレウスが泉に踏みこむ。かれが水をかきわけて離れていくのをファリザードは耳をそばだてて確かめていた。かれの立てる水音がじゅうぶんに遠ざかるのを待って、彼女はようやくふりむいた。

ペレウスの姿はみえない。泉は弓なりに湾曲しており、せり出した陸地の岩石および密生した植物によって、向こう側を一望することとはできなかつた。

かれの姿がなくて心細いような、裸で間近に接することがなくてほっとしたような

(おかしなこと考えるな、はやく汚れを落とそう)

服を脱いで浅場に入る。

可憐なつま先からくるぶし、美しい弧を描くふくらはぎ、しなやかで張りつめた太もも、小ぶりなりに柔らかく実った尻と、順次に静謐な水面に浸かってゆく。すべすべした下腹までを浸して、彼女

は泉中にたたずんだ。小麦色のみずみずしい若肌が、水滴を弾いて煌めいた。

（油と灰からつくった石けんがあればいいのに）と思いながら髪と体を洗いはじめた。

（村へ行き着いたらまず湯を使わせてもらおう。

石けんで洗えたら、そのあと香油も塗りたいな。……香油はイスファーンに帰ってからゾバイダに塗ってもらうことにしたほうがいいか）

数年前から屋敷にいる女奴隷の塗油の手つきを久しぶりに懐かしむ。姉のように優しくいても柔和な笑みを絶やさないゾバイダのことを、ファリザードは使用人のなかでも気に入っている。ペレウスと仲良くなる以前、友達にもっとも近い存在がいたとしたらそれはゾバイダだったろう。

もちろん、ほんとうに友人というわけではない。領主の娘である彼女と、対等な意識で向かい合おうとする召使いなど存在しないのだ。それは屋敷の外の市民たちもおなじことで、果物屋の主のようにファリザードを可愛がる者たちでさえ、彼女へのうやうやしさをつねに忘れたことはなかった。ファリザードもそれを寂しいなど思ったこともなかった。

それは理なのだから。

彼女はイスファーン公の娘であり、ホラーサーン公の姪であり、すなわち帝国五公家のうち二公に連なる血筋の少女だ。世界最大の帝国であるファールス帝国の一公家となれば、蛮族の王国ごときは笑殺してのける実力と権威をそなえている。

その自分をほんとうに対等な友人として扱う者など、帝国のほか

のジン族諸侯はいざ知らず、人族から出てくるはずがない　　そう
思っていた。

（でも、ペレウスがいた）

はじめて自分にできた人族の友人のことに考えがいたる。

（そういえばペレウスのやつ、最初からぜんぜんわたしに物怖じしてなかったな。いつだって生意気で不満げで、わたしがヘラスの悪口をいったりしたら、険悪な目付きでこつちをにらみつけていた。ミケナイというのはヘラスでも古い都市だと聞いたけれど……だからかもしれない、あいつがあんなに強情っ張りなのは）

以前は媚びようとしないうその目付きが気に入らず、身のほどをわきまえない蛮人だとしか思わなかった。だがそれは、裏を返せば気骨があるということだったわけである。

洗った前髪に手ぐしをさしいれて、顔への鬱陶しいたたたりを防ぎながら、「ふふ」とフアリザードは笑った。

ペレウスに気骨がないわけではない。あいつはわたしと戦ったときとわたしを助けたときで、二回もそれを証明してみせた。とくにわたしを助けた今度のこと、父上もかれに注目するようになるだろう

　　浮き立つ気分で自然と微笑していたフアリザードだったが、はたと気づいたとき手が止まった。

（ペレウスが父上に認められることで、なんでわたしが上機嫌になる必要が）

　　髪を後ろにかきあげた姿勢のまま彼女は黙した。頭上から小鳥の
声がとどいてくる。

ややあつて、ファリザードは水をすくって美貌を洗った。顔が熱かったのである。

（あいつは友達、友達だ）

友達が評価されるのがよろこばしいのは当然じゃないか、と思いきもつとする。だが心はその片端から転々として妙な連想にかたむいていく。

（……………この先も友達というだけで、すむのかな…………）

連想はゆえのないことではなかった。ファリザードは父親から言われている。館に滞在するヘラス人の上流階級の子たちのなかから相手を選びなさいと。

そもそもファリザードがこうして砂漠に出てきているのは、単に父親のイスファーン公に怒られてすねたからではなく、

（ヘラスとの戦で、主戦派である叔父御がとうとう兵をあげて前線へ出るべく西進してきた。

だから和平派の父上は、焦ってすぐにでもわたしをヘラス人と結婚させて和睦を演出しかねなかった）

そのゆえに、彼女はイスファーンの市壁から飛び出したのだ。

意に沿わぬ結婚の可能性から逃げ出すために。

けれど砂漠行がこんなことになってしまった以上、もはやわがままにふるまえる段階ではない。イスファーンにすぐにでも帰らなければならぬ。

つまり、こんどこそ結婚と向き合わざるをえない。

ではもし現在、選択を迫られて真剣に考えるとしたら。どうあつ

でも選べといわれたら。

だれを選ぶかはもう問題ではなかった。そんな段階はすつとばしてしまった。

(いま選ばされたら、わたしきつと、あいつを)

ヘラス人との結婚といわれたら、いまではひとりの顔しか思い浮かばない。

しかも 必ずしもいやいや選ぶというわけでもない。困ったことに、かつてこの結婚話に抱いていた嫌悪感は、心のどこを探してもみつからなくなっていた。

ファリザードは情感をたたえた瞳を伏せ、動揺を押し殺すようにつぶやいた。

「ほ……ほかのヘラス人を選ぶよりはまじだもの。そうだ、いちばんまじだからだ」

無理に結婚させられるなら、「友達」を選んだほうがまだしもだからだ。ファリザードはそう念じて、あるひとつの予感をどうにかふりはらおうとしている。それはもうほとんど確信のだが、ファリザードはせめてもの抵抗をしたいのだった。

脱いだ服を泉にひきこんで、じゃぶじゃぶと乱暴な手つきで洗う。

「人族となんてありえないんだからな、本来」

自分にいきかせるように口にだして、

(……でも、宣告のことがあった)

ファリザードはそれを思いだした。

“黄金の薔薇と黒い剣、ふたつの公家をかけあわせ、産まれる子がもし姫ならば……”

彼女の頭上には、生を受ける以前にジン族の古老にかぶせられた
魔術師ホクムの宣告の影が常にある。

その話をファリザードは父に教えられた　ヘラス人使節たちを館に迎えるときに、結婚話の前振りとして。

イスファハーン公の屋敷に呼ばれた古老は、歓待を受けたのちに礼として三つの宣告を下したという。女兒であったならば、といいおいたのちに、

(“命を分けた親の血に濡れる……アーダム人族の子に鍵を渡す……いまある争いのかたちを終焉させる因となる……”

あのとき聞いたのは、こうだったような)

記憶をたどってファリザードは一句一句を脳裏で確認した。

親の血にまみれる　イスファハーン公が怒ってその古老を追い出したにもかかわらず、不幸にもひとつめの宣告は実現した。ファリザードの母は産褥によって腹の子を産み落とす前に死亡した。やむなく刃物によって胎を裂き、その血のなかからファリザードは現世へと出てきたのだ。

その事実をイスファハーン公は娘に明かしたのである。のこりふたつの宣告が実現しないとはいえぬ、と。

けれど、ファリザードは信じなかった。というより、頭からはねつけた。それを口実として父親が彼女をヘラス人と結婚させようとしているとわかりきっていたからだ。

あるいは口実ではなく本気で父はそう信じていたのかもしれない。最愛の妻であったファリザードの母を失って以来、イスファハーン

公が神秘主義への傾倒を強めたというのは有名な話だったから。それを思うとファリザードも父を可哀想に感じたが、やはり娘を人族と結婚させようとするのは行き過ぎだ。

ために「そんなうさんくさい宣告、古老が適当なことをいったに決まっています」ファリザードはそういつて抵抗したのである。だがいまは……

「でたためにしか思えなかったけど、案外、当たるのかな」

頬を染めてファリザードはぽつりといった。

もし彼女がペレウスと結婚し、それによって、戦ってきたヘラス諸都市と帝国の両文明間に平和がもたらされるのであれば、一挙にのこりふたつの宣告も成就するのだ。

しかし問題がある。

ふたつめの、「人族に鍵を渡す」という宣告　ファリザードはますます肌に血をのぼらせた。

鍵を渡す。それはほぼ確実にあのことを指しているのだろう。

要するに伴侶になることであり、同時に肉体上の契りを交わすことでもある。そのことはジン族においては完全に同列であり、「女が男に鍵を渡す」というのだ。

なぜそのように言うかといえば、それは子をなすために子宮錠ラヘル・コナムの解錠を許すことだからだった。

服を延々と揉み洗いするファリザードは、赤面を止まることなく進行させていく。

羞恥心を胸中に抱えこめず、とうとうだれに聞かせるでもなく虚空に向けて話しかけはじめた。

「や、やっぱりそんなことまだ決められないな。うん、ペレウスはいいやつだけど、ほら、ジンと人のつがいなんてどう考えても変じやないか」

ヘラス人に対する蔑視は、いいかげんに捨てようと思いはじめているが、だが何人以前に、かれは人族なのだ。人族との婚姻など、彼女が妖王の娘でなくただのジン族であったとしても通常はありえない話だ。昔のように侮辱と感じて目もくらむような怒りを覚えることこそないが、真剣にその可能性に向きあってみても、やはりまだ戸惑わざるをえない……ということに自分ではしておきたいファリザードだった。

「そつだ、ほんとうなら相手は厳格に選ばなければならぬはずなんだ。イスファーン公家は征服時代以前からあまたの英傑や霸王に妃を提供してきた家として、結婚に関してはほかの氏族より伝統と格式を背負っているんだぞ。和平のことばかり気にして、父上はそのあたりのことを軽くみすぎているんだ。いまだつてすでに、娘を差しだそうとしている弱腰の妖王といい笑いものになっているじゃないか。それに、もう四百年も生きている妖王ドラスのくせに、軽々しく古老の宣告にふりまわされるなんて、わが家の名誉というものをなんだと思つて……」

「でも、ほかはどうしようもなさそうだし……
こうなつたら、あきらめて親孝行してみるのもいいかも……
そつだな、百歩ゆずるとして、せめてペレウスのほうから求婚してくるなら、それなら考えなくもないかもしれないけれど」

ファリザードはいいわけじみた口調で、途中からつぶやきの内容をそれまでと真逆の方向に変えた。

「ぼーっと水面をみつめて胸の前で手をもじもじさせる。結果とし

て揉み洗い中の服がごしごしこすり合わされる。

「うん、あつちからどうしてもって求められたなら、よく考えてから返事する。それにしよう。そういう条件ならなんとか。」

とにかくぜつたい、結婚のことはあつちからいつてもらわなきゃ」

そうでなければならなかった。

彼女は薔薇の公家のフェアリザード、広大なファールス帝国でもっとも価値の高い女兒なのだから。

伝説の魔導師王スライマーン・ベン・ダーウドや、イスカンドル双角王級の人物ならまた別だが、いくら支配階級だろうと小国の人族ごときにこちらからやすやす嫁いだりすれば沽券にかかわるのである。

「それに、男から求めてくるのが正しい作法なんだから。そういう手順はきちんと踏んでほしいし」

揉み洗いの摩擦が加速した。

人族のことはよく知らないがジン族では古来、男が求め、女がそれを許して「鍵を渡す」ことで伴侶となる。今日では形式と化している面もあるが、やるなら正式に踏襲してほしい。

そうやって求婚されたなら　　と思考を続け、

「そうになったらその、ペレウスの体面を傷つけたら悪いし、父上に外堀を埋められてしまっているんだから娘としては為すすべもないし、これはもうしょうがないんだと世間にも親族にもわかってもらえるだろうし」

もじもじ。ごじごじ。

最上級品である絹胴着の繊細な刺繍が、無残にもすり切れそうに

なっている。

しかし、ファリザードがぴたりと口をつぐむや、おもむろにその手の速度がおとろえた。

彼女は洗っていた服を水面に手放し、腕をだらりと垂らして、服が水底にゆるゆる沈んでいくのをみつめた。

ふわふわ浮かれていたさきほどは打って変わって、心も腕も鉛と化したようにファリザードは肩を落とした。

「……ばかみたいだ、わたし」

（体面も矜持も捨てきれないけれど、それよりも、ペレウスに正面からわたしを求めてほしいって思ってる）

「こんな考え、『友達』相手のものじゃない……」

自分の心がどこへ向かおうとしているのか、彼女は理解したのである。

ファリザードは認めた　かれに惹かれたしているのは、わたしのほうだ。

「ジンが人に懸想するなんて、こんなの、いい恥だ……」

押しつぶされそうな声をだし、少女はきつくまぶたをつぶった。

もう一度、冷たい水を両手にくんで顔面に浴びせる。それでもなお、顔も頭の中も熱かった。赤熱した顔をおおって、泉のなかで立ちすくむ。自分の胸の高鳴りが大きく聞こえた。

愁いと艶のいりまじるため息をついたのち、

「あっ……そうだ」

はっとしてファリザードは下腹をみおろした。つかの間の緊張ののち、ファリザードは安堵したような肩透かしを食らったような複雑な心情を味わった。へその下の褐色のすべらかな肌にはなんの兆候も浮かんでいなかった。

(子宮錠の呪印は出てきていない)

張りつめた精神が一気にゆるみ、反動で虚脱感がおとずれる。なにこともなかった下腹を無意識に指でなでながら、少女は思った。

(いずれにせよひとつは確実に喜べる。子宮錠がまだ現れていないならば、『鍵を渡す』ことで悩む必要はすぐにはないわけだから)

ジン族の少女の胎が赤子を宿せるようになったとき、血の色をした紋様が肌にあられる。

その呪印を子宮錠という。

まだ胎の準備がととのわない子どもであるうちは子宮錠は表われない。逆にいえば、呪印が浮けばその娘は妊娠できるようになったということだった。

子宮錠は通常、体が成長すれば自然と浮いてくるものだが、そうでない場合も多い。

ジン族の少女がはじめて男性に魅力を感じ、かれを慕い欲したときに、誘発されるようにそれは出てくる。つまりは、初恋と連動して子宮錠は浮くのだ。かならずそうなる。予期せぬ妊娠の可能性を徹底してはばもうとするかのように。

そしてファリザードは、話には聞いていたが、これまで子宮錠が表れたことはなかった。

みるかぎりいまも表れていない。その事実を頼りに、少女は最後の悪あがきを試みた。

(子宮錠がでていないならわたしのこの感情は、恋ではないってことだ……)

そうか、ほんとうにあいつを好きではないのかも)

ペレウスに対する感情がほんとうに恋かどうか、ファリザードには確信がもてない。

なにしろ初めてなのだ、こんな想いは。

(きつと、ちょっとのぼせちゃったただけなんだろう。しばらくのあいだふたりきりで危地を旅してきたのだもの。そういう状況では錯覚が起こりやすいと聞くし)

たしかにかれに笑いかけられるといまみたいに顔が熱くなるし、かれの声を聞きながらそばにいても不思議に満ち足りた気分になるし、夜寝るときなどにくつつかれるとどきどきと心臓が破裂しそうになるし、眠るかれに不意打ちで抱きしめられたり顔を近づけられたりすると胸が苦しくなってしまうが

(……恋じゃあないだって?)

悪あがきを、自分から放棄した。
なるべく冷静に分析しようとする。

胸打つ早鐘も肌の火照りも、やはりそれとしか思えない。なによ、と切なく揺れる瞳を伏せる。ペレウスに抱きしめられた感触を呼び起こすように、自分の胸をぎゅっと抱いた。

目を閉じて、あいつの顔ばかり浮かぶのだ。

だがそれならなぜ子宮錠が出ないのか。

(もしかして、人族相手の懸想だと子宮錠は浮いてこないんだろうか)

ジンと人のあいだで、子は作れただろうか？

そうでないなら、子宮錠は浮かばなくてもかまわないということにならないだろうか。この呪印は、妊娠を妨げてジン族の出生数を低下させるためにあるのだから。

「そうか、子どもができないんだ。だからはじめから浮かないんだ」

砂をかみしめているような心地がした。ファリザードは、すこし遅れてそれが失意だと気がついた。

(え)

苦い失意のうちに、はつきり恋情を確認した瞬間、それがおとずれた。

最初は、水銀が血管を流れたかのような突発的な悪寒だった。

ついでそれまでもうるさかった心悸が乱れた。はねあがり、胸を内側から壊そうとするかのように暴れ、胸苦しくなり、

「あっ!?!」

雷が流れたようなびりつとした刺激が脊柱に走る。

それから肌の表面に強烈な痛みが生じ、ファリザードは苦痛の声をあげて上体をかがめ、下腹に手をあてた。その押さえている部位をみて目をみひらく。

「うそ、そんな」

子宮錠。

炎の針で皮膚の内側から文身いれずみをほどこされているように、じわじわと赤い紋様がへそ下に浮かんでいく。

「こんな、いきなり、こんな……来るなんて……」

人族相手では浮かないのだと思いこんだばかりだったのに。

熱い。汗が噴きでる。寒い。総身がわななく。蛇のような鎖が体の芯に巻きつき、ぎりぎり締めつけている気がする。

自分の肉体の内側が永遠に離れない鎖に縛られていくのを、フリーザードは呆然としながら耐えるしかなかった。

少女の内側で渦巻いた泣きたい気持ちと苦痛へのおののきと、恐怖と狼狽と底の底にある歓喜が。

血の色をした六芒星が、下腹に鮮やかに浮かびでていた。

22・初恋 下 (前書き)

妖王の子ファリザードに運命降り
ペレウス、開花せる薔薇姫に惑わされかけること

22・初恋 下

荒れ地状の礫砂漠から砂の砂漠に出てからは、一日二回に分けて睡眠時間をとるようになっていた。眠る。沐浴の爽快感に、ペレウスは深々と満足の息をもらした。垢と脂をできるかぎり落としきったところである。

全身の力を抜いて、ぶかりと岩のプールにただよい、上方を見上げる。木々の葉のすきまから濃青の空がのぞいていた。谷間を渡る熱く乾いた風すら、濡れた肌にはここちよい。

ファリザードのおかげだ、とかれは浮かびながら思った。

ここまで彼女が計画した通りに進んできたのだ。砂漠では急ぐときもただ急げばいいというものではない、かれはこの数日でそれをファリザードから学んだ。

水の残量とルートと移動速度についてファリザードは細心の注意を払っており、水を飲む時間や飲む量までを事細かにペレウスに指図してきた。

今日、ちょうど革袋の水が尽きた数刻後に泉にたどりつき、その指図が正しかったことは証明された。……いや、いくらか水に余裕をもって着いたほうがいいに決まっているが、誤差の範囲だろう。

（正しい道をたどっているか、いかに飲むか、いつ休むか……ぜんぶ「計画と効率」なんだな、砂漠では）

騎獣をふくめて自分たちがどれだけ水が必要とするか計算し、水を確保できる道を知っておき、つぎの水場への距離にあわせて水の消費量を調節しなければならぬ。そこに加えて体力の限界や、賊や猛獣を避けることを、ファリザードは可能なかぎり計算に入れて

いたのである。

（性格的には素直で単純な子だけれど、計画的思考の緻密さは、同年代のヘラス人上流階級なんか足元にも及ばないぞ。ぼくは彼女からも吸収しないと）

ファールス帝国の軍は兵站にすぐれるというが、その理由がわかった気がする。砂漠渡りには否応なしに計画性が必要なのだ。

（帝国はやっぱ、侮っていい相手じゃない。うかうかしているとヘラスは、物量の差だけでなく人材の質でも負けかねない）

イスファハーン公家は軍事にうとく、兵は弱い。内陸部にあつて外敵と領土を接せず、ほかの諸侯に守られて平和を満喫してきたためであるうが、おそらく五公家のうち最弱であるう。

そのイスファハーン公家でさえじゅうぶんに潜在的な脅威であることを、ペレウスはファリザードを通じて思い知った。

まして、ヘラスと領土を接して戦いつづけてきた西辺のダマスカス公家や、帝国最強の軍を擁する東辺のホラーサーン公家となれば

……

でも陸上に限ればの話だ。こと海上を舞台とするなら、ヘラスはこれまで帝国に負けていないぞ。

というより、ヘラスが滅ぼされなかつた理由はその一点に尽きるのだ。帝国の支配者であるジン族は海が苦手であり、その水軍はそれほど練度は高くない。対してヘラス人は、歩くより先に帆をあやつることを覚えるといわれる海の民だ。

陸上戦だけであれば、ヘラス諸都市は連合してかろうじてファールス帝国の一公家と互角というところであろう。だがヘラスと帝国

との間には海水の防壁と諸都市の海軍が横たわっており、それこそがヘラスを守ってきたのである。

「砂漠にあつては水は命、か」ペレウスは泉にたゆたいながら、足を動かして宙にしびきを蹴り上げた。「ぼくらヘラス人にとつても、別の意味で水が生命線だな」

けれどその優位もいつまで続くだろうか？ 十字軍の主戦力であったヴァンダル諸王は故国に逃げ帰り、ヘラス・ヴァンダル同盟は大きく弱体化している。

そこへきてファールス帝国側では、帝国中最精鋭のホラーサーン公家軍が、最後の十字軍国家アレツポを攻略するためあらためて西進をはじめているという。かれらがダマスカス公家に加勢して十字軍を片付けたのち、余勢をかってヘラス征服にまで乗り出せば……厄介なことになる、ではすまない。「第三次ファールス戦役」とヘラスで呼ばれているこの戦いは、もはや終わったも同然である。

落ちてきた水滴が顔を打つ……ペレウスは深刻に眉根を寄せている自分に気がついた。

（違う違う、戦いのことから考えてどうする。これからは和平を結ぶことを優先するんだろ）

ホラーサーン公家軍が対ヘラスの最前線に出てくる前に、イスファーン公家のとりなしによって帝国と和睦すればよいのだ。

聞くところによると上帝は、^{スルターン}十字軍は最後のひとりまで滅ぼすことを唯一神に誓約したというが、ヘラス相手には妥協する考えがあるらしい。

（たぶん、これが最後の機会なんだ。ヘラスを破滅から救うためのファリザードを助けておいてほんとうによかった。彼女も手伝っ

てくれそうだ)

もし平和がもたらされたら、十字軍が首をつっこんでくる以前はそうであったように、ヘラスと帝国の両文明間に交流が戻るだろう。旅行として気軽に行き来できる日もくるかもしれない。

そうになったら、と口の端に微笑をきざむ。

好きになったファールス人たちにまた会える　いまのところイスファハーン公、ファリザード、それにゾバイダの三人だけでも。

(そうだ、ゾバイダ。イスファハーンに戻ったら、できた最初の自分の時間で真っ先に彼女に会いに行こう)

ペレウスは頬をゆるませた。

これまでのところ、かれとそのオリーブ色の肌の奴隷娘との関係には、なんら進展はみられない。

サー・ウィリアムとの剣術修行があった期間は、正直なところそちらが楽しくてたまらず、興味と体力のほとんどを修行にそそぎこんでいた。日暮れて屋敷に戻るころにはへとへとであり、ゾバイダと顔を合わせる頻度は低下して、たまに会うときも語学を教えあうだけで終始した。

ファリザードの子どもっぼさを笑うかれ自身も、この方面ではまだまだ幼いのだった。

だがサー・ウィリアムはもうおらず、そうなるとかれの興味は武術から恋に戻ってくる。久々に彼女のとなりに腰かけて談笑したいな　と、ペレウスはあの癒される時間を懐かしんだ。新しい武術の師範はそのうち探すとして、それまではゾバイダと距離をつめることを考えていてもいいだろう。

(いまはゾバイダにとってぼくは「ちょっと親しくしている異国人

の賓客」くらいにしか認識されていないだろうな。よくて弟のような子というくらいか。

でも、ぼくはゾバイダの主であるファリザードと仲良くなったことだし、ファールス語ができることももう隠していない。これからはこそこそ会う必要はないんだ)

セレウコスとその取り巻きのやつらが冷やかしくくるかもしれないが、いまさらかれらを相手にするつもりはペレウスにはなかった。以前は復讐にこだわっていたものだが、かれは砂漠で本物の悪党どもの悪行に接したあとだった。それに比べれば、受けたいじめなどどうしようもなく小さくならぬことにすら思える。セレウコス本人への意趣返しは忘れたわけではないが、そんなことはほかの私事の後でいい。

「きみの主とぼくとは友達になったよ、とゾバイダにいつてみよう。砂漠にいるうちになにがあったのかと驚かれそうだなあ」

想像するだけで愉快だった。

胸のうちは温かかった　だが、ふと、ぶるりと震えが水面に横たわる体に走った。

(そろそろ体が冷えてきたし上がるかな)

ペレウスは洗ってある服をつかみ「もうそっちに行っていていい、ファリザード？」と声をあげた。

返事はなかった。

さらに二度聞いてみて、なんの声も返ってこないことにペレウスは怪訝におもった。ついで、不安が胸に兆した。

(なにかあったのか?)

立ち泳ぎで、彼女のいる岸边付近がみえる位置まで移動する。

ふくらはぎまでしかない浅場にせりだした岩に、ファリザードが腰かけているのがみえた。上体をかがめて腕で腹を抱き、彼女は微動だにしていない。

ペレウスは背筋が冷えるのを感じた。ファリザードの様子は妙だ具合が急に悪くなりでもしたのだろうか。

彼女が裸であるがゆえに刹那のあいだ迷ったが、ペレウスはけっきよく接近することにした。首を振ってくせのある黒髪から水をはねとばし、歩いて近寄っていく。服は岸に放って、声をかけた。

「ファリザード、どうした！？ どこか」

ファリザードに顔を向けられ、ペレウスは言葉を止めた。

かれの知らなかったファリザードがそこにいた。震えて乱れた呼吸、哀切的に潤んだ瞳、息づいて熱を帯びた肌。それまでかれが知っていると思いきんでいた「子供」はどこにもいなかった。

彼女の泣き出しそうな表情にもかかわらず、少年がそこに感じたのは、おぼろめくような妖しい艶めかしさだった。

「おまえの、せい、だ……」

おまえがいなければ、子宮錠の呪印が浮くのはもつと後になっていたのに……」

ファリザードが懊悩にじむ声でかれをなじる。なにをいわれているのか理解はできなかったが、ペレウスはなにもいえなかった。

「わたし、これで、赤子を宿せる体になってしまった……大人にな

「つちやっただじやないかあ……」

わななく身を抱く彼女の腕のあいだ　その下腹に、赤い紋様が
文身いれずみのように浮いているのがかいま見えた。

ペレウスは反射的に目をそらした。

けれど、ファリザードのほう体が起こす気配があった。水音が
ぱちやりとかれのほうに一歩をふみだす。また一歩。

「ペレウス……わたしの初めて、人族相手に浮いちゃった……おま
えがあんなに、わたしに触ったから……あんなにぎゅってするから
……」

心細いのか動転しきっているのか、ペレウスのせいといいながら、
足取りおぼつかなげに彼女は近づいてこようとす。声にはさすが
ような響きがあった。

ペレウスは後じさりながら心中でうめいた。

言葉の端々から察するに、あの紋様がはじめて浮いたというのは、
人族でいう初潮が来たようなものなのかもしれない　が、それが
わかったところで「ではどうすればいいか」など、かれにわかるわ
けがない。わかっているのはかれは腰布一枚で彼女は全裸というこ
とである。

じりじり後ろに下がりつつ、手をつきだしてかれは制止をかけた。

「落ち着いて。ま、まず止まって」

ファリザードがいわれたとおり立ち止まったのち、身を抱いて「
う……う」と、違和感をけんめいに押し殺すうめきを漏らした。や
むなくペレウスは顔を向けた。

「いったいどうしたの？　痛い？」

そう訊いてまともに彼女をみたペレウスの目に今度こそはつきり、彼女の下の腹の紋様がとびこんできた。

六芒星だった　　ファリザードの縦長のへその下から恥丘にかけて、魔方陣じみた六芒の星が鮮やかに浮きあがっていた。それは血の紅色をしてうっすらと光を放っていた。

（これがラヘム＝コフル？　あれ……でもこの星のような形、どこかで）

記憶をさぐるほうに集中してこれ以上動揺すまいとしたペレウスだったが、答えるファリザードが努力を無にした。

「痛くは、ないんだ……でも、胸の奥もおなかの奥も、ぎゅうつと締めつけられてるみたい……」

少女は、耐えるように目を閉じてぶるりと腰をよじった。彼女は隠すというより押さえこむ感じで腰の前に手をあて、無意識に両ひざをすりあわせた。濡れた全身が茹でられたように色づいて、葉漏りの光にまだら模様となっていた。芳気たちのぼる裸身が切なげにあえぐたび、ほっそりと優美な稜線を水滴がいくつも伝い落ち、ふくらみかけの胸の谷間やなめらかな太ももの上で宝石のようにきらめいた。

思わずごくりと固唾を飲んだあとで、ペレウスは愕然とした。自分が見入ってしまったことに気づいたのだ。

（そんなはずない、これはファリザードだぞ。ぼくはこいつの裸や薄着姿なんか見慣れている）

男勝りで、皮肉屋のくせに単純で、意外に泣き虫で、まるきり子

供の、「女の子」としてはぜんぜんかれの好みでないはずのジン族の友達。

（素肌をくつつけて体温を分かち合ったこともあるけど……そのときだって特にどうとも感じなかったじゃないか）

だが現に、はやく視線をそらせと理性が警鐘を鳴らしている。フアリザードの目覚めかけの危うい色香に、惹きこまれそうになっていた。

『薔薇の紋章がつかさどるのは、美、愛、複雑さだ』とつさに想起したのは、彼女に聞いたその言葉だった。ペレウスは息をつめた。ではこれがそうなのか。

十重二十重に重なる花卉が象徴する、いくつもの姿のそのひとつ。

（この子は信じられないほどきれいだ）と、ペレウスは認めなければならなかった。

結局、目を離せないまま立ち尽くすペレウスの前で、金の瞳がゆつくりと開き、茫洋とかれを見つめた。先ほどよりさらにもやを帯びた瞳が、蠱惑的にとろけていた。

「おねがい、ペレウス……わたしは……ちゃんとおまえが言うてくれたら、わたし、おまえとなら……」

盛大な水しぶきが上がった。

岸から飛びこんで乱入してきた馬の勢いに、驚いたフアリザードが「きゃ」と後ろに尻もちをつく。

妖しい雰囲気はその時点で霧散した。

黎明号はたてがみをふり乱し、浅場で足をふみならして水をはねとばしている。狂乱に近い有り様だった。

「な　なんだ？　どうした、黎明？」

ひざを立てて浅い水底に座りこみ、夢から醒めたようにばちばちとフアリザードがまばたきしている。

ようやくペレウスもぎくしゃくと首を回して、火が出そうな顔を彼女からそらすことができた　すでに、フアリザードが尻もちをついたはずみにいろいろと目に焼き付いてしまっていたが。

「あ……きゃあああ！？」

フアリザードが、いつペンに理性がもどってきた様子で悲鳴をあげた。彼女はものすごい勢いで前を隠し、がばつと足を閉じた。

「みた！？　みたなっ！？」

ほとんど泣き声の詰問をうけて、ペレウスはあさつての方を向いたまま怒鳴りかえした。

「偶然だっ！　ぼくが意図したわけじゃない！」

「嘘でもみてないって言え　！」

ふたりとも羞恥が沸騰して、目を回すほどに混乱している。いつのまにかフアリザードの下腹からは、あの赤い六芒星が消えていた。ぎゃあぎゃああと騒ぎ、さっきの淫靡な情緒は微塵も残していない。

黎明号が、どちらにもいませんぐ黙りなさいとばかりに息の荒い鼻で小突いてきた。

尋常でないその馬の様子に、肩を押されてよろめいたペレウスは

げげんに思った。同じことをフアリザードも感づいたようで、彼女は洗っていた服を引き寄せ「何があったの、黎明？」といいながら水中で素早く身に着けはじめた。同時に耳をぴんと立て、鼻をくんと鳴らす。

その顔色が変わった。

緊迫した表情で、ズボンだけ穿いた彼女は岸に上がり……ぼたぼた水を垂らしながら、忍びやかに身をそばめて大きな羊歯したの陰に伏せた。葉を慎重に分けて、黎明号の走ってきた方角を見る。

それきり、彼女は身じろぎもしくなつた。

声をかけることもできず、ペレウスはなるべく半裸の彼女の姿を気にしないようにしながら、みずからも上陸してそのそばに這いつた。

その光景をみたとき、フアリザードが動かないわけも理解した動けなかつたのだ。

酸鼻な饗宴がくりひろげられていた。

離れた木の下につないでいたらくだが、金色の獣の群れにとりまかれて倒れている。悲鳴すら漏らせないほどのどを噛み絞られていた。全ての脚とこぶと尾に、金色の獣が一頭ずつとりついていて、押さえこみながら牙を肉に食いこませていた。らくだの腹には三頭がむらがり、柔らかい皮膚を裂こうとしていた。

虫の息のらくだの腹がとうとう食い破られると、うるうる周りを歩いていたほかの数頭も、争うように傷口をめがけて鼻先をつつこんだ。

とつくにこちらに気づいていたのか、血をすすっていた一頭の牝が顔をあげてペレウスたちを無感動に見つめた。赤い粘液にべとつく鼻面、むきだされる牙

だが目先の獲物にとりあえず専心することにしたらしく、その牝は仲間とともにらくだの腸を引き出しにかかった。

「獅子シールの群れだ」

慄然とつぶやくファリザードの表情からは血の気がすっかり失せていた。自分の顔もそうであろうことを、ペレウスは疑わなかった。

23・獅子の峠（前書き）

ペレウス、獅子満ちる谷間にて腹をくくり
「理にかなった道」を選ぶこと

23・獅子の峠で

「わたしの誤算だ。わたしは大ばかだ。

獅子シールの泉のある道を避けただけで獣については安心し、あとは賊のことしか心配しなかった」

ペレウスを自分の後ろに乗せ、岩だらけの谷間に黎明号を走らせるファリザードは、ずっとこの調子でみずからを責めていた。

「賊どもは、獅子の泉のほうでわたしたちを探したに違いない。すみかを荒らされた獅子たちはそれでこっちに來たんだ」

「ライオンたちは、人間がいなくなるまで獅子の泉から一時退散するだけという話じゃなかったのか？」

ペレウスの疑問　彼女をなじる意図でいったわけではなかったが、ファリザードは悔いても及ばぬとばかりの苦渋にまみれた声で答えた。

「……あの賊のやり方だ、ペレウス。泉に塩をまいて妖しい力の出口にしていたろう。」

きつと獅子の泉でもそれをしたんだ。飲めないオアシスには獣は寄りつかない。ほかの泉へと移動するんだ。

そうなることに考えが至るべきだったのに！　においに敏感ならくだに、もっと周辺をかぎまわらせておけば……」

「考えたって、この場所を通るほかにどうしようもなかっただろ。地形的にさっきの泉は迂回できなかつたんだから」

ペレウスは彼女をなだめた。

谷の両側には、さながら両翼のように山脈がそびえている。赤い土と大岩ばかりの不毛の山地であり、本格的に迂回しようとするれば日数がかかるうえ、いまは賊がいるであろう。獅子の泉にまで近づいてしまつという。また、水なしで山地を越えようとするのがいかに愚行かはいつまでもない。泉のあるこの峠道しか選べなかつたのだ。

「いまは手綱に集中しなよ。黎明が足に怪我でもして動けなくなつたら困る」

山間にひとすじつけられた峠道といったほうがいいこの谷間の道は、曲がりくねって岩が多く、まちがつても歩きやすい道ではない。そんなところでふたり乗りの馬を走らせるファリザードの馬術はたいしたものだ、限界はある。ゆるやかな勾配とはいえ、足元の荒れた坂道をかけのぼる黎明号の息は徐々に上がりつつあつた。

まだ下り坂にもなっていないのに荒い馬の呼吸に、懸念と胸の痛みがつのつた。

(ぼくを乗せていることが黎明の負担になっている。)

ぼくの体重は、ジン族のファリザードより倍以上も重いはずだ)

そのことをなるべく意識すまいとしながらも、ペレウスはファリザードに提案した。

「馬を壊してしまつては元も子もない。すこし速度を落としてはどうだろう」

が、ファリザードは「いまは無理をさせても、一刻もやくこの谷間を抜けなきゃだめだ」ときつぱりいった。

「獅子の群れがいったいどのくらいこの谷に逃げてきたのか予想もつかない。らくだを喰い殺したあの群れだけならいいが、あれ以上いたらまずい。」

ぐずぐずしていれば日が落ちる。その前になんとしても峠を出なければ……

移動してきたばかりの獅子たちが、白昼から狩りを行うほど飢えているなら、夜にはもっとひどくなる！」

夜 本格的な狩りの時間。

ペレウスも獅子の習性のある程度知ってはいた。古代にはヘラスにも獅子が生息していたため、文献が残っているのだ。少年はかつて、生まれ育ったミュケナイの王宮で、百獣の王についての記述を目を輝かせて読みふけたのである。幼いころあこがれていた動物なのだった。

その野生の獅子に今日、邂逅をはたしたわけだが、自分が狩られかねない状況では童心にかえるところではない。

（そういえば、たしか文献には「同じ群れをつくる獣でも、犬や狼とライオンでは好む狩りの手法が違う」と書いていたような）

狼は何日かけても執拗に相手を追いつめるやり方をすることが多いが、獅子は……

「ファリザード、大岩や地面のくぼみや頭上にももののあるところにはなるべく近寄らないで」

注意をつながしてから、ペレウスは馬鹿なことをいったと気がついた。ところによっては幅が四ガズもない細い谷だ。危険な場所を避けようと思っただけ避けられるものではない。

フアリザードがかれをちらとふりむいた。

「獅子がひそんでいるかもしれないから警戒しろといいたいのだから？ あいつらは猫と同じように身を伏せて獲物に忍び寄るから。でもこんな道では」

そのあとに彼女が続けたかった言葉はペレウスが気がついたことと同じであつたらう。

こんな狭い道では、どのみち避けられなかったのだ。

一頭の獅子がいきなり、前方に生えていた山ぶどうの木陰からとびだした。飛鳥の影のように低い姿勢で地を疾駆し、そいつは牙を剥いてみるまに距離をつめてきた。

フアリザードが息をのみ、恐懼にとらわれた黎明が急停止してさおだちになった。鞍の後ろに乗っていたペレウスはぐらりと揺れて身が浮くのを感じた……宙に投げだされていた。

「ペレウス！」

自分の名を呼ぶ彼女の叫びがいやに明瞭に聞こえた瞬間、肩から大地にたたきつけられた。

サー・ウィリアムに投げられた肉体の記憶がとつさに受身を取らせ、さいわいにして頭や腰を強く打つことはなかった。が、体の下になった右手の小指と薬指に激痛が走った。

（起きなきゃ）

痛がっている暇はないと身を起こしたとき、獅子がかれへとおどりかかってきた。

だが爪がペレウスにとどく寸前に、その獅子の延髄を飛電のごとく走った矢がづらぬいた。声もあげず兎のようにとびはね、地面に落ちたときには獅子は絶命している。

まばたきのうちに手綱をてばなして弓へと持ち替え、フアリザードが放ったのだった。

あざやかな弓術を示しながら、彼女の呼吸は動揺によって黎明と同じくらいに乱れていた。肌にとりと冷や汗をかきながら、彼女は早口にうながした。

「はやく乗って！」

いわれるまま鞍に手を置こうとして、再度指に走った痛みにもペレウスは思わず「あっ」と声をあげた。馬に乗りあがるのに失敗し、反射的に痛む指をつかむ。

愕然とした顔になったフアリザードがたずねてくる。

「手が痛むのか？ まさか骨が？」

ペレウスはじんじん火がついたように痛む指をみつめた。胸に引け目と情けなさがこみあげた。

（なんてことだ、こんなときに手負いになってしまった。この右手、刀を全力で振るえるだろうか。）

獅子がそばに来たら七彩をとって斬りつけるくらいが、ぼくのできることだと思いだめていたのに（

せめてぼくの得意な左手使いの円盾があれば。……いや、盾の重さのぶんだけ黎明が疲れてしまうか、とそのような思考をぐるぐる脳裏にめぐらせながら、ペレウスはフアリザードに答えた。

「突き指だ、骨は折れてないと思う　まだいる！」

岩角を蹴り、断崖を跳躍しながら、一頭の獅子がフアリザードの後ろの崖をかけおりてきていた。

かれの背後の崖からも一頭の咆哮がせまり、ペレウスは総毛立った。(はさみうちされた)と頭に浮かんだ。

フアリザードは、こんどはあわてなかった。猫じみた手の速さで彼女は矢をつがえた弓を上げるやペレウスの背後に放った。

ついで吊り革で背負った矢筒から抜く手もみせず矢を抜く　つぎの一撃がすさまじかった。

彼女は馬首をめぐるらせるのではなく、自分の腰を柔軟にねじって、完全な真後ろへと射撃を発射したのだ。黎明の背後に迫っていた雄獅子の赤い口に矢が吸いこまれた。

苦痛の猛りをあげるとびはね、転がり、獅子はのど深く刺さった矢の矢羽を前足でおさえて抜こうともがいた。それから徐々に動きを弱めていった。

ペレウスは肩ごしに自分の背後をみた。急所を一撃で射ぬかれた牝の獅子が、力の抜けた体を崖のなかばに横たえてずるずる滑り落ちてきていた。

(すごい。戦場ではヘラス・ヴァンダル連合軍は、さんざん帝国の騎馬弓術に苦しめられたというけど……)

ことに真後ろへ放った一撃は、“ファールス人の背面騎射”として名高い秘技であろう。

ペレウスが落馬していたのはこうなるとよかった。あの技は後ろ

に誰かがいては使えなかっただろうから。

そこまで考えたとき、ペレウスはうすうすわかっていたことをはつきり悟った。

（ぼくは邪魔になるだけだ）

弓術、馬術、刀術、すべてファリザードのほうがかれよりずっと巧者である。

（それなら……）

下馬したファリザードが、七彩を抜いて獅子三頭にとどめをさして回っていた。矢はちょうど三本しかなかったのである。

雄獅子ののどに手をつつこんで最後の矢を回収すると、彼女はペレウスへむけて手短にいった。

「鞍にのぼるんだ。わたしが下から押しあげるから」

「いや、いい」

ペレウスは彼女に背をむけ、獅子のとびでてきた山ぶどうの木へと近寄った。それは歳経た大木で、こずえは高く、枝が幾本も張りだしていた。

（やるべきことはこれだ）

かれは枝に手をかけ、息を吸ってぐつと力をこめ、身を引き上げた。足を太い枝にかけてつぎの枝に手をのばす。

右手の薬指と小指が猛烈に痛んだ……が、手をのばすたびかならず訪れるとわかつている痛覚を覚悟するなら、右手も七割程度の力

を使えるようであった。

「なんだ？ ペレウス、なにをやってる？」

とまどいの声を背に、脂汗をにじませてじりじり上がっていった。指は腫れはじめていたが、ペレウスは奥歯が砕けそうなほどかみしめて耐えた。

とうとう体を木のてっぺん近くへとおしあげたとき、ファリザードの心細げな声が下から届いた。

「高いところからみたって地形が複雑だから、獅子がいるかどうかはつきりわからないと思うぞ……怪我した手では危ないから降りてこい」

息を切らせながらペレウスは葉のあいだから顔をだし、おろおろしている彼女を、笑いもせず感慨をこめてみおろした。この子のこんな表情、前には決してみられなかったな、と思った。

「ぼくは残る」

告げると、ファリザードの瞳が大きくみひらかれた。かれのいった意味をはかりかねるように、彼女は「なんだって？」といぶかしげな声を出した。ペレウスは手早く説明した。

「ぼくがいなければ黎明の負担は軽くなる。きみはいそいで峠を走りぬける。そのあと、村から助けをよこしてくれ」

「ばか！」かれの真意を理解したとたん、激高するようにファリザードは叫んだ。「ふざけてる場合か！ 下りてこいつ、はやく後ろに乗れ！」

主の動転が伝わったように、黎明が足踏みをつづけていた。もの狂おしげにかつかつと馬蹄が鳴っていた。

「ふざけてなどいないよ」「噛んで含めるようにペレウスはしっかりといい切った。

「馬術弓術に長けているのも、道を知っているのもきみだ。ここから逃げるとき、ぼくがいなきゃならない必要はどう考えてもない」

「必要！？ そんなことどうだって……！」

「ぼくはジン族のきみよりずっと重い。無理にふたり乗りでいけば、さつきみたいに黎明の動きが鈍る。獣の襲撃があつた場合に機敏に対応できず、もろとも死ぬ確率が高くなるだけだ。

きみと黎明がこの峠を突破し、ぼくは助けをこの樹上で待つ。そのほうが合理的だ」

だが、彼女は納得せず声を上ずらせた。

「ここから村まで本来なら二日の道のりだぞ！ 馬を飛ばしに飛ばしても丸一日かかる、戻ってくるまで往復で二日だ！ そのあいだこの谷間にいるつもりか！」ついで、約束をたがえる不実を責める台詞。「昨夜、わたしとおまえとでイスファハーンに帰ろうって話したじゃないか！」

「……帰れるよ。あるとき、きみはこうもいったろ。『少しでも、生の可能性が高いほうに賭ける』って。

このやり方が、ふたりで生き延びられる可能性がもっとも高いんだよ、フェアザード。

こっちの心配は無用だ。きみがやらなきゃならない峠の突破に
くれば、何日か木の上で待つほうがずっと簡単なはずだ。
行くんだ、ほら」

こんどこそ、ペレウスはファリザードが納得しただろうと思った。
彼女が黎明に乗ってかけ出すのを見送るつもりで待つ。

ファリザードは 動くことなくとどまっていた。その瞳は琥珀
の鏡のように呆然とかれを見つめていた。失うことへの恐怖がそこ
にありありと浮かんでいた。

怒鳴り声から一転し、小琴の弦が細かく震えるようなかほそい声
で、彼女は拒んだ。

「だめ……いやだ」

「……行けったら」

「こんなのはいやだ……いっしょに行こうよ、ペレウス」

手を差し伸べてくる彼女に、業を煮やしてペレウスは怒鳴った。

「行けよ、早く！」

……
……
……

あのわからずやめ、とペレウスは木の上で腹を立てていた。

鞘におさまった ハフト・ラング 七彩 がその胸に抱えられている。一度登って

きたファリザードが、その名刀をかれにわたしていったのだ。木の
そばを離れようとしないう彼女を怒鳴りつけ、なだめすかし、情理を

尽くしてどうにか説き伏せた直後のことだった。

（刀があれば万一ライオンに接近されたとき役立つだろうに。弓矢は三本しかなかったはずだろ）

だが受け取らざるを得なかった。そうしなければ先に行かないと彼女がごねたのだ。

このどうしようもない強情っ張り、と途中からファリザードは泣いていた。

（強情なのはきみじゃないか。

わかっているのか。きみが逃げられなければ、どっちみちふたりとも死ぬんだぞ）

内心でひとしきり彼女を責めたのち、ペレウスは蒼白な顔をうつむけた。

「……ファリザードに文句をいえた義理じゃないんだけどな、ほんとうは」

ペレウスは彼女に嘘をついたのだから。

かれが優先したのは、最大限に追求したのは、「ふたりで生き延びる」ことではない。

ファリザードが生き延びることだ。

七彩の鞘をはらい、ペレウスは右手の指の腫れた箇所を刃を当ててかるく引いた。

「痛っ……」

ぼたぼたと血のしたたる指をだらんと下げる。血は葉に落ち、葉から木の根元に落ちていった。

（血のおいをただよわせていよう。そうすれば、ファリザードを追いかけるかもしれない。獅子をすこしでもこの場にとどめられるはずだ）

それこそが残るほんとうの意味だった。

「こつすることが正解なんだ、ヘラスのためには」

ファリザードを死なせるわけにはいかない。

ファールス帝国内における和平派の重鎮イスファハーン公の、その最愛の娘。彼女を失えば、イスファハーン公は悲嘆にくれるだろう。ことによると和平交渉を進める意気を失うかもしれない。

だがもしぼくが死んでもファリザードさえ生き延びていたならば、イスファハーン公はきつと負い目を感じ、最後までヘラスのために尽力してくれるだろう。

（ぼくの命はたかだかひとつの命というだけだ、もし失われてもそれほど影響はない。父上だってまだ若いんだから、跡継ぎはいくらでも作れる。）

けれどファリザードの命は、ヘラスとファールス帝国の平和に関わるんだ）

「だからこれでよかったんだ、後悔なんかするものか」

ぶつぶつとつぶやいたのち、ペレウスは細いあごを強く食いしばった。そうでもしなければ、ひっきりなしの震えはどんどん強くな

るばかりだった。

ちらと横目でみおろす。

眼下の地面で、やってきた獅子が二頭ばかり、首をかしげてかれをじっとみあげていた。好奇心の強そうな、たてがみも生えそろわないいまだ若い雄二頭で、尻尾の先がゆるやかに左右にうねっていた。

.....

.....

.....

強い好奇心。群れる習性。

骨でも砕く頑丈なあご。固い木の皮に深々とひっかき傷を残す爪。四ガズメトルもの信じがたい跳躍能力。

夜になつているとはいえ月が煌々と明るかったため、ペレウスはすべてを間近でつぶさにみることができた。

とりわけかれの神経を圧迫するのは、その獣の木登りの能力だった。体重が重いため山猫や豹には及ばないが、人よりはうまいのだ。

「寄るな」

なるべく高い枝に横たわり、右腕をのばして、七彩の切っ先を可能なかぎり下に向ける。みしみし枝をたわませながら登ってきた一頭の鼻先に、それを突きつけた。

その牝の獅子は獐猛なうなりをあげ、前足の一本をあげて七彩を払おうとした。ペレウスにとって幸いにも彼女が叩いたのは刃のほうであったため、鋭利きわまりないダマスカス鋼は獣の足裏を傷つけることになった。

牝獅子が怒りと苦痛の声をあげてとびおりたのちも、獣たちは木

の下から去る様子をまったくみせず、底光りする瞳をペレウスに向けてそこらを徘徊している。その数はいまや二十頭にせまるかと思われた。

泉かららくだの残骸の一部をくわえてきたのか、闇のどこから骨をぼりぼりとかじる音が聞こえる。いつそ目も耳もふさいでしまいたいとペレウスは思った。

（くそ、ライオンが木に登るのがうまいなんて文献には書いてなかった。七彩をファリザードが残してくれていなければとうに食い殺されていたな）

イスファハーン公の屋敷でも、広大な庭で獅子を放し飼いにしていた。あの獅子が木に登るところをみたことはないが、庭に姿が見えないとき、ひよつとしたら樹上で憩っていたのかもしれない。

（あれは赤子のころから飼い馴らされたうえ去勢されていた。いわば大きな飼い猫でしかなかった。ここにいるのがあのぶくぶく太った獅子なら安心していられたのに）

眼下の獅子たちは、生粋の野生だった。あばらの浮き出た体には、絞りこまれた筋肉が蔵されている。

犬や狼のように木の下で吠え立てるのではなく、沈黙してうろつきまわる。こちらに関心がないように寝そべってあくびなどしていながら、唐突に身を起こすや跳躍や木登りで急迫してくる。気まぐれで行動の予測がつかず、片時も気を抜くことができなかった。

（まだ一夜目……）

恐怖と疲弊が精神力をすりつぶそうとしてくる。ペレウスは憔悴のあらわれた表情をひきしめるように鼻にしわをよせて獅子たちを

にらんだ。

せいっぱい心を奮い立たせる。

（だいじょうぶだ、この枝はあいつらの跳躍が届かない程度に高い。よじのぼってきたら刀を突きつけてやる。

眠らず追い払いつつければいいだけだ）

助けが来るまであと二日二晩。こうして樹上で耐えていればいい。

ファリザードが無事に峠を抜けていたとしての話だが。

（それは考えるな）

最悪の事態　彼女がとうに亡き者となっている場合、いつまで耐えようが無駄になる。

ペレウス自身もかならず獅子の食卓に引き出されるだろう。

みずからの死に様を連想してしまふ。

獅子が大きな獲物を殺すときは、のどに噛みつき、気管を圧迫して窒息死させる。しかし、しばしば四肢の骨を噛み砕いて自由を奪っただけで、獲物にとどめを刺さずむさぼり始めることもあるという。獅子は好物である腸から食べることが多いため、その場合、獲物の苦しみは長時間にわたるのだとペレウスは書物で知っていた。

（考えるなつたら。余計な知識を思いだすな。あのぼろぼろの書物の著者、こんな悪趣味な雑学より、ライオンが木に登るほうを記しておいてくれればよかったのに）

幼年時代の思い出がつまったミュケナイ王宮の書庫　かびくさい空気の記憶に触発されて、ペレウスは故国のことを強烈に思った。

「ヘラスの神々、助けてください」

意識せず、怯えた祈りが口をついて出ていた。
なるほど、祈りはこういうときにしぜんと出るのかと、ペレウスは苦い笑みを浮かべた。

（そういえば、願えば神々のだれかが応えてくれる「かもしれない」といついわく付きの神器を、いつしよに来た少年使節のだれかが持っていたな。持たされた家宝とかで）

ペレウスはそんなことを思いだした。たしか仇敵同然である民主政都市の少年のだれかだったと思うけれど……

（それがあれば役立ったかも。イスファハーンに戻ったら念のため調べておこう。賊だのライオンの群れのかたまりだの、つぎはこんな窮地はごめんだぞ）

過酷な現実ばかりを見つめていては発狂しそうになる。ペレウスは未来の予定を考えはじめた。現実逃避というより、生きなければという気力をふるいたたせるためである。

だが、木がみしりと揺れた。

獣の体臭が鼻に、息づかいが耳に届く。獅子という現実がまたも近づいてくる。それもこんどは、とうとう複数で登ってきたようだった。

「怖くなんてないぞ。ぼくの持つ爪はおまえらの爪より鋭くて長いんだから」

ペレウスは七彩を右手でにぎりしめ、下の枝にあらわれた捕食者の顔をみつめて吐き捨てた。

「おまえたちなんかちよつと大きな野良猫というだけだ」

「いや、かれは七彩を獅子の脳天めがけて突き下ろした。避けられた。」

真上からの刺突を首をひねって最小動作でかわすや、その「大きな猫」は七彩の刀身をくわえたのだ。はっとしてペレウスは獅子の口から刀を抜こうとした。が、傷をおった人の子の右手では、獣のあごの力に抗しえなかった。

七彩はやすやすとペレウスの手からもぎとられ、獅子が口をはなすと木の下へと落ちていった。麻痺したように動けなくなったペレウスは、重低音の複数のうなり声をこれまでになく近くに聞いた。

（これから死ぬのか）

そう思ったときだった。

獅子たちが一様に耳をそばだて、さつと首をめぐらせた。谷間の道の一方へと。

ペレウスも気づいた。

（だれかが大勢で接近してくる）

それがわかったのは、樹上からみおろす谷間の道に、松明のものらしき明かりがいくつも見えてきたからである。

人の足ではありえない速度からして、間違いなく馬に乗っていると思われた。

あっさりとペレウスのそばの枝から獅子の気配が消えた。

みると、群れたむろつていた獅子の大半がすでに姿を消していた。

やがてペレウスの耳に、無数の馬蹄が固い地を打つ音がとどいて

きた。

そしてついに、数人ごとに松明をかかげた騎馬の一団が姿をみせた。

名残惜しげにというよりは好奇心からその場にとどまっていた数頭の獅子がいたが、かれらから矢を射かけられてぱつと崖を駆け上がっていく。

「それでいい。よし、それでいいんだ」

最後の一頭を見送って、安堵のあまり真顔で変なことを口走る。体の力が抜けてずり落ちかけて、あわててペレウスは枝にしがみついた。せつかく食い殺されずにすんだのに墜死するなどたまったものではない。

獅子たちが追いちらされて消えると同時に、騎馬の一群のなかからだれよりも小柄な騎影が飛びでてきた。その一騎はぶどうの木の下にかけよってきて叫んだ。

「ペレウス、無事か!？」

(ファリザードだ)

気の遠くなるような安堵が再度、身をつつんだ。(ずいぶん助けが早いな)というささやかな疑問も感じたが、いまはどうでもよかった。

地面に降りるや、そこにファリザードがマントをひるがえしながら正面から抱きついてきた。体重は軽いが勢いがついている。ペレウスはよろけてへたへたと尻もちをついた。かれの胸に顔を埋める彼女の温かさと震えが伝わってきて、それがふたりながらに命を捨てたことを実感させた。

「しばらくは町中の猫もみたくないよ、ファリザード……」

抱擁されながらペレウスはげっそりやつれた顔で息を吐き、それから、騎馬の一群に目を向けた。

ファールス人だと最初は思った。じっさい、砂よけの布を体に巻きつけたその格好は、ファールス風の砂漠渡りの衣装と変りないようにみえた。

けれど細部に微妙な違和感があった。ファールス風だと顔にも布を巻きつけることが多いが、かれらは顔をむき出しにしており、髪を一本の太い三つ編みにして後ろに垂らしていた。

先頭にいた者がひらりと馬から下りて、大股に歩み寄ってきた。顔が月明かりにはつきりと照らされる。

隻眼の、老境にさしかかった人族の女だった。とはいえ背筋はぴんと伸び、身ごなしは若者のごとく軽やかであったが。

「その嬢ちゃんがあたしらの夜営を見つけたのは運がよかったね、獅子の腹におさまりそこねた坊や」

白一色の男服。左目には眼帯。

ほとんど白髪と化した髪は男たちとおなじく編みこんで後ろに垂らしている。いくつもの皺の刻まれた顔。

「ま、狭気があるのは認めるよ。蛮勇ともいうけどね」その老女は歯をむきだして唇の両端を大きくつりあげ、どこか牝獅子を思わせる笑みをうかべた。

坊や呼ばわりで大いにペレウスは気分を害していたが、ともかく相手は命の恩人である。かれはくっついて離れないファリザードの背を軽く叩いてうながした。

「この人たちはだれなのか、紹介してくれないか」

が、ファリザードが身を離すまえに、ペレウスの言葉を聞きつけた隻眼の老女は自分から名乗った。

「あたしらは白羊族^{アク・コユンル}、騎馬の部族さ。

あたしはユルドウズ、女だけど族長をやってる。それでこっちが、
んん……まあ、連れ合いのクタルムシュ」

老女が、背後にいる背の高い男を指ししめす。ほかの者とちがって三つ編みの髪型ではなく、ターバンを頭に巻いているその男は、ペレウスたちに微笑んだ。

ずいぶん若いんだな、とペレウスはその男の整った顔をみて何気なく思い、目を丸くしてよくよく見なおし、最後には完全にあつけにとられた。

クタルムシュというその男は、ジン族の風貌をもっていた。

「じ……ジン族と人族のご夫婦ですか？」

「正式な結婚はしなかったけどね」騎馬部族を背後にしたがえた老女は肩をすくめた。

24・ウタルムシュとユルドウス（前書き）

ジンと人の夫婦、ファリザードの護衛となり
ペレウス、魔法の理をかれらに聞かされること

24・クタルムシユとユルドウス

獅子の峠で助けられた直後、騎馬部族の野営地にペレウスとフアリザードは連れてこられた。

族長のものである大きめの移動式天幕に入り、床にじかに座らされる。らくだの乳のヨーグルトとレモン水という軽食を与えられる。隻眼の老女ユルドウスは、そこで経緯をペレウスにざっと説明したのである。

「あたしらは部族ぐるみで傭兵稼業をやっているのさ。」

この谷の出口近くで夜営してたらその嬢ちゃんが駆けこんできて、雇われたってわけだよ」

彼女の名乗りにも、ペレウスはうさんくさげに眉をひそめた。

「……傭兵？」その一言で警戒心が増大したのである。ジオルジロス率いる砂漠の賊たちもみずから傭兵と名乗っていたことを、かれは覚えていた。

隻眼の老女はペレウスの目つきに失笑した。

「あんたが傭兵ときいてなにを連想しているのかはわかるさ。じっさいひどいやつらが多いからね。」

だがあたしは白羊族アフ・コユルを、すぐ盗賊に化ける寄せ集めの狂犬どもと一緒にしてほしくないね。

あたしらは戦をしていないときは隊商の護衛をやったり、あたしら自身が隊商になることで口を糊しているよ」

「あ、すみません、これは失礼……」ペレウスは顔を赤くした。命の恩人相手にいましたがたの態度はない。かれはきちんとひざをついて向きなおった。

「お礼をいわせてください。ぼくはヘラスの都市ミュケナイのペレウスです」

「ああ、いやいや、お礼なんていいんだよ」

「そういうわけには」

「用心棒代十万ディーナールもらえるそうだからね。笑顔と弓矢はいくらでも提供するよ」

「なにい!?!」ペレウスは礼儀をかなぐり捨てて目を剥いた。十万ディーナールといえば、砂漠の賊がファリザードの身代金で要求したのと同じ額である。それはけっきょく油断させるための罠の一環だったのだが。

いずれにしろペレウスのなかで白羊族への不信任はたちまち急騰した。

「なんだってそんな額になっているんです!?!」

「その嬢ちゃんに値段交渉をもちかけたら『いくらだって払う』と快諾をいただいたんでね」

指さされたファリザードがなんとも微妙な顔になった。抗議したいが大きな声で主張ができないといったもどかしげな表情。彼女はごによごによと不満げにいつのりはじめた。

「あれは快諾したという状況ではないだろう。交渉している暇がなかったから、やむなくこっちは……」

「おうおう、助けてやったのに、口約束だからとばっくれる気満々かい。イスファハーオン公家で教える帝王学には信義という項目は含まれていないようだね」

「は、払わないとはいってないだろ!？」

ファリザードが思わずといった調子で叫んだ。

なんでこの子はときどきこんなにちよろいんだろう、とペレウスは横で頭痛を覚えた。だが、それまで黙っていたクタルムシュというジン族の男が苦笑とともに場に割って入ってきた。

「ユルドウズ、子供をあまりからかうものではない。

まさか本気でイスファハーオン公家から十万ディーナールをむしり取る気でもあるまい」

夫の言葉にユルドウズは静止し、真顔で「ん？」とフクロウのように首をかしげた。

笑顔でそれを無視したクタルムシュは、「ペレウス君だったかと少年へ話しかけてきた。

「……はい」

「その子は敵味方判然とせぬわれわれの夜営にとびこんできた。そしてユルドウズがはったりで出した金額を聞いてもためらいもせず、とにかく早かれと峠へわれわれをひっぱっていったのだよ。

だれのためだと思っかね？」

そのジンの物柔らかな視線は、しかしはつきりとあることを伝えてペレウスの目を射ぬいてきた。

はたと悟り、ペレウスは慙愧の念にとらわれた。

かれはファリザードへと向きなおり、その手をとった。突然の接触にびっくりしている彼女に確かめる。

「十万ディーナールの額を承諾したのはぼくのためだね」

「あ……う……し、しかたがなかったからな……」

うつむきながらそういった彼女に「ありがとう」と誠意をこめてかれは礼を告げようとした。

だが告げることはできなかった。

頬を染めてうつむいたファリザードが、かれの右手の傷に目を止めたのである。血のおいで獅子を誘うために樹上でみずからつけた傷を。

「刀で切った傷……」

そうつぶやいた彼女は無表情になっていた。ペレウスはぎくりとして手を引こうとしたが、今度は彼女がかれの手をつかんで離そうとしなかった。

「……ペレウス。自分でやっただろう、この傷」

ファリザードの声は不自然に平坦だったが、瞳の奥に感情の波が荒れていた。

「やっぱりわたしを逃がすために残ったんだな」

「違う。その傷は不注意で切ったんだ」考えるより先に嘘がペレウスの口について出ていた。だがその否定をかけらも信じない様子で、ファリザードはかれの右手を両手のひらで包むように握った。

それから柳眉をはねあげてペレウスをにらんできた。

「今度やったら、許さない」

「だから違つといつてるだろ……」

ペレウスは嘘を重ねたが、その声は尻すばみに小さくなっていった。

ひるみを覚えたのは、彼女の怒りの表情そのものではなく、その裏にあるものだった。

こちらをみつめる瞳、そこに溜まった涙、声の奥底にこもる哀切な懇願の響き　そこから伝わる真摯な情に気圧されたのである。

右手を大切なもののように胸前で抱かれているのが、なんともこそばゆい。

「互いに礼くらいいえばよかるうに……初々し……だねえ」

「しかたあるまい、ユルドウズ。こういうときは胸がいつぱいになつて……ものだ。わたしにも……のような覚えがある」

「なんだ、もしかしてあんた嬢ちゃんを昔の自分に重ね……のかい」

「同病相哀れんだら悪いかね？　おまえもなかなか……くれないやつだったしな」

「あたしや簡単に落とされてたまるかと肩肘はつてたから……気づいてもいなさそうな坊やといっしょにしないでくれ」

背後の夫婦がなにやらひそひそとささやき交わしている。

かれの耳にはところどころが聞こえずよくわからなかったが、フ

アリザードは真っ赤になってペレウスの手を離し、かれらへと怒鳴った。

「ふ、夫婦漫才はどこか別のところでやれ！」

「いやいや、あたしたちの天幕で雰囲気出しはじめたのはあんたらだよ、嬢ちゃん」

ユルドウズが平然と返す。ペレウスはとっさにいい返せず歯ぎしりしているファリザードの袖をひいた。

「ファリザード、ぼくが気づいてもいなさそうって聞こえたんだけど、何のことだろうか」

「気にする必要はない！ 何でもない！ それよりっ」

ぶんぶん首をふってファリザードが無理やり話題を軌道修正した。彼女は深呼吸し、いくぶんか冷静になった表情でユルドウズをみすえた。

「白羊族は傭兵だといったな。」

では、わたしの護衛としてあらためておまえたちを雇おう。わたしたちを無事にイスファハーンに送り届けてもらいたい」

五日後

砂塵をまきあげて平原を進む百騎ほどの一団があった。

そのなかにペレウスとファリザードは混じっていた。周囲の騎馬隊は、むろん白羊族である。

獅子の谷でかれらに助けられてより数日。目的地であった村にほんの三日逗留して心身を休めたのち、早期にイスファーンへと帰還することを決めたのである。

当初の計画では、村でじっくり隊商を待つか使いを出して護衛隊を編成するはずだった。砂漠の賊に備える必要があったためだが、白羊族の武力をひきつづき借りたことにより、問題は解消されたのである。

「ジンの魔法は大別すると二種に分かれる。肌の呪印によるものか、魔具によるものかだ」

馬上のクタラムシュの講釈に、かれと馬を並べたペレウスは一心に耳をかたむけている。

この数日で、ペレウスはクタラムシュとウルドズの夫婦に完全に信を置いていた。ことにクタラムシュには体術や役立つ知識を教わったことで、親しみと敬意を感じはじめている。かれはイスファーン公ムラードと同じく温和な性格のジンであるうえ、サー・ウイリアムに似て面倒見が良かった。

「まず肌への呪印を説明しよう。」

通常、それは生まれつきそなわっていて時が満ちれば浮かんでくるものだ。ただし浮かぶ時期や浮かぶ種類には個人差があり、けっして一様ではない。

とはいえ、種類についてはいくつかの定型がある。戦闘に役立つ呪印には“変化”^{へんげ}“剛力”^{じょうりき}“隠行”^{おんぎょう}などがあるな」

この新しい情報に、ペレウスはいたく惹きつけられた。

「剛力……ですか」

(たぶん、名のままの能力だな)

失った耳のあとを撫でる。

かれの左耳は 剣 ことホラーサーン公アーデイルの命令で、妖^{イフ}士イルバルスに引きちぎられたのだ。紙でも破りとするようなたやすさ^{ライト}まで。

あのとときの苦痛と屈辱を思いだし、ペレウスはわずかの間だけうつむいた。さいわいクタルムシュに不審に思われることはなく、かれの話は続いた。

「また、すべてのジンの女性の持つ呪印として子宮錠^{ラム・コラル}の存在がある。これは封印紋の一種といえる。

封印紋は、ジンが血をもちいて他者や器物へ刻むことができる呪印だ。能力や機能を封じる」

封印紋の話題になったとき、ペレウスと反対側でクタルムシュに並んでいるユルドウズがびたつと鼻歌をやめた。それだけでなく、近くにいたほかの白羊族の面々もある者は表情を消し、ある者はぶつと口中のアンズの種を吐き、それぞれがなんらかの反応を示した。それを怪訝におもったペレウスだったが、深く考えるまえにクタルムシュがたずねてきた。

「ところで、ファリザード殿からはこうしたことを聞いていなかったのかね？」

「それが、ファリザードもあまりくわしくは知らないようだ」

「悪かったな、役立たずで」黎明号にまたがって斜め前を闊歩していたファリザードがふりむき、むうつと膨れた。「父上はわたしを

赤ん坊扱いして、大人になって呪印が浮くころに教えてやるなんて
いつていたんだもの」

ペレウスはじろつと彼女に一瞥をくれた。

「いや、それだけじゃない。きみ、知っていることもぼくには隠し
ているだろう。」

肌への呪印で多少の知識はあったんだろ、子宮錠とやらのことは
知っていたんだから」

「だ、だからそれは、未婚の娘が話すことじゃないからと以前にい
つたろっ！」

いまにも黎明号を走らせて逃げ出しそうになったファリザードに、
ユルドウズが「変にいかかわしいものみたいがいいなさんな」と苦
笑いした。

「単になかなか身ごもらない効果があるっただけだろ。」

……ああ、ひよつとして、その効果のせいで他種族より子作りを
かなり頑張らなきゃならないことを恥ずかしかってんのかい」

ファリザードが逃げた。

騎馬部族の馬群にまぎれこもうとする彼女の背を見送ってユルド
ウズがけらけら笑う。その後ろで、呆れた視線を妻に注ぐクタルム
シュと、さすがに赤くなったペレウスが沈黙している。

ふたりの視線に気づいたユルドウズが、ごまかすようにペレウス
にむけてつけくわえた。

「ジン族が淫乱だと陰口たたかれるのはそついう事情があるからだ
そつでね」

「はあ、その、それではクタルムシユさん、魔具のほうについても教えてください」

ペレウスの督促に、クタルムシユはうなずいた。

「魔具のほうはダマスカス鋼が要となるのだ。通常の材質の器物には封印紋くらいしか刻めない。

だが、ダマスカス鋼であれば、魔術紋様を刻印することによって、特殊な機能を付与することができるのだ。

そうだな、なにか一例を」

「あつ……ひとつならずでに例を知っています」

ジオルジロスの使った“悪思の扉”のことを思いだし、ペレウスは青ざめた。「それは黒い玉で、空間をべつの空間とつなぐ力を持っていました」黒雲のようにあの恐怖がよみがえるのを感じながらかれはクタルムシユをみあげた。

「あの……聞いてください」

……

「ジオルジロスか、その名は知っている。あの邪教徒、まだ生きていたのか。とうに唯一神に仕えるジンに殺されたと思っていたのに」

詳細を聞いたクタルムシユが嫌悪感をこめて古老の名を吐き捨てた。ターバンの下の涼しげな目鼻立ちがしかめられる。

「災難だったな、あの性悪な古老に出会うとは。

よかるう、イスファハーンへの道中でもしジオルジロスの一党と出会ったら、わたしがあれに引導を渡そう」

あまりに簡単なそのいいように、ペレウスは頼もしさより先に危険の念を抱いてつい口にしていた。

「でも……あの賊どもは一筋縄ではいきません。ヴァンダル人の重騎兵とファールス人の軽騎兵が連携して攻撃してきました。お話しした“扉”の魔法だってあるし……
とにかく気をつけてください」

が、おなじく馬に乗った老女ユルドウズが、はんと鼻を鳴らした。

「かつては大陸に名をとどろかせていたうちの部族が、消滅寸前とはいえだいが舐められたものだねえ。

坊や、イスファハーン領の弱っちい兵とあたしらを同列に扱うんじゃない。

話を聞いてりゃその殺された兵たち、斥候の役目もまともにこなせてなかったんじゃないか。死んだのは半ば自業自得というもんだ」

「……ユルドウズ」

いつのまにかそばに戻ってきていたファリザード　イスファハーン公家の娘　が、短くとがめる声をだした。死んだ兵たちを悪くいわれたことで、彼女はきつく眉根を寄せている。

だが騎馬部族の女族長は、ファリザードの顔が険しくなったことを意に介さず、ずけずけとつづけた。

「おっと、ごめんよ嬢ちゃん。でもおたくの兵がなくなってなかったのは事実さ。」

通常は最低でも一ファルサング（約五キロメートル）は斥候が先行して念入りに周辺を調べるものさ。そこでもし異常が報告されれば隊を止めるのが常識だよ」

「この隊だって先を急ぐばかりで、そんなひんぱんに斥候を出しているようには見えないぞ」

「だから舐めすぎだつてのさ。現在は二人一組で六組十二人、進行しながら側面や後方にまで送り出して警戒させているよ」

ファリザードのいちゃもんをウルドウズは一蹴した。

「一定時間でふたりのうちひとりを交代させて、この本隊にいる予備と入れ代えている。」

そしてうちの連中は全員が斥候予備軍さ。岩や砂丘の陰をつたって、味方のあんたでさえ気付いてないくらいさりげなく、忍びやかに馬を進めることができる。敵がこちらの存在を知ってよほど警戒していないかぎり、接近を気づかれやしないさ。ましてやこっちが敵に奇襲をくらうことはありえない。

わかつたかい、白羊族より優れた軽騎兵なんて地上に存在しないよ。総勢五十名ばかりの賊なんて敵じゃないね」

豪語したウルドウズは、「それにね」といってジン族の夫をあこでしめした。

「クタルムシユが“じりやく隠行”をすでに本隊にかけてある。さきほどこの人が語っていた肌の呪印による力のひとつさ。」

上空の鳥でさえ、よほど間近に来ないかぎりあたしらには気づか

ないよ」

実感がわかないがそういうものなのかとペレウスは素直に感服したが、ファリザードは驚愕の面持ちになった。

「“隠行”の力を部隊丸ごとに及ぼしているだつて？

そんなことができるのか？ 父上の兵士にこっそり訊いたときは個人で使う魔法だと聞かされたぞ。せいぜい身の回りの数人を隠す程度の……」

「クタルムシユはこの能力がけたはずれに強いのだ。

隠行という域を超えて、“えんぺい掩蔽”の領域にまで昇華させたといわれるジンはこの人だけだよ」

「いや、待て。にわかには信じがたいんだけど。

そんなことができるならクタルムシユ卿は上帝の近衛隊にだって入れるはずだぞ」

「その近衛隊アミールの長だったのだ。それを大過なくつとめあげたのち、十七人の太守アミールのひとりに抜擢されたんだよ、この人は」

「うそ……」息をのんだファリザードに、ユルドウズは感情のはかりがたい平坦な声で答えた。

「太守として派遣された任地で醜聞を起こして、官職をなげうつて野に下ったけどね」

「醜聞？」横で聞いていたペレウスは、そこに立ち入るべきではないと思いつい訊いてしまっていた。

当のクタルムシユが明るく笑った。

「なに、人族の娘に求婚してしまったというだけのことさ」

「ふん、極めつけのばかな男だよ。二百年かけての地道な栄達を、それで棒に振りやがった」

ユルドウズの声にかすかに当時の苦衷の残滓がにじみでた。複雑な想いをそこに感じとって、ペレウスたちはしんとした。が、クタラムシユのどこまでも温かみのある笑い声がそこにかぶさってきた。

「わが伴侶はいまだに惜しんでくれるが、これほどわたしたちの心情が乖離している件はそうそうないのだよ。」

太守であったときのわたしが何度いいよってもユルドウズはつれない態度であった。それが、わたしが太守の地位を捨てたと告げた日のうちに求婚を受けてくれたのだ。

それで、そのときのわたしは踊り出す寸前だったのだが、ユルドウズときたら対照的に悲壮な顔でね」

噛み付くような勢いでユルドウズが突っこんだ。

「笑える要素がどこにある！？ あのと看浮かれてたのはあんたひとりだけだ。」

よく周囲の顔を思いたしな。うちの連中ですらどん引きしていただろ。そのうえ、怒り狂ったあんたの一族が攻めてきそうだったので、みんなあわてて遠くの地への逃げ支度にとりかっていただろうが」

「すまない。喜びのあまり周囲の顔はよく認識できていなかった。」

ともかく太守を捨てたことに対する痛恨の念は、もっと早く捨て

ておけばそれだけ早く結ばれていたのということだけだな。

しかし任地におもむかねばユルドウスに出会えなかったのだから、その意味で太守となったのは無駄ではなかった」

「へーえ。帝都の風観やら上帝のご尊顔やら、折にふれてあれだけ懐かしげにかつての勤務風景を語っていたくせに。

それでいながら失った栄光の日々に思い入れがないとでもいう気かい」

なにかの言葉を誘うようにふいとユルドウスがそっぽを向いた。クタルムシユが真面目な顔になって告げる。

「懐かしくはあるが戻りたいとは思っていない。

たしかに帝都バグダードの“大円城”の大広間において、上帝みずからの手で太守に任じられたときの喜びは大きかった。そのときはそれがわたしの生涯でもっとも晴れがましい日だと思えたよ。

ただしその喜びは、革の天幕のなかでおまえの夫の身分を手に入れた日に上書きされたのだよ」

かれの台詞をそばで聞かされるペレウスおよびファリザードは、さつきから熱い顔をうつむけ気味にしている。

照れ隠しなのかわりと本気の辟易なのか、うんざりした表情のユルドウスがふたりに向けてぼやいた。

「……あんたら、すっかり聞いたね？ この四十年、この馬鹿は毎日こういうこっぴざかしい調子だ。

口説かれるようになったところはそりやもう全身がむずかゆくて耐えきれなかったね。求婚に応じてやればこの齒の浮くような台詞が止むかと思っただが……けつきよく、こいつが恥を知る前にあたしのほうが慣れちまったよ」

「……」ちそつちま……」

ほかにいいようもなく、ふたりは小さな声でかるうじて答えた。

24・クタムシュとユルドウス（後書き）

村に滞在していたときの話が「EX2・手袋」として目次の下のほうにあります。

なるべく時系列どおりに読みたい方はそちらもどうぞ。

25 ジンの愛 上 (前書き)

ペレウス、ファリザードに呼び出され
遅まきながら彼女の気持ちに気づくこと

25 ジンの愛 上

「坊や。向こうで嬢ちゃんが呼んでいるよ」

ペレウスがユルドウズに告げられたのは夕方近く、馬群が大岩の陰で足をとめて休憩しているときのことだった。意図のつかめない種類の笑みを浮かべ、彼女はさらに付け加えた。

「見せたいものがあるから、音を立てないようにして静かに歩いて来いってさ」

夕食の干したアンズを咀嚼していたペレウスは、なんだろうと首をかしげながら立ち上がった。指し示されたほう、人気のない大岩の裏側にまわりこむ。

ファリザードはそこにひとり立っていた。彼女はかれの姿を見てどうしたわけかびくりと目を見開き、それから含羞の面持ちで顔をそらした。たおやかな少女めいたそのしぐさに、ペレウスはなぜか気後れを感じた。

彼女とふたりきりという状況は獅子の峠以来である。いや、ほんとうの意味では泉以来であった。

あのときの、裸のファリザードの艶めかしい風情を思い出して、ペレウスは頬を赤らめそうになった。

(泉でのことを深く考えるのはよそう)

「見せたいものってなんだい」

声にしてたずねたかれに、ファリザードは静かにというように唇

の前に指を一本たて、それからその指で離れた地面を指さした。
ペレウスはそれで気づいた。彼女が示した地面の一部分が、鮮やかな赤や黄色に染まっていた。

「蝶の……群れ？」

(すごい、何百匹いるんだろう)

音もなくファリザードがそばに寄ってきて、ささやき声でペレウスに教えた。

「地下水が地表のくぼみにほんのわずかながらしみ出しているのだ。蝶たちはその水を吸っている」

いわれてみれば、じゅうたんのように地の一部を覆う絢爛な羽の合間から、きらきらと宝石のような輝きがのぞいていた。水たまりが夕陽を反射しているのだ。

ペレウスはこの奇観にすっかり感じ入った。

「きれいだね」

「う、うん」とファリザードがうなずき、「砂漠の蝶たちは水を嗅ぎつけてやってくる。群れで砂漠を渡り、水場にこつして降り立ちながら旅をするんだ」固い口調で説明したのちに「……ちがう、こつという話をするために呼んだわけじゃない」とうめいた。

「じゃあぼくにどついつ話が？」

「うわ、いきなりこつちに近寄るな！……待って、ちょっと待って」

後じさったファリザードは胸をおさえて深呼吸をはじめた。みて飽きない子だなあと呑気にかまえていたペレウスに、ようやく呼吸をととのえた彼女は切りだしてきた。

「イスファアーンに帰ったのちのことだ」

「うん」

「……ペレウスにはなにか、この先の目的はあるのか？」

ペレウスは面くらった。いきなりそんな質問をされるとは思わなかったのである。だがファリザードは真剣な表情である。かれは「そうだね」と考え始めた。

砂漠の賊への復讐はかならず行わなければならない。重要度は格段に下がっているが、アテーナイのセレウコスへも借りを返したい。それに死んだパウサニアスの話では、セレウコスが代表する民主政都市の少年たちに対抗すべく、王政都市の少年たちが連合を組むという。ペレウス自身が盟主にかつきあげられるという話はさておいても、まったく関わらないわけにはいかないだろう

（けれど、それらはぜんぶ些事だ。大切な本質はひとつだけだ）

「ヘラスを守るために尽力する」

ペレウスは口にした。故国ミユケナイと、その属する文明であるヘラスを守る。それは王族であるかれの願いであり、使節としての存在意義でもあるのだ。

ファリザードは半ば予期していたらしく、「そうか。おまえらし

い答えだな」とうなずいて「具体的にはどうする」と二度目の問いを發した。

「さしあたり、わが帝国とヘラスとの間の戦争を終わらせるということになるか」

「……そうだな。このまま帝国とやりあっていたらヘラス諸都市は劣勢になるばかりだろうから」

劣勢どころではない。帝国五公家のひとつ 現在の主な敵手であるダマスカス公家ひとつとっても、ヘラスはこの先互角を保てるかどうかというところである。

「いま戦っているダマスカス公家だけじゃないな。これ以上和平締結が遅ければ、ホラーサーン公の軍までが前線に来る」

ペレウスは 剣 ことホラーサーン公アーデルの凍えた雰囲気 を思い出して顔をしかめた。

「……ファリザード、ぼくはかつてきみのお父上から、ホラーサーン公を評する言葉を聞いたことがある。

かれはファールス帝国でもっとも偉大なジンのひとりであり、同時にもっとも狂っているひとりだと。そしてかれはヘラスを含む人間世界を征服したがっているのだと。

それならば、かれのようなジンから故国を守らなきゃならぬ
い」

「……伯父御は、私欲のためにそうしたいわけではないんだ。かれは地上を管理するのは人族ではなくジン族であるべきだと信念をもっているから」

「私欲だろつがかれなりの正義だろつが同じだ。 剣 の意図がぼくらを征服して管理下に置くことにあるなら、それは絶対に受け入れられない」

ペレウスはぎつと奥歯をかみしめ 所在無げに黙っているファリザードに気づいて謝った。

「ごめん。きみにいったつてしょうがないことだね」かれはもどかしさのこもったため息をついた。「和戦いずれにしる、ぼくはまだ誰かに影響を与えるような力はない。偉そうなことをいつても滑稽なだけだとわかつてはいるんだけど」

「そういうわけでは……」ファリザードがいいかけたが、彼女は結局それをひっこめた。彼女は少し考えたのち、ペレウスを安堵させるようなことをいった。

「ペレウス、あまり心配しなくていいと思う……伯父御が今回出陣したのは、あくまでも十字軍の根拠地アレツポを攻めるためのはずだ。」

現在の上帝およびその実家であるダマスカス公家は、ヘラスとの和平案に大きく傾いているらしい」

その朗報にはつと息を呑み、蝶が逃げるかもということを忘れて「ほんと!？」とペレウスは彼女に詰め寄った。

「以前に父上から聞いたことだ」とファリザードはうなずいた。

「上帝にしる戦の最前線にいるダマスカス公家の者たちにしる、ヴァンダル人の『十字軍』どもは一掃するということで一致しているが、ヘラス諸都市についてはまた別の考えがあるらしい。」

『征服して管理する』よりも、『服従させて交易する』ほうを選ぶおつもりとのことだ。損得だけ突き詰めて考えれば、ヘラス諸都市を残しておいたほうが帝国にとっても利益になるそうなのだ。

だから伯父御の目論見は実現しない。伯父御には、ヴァンダル人どもを最後のひとりまで殲滅することで満足してもらうことになる。父上はそういつていた。まだ決定的ではないけれど、上帝の意は和平にあるのだと」

「そうか、それはよかつ……」

サー・ウィリアムのことろが思考に引つかり、ペレウスは喜色を消して言葉を切った。みつければ、あの騎士もやはり殺されることになるだろうか。

黙然としたかれの様子に気づかず顔を伏せたファリザードが、「あ、あの、それで、本題なだけれど」とにわかにも口ごもった声を発した。

「本題？」顔をあげたペレウスに、急速に余裕がなくなったファリザードは自分を指してとつぴなことをいった。

「わ、わたしは薔薇の公家ことイスファーン公家の女児だ。おまえはわたしに気安く接してくるけれど、だからといってわたしの価値を甘くみたらだめだぞ」

「……うん」甘くみるなど自己主張されてもどうすればいいかわからなかったが、ペレウスはとりあえず合わせた。こういう子だとわかってるので、気安いだのなんだのいわれてももう腹もたたない。両手の指先をつつきあわせながら、ファリザードはへどもど何やらいい続けている。

「前に話したように、イスファハーン公家の女は本来、その時代最大の権力者や英雄、偉人に侍る存在なんだからな。」

歴代のファールス上帝も、イスファハーン公家の女性を後宮に入れさせるよう求めた者は多かつたんだぞ。伝説上の人物たちと並べられて箔がつく存在になるからな」

そうと教えられて、ペレウスはまじまじと彼女をみつめた。

「へえ。それじゃあきみもいずれ、上帝の妃になるのか」

興味と一抹の寂しさに似た情動　友達が結婚する話ってこう感じるんだ、とかれは納得しながらいった。だが、ファリザードはがばと顔を上げ、あわてた様子で否定してきた。

「な、なんでそうなる……いや、それはない。たぶんない。」

現在の上帝は妃とことのほか睦まじいそうだし、見栄を張る御方でもないというから、わたしはお呼びでないと思う。

と、とにかくわたしは、いまのところだれと結婚するかは決まっていんだ」

「なんだ、そうなのか」

「そつだ、そついうことだ……わ、わたしともし結婚できたらとても幸運だということがわかったか！」

目をきつくつぶったファリザードが叫ぶようにいった。

「えつと、うん……？」

話の着地点が見えず、ペレウスはそろそろ困惑しはじめている。

もつちよつと要領を得た話をしてほしい　そう思ったとき、フアリザードの声に驚いたのである。蝶群がとつと地面から飛び立った。

幾百枚もの色とりどりの羽がいつせいに空気を打つ。一部の蝶は飛翔するときペレウスたちをかすめていった。その美しい虫たちは四散したのち、宙の一点でふたたび集まって舞い上がっていった。だがペレウスは途中から蝶に目を向けられなくなっていた。

「ペレウス」

フアリザードの雰囲気を変化していた。

あの泉でみた蠱惑的な雰囲気をただよわせる彼女がそこにいた。熱慕の情をこめてうるんだ視線を真正面から受け、ペレウスはう、と後じさりかけた。

彼女はいまだためらう声で、三度目の問いを発した。

「父上がヘラス人有力者の子息たちを、使節としてイスファハーンに招聘したわけを知っているか？」

「実質上の人質だろ」ペレウスは即答し、しばしためらって、「それはしょうがないといまなら納得しているけれど」

だが、フアリザードは静かに首をふった。

「それもあるかもしれないが……父上のほんとうの目的はそこにはない。

わたしを、使節のうちのだれかと結婚させようとしていたんだ」

晴天の霹靂

あんぐりとペレウスは口をあけた。

そういえば以前、ファリザードが「この先、おまえと結婚しろといわれたってしないからな」などと口走ったことがあったが……

(あれはこういう裏の事情があったからか)

思い当たるふしに愕然としているかれの前で、ファリザードがもじもじしながら続けた。

「だからわたしはおまえたちの応接役を命じられたのだ。だれに嫁ぎたいか見定めて選べと。」

父上はいった。ヘラスの次世代の指導層とわたしとの婚姻が、和平の象徴になるのだと

一語ごとにはにかみ、顔をますます紅潮させながら、

「わたし……当初は、死んでもいやだと思えなかった。そのくらいならヘラスとの戦争が続いたほうが良いと。上帝が和平に傾いていると聞いたときは、伯父御を応援したくなっただけだった。でも……その……いまは……結婚も、そう悪くないかもって……つまり、お、おまえとなら……」

ここにいたって、ペレウスはようやく話の流れを悟った。

その瞬間に、心臓がはねた。

(まさかこの子、ぼくのことを)

予感をそんなばかなと一蹴しかける

彼女にみつめられてそれができなくなった。

ごくぐりと固唾を飲む音は彼女のものか、それとも自分のものだった

ただらうか？ この方面には敏感とはいえないかれにすらも、ファリザードの心はもう明らかだった。

彼女は勇気をしぼりだそうとするかのようにみずからの服の胸元をつかみ、

「ペレウス、前にいったことは撤回する……結婚しろといわれたら、お、応じなくも、ない……」

おまえにであれば、もらわれてやってもいいっ……」

しどろもどろながらファリザードはそっぴいきった。

そのときの愛らしくも真っ赤になった表情に、ペレウスは思考も動きも停止しかけた。

くすぐったく甘く、赤く熱い困惑が、思考をぐらぐら揺さぶる。

混乱のうちになんとか理性の手綱をひきしめようと試み、手を拳げて思わずいつてしまっていた。

「でもぼく、好きなひとがいるんだけど」

心臓を刺された瞬間のようにファリザードが固まった。

場が切り替わったように、死のような沈黙が訪れる。

残っていた一匹の蝶を、近寄ったトカゲがぱくりとくわえて飲みこんだ。

25 ジンの愛 上 (後書き)

依頼して描いていただいたファリザードのキャラデザ絵を第一話冒頭に貼りつけました。

26 ジンの愛 下 (前書き)

ペレウス、ファリザードの想いを知って混乱し
ユルドウズにジンの愛について教えられること

26 ジンの愛 下

まずかったかも、とペレウスは困惑しきって口を押さえた。

予想もしていなかった告白に度肝を抜かれ、ろくに考えずについ口にした言葉が「ほかに好きな人がいるから」。前向きな返事では絶対がない。

(やってしまった。もっと慎重にいけないのか、ぼく……)

ファリザードを傷つけないわけじゃない)

ファリザードは不意打ちで斬りつけられたような表情になっている。茫然自失して、痛みを打ち込まれながら認識もできない様子だった。

やっとのことで彼女は口を開き、震えた声をだした。

「だ、だめ……そんなのはだめだ……そんなこと許さない……」

ペレウスは、ファリザードのその言葉に悪気がないことはわかっていた。彼女はただ冷静さを欠いているだけだと知っていた。誰からも甘やかされた生まれ育ちゆえにもともと下手に出るのが苦手だということも知っていた。

それでも、「だめ」「許さない」という言葉を聞いたとき、少年は反射的に顔をそむけてしまっていた。

「急にそういうことをいわれても困る」

自由への干渉を許すなかれ 独立を重んじるヘラス人として誇り高くあれ 故国の宮廷で受けてきた教育が、ファリザードの言い方に反発を生じさせたのだ。

だが、ペレウスもべつに頑迷な誇りだけで生きているわけではなかった。突っぱねる口調になってしまったことを、すぐさまかれは後悔した。

（しまった、まただ。なんでぼくってこうなんだ。こんな言い方することないだろう）

いまの台詞でファリザードをさらに傷つけたのは確かだった。かれはとっさに謝った。

「ごめん」

直後に、その一言が駄目押しになったことに気づいた。蒼白になっていたファリザードが、突き飛ばされたように後ろによろめいたのである。

彼女は悲痛に唇をひきむすび、肩をわなわな震わせはじめた。金の瞳に涙があふれんばかりに盛り上がり、こらえながらもいまにも決壊しそうになっていく。

誤解されたことを知ってペレウスはあわてた。

「ごめっ、いや違う、泣くな、さっきのはそっちの意味のごめんじや」

弁解するかれに背をむけて、ファリザードが走りだそうとした。そこへ横からペレウスに救いの手が差し伸べられた。

「嬢ちゃん、落ち着きな。坊やは『ゆっくり考えるから時間がほしい』といているだけだよ」

クタラムシユとユルドウズが岩陰から歩き出てきたのである。

ペレウスは余裕なくこくこくとうなずいた。覗いていたのかと本来なら文句をいうところだが、この局面では純粹に助けがありがたい。

呆れ返った表情のユルドウズが、二人を交互に見比べた。

「みちやいられない。あんたら、どうもお互いの種族の事情をろくすっぽわかってなかったみたいだねえ。」

ま、どうせ嬢ちゃんのほうが恥ずかしくてジンの秘密をあれこれぶちまけられなかったんだろうけれど。

嬢ちゃん、あんた子宮錠ラヘル・コラムはもう浮いているかい？」

いきなりの問いをユルドウズから向けられたファリザードがたじろいだ様子を見せる。だが、ちらりとペレウスをみて、彼女は素直にこくんとうなずいた。

「浮いたのは坊やに出会ってから……いや、坊やに対して浮いたのかい？」

今度の問いにはすぐ答えはなかった。が、少ししてファリザードはむつつりと押し黙ったまま、紅潮した顔をうなだれさせるように深くうなずいた。それまでこらえていた悔し涙が下に二粒こぼれた。

ユルドウズが「そうかい。わかったよ」とため息をつき、半白の頭髪を女性らしからぬしぐさで掻き乱した。そして、

「ちよっくらあたしが坊やに説明しとこう。嬢ちゃんのほうは任せたよ、クタルムシユ」

ペレウスのマントの肩を老女はつまんで引つ張り、歩き始めた。

「な、なんです！？ どこへ」

「いいから坊やはあたしとこっち来な」

ペレウスが座らされたのは少し離れた砂の上だった。

そう場所を移したわけではない。お互いの会話が聞こえない程度に遠ざかっただけである。

かれの前にとっかとおぐらをかいたユルドウズが、「覗こうといったのはうちの人だよ。お節介なんだから」とつぶやいた。

「そこをまず説明しとこうかね、坊や。

うちの人があんたらにやたらと親身になるのは理由がある。クタ
ルムシユにとつたら、嬢ちゃんは同じ特殊性癖持ちのお仲間なのさ。
同病相哀れむってやつさね」

「特殊性癖？」

「人族に惚れたこと」ユルドウズはまず自分を、ついでペレウスを指さした。「人を伴侶に定めたジンは、仲間内では変わり者飛び越えて変態扱いさ。それでも嬢ちゃんはあるが好きだと、あんな不器用な言葉でだけどころちゃんと表明したんだよ。あんたにしたら一方的に好かれて迷惑かもしれないけどね、もう少しそこんところを汲んでやってくれないかね」

青ざめたペレウスは、ためらいがちに切り出した。

「でも、それじゃ……ぼくがフアリザードの好意に応えたら、彼女がジンの社会で馬鹿にされることになるのでは……」

「そうだね、陰口くらいは叩かれるね」ユルドウズは間髪をいれず

断言した。「だがそれがどうしたってんだい？ 一族と絶縁したクトルムシユに比べれば、嬢ちゃんは少なくとも父親には祝福してもらえないじゃないか」

「そんな無責任な言い方っ」

「お黙り。そこらへんがジン族のことをわかつちやいないというのさ。そのころには嬢ちゃんは同類に軽蔑されるより、あなたに拒絶されるほうをよほど辛く感じるだろうよ。」

坊や、いまから話すことをしつかりおつむに刻みな。あなたはいま人生の岐路にいるんだよ。類まれなる幸運か、言語を絶する災厄かのね。

あの嬢ちゃんを、あんたのなんだと思うっ？」

ユルドウズの指したほうにペレウスは目を送り、涙を浮かべてこちらを見つめているファリザードと視線が合つて動揺した。彼女はクトルムシユの話を聞きながら、悲しげにしおれてかれを見ていた。ファリザードから目を離せないまま、ペレウスはぼそぼそと話した。

「……ファリザードはぼくの友人ですよ」

「ちがう。さつき答えをいっただろう。あの子はあなたにとって、極めつきの幸運もしくは災いになる。あの子があなたを見初めた以上、この先どうしてもそうなってしまう。」

このファールス帝国の人族のあいだには“ジンに憑かれた者”^{マジヌーン}という言い回しが古来からある。恋に身を焦がすやつをそう呼ぶんだ。忠告するが、ジンの恋心をもてあそぶとやばい事態になるよ」

この脅しでようやくペレウスはユルドウズのほうに顔を戻した。

「どづいう事態ですか？」

「その質問に答えるために、もうひとつ“ジンの嫉妬”という言葉
を教えてやる。奇怪もしくは残酷な殺され方のことを、古来そう
呼びならわしていたんだよ。」

嬢ちゃんの想いに応えるにしろすっぱり振るにしろ、ひとつ間違
えたら大変なことになるとよおくわきまえな」

顔がひきつるのをペレウスは感じた。誇張だと思いたいが、ユル
ドウズの様子は真剣そのものである。

「……ほんとうに、そんな大げさなことになるんでしょうか？」ペ
レウスは疑念もあらわに質問した。「ぼくも彼女もまだ十二歳です
よ」

ユルドウズは「は」と嘲るように笑い、顔をぐつと近づけてきた。
隻眼にわずかに怒りの色が浮いていた。そういえばこの騎馬部族長
は村にいたときフェアリザードとよく一緒にいた。とペレウスは思
い当たった。自分とクトルムシユ以上に、フェアリザードとユルドウ
ズは親しくなっていたのかもしれない。

「はじめて子宮錠が浮いたと嬢ちゃんはいったんだ。あんなのそば
にいろうちにね。」

ジンの女にとっては、そうなるともう取り返しがつかないんだよ。
あんな、もしかして、時間を置けば嬢ちゃんの熱も冷めるかもし
れないと期待しているかい？ もしそう目論んでいるならとんだ勘
違いだ。

五十年で吹っ切れたならジンの恋としては短いほうだよ」

「……五十年？」

耳を疑い、ペレウスは聞き返した。

ユルドウズが、ほうらやっぱり知らない、といたげに目を細め、言葉をつむいだ。

「ジンは一度相手に想いを寄せると、簡単に心変わりできないのさ。百年でも二百年でもひとりの相手にこだわり続ける。あたしら家族の時間感覚からするとほうもなく長い時間だね。

あの子の心をずたずたになるまで傷つけでもしないかぎり、あんな一生嬢ちゃんに好かれたままだよ。そうしてでも突き放したいなら止めないけどね」

「ずたずたって……そうまでしたいわけがないでしょう！」

「そうかい。じゃあ次は幸運のほうの話もしてやろう。

いったんこちらに惚れれば、ジンは理想の伴侶になる。子が生まれるにくいことは除いてだけどね。

……自分でいうのも照れるが、クタルムシユはあのとおり暑苦しいくらいあたしにべったりだろ？ だがね、あのくらい深く、しかも長続きするのがジンの愛なのさ。

嬢ちゃんはまだ意地を捨て切れていないけれど、この先はどんどんその深みにはまるばかりだよ。愛した者を喜ばせるためならどんなことでもやろうとする。どこまでも尽くしてくれるし、けっして裏切ることはない。こっちが先に裏切らないかぎりだね。

こちらが老いようと顔に醜い傷がつこうと気にとめず寄り添ってくれるし、そのひたむきな情熱は人間の一生くらいの時間では冷めることはない。

足の爪を歯で噛み切って整えてほしいとあなたが求めれば、嬢ちゃんはあるのつま先を唇に含むだろう。そういう献身的な妻をあ

んたは手に入れるだろうよ」

最後の例はさすがに冗談ですよねとペレウスは確かめなくなった。見栄っ張りのファリザードがそんなことをするようになるなど信じられない。

しかし、ほんとうだとしたら。

「ユルドウズさん、それって、理想というよりは……」

重い。

冷や汗を浮かべているペレウスに、ユルドウズは渋い面持ちでうなずいた。

「何をいいたいのかはわかる。少々疲れるし、愛情にときどき胸焼けするんだよねえ。でもまあ、慣れたらそう悪くもないよ」

「待つてくださいよっ、いろいろ聞かせていただきましたがいまの話はおかしい！」

世の中、うまくいく恋のほうが少ないって聞きますよ。

どれだけ異性に好かれても振り向かない者……たとえばほかに相手がいる者だっているわけでしょう。ジンがそういう望みのない相手に好意を寄せれば、そのつど血の雨が降るわけですか」

「うん、それがねえ。」

どうもジン同士だと、そういう想いのすれ違いはめったに起こらないらしいんだよ。好意を向ける相手は、自分のことを愛している、もしくは愛してくれる相手であることがほとんどなんだと。

“運命の相手”を本能的に嗅ぎ分けて恋しているんじゃないかって思うくらいさ。

そういうわけで、ジンの恋は片恋で終わることはほとんどない。

だから嬢ちゃんもあなたに初っ端から振られそうになるとは思わなかったんだろ。人族相手だと本能も狂うのかもね、やっぱり。で、坊や、嬢ちゃんの恋にはほんとうに望みがないのかね？」

ユルドウズが指でペレウスの胸をつついてくる。

「あなたがさつき突っぱねちゃったのは、ジン族のこういう事情を知らなかったからと思っただけだ。それとも嬢ちゃんがどうしても嫌いかね？」

「違います！……でも……」

「ふんふん。後でじっくり考えてみようか。」

さあて話を続けよう。あなたが嬢ちゃんを受け入れた場合、輿入れにともなつて以下のものをあなたは手に入れることになるだろう。ヘラスの平和。

それを実現したという栄誉。

小国の国家予算に幾層倍するであろう額の持参金。

以降、帝国との外交の窓口役となるであろうイスファーン公家縁戚の立場。

ついでにいえば嬢ちゃん自身もあと十年、いや五年もすればこの地上で指折りの美女になっているだろう。いつまでも若く、あなたに心底ぞつこんの花嫁だ。子供のアなたには実感わかないかもしれないけど、美しい女を手に入れるためだけで命を賭けた英雄の話はいっぱいあるんだよ。

どう？ 幸運と呼ぶにはまだ足りないかい、ミュケナイのペレウス？」

ペレウスは喉元をやんわり絞められて息がつまる錯覚を覚えた。ファリザードを魅力的な女性という目でみることに実感がわかな

いいとはいきれなかった。すでに泉のときに、ペレウスは彼女が異性であることを意識させられていたのだから。

ユルドウスがまたかれの胸をつついた。

「それともなにかい、あなたの想い人とはもう将来を誓い合っちゃったわけかい？」

「……そういうのじゃないですけど……」ペレウスは口ごもった。そもそも好意を伝えたことさえない。

「それなら、その女以外は選べないと固く決心しちゃってるわけかい？」

「そ　　」そうですと続けるはずが、言葉が出てこなかった。その理由もわかっていて。

そんなこと、考えてもいなかったからだ。

黒髪のゾバイダはかれにとって、過酷な環境における安らぎだった。ペレウスはゾバイダを姉のように慕い、あこがれてはいたが、彼女へのほのかな想いをそこまで発展させてはいなかったのである。それはファリザードが自分にぶつけてきた想いとはまったく違う種類のものように感じられた。

(ぼくのほうが、ファリザードより子供だったんだらうか)

苦悩しているペレウスに、ユルドウスは首をかしげて決定的なことを訊いてきた。

「その女のことはさておいてさ、どうにも妙だねえ。

坊や、あんたはもつと果断な性格と思っていたんだけど、やたら優柔不断じゃないか。

やっぱりなにか別の悩みがあるのかい？」

もう隠してはおけない。ペレウスはやむなく口を割った。

「……宗教です」

親しくなったとはいえ唯一神の信徒であろう帝国人に話すのは気が進まなかったが、こうなれば打ち明けるしかなかった。
だが、

「そうか、やはりね」

予想に反してユルドウズはすんなり納得した。
戸惑いながらも、ペレウスはさらに細かく心情を打ち明けた。

「ファリザードは帝国人で、唯一神の信徒です。」

以前、彼女に宗教のことを教えてもらったとき、しきたりについても聞きました。

この宗教の女性は、同じ宗教の男相手でなければ嫁げないんでしょう？ だとしたら、ぼくは結婚の前提条件として、唯一神の教えに入信させられることになります。ヘラスの神々を偶像崇拜で多神教だと切り捨てる教えに」

結婚と戒律の話をするときファリザードがぎこちなかった理由も、ヘラスの多神教をかたくなに否定しようとした理由も、いまならわかる。ペレウスは唇を噛んでつぶけた。

「ミユケナイはヘラス最古の都市国家です。とうに没落しましたけれど、神々を敬うことだけは廃れていません。代々の王は神官もつとめてきたんです。」

その王家に生まれたばくが、ヘラスの神々を捨てるというのは……それに想像もつかないんです……帝国の唯一神のまえに額づき、断食や、日に五回の礼拝を行っている自分の姿が……」

「まいったね、そこまであたしらと同じか」

ユルドウズの慨嘆に、ペレウスは「え？」と顔をあげた。老女は曇った顔で話した。

「あたしもこの帝国では異教徒だよ。坊やに最初に自己紹介したとき、あたしとクタルムシユは正式に結婚したわけじゃないっていつたろ？」

白羊族は古代ファールスの炎の神を奉じていまに伝えてきた。だから、クタルムシユとあたしの結婚を認めてくれる聖職者は存在しなかったんだよ。

それでもあたしらは、お互いの信仰を尊重したままこうしていっしょにいられるけれどね……イスファハーン公家の結婚ともなると、そこの問題をゆるがせにするわけにはいかないか」

「はい。そうしなければ、帝国内部の反発を買って結婚そのものが成立しないと思います」

「なるほどね……」

ペレウスとおなじく沈んだ面持ちで老女はうなずき　ふっと肩の力を抜き、一転してにこやかにいった。

「じゃあしょうがない。坊や、あんたは唯一神の教えに入信してきな」

「ええ!？」

「だって、そうするしかどうしようもないだろ。じゃあ悩むだけ時間の無駄さ。」

まあ、この問題にあたしらがあまり口をはさむわけにやいかないんだけどね、ここはあえて仮定して話してみようじゃないか。

あなたが嬢ちゃんと結婚すれば、あなたの国のみならずヘラス全体が救われるわけだ」

「……結婚話はいくまでも交渉全体の一部だと思います。それがなくても和睦は成り立つはずです」

「そうかもしれないが、平和に向けての努力はどこから壊れるかわからないからねえ。結婚は結びつきを確固たるものにするよ。ないよりましという程度にはね。」

そうそう、もう一度強調しとくよ。王族が帝国の名門イスファハーン公家と縁戚関係になれば、あなたの国ミユケナイは戦後、ヘラスの中でも飛び抜けて利権を確保するだろう。

あたしがあなたの国の人間だったら、王子一人くらいは帝国に差しだしてもいいんじゃないかとそろばん弾くね。信仰はほかの王族が守ればいいじゃないか」

「じゅうぶん口をはさんでいるじゃないですか、ユルドウズさん」

進退窮まったペレウスは恨みがましくこぼした。ユルドウズはすまし顔である。

「とんでもない。事実を述べただけさ。」

嬢ちゃんの気持ちも国の利益も、あなたが覚悟決めるだけで八方まるく収まるって事実をね」

.....
.....
.....
ペレウスたちが戻ったとき、ファリザードはいまだクタラムシユに懇々と説き聞かせられている最中だった。

完全に迷いが吹っ切れたわけではなかったが、ペレウスは砂を踏みしめて彼女に歩みよった。

かれの接近はわかつていたはずだが、ファリザードは顔を向けてもこなかった。

「ファリザード……」

ためらいながらかれが話しかけても、ファリザードは目を合わせず「……人族は」と低い声をだした。

「人族は、愛の対象をすぐに取り替えることができるのだとクタラムシユ卿から聞いた」

「それは、その……」

「そんなの不潔だ」

涙ぐんで子供っぽく片頬をふくらませた彼女にそっぽを向かれ、ペレウスは言葉に困って立ち尽くした。

クタラムシユとユルドウズが、あちゃあとばかりにひたいを押さえている。お馬鹿娘、とユルドウズがつぶやき、横の夫とひそひそ声で口論をはじめた。

「ちょっと、あんなに余計なこと話してんない」「気落ちするには早いとはげましたつもりだったのだが」「相手が多感な年頃だとわかっとかなきやだめだろ。だいたいあんたがそんなこといったらあたしが移り気だったみたいに思われるじゃないか」「ユルドウズが移り気なのは事実ではないか。よその騎馬部族の若い族長から、おまえの美しさを称える言葉を彫った琴を贈られて『いい男から褒められるのは悪くない気分だね』などと頬を染めていただろう」「ええい、しつこいね。三十三年前の話にいつまで妬いてんだよ」

漫才のような夫婦喧嘩は放置し、ペレウスは言い返すことなくフアリザードに背を向けた。

彼女の神経が昂っているなら、もうすこし後から話そうと思ったのである。

が、マントの裾をぐつつかまれた。

フアリザードの心細げな声が背後から聞こえた。

「怒ったのか？」ついで、「ごめん。嫌わないで、ペレウス」

愕然としたペレウスの耳に、ぐすつと鼻をすする音が届いた。

「わたし、これからおまえの好みの女になるように頑張る。気に入らないところがあつたなら、教えてくれれば直す。わたしのことを誰より好きにさせてみせる。

だから、選ぶ女はわたしにして」

媚びるといふよりただ必死な、涙声の懇願だった。

場が静かになっていた。

そんなこと頑張らなくていい。ペレウスはそういおうとしたが、

からからになった喉は言葉を詰まらせた。

“嬢ちゃんはまだ意地を捨て切れていないけれど、この先はどんどんその深みに” ユルドウズの声が脳裏に響く。

(下手に出るのが苦手な子だったのに)

「ファリザード」気がつけば、中断していた言葉を再開していた。

「時間をぼくにくれないだろうか。

いまはまだ……聞いたばかりで心の整理がつかないんだ。無理に決めようとしても打算でしか決められそうにない」

マントをつかんでくるファリザードの小さな手が震えるのが感じられた。

「打算でもいい」

「ぼくがいやなんだ」

ぼくはおかしなことをいつている、とペレウスは心情を吐露しながらぼんやりと考えていた。

(王族の結婚は損得を第一に考えて行うものだと、そのくらい知っているのに)

国の利益となる結婚を父王に決められ、それが見知らぬ相手だったなら、ペレウスは文句ひとついわず王族の義務を果たすつもりで結婚しただろう。

けれど、こうまで好意を寄せてくれたファリザード相手に、打算のみで向きあうことは、なぜかどうしてもいやだったのだ。

だから、かれはきつぱりと告げた。

「ちゃんときみに気持ちに向いてから、こっちから申しこむ」

振り向いて彼女をみつめる　ファリザードはかれの言葉の意味をはかりかねて、八割の不安と二割の期待のないまざった表情になっていた。

「……わたし、希望をもって待っていていいのか？」

その問いに、ペレウスはやむなくこくんとうなずいた。

じわじわと薔薇が開くように、ファリザードの顔に深い安堵と喜びが浮かんでいく。目尻に残る涙もさながら花の露のようだった。

「選んでくれるなら、一生後悔させないから」喜色をあらわに、彼女は軽やかにペレウスの手をとり、そこで興味津津の観客ふたりに気づいてがちゃんと固まった。

「ああ、いまごろこっちのことを思い出さなくていいよ」気にせず続きをどうぞとユルドウズが手ぶりで示す。

「うっ……く……」みる間にファリザードの顔に羞恥の赤が上っていく。

そのままいけば限界に達した彼女が逃げ出して幕となったろうが、事態が動いた。

四人のいた岩陰に、白羊族の男性が報告にきたのである。

「ユルドウズ様、一・五ファルシング先で斥候が賊らしき一団を見つけました。」

二十二騎で、みなファールス人軽騎兵の格好です。ジン族がひとり混じっており、布をかぶせた玉らしきものを一頭いるラバに背負わせているそうです。

周囲をひどく気にしていたようですが、斥候は気づかれなかったと申しております」

四人全員が交互に顔を見合わせた。

（布をかぶせた玉。まちがいなくあいつだ）

ペレウスはファリザードと緊張の視線を交わした。

と、クタルムシュが喉の奥で奇妙な音を立てた。それが獰猛な笑い声だとペレウスは気づいた。

「ジオルジロスか、ほんとうに出くわすとはな。おおいによろしい。ユルドウズ、イスファハーン公に贈るご令嬢結婚の前祝いを調達しようか」

「ちょっと血なまぐさ過ぎやしないかねえ、凶賊の首の山つてのはでもいいか。あたしらは軽騎兵を始末する。ジンの古老とやらは任せたよ、クタルムシュ」

夫に合わせ、隻眼の雌狼のような笑みをユルドウズが浮かべた。

27・魔帝（前書き）

武をつかさどるジン決起してファールス帝国を震撼させ
状況はかくて急転すること

なんというあっけなさだ、とペレウスは瞠目していた。

周辺に転がる死体はきつかり二十一体　かしらであるジオルジロスを除く賊たちは、白羊族の男たちに矢を浴びせられて一人残らず絶命していた。

そしてペレウスやファリザードの前には、ジオルジロスが地に膝をつかされている。その背後から、かれを素手で馬上から引きずり下ろして捕らえたクタラムシュが槍の刃をつきつけて目を光らせていた。

ユルドウズが誇らしげにいった。

「ヘラス人やヴァンダル人には、騎射はファールス人の得意技みたいに伝わっているみたいだけれどねえ。腹立たしいっいたらないね。大半のファールス人は練習してやっと騎射ができる。だがあたしから騎馬部族にとっては、馬に乗って矢を放つなんて、子供が駆けっこするくらいだれもが自然にやれることなのさ。

みな、この成果を」

(たしかに無類の軽騎兵かも)

騎兵戦の一部始終をやや離れたところでみていたペレウスは、ユルドウズの豪語にうなずかざるをえない。

が、黎明に乗ったファリザードがぼそっとつぶやいた。

「雇い主を囿おとこに使つといて、成果あがらなきや噴飯ものだ」

「使えるもんは使うさ。なんだい嬢ちゃん、さっきの言葉はべつにファールス人をこきおろしたわけじゃないよ」

ユルドウズは平然とした様子である。

「先にいったら、理由あってあたしたち白羊族はジン族には手を上げられないのさ。」

だからこのジンの古老はクタルムシユに任せなきゃならなかった。こいつのそばからひとりでも多く賊兵を引き離したかったのさ。

ま、そんな小細工いらなかったかもね。ちよつと脅かしたら賊どもは面白いくらい逃げ散ってくれたから」

すべては整然と行われた。

最初の一手は、黎明に乗ったファリザードが賊をおびき寄せるところから始まった。

まばらに草のはえた礫砂漠をゆく賊の一行の前方に、ユルドウズに指示された彼女は偶発的な遭遇をよそおって身をさらしたのである。

ファリザードが慌てたふうをよそおってすぐ馬首をひるがえして逃げる　七名の賊がファリザードを追う　岩山をまわりこんだところで白羊族の分隊三十名が、彼女を追ってきた賊を声さえあげさせず射殺した。

それとほぼ同時に、白羊族の残り七十騎は、獅子の群れが静かに獲物に接近するように、賊本隊の背後に回りこんだ。

それはクタルムシユの術である“隠形”に助けられたのは間違いなかったが、白羊族の騎兵行動の巧みさもまた並外れていたのである。

間近にいたり、血も凍りつかせる喚声をあげて白羊族が殺到したとき、残っていた賊の十五名全員が、恐怖にかられて背を向けた。白羊族はらくらくと追いながらその背をつぎつぎ射抜いていったのである。

手に汗をにぎりながら、クタラムシユさんの姿がどこにも見えな
い　とペレウスはかれを目で探していた。だが、気がつくとも馬を
駆るクタラムシユがジオルジロスの馬に並走していた。かれは手槍
を繰り出して一撃でジンの古老のつかむ手綱を切り、それから横殴
りに馬上からたたき落としたのである。

(“ 隠形 ” って、地味だけどすごいかも。

すこし離れたら、白羊族のみんなの姿がよほど目をこらさないと
わからなくなつた)

ペレウスは最初、クタラムシユが白羊族の隊に “ 隠形 ” の効果を
及ぼしていると聞いてもいまひとつ実感できなかった　が、この
とき術の効果のほどをはじめて実感することになつたのである。

『ジンの魔法のひとつである隠形はほんとうに姿を消すわけではな
い。こちらの姿を相手の意識にのぼりにくくさせる程度のものだ。
それでも、顔のほくろが見える距離に近づくまではそれなりに効
果がある』

その説明が、いまなら腑に落ちる。

ふと、ファリザードがユルドウズにかける懸念の声が聞こえた。

「……気を抜かないことだ。この賊どもは、前見たときの半分以下
の人数しか手勢がいなかった」

向きなおり、ペレウスも「そうです」とそれに同意した。

「ヴァンダル風の重騎兵の姿がみえません。あいつらは強かった」

ふむ、とユルドウズが考えこんだ。

「斥候の話によるとこのあたりにはいないけれどねえ。近くにいるとしたら、あっちにも隠形の使い手がいる場合だ。考えにくいが、万が一そうだと厄介だ。よし、クタルムシュ。ちよつとそのジオルジロスとやらをくすぐって情報を吐かせられるかい」

末尾の一言の冷酷な響きに、ペレウスはぎよつとした。つまり拷問にかけてということだろう。

(傭兵なんだな、やっぱり)

クタルムシュが妻に「わかった」とうなずいたときだった。

「プレスター……重騎兵の指揮官とはいったん別れて逃げることにしたのだ。ここにはいない」

低い声を出したのは、ひざまずかされたジオルジロスであった。ユルドウズが、「おや、素直じゃないか」と冷笑する。

「だけどねえ、それがほんとうかどうか確かめてみなくちゃ。もちろんあたしら、鎧を着込んだ重騎兵の始末の仕方だって知っているけどね、こつそり近くに寄られて白兵戦に持ち込まれちゃ厄介なんだ。念には念を入れてあんたの体に聞いてみよう」

「やめておけ、この窮地では時間の無駄だ。それよりわたしと協力したほうが利口だ」

「……あん？」

なにをいつてるんだ、とばかりの表情をしたユルドウズに、ジオルジロスは「考えてみる」と話をもちかけた。

「わたしを生かしておけば役に立つぞ。“扉”を操るわが力によっておまえたちに逃げ道を提供することができる」

一拍置いて、ユルドウズが首をひねり、ペレウスはまばたきした。意味がわからなかったのである。ファリザードが懐疑的に眉をひそめて訊き返した。

「……なんの話をしている？」

「なんだと？」

今度はジオルジロスが驚きを目に浮かべた。「知らぬのか？」とかれはいい、それから、

「そうか、いまなお知らぬか。知らぬのだな」

不吉に、ほくそ笑んだ。

「なるほどそうか、それも道理だ、知るまいなあ。いまのいままで連絡のつかぬ僻地に隠れていたのであれば！」

ジオルジロスはおかしくてたまらないとばかりに体を折り、身を震わせて笑いはじめた。

その嘲笑に、ペレウスはざわりと身の毛が逆立つような感覚を覚えた。みわたすと、程度の差こそあれ全員の顔に動揺の色が浮かんでいた。みな凶兆を感じ取ったのだとペレウスは気づいた。

「なんのことか話せ、邪教徒」

クタラムシュがジオルジロスの腎臓の上をつま先で蹴った。苦痛にせきこんだジンの古老は、それでも嘲りをのせて声を放った。

「わたしとおまえたちはいまや同じ立場だ。地上でもっとも危険なジンに追討を受ける身だということだよ」

時をさかのぼること数刻、都市イスファハーンから七十ファルサング（約350km）の西にある都市ニハーヴァンドの近郊

小高い丘のある原野で、ひとつの合戦が行われた。

一万四千の軍と三千の軍が激突したこの戦に、特筆すべきことはない。

少数でありながら無敗の記録を更新しつつある三千の側が終始、戦闘を優勢にすすめ、当然のように完勝したことを除いて。

また、どちらの側もファールス帝国の正規軍とされる軍勢であったことを除いて。

勝者の三千の軍はホラーサーン公家軍の一部、敗者の一万四千は上帝直属の太守軍であった。

戦闘が終わり、舞い上がっていた砂塵が降りはじめた原野は、敗軍の人馬の屍やうめく重傷者に満ちている。

「皮剥ぎ公、この狂ったジン」

丘の上、斬りつけるような罵声が飛んだ。

罵ったのは敗軍の将　イスファハーン公家の次男にして、上帝直属の都市二ハーヴァンドの太守アクバルである。

血まみれの甲冑姿で縄を打たれたアクバルの隣には、ともに戦った別の都市の太守や、近隣の領主たちも引き据えられている。

かれらはアル・シャムシル剣　ことホラーサーン公アーデルの前に、戦の捕虜として並ばされていた。

「この逆賊め、今日の勝利を得ようとも貴様はこれで終わりだ。

なにを考えて裏切ったかは知らぬが、これからファールス帝国のすべての氏族がきさまに敵対するぞ！」

赤塗りの鈴のように血走った眼球を剥き、縛られたアクバルが絶叫する。

剣　は甲冑を着けず、床しよづき几にまたがっていた。無表情のかれは雲をながめるように天へと目を向け、アクバルの怒声になんの反応も返さなかった。周囲に、鎖かたびらに身を固めたホラーサーン兵たちが物言わぬ彫像のごとくたたずんでいた。

さらに怒鳴ろうとしたアクバルを黙らせるように、タカの影が上空に兆し、直後になにかがぱらぱらと降ってきた。

それは切り取られた指。

耳。鼻。

二枚、べちやりと濡れたものがアクバルの前の地面に落ちた

それがかれの弟たちの血まみれの顔の皮だと気づき、アクバルはめまいを覚えて下唇を噛み破った。

剣　がやつと視線を下ろし、声を出した。

「戦場に着く前にイルバルスは仕事をしてきたようだ」

「はい。イスファハーン公家五男ハイダル、八男クバードの死亡も

これで確認されました。次男アクバルはいま御前でわめいている者です」

剣 に合いの手を入れたのは、ホラーサーン兵たちの先頭にいる、かれの副将であるジン、アルプ・アルスラーンだった。青い鎧を身につけ、吠える獅子を模した兜をかぶった、髪の高い厳しい顔のジンである。

「さすがに上帝直属の太守軍に回されたジン兵。この者どもの屍の心臓からは上質の魔石がとれました、アーデル様」

アルプ・アルスラーンが合図すると、兵のひとりが陶器の大皿に盛った魔石を運んできた。大皿の縁からはぼたぼたと血がしたたっている。

ジン兵たちの血をまといつかせて煌々と輝く魔石 世にダマスカス鋼と呼ばれる金属の原石。

それを 剣 は受け取るや、大皿ごと持ちあげて口に流しこんだ。ぼりぼりと噛み砕いては嚙下する音がひびく。 剣 の頬はリスのごとく滑稽にふくらんでいる。だが、笑いを誘う光景では決してなかった。魔石をむさぼる口元が赤く汚れていく。

口がふさがった主に代わり、アル・アトファル 爪将 ことアルプ・アルスラーンが敗軍の面々へ、冷たく重い鉄鋼のような声を発した。

「無能を恥じる、若造ども。

これらの勇猛な戦士たちを無為に死なせたことについて、かれらを率いたおのれらが責めを負え」

それを聞き、アクバルは秀英な眉目をゆがめて歯をむいた。

アルプ・アルスラーンの言葉は辛辣であったが、アクバルは決して手をこまねいて敗北を迎えたわけではなかった。

ホラーサーン公によるイスファハーン陥落とその軍の接近の報せを聞くや、アクバルはすぐさま太守として動かせる兵を動員した。さらに近隣の太守や領主に即座の援軍をたのんで、短期間で一万四千ちかくの兵をかきあつめたのだ。

また、敵のホラーサーン軍が散らばり、剣がわずか三千の部隊に混じってこちらから攻撃可能な距離にいると知るや、時をおかず果敢に討って出もした。

その即断に通常なら誤りはなかった。

本来ならばホラーサーン軍は三万の兵数をかぞえ、練度も高い。

その強敵が補給の問題からか、散らばって別個に行動しているのだ

ザイヤーン、カーヴルト、イルバルスなどのホラーサーン諸将は 剣 とその副将から離れているという。

軍学上、「敵軍が分散しているところを叩け」というのは鉄則である。いまなら敵の五倍の兵力で各個撃破できるはず、あわよくば 剣 を討てるはずという甘い誘いにアクバルは乗った。

不運は、予想をこえて敵軍の練度が異常な水準に達していたことであつた。

三千名のホラーサーン軍は 剣 その人と、副将をつとめるアルプ・アルスラーンがみずから率いており、両名の指揮能力はアクバルの軍を圧倒した。

アクバル軍の騎兵による側面および背面への攻撃はことごとく先手をとられて撃退された。優勢な歩兵兵力を叩きつける正攻法はかわされ、丘の地形を利用して翻弄され、あげくに正面から押し戻された。五分の一の敵に押し負けたのである。

さらに途中から、鳥に“変化”するホラーサーン将イルバルスの

遊撃隊までもが、空を翔けて急速に戦場に合流し、アクバルの軍の後方をかき乱した。

敗色濃厚となった戦闘終盤において、アクバルは一か八か 剣との刺し違えを計った。

かろうじて統率のとれている周辺の騎兵を集めて二百騎の決死隊をなし、矢のようにホラーサーン軍の中核を衝こうとしたのである。

本来、数で優っていた側が取るはずのない作戦だった。そうまでしても、戦局はくつがえらなかつたのだ。

「恥を知れだと、よくもほざいた。卑劣な背信者がどの面さげてその言葉を吐く」

噛み切った唇から血をしたたらせ、アクバルは逆上の声をはりあげた。

だが威勢よく応酬しているのはかれひとりであり、ともに拘束された太守や領主たちは、嵐をやり過ごそうとするかのようにうなだれて沈黙していた。

アルプ・アルスラーンは軽蔑のまなざしで、一族を殺されつつあるアクバルを見下ろした。

「背信者はアーデイル様ではない。イスファハーン公ムラードだ。そしてダーマードの愚か者だ」

アルプ・アルスラーンがそのふたつの名を敬意のかけらもこめず言い放ったことに、怒り狂うアクバル以外の敗将一同は動揺を覚えた顔になった。その武将はイスファハーン公の名だけでなく、ダーマードという名さえ呼び捨てたのだ。

それは上帝の実名であった。

ひざまずいた領主のひとり、あえぐように 剣 にむけていっ

た。

「ホラーサーン公、あなたは征服時代以来、長く帝国の守護者でした……上帝にもほかの公家にも民にも、畏敬をもって頼られていたお方だったではありませんか。」

それがなぜこのような反逆を……上帝を廃したてまつり、イスファーン公家を滅ぼすなどおっしゃるのです。どのような意図があつて……」

剣 は領主の問いに片眉を上げもしなかつた。地平を見晴るかながらアーモンドの実をむさぼるかのように魔石を噛み砕いている。

アルプ・アルスラインがまた代わつて答えた。

「今しがたいったではないか。アーデル様は裏切りを受けたのだ。五公の誓いを知らぬのか、小僧ども。」

六百年昔の征服時代、アーデル様はこのファールス帝国を煙と灰燼のなかに築きあげて他の四公に分かちあたえた。

だがそこで他の四つの公家はさらなる進軍を拒否した。『われらはもう戦いを続けられぬ。ひとまず得た領地で傷を癒し、長年をかけて新しい国の力を養おう』と。しかし、そのかわりとしてかれらはアーデル様に誓約した。『いつの日か、かならず征服を再開し、人族が荒らした大地をわれらの手に取り戻す』と。魔石と塔と薔薇と太陽と月の家々が、おのおのの紋章にかけて剣の家に誓つたのだ。……四公家が日輪ひのわと月輪がちりんにかけて誓つたゆえに、アーデル様はそれをひとまずお信じになられた。信じたゆえにアーデル様は、みずから築いたこの帝国と五公の制度を守つてこられた。他国の侵略をことごとく退け、何度も起きた人族の反乱を鎮定し、背信帝の軍を打ち破つた。

どのような扱いを受けようとも耐え忍ばれた。他の四公家が持ち

回りで上帝位を占め、結託してアーデル様に玉座をけつして渡さないようにしていても。

すべて『いつの日か』といういにしえの誓約を信じておられたゆえだ。

信じておられたのだ　イスファハーン公家とダマスカス公家により、ヘラスとの恒久和平締結の話が持ち上がるまではだ」

鉄鋼のような声が、いちだんと重量を帯びた。

「イスファハーン公ムラードには、アーデル様は御妹をくれてやった。だがムラードは真つ先に人族との融和という世迷い言をほざきはじめた。

ダマスカス公ダーマードは、アーデル様が上帝に押し上げてやったようなものだ。背信帝の起こした内乱をアーデル様が鎮めたことによつてだ。それにもかかわらずダーマードは、人族との交易の利に目がくらんでムラードの甘言に乗り、一、二年のうちにもヘラスと和睦するつもりであった。

腑抜け。誓約破りの裏切り者ども。人族から攻められておいてさえ、恒久的な和平を望むだと。

アーデル様以外、当時の五公家の当主は代替わりしたとはいえ、一度誓つたことを破棄するとは許しがたい。

誇り高き生粹のジンは裏切りはけつして許さぬ。

五公制度などもういらぬと、アーデル様は決められたのだ。もとよりファールス帝国の玉座は、この地を征服したアーデル様に帰すべきだったのだ」

アルプ・アルスラインの獅子吼のごとき宣言は、原野を揺るがすかと思われた。

「われらはもはやホラーサーン公家軍ではない。

アーディル様こそがこのファールス帝国にふさわしい唯一の帝であり、われらホラーサーン兵こそ帝室の近衛軍であり、なんじら逆らう者らこそ逆賊に他ならぬ。

われらは上帝スルターンアーディル様の意に従い、逆賊を討っているのだ」

こんどこそ、敗将のだれもが絶句した。

「……篡奪さんだつというのだ、それは！」

すぐに声を荒らげたアクバルすら、気を吞まれた様子をその面から払拭することはできなかつた。

剣 ののどから、ごくんと音が聞こえた。噛み砕いた最後の魔石をのみくだした音であった。「アクバル」と 剣 は甥の名を呼んだ。

「なんだ、篡奪者！」

「ファリザードがどこにいるか知っているか」

身構えていたアクバルは、予想外の質問に面食らい、「し……知らぬ。妹は行方がわからないのか？」と逆に問うことになった。

「そうか」

淡々と 剣 はいったのち、質問を変えた。

「アクバル、わしに仕えるのと、殺されるのとどちらがよい」

むしろその問いを待っていたとばかりに、アクバルは血混じりの

唾を吐きかけた。

「だれが貴様なんぞに！ 貴様がすでに殺したわが薔薇一族の者たちのように皮を剥くなりなんなりするがいい、伯父よ」

「そのいさぎよさを称して斬首にする。アルプ・アルスライン、アクバルを連れて行って首をはねろ」

「御意に」

縛られたアクバルをつれてアルプ・アルスラインが退出してゆく。牙旗の“黒い剣”の紋章がひるがえる下で、剣は上空をあおいで別の臣下によびかけた。

「イルバルス」と。

翼を広げたタカの群れが旋回しながら舞い降りてくる。そのうち一羽の猛禽が剣の眼前に降り立つかとみえたとき、その姿は変じ、まばたきのうちに甲冑姿となっていた。片膝を地についた、屈強な体格のジンの将がそこにいた。

剣 はいいわたした。

「ひきつづき各地の薔薇の根を切れ。ただし成人しておらぬ者、特にファリザードは生かして連れてくるように」

剣の命令に、イルバルスは声らしい声を発して答えはしなかった。

かれは猛禽が鳴くような軋り声を齒のすきまから押し出し、地を蹴ってふたたび天へと戻っていった。

最後に、剣は両腰に差した一对の三日月刀ジャハーンギ “世界の覇者”と“世界の王者”の柄に手を置き、「イスファハーン公家の者以外の太守および領主らよ、聞くがよい」と敗將たちへ声を発した。

「一度だけは許す。人質にも取らぬ。

ただし次にわしに弓を引けば、一族もろとも皮を剥ぐ。

帰ったら、ここにいない近隣の領主や氏族の代表者にわが言葉を伝えよ」

血みどろの口元が物憂げにつむぐ、ぼそぼそとした低く小さな声にもかかわらず、だれもが戦慄の面持ちで固唾を吞んで沈黙した。

ターバンの下からのぞく金の瞳には感情はなく、代わりに静かな古代の狂気がたたえられている。

「かく伝えよ。わしは取り戻す。

六百年間、他の四公家にあずけおいていた帝都バグダードの玉座を取り戻す。そこなわれたわが力の大半を取り戻す。いずれは、群れはびこる人々が占拠する大地のすべてを取り戻す。

わしに従え。これよりわが言葉こそが上意なり。われスルターン・アーデルは、このジンの帝国ジンニスタンの支配者なりと」

28・滅び（前書き）

序幕これにて終わりを告げて
悲泣の中から新たに始まること

踏みこんだイスファハーンの中心地には死のにおいが満ちていた。いまなお大気にまじる煙と灰のにおい。毛髪が焼けたにおい。放置された死肉が腐ったにおい。

すべてが破壊されたわけではない。

円環状の市壁の大部分をはじめ、隊商宿も公衆浴場も、造幣局も寺院も学院も傷ついておらず、なにより水路や市民の住居や市場は手付かずであった。市民たちのほとんどは生きており、家々の門扉をわずかに開けてペレウスとユルドウズのほうをこわごわとうかがってきていた。

それでも、イスファハーンが心臓を砕かれたのは一目瞭然であった。

完膚なきまでに壊されたものが三つある。

市壁の四力所にある、巨大な門。塔は崩れ落ち、扉は破られて外敵を防ぐことができなくなっている。

八百名あまりの衛兵たちが寄宿していた兵舎。たたきつぶされたかのように屋根が崩落し、その跡地にイスファハーン兵たちの死体が積み上げられている。

そして、火を放たれて焼け落ちたイスファハーン公の館 ……

館の庭園に入るアーチ門の前で、ペレウスは嘔吐しかけた。

顔をそむけ、横手へと摒ぶたいに小走りになる。美しい薔薇が繚乱と咲きみだれていた生垣の焼け跡に身を折り、胃の中身を吐き出

した。

ほかのヘラス人たち、ゾバイダ、この館の使用人　みなどこにいったのかは不明だ。逃げたのか、殺されたのか、連れて行かれたのかさえわからない。

見つけることができたのはただひとり、庭園の門前にさらされたイスファハーン公ムラードだった。

正確にはその屍。

いや、より正確には、それは通常の屍ですらなかった。

「……坊や、隊商宿に帰ろうか。嬢ちゃんのそばにいてやったほうがいい」

同道したユルドウズが背をさすってくれる。彼女の声にも、戦慄が混じっていた。

わななく口元をぬぐったペレウスに、ユルドウズは深い息を吐いてつぶやいた。

「嬢ちゃんには気の毒だが、この実家には立ち寄せないほうがいいね」

かろうじてペレウスはうなずいた。

(ファリザードはどうしてもここに戻ってきたが……ああ、でも……だめだ……戻ってくるべきじゃあなかった)

捕らえたジオルジロスに、　剣　の決起とイスファハーンの陥落を聞いたのは昨日のことだ。

ファリザードは一刻もはやく父親の安否を確かめたがって取り乱し、ほかの何も考えられない様子になっていた。

やむなく、ペレウスと白羊族の一同は相談の末、空間移動の力をもつ“悪思の扉”をジオルジロスに開かせた。それによって行路を大きく短縮し、イスファハーンへ半日にして帰り着いたのだ。

とはいえ市中のどこに 剣 の兵がいないともかぎらない。それを警戒して、ペレウスとユルドウズは隊商宿にフアリザードを無理に残らせ、みずから偵察におもむいたのである。

（もういい。見るのはじゅうぶんだ。じゅうぶんに見た。

つぶさな報告なんて言えやしない。あの子にこんなことどう言えるんだ）

イスファハーン公は全身の皮を丸々剥がれていて、中身はさしあたり見当たらないよと？

その皮は、門扉に、大釘によって額と胸と両手のひらの四箇所打ちつけられていると？

ばかりと開いた赤黒い眼窩や口が縦長に引きのばされて、表情はさながら驚いているように見えると？ 血の筋を涙やだれの代わりに流していると？

目視した物に衝撃をうけて真っ白になった脳裏に、ジオルジロスが昨日語った話がぐるぐると渦巻いていた。

『 剣 は、残酷な古代の戦神のごときジンだ。アーマダンド・オ・カンド・オ・スーフタンド・オ・クシュタンド（かれら来たり、破壊し焼き払い殺し尽くし）……あの時代、あやつによって幾多の民族とその崇める神々が滅ぼされた。

その乱世がふたたびやってきた。あやつはまずこの巨大なファールス帝国を完全に掌握して軍事国家に鍛え直すつもりだ。近い将来には四方の国々を討ち滅ぼしはじめだろう。

わたしを殺してもいいことはないぞ。わたしは金次第の傭兵だが、あやつの味方にだけはならんからな。われわれは手を結ぶべきだとは思わないか？ もう一度いうが、 剣 が征服時代をふたたび始めたのだぞ』

（その始まりの烽火として真つ先にイスファハーンは陥落させられたのか）

横で、ユルドウズが声を厳しいものに切り替えてせつついた。

「イスファハーンにあたしたちはとどまっちゃならない。宿に戻って嬢ちゃんを説得し、この都市を出て遠く逃げるべきだ」

ペレウスも再度うなずく。うなずくしかできなかった。

そのときだった。小さな声が耳に届いたのは。

父上。

子供が途方にくれて親を呼ぶ声だった。

ふたりは血相を変えてふりむき、予想通りにファリザードの姿を見た。

扉に打ちつけられた、彼女の父親の剥がれた皮の前に。

なんてこった、と青くなったユルドウズがしゃがれ声でうめいた。

「馬鹿娘、あれほど言い聞かせたのに宿から抜けだしてきやがった」

ファリザードはひざまずき、血に汚れながら父親の皮の脚を抱きしめていた。

垂れ下がるカーテンにすぎるように、頬を父の皮膚に押し当て、

彼女はまたつぶやいた。

「父上」

『なにしろジンというのは憎むのも愛するのも極端なのだ』 生前のイスファハーン公の言葉に思い当たって、にわかに戦慄し、弾かれたようにペレウスは駆けよった。彼女の腕をつかんで、石床に広がる固まった血溜まりから立ち上がらせる。

視界をさえぎるように彼女の前に立ちふさがって両肩をつかんだ。

「ファリザード！」

知らずペレウスは、つまった声をだして彼女の名前を呼んでいた。だが、どんな台詞もその後には続けることはできなかった。

父の死骸を見た娘にかける台詞がわからなかったというのもあるが……ファリザードを正面から見た瞬間、すべての言葉が消え失せたのである。

一直線に駆けてくる間にすでに泣いていたらしき彼女の、濡れた金の目 いまは見開かれたまま、何も見ていない。涙があふれる瞳は虚無しか映していなかった。

繰り返し唇が動き、ほとんど呼気だけの声が延々とつむがれていた。

あんな言葉嘘です、父上。嘘です。嘘です。

許しを乞うその響きに、ペレウスは耐えられなかった。黒い腐血がこびりついた人形のような彼女を抱きしめる。

言葉というのがなんのことか、かれにはわかった。ファリザードがイスファハーンを飛び出す直前、父親に怒られたとき、かれもそれを聞いたのだから。

『父上なんてだいきらい』。

それが、娘が生前の父に投げた最後の言葉になったのだ。

ファリザードの体の、発作のような激しい震慄がペレウスにも伝わってくる。抱きしめる腕をゆるめれば彼女が壊れそうで怖かった。

駆けつけてくる足音がして、ペレウスは涙にぼやけた目で通りを見た。

クタルムシユと白羊族の十数名がファリザードを追って走ってきていた。

門の凄惨な骸を見て愕然と立ち止まったかれらを、ユルドウズが尖った声で叱りつけた。

「存外役に立たないね。なんで嬢ちゃんを外に出したんだい」

うなだれる白羊族たちの前に進み出て、沈痛にクタルムシユが謝罪する。

「すまない。ジオルジロスを縛りなおしているときにファリザード殿に隙をつかれて出て行かれた」

「クタルムシユに言ってるんじゃないよ」

ユルドウズは面目なげな配下の者たちをにらんだ。

「あたしら白羊族はジンに危害を加えることだけはできないんだ。念のためあんたがあんたの古老を見張る役になったのは間違ってるよ。」

悪いのは雁首そろえていながら嬢ちゃんに逃げられたこいつらさね。嬢ちゃんがこの……このひどいもんを見ちまったことはさておく

とっつて」

ユルドウズはあごで示した。

「ごらん、嬢ちゃんが見られてしまったよ」

それは確かだった。先刻から、道のそこかしこからこちらに集まってきた視線がその密度を増していた。それだけでなく一部の人々は街路に出てきて、一同におずおず近寄ろうとしてきている。

真っ先にそのひとり、白いひげの老爺が顔のしわを一層深めてよるよると間近にきた。この人はたしか市場で果物屋をやっていた人だ、とペレウスは気づいた。

「ファリザード様、おお、おお、よくぞ生きておられて……」

だが老いた果物屋の面に浮かんだ喜色は、ファリザードの様子を見て悲しげな色に変わった。

嘆声で唯一神に祈りをつぶやいた老爺は、ユルドウズに顔をむけてうろんげに誰何すいかした。

「……そのヘラス人の少年は、ちよくちよく買い物をしているところを見かけた覚えがありますが、あなた方はいったい？ イスファアーンの兵には見えませぬが」

「単に雇われた護衛さ……といっても、イスファアーンに帰り着くまでという話だったんだけれど」

ユルドウズが口ごもりながら言ったとたん、果物屋の老爺が必死な表情でつめよった。

「ならばお願いいたします。

どうかこのまま、一刻も早く、ファリザード様を安全なところまで送り届けていただきたい。せめて近隣の信用のおける領主のところへと。

この都市にいた衛兵たちはことごとくが殺され、いまファリザード様をお守りできる兵はいないのです」

「……運ぶくらいならね。あたしら白羊族はどうしてもジンには手を上げられないから、ジン兵が多い 剣 の軍と出くわしたら逃げるしかないけれど」

隻眼をきつく閉じてがりがり頭をかきながらユルドウズが答え、「それよりまずは確認したいんだけど」といった。

「これをやった 剣 の兵は何人だい？ そいつらはどこへ行った？」

「……二百名です。ただの二百名でした。

そやつらは、もとより市壁の内側に数日前から招き入れられていた客分たちでした。それが夜半にいきなり火の手を上げ、八百名余の衛兵たちを皆殺しにし、お館様を弑したのです！」

激調を帯びた老人の答えを聞いて（ 剣 が連れてきていたあの二百名だ）とペレウスは気づいた。

（本当にあれだけの兵でイスファハーンを制圧したのか）

しかし、さもありませんとユルドウズはうなずいた。

「 剣 の軍には、ホラーサーンの山地で訓練を受けた、山岳戦の

ための部隊がいる。そいつらは都市戦にも応用でき、少数でも危険だよ。入れるべきじゃあなかったね」

クタラムシュが「そうは言っても仕方あるまい」と首をふった。

「そうなることの予想は難しかったろう。その時点まで 剣 はファールス帝国の重鎮だったのだからな。

いまは上帝を名乗っているが」

その言葉に、

「 剣 は帝位篡奪者だ！」

ファリザードを抱きとめたペレウスは反応して、強烈に吐き捨てた。

「これは犯罪だ……あいつは正統な上帝ではない、この帝国を導く資格なんかあの男は持たない！」

ペレウスは重ねてかたくなに否定した。否定しなければならなかった。和平の意思などかけらも持たない 剣 が名実ともに帝国の頂点に立ったとき、ヘラスになんの望みが残るだろうか？

しかし、ユルドウズの苦みのこもった声が、冷徹な分析の響きをおびた。

「坊や……正統性、資格、そういったものの一切を 剣 は実力によってもぎとってきたんだよ。古代ファールス征服時にね。今度もそうしようとするにちがいない」

ペレウスが唇を噛んで黙ったのち、ユルドウズは果物屋に目をま

た向けた。

「ねえ、質問はもう一つしたよ。その二百名はどこへ行った？」

「奴らは皮剥ぎ公とともに来て、皮剥ぎ公とともに去りました。この一帯には残っていません」

「残っていない？」ユルドウズの隻眼がすつと細められた。彼女は親指で背後のイスファハーン公の皮を示した。

「じゃあなんでその、あんたらの主君を早く葬ってやらないのさ？」

その一言は、果物屋の老人および、周囲にできつつある人垣のひとりひとりの胸を貫いたようだった。

蒼白になって視線をさまよわせる者、眉を寄せて脂汗を浮かべる者とそれぞれが落ち着きなくなる。

悲しげに、弱々しく果物屋が言った。

「それは……どうしようもなかったのです、恥じるしかありませんが。」

みな怖いのです。皮剥ぎ公が怖いのです。かれは出て行く前に、市民に対して『今回のみは傷つけないが、反抗に起てば都市ごと屠る』と言い置いていきました。

市壁の門は壊され、衛兵は皆殺しにされました……皮剥ぎ公の軍がイスファハーンに戻ってきたとき、わしらには抵抗のすべがありません。ただでさえこの地は長く平和でわしらは戦に慣れておらず……」

「なるほどね。 剣 はたしかに借りを返す男だから、なにかあい

つに逆らうことをすればそれは身に返ってくるだろう。旧主の死骸を葬って、恐ろしい新帝の機嫌を損ねるわけにはいかないってわけか。

わかるよ。イスファハーン公は昔から柔和で優しいお方で、そのうえいまは死んでるからね。ちよっとないがしろにしたってかれから罰は受けないさ」

ユルドウズのいつもより辛辣な物言いには、すでにして怒りがこもっていた。

慙愧の面持ちで無言となった市民たちに、ユルドウズは隻眼の下をゆがめて言った。

「で、帰ってきた嬢ちゃんにここに居座られて、それを後から 剣の軍に『ファリザードをかくまっていたらろ』と追求されるのも怖いつてわけだね？」

けっこう。いましてがた白羊族もちよつと失敗したことだし、あんたらが追い出す嬢ちゃんは、 剣 の怒りごとこつちで引き取っていつてやるよ」

.....

イスファハーン市内の隊商宿は、どれも三階建てで中庭を広くとった構造である。

遠路をはるばる訪れる商人や旅人の泊まる場所であり、常ならばそついった客でにぎわいの絶えない場所であった。

しかしいまはペレウスたち以外に人気はなく、市の全域をおおう重苦しい沈黙に呑みこまれていた。

ファリザードの震えは止まっていたが、小部屋の寝台に軽い体を横たえても、彼女は身動きひとつしなかった。ぴくりともせず、空虚な瞳で天井を眺めている。

寝台の端に座って背を丸め、ペレウスは両手で顔をおおった。

（世界のすべてが、逆転した。ヘラスにとっても、この子にとっても）

こうなってはもう、結婚話どころではない。

ヘラスとの和平を推進してきたイスファアーン公家は一朝にして滅びの瀬戸際に追いこまれた。それを行った 剣 は人間世界に攻め寄せるために上帝位を奪いつつあり、かれとは微塵の妥協の余地もない。

（この先、どうしたらいい……
いますぐやらなければならぬことが何かだけはわかっているけれど）

ファリザードを逃がさなければならない。ジオルジロスの話によると、 剣 は侵攻したイスファアーン領各地で、イスファアーン公家の直系の血縁者をつぎつぎ殺害しているという。

（どこへ逃げれば……ミユケナイへ亡命させる？）

たしかにそこまで行けば当面は安全かもしれないが、極めて難しい。

ここイスファアーンからヘラスのかれの故国までは西におおよそ約5000km五百ファアルサング 砂漠と海水、大河と山脈、そしてなによりホラーサーン軍が立ちほだかっている。

扉の開く音がして、ペレウスは目を覆っていた手をどけた。

「……ユルドウズさん」

小部屋の入り口で、騎馬族長はファリザードに一度視線を投げ、それからペレウスに告げた。

「日が暮れたら出発する。夕食時に起こすからいま寝ときな。つたく、十万ディーナールの稼ぎどころじゃなくなったね」

「ぼくの国ができるかぎりの御礼をします。ですからお願いします」

ペレウスは思わずさがるような声を出していた。

ふんと鼻を鳴らす音が返ってくる。

「言わなくていい。」

ジオルジロスの野郎じゃないけどね、白羊族は 剣 の味方にだけはならない」

ユルドウズは戸口の柱に背をもたせかけ、片脚をあげて反対側の柱にかけた。

「その昔、ね。古代ファールスのホラーサーン地方には、白羊族の国があった。アク・コユンル

征服時代になり、 剣 がやってきてその王朝を滅ぼし、ホラーサーンを支配した。けれど百年後、あたしらの誇り高いご先祖は大反乱を起こしたのさ。奮闘して、 剣 に傷までつけたんだよ。残念ながらかすり傷だったらしいけど、実は先祖たちはなかなかいいところまでいったんじゃないかってたまに夢想する。

なにしろ、反乱を鎮定したあと、 剣 は白羊族の大人を皆殺し

にして皮を剥ぎ、それを敷き詰めた家畜小屋に白羊族の孤児たちを放りこんだんだから」

小部屋に流れるユルドウズの声からは感情が欠落していた。

「けどね 何度も言ったけど、あたしらはジン族には手出しできないよ。 剣 と戦うなら、はやくあたしら以外に味方の軍を見つけない」

「なぜですか!?!」

寝台から立ち上がってペレウスは質疑の声を上げた。

「そこまでされた恨みがあって、なぜ 剣 に逆らえないんですか!?!」

「理由なら、これさ」

言つやユルドウズはどこに隠し持っていたのか小型の弓矢を取り出し、一瞬で寝台のファリザードへ狙いを定め、弦を引こつとした。驚愕したペレウスがファリザードの身をかばう寸前に、「ぎっ」と呻いてユルドウズは弓を取り落とし、自らの手首を押さえた。

「……ほら、見なよ」

彼女は、上着の袖をまくりあげて、ペレウスに見えるように手首をむき出しにした。

手首の肌に刻まれた、剣の紋様 傍目には文身こゝろずみに見えるそれが、虫のようにぎちぎち動き、皮膚に潜り込みかけていた。切り口が開き、つっと手首から血が幾筋も流れた。

「昔話の続きさ。親の皮の上で育ち、発狂することなく無事に成人を迎えられた子らを放逐する前に、 剣 は手ずから強力無比な封印紋をほどこした。子々孫々の呪縛をね。

“ 決してジン族に手を上げることができない ” という縛りなんだよ、これは。やるうとすればごらんのとおりだ。嬢ちゃんに……ジン族に向けて本気で放つつもりだったなら、いまごろこの手を切り落とされているよ。

白羊族の生まれてくる赤子には、みなこの呪印がついている。わかつたろう、坊や。ジン族同士の内乱では、あたしらはまともな戦力になれないんだよ。

たとえ、それがどれだけ悔しくてもね」

語り終えたユルドウズは、弓矢を捨てて出て行った。血を点々と床にこぼして。

ぼすんと寝台にふたたび座り込み、ペレウスは長嘆息した。

マントの裾を、背後から引っ張られた。

死んだようになっていたファリザードが、ペレウスのマントをつかんでいた。

後ろに手を伸ばし、ペレウスは彼女の手に触れた 今度は手をぎゅっと握られた。強く、強く、骨が軋むほどに。

胸を衝くすすり泣きが、かすかに聞こえた。

それが次第にむせぶように強まる。絶望が凝って音に変わったかのようなファリザードの嗚咽に、ペレウスは自分も頬を濡らして聞き入りながら、少しほっとしていた。

どんな悲惨な泣き方でも、泣けるようになったのならはそのほうがまだ良い。

正気に戻っても、彼女の向き合わねばならない現実は無々とした

奈落だけでも……

いや。

ふいに、ペレウスは強烈に思った。ぼくはこの子を助きたい。

どのみち 剣 は倒さねばならない。絶対に。

ぎり、とあごを食いしばる。

古代より常勝を誇る最強のジンであっても、 剣 には敵が多い。力を結束させれば討てないはずはない。誰かがそれをやらねばならない。

「そつだ、ヘラス諸都市は」ペレウスはつぶやいた。「 剣 への対抗戦線を、帝国のほかの四家と組めるはずだ」

28・滅び（後書き）

第一章はこれですとなりませ。

2 - 1 ・最悪の再出発点（前書き）

剣 の軍薔薇領を恐怖に落としこみ
ファリザード心許まれて鬱々とすること

2 - 1 ・最悪の再出発点

毎夜、悪夢を見るようになっていた。

ジンの少女は走る。裸の少女の足元でがちゃがちゃ耳ざわりな金属音が鳴る。それは両の足首にはめられた鉄環から伸びる鎖が立てるものだった。泣く少女がよるめき駆けるほどに、肌に食い込んですり傷をつくる。足の指の股まで流れる血でぬるぬるしていた。

どこを走っているかも定かではない。一步ごとに周囲の風景が変わる。

光白き昼。星輝く真夜中。朝焼けの夜明け。

峻険たる岩山、闇が塗りつぶす洞窟の中、焼けつく熱砂の砂漠、奇妙な四角錐の泥の建物の建つ大河のほとり。

いくつもの神殿を見た。静謐で吐き気をもよおすほど無機的な白い石の小部屋。黒い巨石を据えた地下の神域。オリーブと牡牛の頭が捧げられた台座。乾いた泥のレンガを積み上げた高い神殿。

戦場を見た。体に亜麻布だけを巻いた戦士たち。呪詛と叫喚、イナゴのように宙を飛ぶ矢群、投げ槍、乱戦の中でひざまずいて命乞いする兵士、その眼窩に剣を突っこむ敵兵。

景色を彩る邪神と怪物たちを見た。有翼獅子を、獅子の頭を持つ鷲を、鷲の頭を持つ人を。象をつかんで舞いあがる巨鳥を、深淵にひそむ牡牛の神を、一つ目一つ脚の巨人を。泥濘にのたうちまわる大いなる七匹の蛇や、暗黒に住まう黒い蛙の姿の神を。

……万象が流転する光景のなかで、一柱の神が休むことなく少女の後を追ってきていた。彼女の足の鎖は背後に伸びて、その神とながっている。

“皮を剥ぐ車輪”の神　火を噴き、無数の命をその下に轢きつぶし、屍山血河を築きながら躍動してせまってくる。

こっちに逃げなさい、フアリザード。

戦場の風景の片隅に見慣れた赤レンガの館があつて、そこから誰かの声がした。ペレウスの声にも、イスファハーン公の声にも聞こえ、あるいは聞いたことのない母の声のようにも思われた。

よろよるとその生垣に近づいて飛びこみ、薔薇のとげで肌に無数の傷を負わされながら、もがいて向こう側に抜けた。誰かの手が、薔薇の茂みから、傷ついた彼女の体を抱き上げた。

もつ心配することはない、愛し子よ。

父の声で言われて、心からの安堵に泣き笑いしながら見上げると、かれには全身の皮膚がなかった。

イスファハーン公領はファールス帝国の広大な中央部を占め、帝都バグダードのある上帝直轄地メソポタミアにも接している。

薔薇の公家の宰領するこの土地は、外敵の来襲をほとんど受けぬ位置ゆえに、帝国内でもっとも平和を享受してきた土地であった。

……反乱を起こして西進してきた アル・シャムシル 剣のホラーサーン軍に牙を突き立てられるまでは。

最大の都市イスファハーン陥落から、すでに一月が経とうとしていた。

“帝国最精鋭”の名をほしいままにしてきたホラーサーン軍の猛威はとどまるところを知らず、抵抗や反撃を一方的に粉碎しながら、東から西へ信じがたい速さで横断していく。

都市ニハーヴァンド　一万四千の兵をかき集めて野戦に踏み切った太守アクバルを三千のホラーサーン軍に討たれ、剣の前に城門を開く。衝撃的な敗戦に、戦意喪失した周辺の小都市群もそろってホラーサーン軍に降伏。

都市シーラーズ　領主にしてイスファハーン公の四男ニザーム、近隣都市の諸侯の兵を糾合して五千の軍を仕立てあげ、ホラーサーン将ザイヤーンの率いる黒羊族カラ・ココンルの軽騎兵軍五千と対峙。しかし統制と機動力の点でまったく追いつかず砂漠を引きずり回され、矢の弾幕を浴びて統制が壊乱したところで突撃を受ける。ニザームが戦死して軍は四散し、守る者なき都市は失陥。

都市フムセル　人族のホラーサーン将カーヴルトが率いる四千の軍に攻囲を受ける。周辺地域を焼き討ちされ、あふれかえる難民を市壁の中へと追い込まれたうえで包囲される。工兵に都市の水脈を断たれ、さらに難民に偽装して潜入してきたホラーサーン兵に毒を貯水池に放りこまれる。数日で水の備蓄が尽きて降伏。

都市バストラ　バグダードに沿うティグリス川の河口にある、軍船を有する港町。飛翔するホラーサーン将イルバスの降下急襲によって海上でも苛まれ、船団は耐えかねて逃散。バグダードの最大の生命線である南からの物流、ほぼ断たれる。

都市クテシフォン　バグダードから馬で一日と要しない距離の

古都。ホラーサーン将アルプ・アルスラーンの指揮下に合流した一万の軍に攻撃される。ティグリス川の水を引いた堀を頼みとして籠城する方針をとるが、“河畔の葦や茅を束にしたものを堀に大量に投げ込み、水を吸って沈んだ束の上に板をかぶせる”という方策により、堀を埋め立てられて無効化される。クテシフォンが援軍到着の前に陥落したことで、帝都バグダードに最大の激震走る……

「わたしのせいだ。わたしがイスファハーンを離れなければ、都市を守る衛兵はすべて父上のそばに留まっていたんだ」

鞍上のファリザードが数日ぶりに発した小さな声は、絶望と自責に満ちていた。

白羊族の馬群のなかで彼女と並んで馬を進めていたペレウスは、うまい慰め方が見つからず無難な言葉をかけるしかなかった。

「きみのせいじゃない。お父上の殺害は アル・シャムシール 剣 が すべての責めを負うべきことだ」

すこし逡巡して、

「……それに、何人か衛兵が増えたところでさしたる違いはなかったはずだ」

だが、ファリザードはゆっくりと首をふった。その彼女の表情を見てペレウスは胸を衝かれた。

瞳の光をよどませて、彼女は生氣無く笑っていた。絶望の笑みを刻んだ唇が、言葉をつむぐ。

「わたしにかかっていた宣告が成就したんだ」

「ホクム」

おうむ返しに問い返して、ペレウスは思いだした。そういえばイスファアーン公から聞いた気がする。

ファリザードがなおもおかしげに続ける。

「わたしが生まれたとき、ジンの古老が言ったんだ。

いまある争いのかたちは終焉するって……わたしがそのきっかけになるって。わたしは親の血にまみれるだろうとも……」

ペレウス……この国は、ファールス帝国はめちゃくちゃになった。内乱が始まって、ヘラスや十字軍のような弱敵とたらだら戦争するどころではなくなっただ。長い戦は終わった、おまえたちにとつては。

ほら、宣告は成就しているだろう？」

そこまで話して、暗い諧謔の響きが一転し、すすり泣きに変わった。

黎明号サハールの上にはぼつりぼつりと涙滴を落とし、ファリザードは馬上にうづくまるように背を丸めた。

その、心が折れきった様子にペレウスは胸騒ぎを感じた。（この子はこの先大丈夫なのだろうか）と不安になったのである。

（……いまの情勢では無理もないけれど……）

イスファアーンを出てから半月と経っていない。だが、情勢の悪化はまさしく転げ落ちると言うのがふさわしいものだった。

イスファアーン公ムラードその人を殺したのを皮切りに、剣はその直系の子息たちを、ひとり残らず捕殺するつもりであるかの

ようだった。すでに次男アクバル、三男ファフル、四男ニザーム、五男ハイダル、七男ターイ、八男クバードが殺害されている。ファリザードの兄たちはあと三人を残すのみとなっていた。

それだけではなかった。

剣 の連勝とイスファハーン公家の度重なる敗戦に伴って、イスファハーン公領にはある変化が起きていたのだ。

イスファハーンを出て最初に訪ねた村では二日と置いてもらえなかった。「ここは防戦に向きませぬ」という村長の訴えはもつともであったが、留まられては困るといふかれの底意は感じられた。

次にたどりついたのは、イスファハーン公家の旗手が治める城邑バードであった。だがペレウスたちが三日そこに滞在したのち、ジン族の城主は話を切りだしてきた。「飛翔型のジンの目撃情報がありました。飛翔型の変化をなすジンは十中八九ホラーサーン兵です。この地は危険です、どうかもっと北へ」と。婉曲に、やんわりとではあるが、これ以上歓待できない旨を通告してきたのである。

その北隣の都市カーシャーンの領主にいたっては、最初から城門を開けようとしなかった。カーシャーンの領主本人が使者を寄こして伝えてきた言葉は、「わたしはすでにホラーサーン軍を攻撃しました。敗れたとはいえ最低限の奉公の義務は果たしております。次に弓を引けば一族ごと殺すと皮剥ぎ公に通告されておりますので、どうかお許しいただきたい」であった。

(……諸侯も民もみんな 剣 に怯えている。主君であるファリザードの一族に奉公することではなく、 剣 の軍の脅威を避けることを第一に考え始めている)

イスファハーン公家はこのまま滅亡すると思っているのだろう。立ち去る間際にかねらの顔色を見るとそれがわかった。良心の呵責

と憐れみと、巻き込まれずにすんだという強い安堵を浮かべたあの表情

（この地のジン族も人族も薄情にすぎやしないか？ それともこ
とん現実的なのか）

いずれこうなることは予想できた。そもそも都市イスファハーン
からすらも、実質上市民の懇願で追い出されたようなものだったの
だから。

しかしあまりにも見限られるのが早すぎる。イスファハーン公の
死に様に衝撃を受けたファリザードが重ねて心に打撃をこうむって
もおかしくはなかった。

「宣告があるからこうなったのなら……母上も父上も、わたしが殺
したようなものだ」

陰鬱な涙をつぎつぎと頬に伝わらせながら、うなだれたファリザ
ードが嗚咽している。

「生まれて……生まれてこなきゃ、よかった……」

その弱音は、さすがに聞き過ごせなかった。

ペレウスが反射的に否定の言葉を怒鳴りかけたとき、ぱしんと空
気が破裂する音が響いた。

足元の礫砂が飛び散り、ペレウスのみならず、ファリザードもび
くりとしてしゃっくりを呑んだ。

いつの間にかそばに来ていた女騎馬族長のユルドウズが、鞭を振
り下ろして大地を叩いたのだった。

「甘ったれるんじゃない、小娘」

冷たく乾いた声と視線で、隻眼の老女は馬上から叱咤を投げつけた。

「進まなきゃならないときに鬱陶しく泣くんじゃない。

この手がジンを打てるなら一撃くれてしゃっきり目を覚まさせてやるところだが、そもいかないので状況を説明してやる。

いいかい、身を隠す岩や砂丘にとぼしいこの場所はさっさと通りすぎなきゃならない。クタラムシュの“隠形”の術があるにしても、あれだつて万能じゃない。同じく“隠形”に習熟したジン兵には見破られやすいんだ。とつとと行けつてこつた」

ユルドウズの言葉の鞭は、手にした鞭よりも痛烈に相手を打っていた。

「イスファハーン公家のファリザード、あなたには討つべき仇ができた。

うつむかず、伯父に一矢報いるために前を見る。ジン族は血の貸しを取り立てる種族なんだろう。

まずは忠誠心たしかな味方の庇護を受けて安全を確保し、それからイスファハーン公領全土に呼びかけな。……この前はぶるつてる城主にたまたま当たっちゃったが、あんたが主君の仇を討つため剣と戦えと号令をかければ、決起する者はまだ少なくないはずだ」

「無理だ……」

涙をこぼしながら、風に吹き消される寸前の灯火のような弱々しい様子でファリザードはつぶやいた。

「戦っても伯父御には勝てない………決起は必ず鎮められる」

ユルドウズはそれを聞いて、冷静にうなずいた。

「 そうだね。 あんたの言うとおり 剣 はちよつとばかり強すぎるかもしれない。 殴ろうとする手のほうが切り裂かれるかもね。 わかった、 あんたの家のことだ。 仇を討てとは強要しないよ。 それでも覚えときな。 殴るか殴らないかを選べるだけ、 あんたはましなんだよ。 だからせめて、 めそめそはしても泣き言を吐かず黙って泣くんだね 」

白羊族の女族長はペレウスを見て一言「坊や、あまり甘やかすんじゃない」と釘を刺し、後続の馬群のほうへ走り去った。

ペレウスは沈思してそれを見送った。 白羊族が囚われている呪いジンに決して手出しできないという呪いのことを考えていたのである。

(剣 は復讐の権利すら人族には認めない)

「……………ごめん、ファリザード。 ぼくも戦うべきだと思つ……………」

視線を戻さず、かれはためらいがちに言った。 打ちひしがれたファリザードを見ていると、どうしても同情の念を禁じ得なくなる。 ぼろぼろ落ちているであろう彼女の涙から目をそらさなければ、言うべきことをはっきり言うことができなかった。 「甘やかすな」と言われた最前の言葉が頭に残っていた。

しゃくりあげる音がしたが、ペレウスはそちらをつとめて見ないようにした。

……

風更けて夜半、夜営の天幕が立ち並ぶ横である。ホラーサーン軍の部隊に発見されることを怖れて焚き火はしていない。

「九十六戦九十六勝」

額を寄せ集めた三人のうちで、なるべく淡々と言おうとする口ぶりのユルドウズが告げた。

白羊族の斥候が砂漠で隊商と出会い、聞いてきた話ということであった。

「イスファハーン公領に侵攻したホラーサーン軍が、この短期間で打ち立てた戦績だそうだよ」

それを耳にしたペレウスは青いレモンをかじったような渋面になっただが、

「ふん、鵜呑みにすることはない」ユルドウズは肩をすくめた。「剣の軍みずからが流した話だろう。細かい戦闘すべてと落としたり城の数を合わせてそう吹聴しているんだろうよ。こけおどしの一種さ」

だが、クタルムシユが表情を変えず首を振った。

「話を誇張して宣伝に使っているのかもしれないが、分散しているホラーサーン軍に襲いかかったイスファハーン領の軍や太守の軍が、ことごとく返り討ちにあうか撃退されたのは事実だろうな。剣の鍛えた将兵たちは勝ちつづけている」

「……なんでこうまでイスファハーン公家側は敗戦を重ねたんでしょっつ？」

気を重くしながら問わずにいらなかったペレウスに、クタラムシユが向きなおった。かれは「多くは誘い出された結果だ」と断定した。

「誘い出された？ どういうことですか」

「城を攻めるより野戦で勝つほうがたやすい。

ホラーサーン軍はみずから分散し“常より弱い”状態となったのだ。今こそ好機とイスファハーン領の諸侯に思わせることで、野戦にかれらを引つ張り出した」

……大軍は水や糧秣をはじめ大量の補給物資を必要とする。荷駄隊の数を削って迅速な行動を起こすときは、あらかじめひとつの経路に物資を集積させているのでなければ、徴発を行いながら進むことになる。

三万のホラーサーン軍はもともと、数千の小規模な軍勢に分かれ、途中のいくつもの都市や町村から補給を受けながら、複数経路をたどって西進していたのである。

剣が帝位篡奪を宣し、町村の自発的な物資提供に期待できなくなつてからはその傾向はいちだんと進んだ。

薄く、広く散開したのだ。

それは物資徴発の面では必然的な成り行きであつたが、戦略面では常道に反している。なぜなら、そのように広範囲に引き伸ばされれば、反比例して軍の力は薄まってゆくからだ。“兵力は集中すべし、分散するなかれ”ということである。

もちろん“味方”の領内に行く時に攻撃されることを警戒する必

要はないが、イスファハーンが陥落して以来、ホラーサーン軍は四方を敵に取り囲まれた状況にあるのだ。

そう、当初のホラーサーン軍は各個撃破のいい対象に見えたのである。

それがとんだ甘い見通しであつたと攻撃した諸侯たちが気づいたのは、血による代価を払わされた後であつた。

「ホラーサーン軍は百戦百勝である」という図を 剣 は短期間で満天下に示した。

イスファハーン領の諸侯は、弱まった状態にあるはずの敵を血気にはやって攻め、完膚なきまでに打ち破られた。さぞ強烈な敗北感を植えつけられたことだろう。

どうあがいても勝てはしないと思いこむほどにな

クタルムシュはぐるりと首を回し 天幕のひとつを見やった。

ファリザードが眠る、というより臥せている天幕を。

「その桎梏^{しごく}を外してイスファハーン領が総決起するためには、かれらの精神の支柱となる者が必要だ。その者を中心としてイスファハーン公領がもう一度奮い立てるような誰かが必要なのだ。

……先代イスファハーン公ムラードの死にともない、その長子イブン・ムラードは薔薇の公家の当主となつた。かれは上帝のひざ下に保護されており、 剣 に復讐を誓つたと聞く。

しかし、薔薇の家は女兒のほうで有名だ。実績なき若き指導者であるイブン・ムラード殿が求心力を強化するためには、御妹のファリザード殿の名も必要となるだろう」

「……言っていることはわかります。ですが、あの……ファリザードは」

伏し目がちになって、ペレウスは「ファリザードは限界です」と告げた。

「父親の剥がれた皮を目撃した衝撃からも立ち直っていないんです。いま、重責を担わせて追い詰めれば」

「精神のひびがもっと大きくなりかねない」ぼそりとユルドウズが後を引き取った。

「無理をさせるべきじゃないね。それに、遠い国へ亡命して安らかに過ごすって選択肢もあるんだ。それを選んじゃだめということはいいよ」

ペレウスは目を丸くしたが、いや、と思いなおした。甘やかすなど口では言いながら、ユルドウズがファリザードを気にかけていることは薄々分かっていった。しかし人族ふたりの意見に、クタラムシユは謎めいた笑みを返した。

「わたしはさほど心配していない。

イスファハーン公家の女兒、すなわち薔薇姫がジン族のあいだで尊ばれてきたのは、なにも生まれにくく希少という理由だけではないのだよ」

「ふうん、そういうえば聞いたことがあるね。価値が高いと見なされているってことは。

で、もったいぶらずその所以を教えてくれるかい？」

「先祖返りだ」

「先祖返り？」

「うむ。血の特質を色濃くして活力を吹き込むのだ。

ジンの魔法をもたらず肌の呪印　これは遺伝により受け継がれるものだと知っているな。つまり、家系によってどの能力が顕現するかがおおよそ決まるわけだ。わたしはサマルカンド公家を祖とするサンジャル氏族に生まれ、この氏族に受け継がれてきた“隠形”の呪印を持ち、また“大力”の呪印をも合わせ持つ。

稀に変異が起こるが、ジンの生まれ持つ力は近い血統の定めるところであるのが普通だ」

だが薔薇の公家は特殊なのだ、とクタルムシュは言った。

「上古の世、ジンの力はいまとは比較にならぬほど強かったという。それは人の魔術師の力も同じだが……いまの世にあつて魔法は衰微し、世代を重ねるほどにジンの力は衰えた。だが、薔薇の女児は自分の母系の特質を濃縮し、人並み外れた傑物として生まれてくるのだ。呪印はもちろんのこと、あらゆる能力や性格を。」

そして自分の資質と、自分の夫となる者の家系の特質とを混ぜ合わせ、強調して次の世代へと伝える。これにより、ジンは血の衰微を遅らせることができる。

羊や馬の交配を思うがいい、ユルドウズ。生まれてくる子の質を高めたいとき、優秀な母胎は優秀な種よりも尊ばれるだろう。それゆえに薔薇の公家の女児は求められるのだ」

「……そうなんですか……あの、ということはファリザードは」

「ああ。ファリザード殿は他家から嫁いできた母君の血を濃く受け継いでいるはずだ。

すなわち武をつかさどる　剣　の家系の血を」

クタラムシユが言い切ると、人族ふたりは顔を見合わせて懐疑の視線をやり取りした。

一拍置いてから、それぞれ異論の口火を切る。

「クタラムシユ、そいつはちょっと信じがたいねえ。……心がまいつちまつてるあの嬢ちゃんの様子を見てると、ね」

「フアリザードの性格に、剣と重なる部分があるようには思えません。あんな冷血残忍な化物と。」

……ところで、剣の家系の呪印ってなんですか？」

「はつきりしたことは不明だ」

話を一気にうさくさくする言葉が帰ってきた。ペレウスは眉を寄せ、闇を透かしてまじまじとクタラムシユの真剣な顔を見つめた。

「……不明？」

「剣はもともと氏族不明のジンだ。子もいない。」

征服時代以前は、他の四家の客分であつたと聞く。妹を伴って砂漠の彼方からふらりと現れ、四家のもとに身を寄せたが、やがて実力によって頭角をあらわした。征服戦争で、古代ファールスの制覇という武功をたて、新たに一家を打ち立てることを許された。

だが、かれの祖が誰であつたのか誰も知らない。かれの血縁者は死んだ妹と、その妹がイスファーン公との間に産んだ子たちだけだ。

かれが振るつたはずの呪印の能力については、征服戦争をかれとともに戦った世代は黙して語らない。征服された側の人族も語ることを許されず、記した書物はすべて剣自身に焼かれた。……だ

が記録の抹消に完璧はない。いくつかの伝承は残っており、その能力を推測することはできる。

いずれにしろ数年から数十年待てばはっきりする。ファリザード殿に呪印が顕現すれば、剣の能力も必然的に明らかになるだろうから」

「……数十年かい、悠長だね。能力がわかる前に 剣がこの帝国を再制覇しちまうだろ」

「まあ、それを待たなくとも、どこかの古老が知っているだろう……そうだ、明日の夜にもジオルジロスに聞いてみるか。あれも一応古いジンだからな」

捕虜となっている賊の名が出たが、ペレウスはその提案にあまり気が乗らなかった。

「あいつの口から出るのは嘲弄か嘘ですよ。もしくは嘲弄たっぷり
の嘘です」

「うむ、気をつけよう」

「ほんとうなら、あいつの操る 扉の力を利用することも避けた
かったくらいです」

「わかっているさ、ペレウス君。だが背に腹は変えられなかった。
これからも利用することになるだろう」

クタルムシユは夜空をあおぎ、つぶやいた。

「飛翔型ホラーサーン兵の姿が近辺で目撃されたというのが本当な

ら厄介だ。あいつらは空から見る　足跡が残る平野だと“隠形”でも撒ききれん。一瞬で逃げるためには空間移動くらいしか手がない。

まずは、どんな手を使ってもファリザード殿をその兄君たちのところに安全に送り届けることだ」

2・2・浮上開始（前書き）

夢を見てファリザード不安を吐露し
意を決して一歩目を踏み出すこと

2 - 2 ・浮上開始

『敵の弱きを叩くことが覇者の常道だ』

庭のナナカマドの木の股に腰掛けた伯父が言う。枝に座って足をぶらぶらさせる彼女に向けて。

『獅子は象ではなくガゼルを追う。群れのなかの壮健な個体ではなく、主に足の遅い老獣や幼獣を狙う。固い肩ではなく柔らかい喉笛を嚙んで殺す。獣の王にしてかくの如し。』

強をもって弱を討ち、大をもって小を討ち、衆をもって寡を討つ。勢い盛んなるをもって衰えたるを討つ。それが始原の、純粹な武の姿だ』

でも弱者を狙うのは卑怯ではないの、伯父上。卑怯が、武の本質なのですか？

『弱き者ではなく、弱き部分だ。全体を鳥瞰したとき、もろい箇所は真っ先に狙われるということだ。』

おまえは刀術を習い始めていたな。武芸においては対手の隙を探るであろう。急所を狙うであろう。それは卑怯か、フェアザード』

う……ううん。でも、やっぱり、大人が赤子をいじめるようなことは卑怯になります。

『おまえのその論は、倫みちと呼ばれるものに基づいている。』

獣の一部は同族の赤子でもむさぼり食う。純粹な武はあくまでも獣の理だ。対してジン族……それに人族など、智を持ち社会を築く者らは、倫に沿って生きなければならぬ。

ゆえに、武において倫は枷だ。

だが倫は、同時に武を巧緻たらしめる要素ともなる。純粹なる武から先へ進んだ巧緻の武においては、弱者が強者に勝つやりようも存在する』

どうやって弱者が強者に勝つのですか。

『方策はいくつかある。一つ目は』

革の天幕の内側ではね起きた。

おびただしい寝汗をかいていた。毛布をはねのけたために夜気が冷え冷えと身に沁む。悪寒が心悸に重なって気持ちが悪かった。

(夢……)

怪物の夢でも、血の夢でもないにもかからわず、いま見たものはやはり悪夢だった。

滅入って顔を覆ったとき、天幕の壁が外から軽く叩かれ、ファリザードははっとした。

「……大丈夫？ ファリザード」

細々と伝わってきたのは、ペレウスの声だった。

すでに皆が寝静まっており、外は月光が中天から照らしている時刻のほずである。もっとも、この少年はここ連夜ユルドウズやクタルムシユたちと話し込んでいるようだったので、まだ起きていても不思議はなかった。

どうやら夢から醒めたときに小さく叫んだか天幕を揺らしたかしたようである。たまたま外を通りかかったペレウスを驚かせてしまったらしかった。

なんでもないとやおうとして、少女の口から出たのは、

「入ってきて」

「様々な悪夢を見るんだ。たいていは父上か伯父御が出てくる」

ファリザードの吐露をペレウスは聞いていた。

ひざを抱えて小さく縮こまる彼女の隣に座っている。

「父上はあの館にいて、わたしが走り寄ると抱き上げて笑ってくれる。でも、夢の終わりでは館は火を噴いて灰になり、父上は笑顔のまま、皮を剥がれて血みどろになっていく。」

伯父の夢は…… 剣 は…… 軍を率いていて、いつだって殺しただれかの皮を剥ぎとらせて陣幕の前に晒すよう命じている。晒されているのは兄上たちの皮であることも…… でも、そういう夢よりずっと耐えがたいのは、昔の夢だ」

ファリザードの声がわなないた。

「庭で、客として訪れた伯父御がわたしに話を聞かせている夢だ。わたしはあの男を嫌いではなかった。優しい言葉をかけてきたことも笑顔を見せたこともなかったし、むしろいつでも霜刃のような雰囲気の怖い男だったけれど…… 子供のわたしにも真摯に向い合ってくれた。三日月刀“七彩”ハフト・ラングも馬の“黎明”サハールも、伯父がわたしに与えてくれた。」

…… 父上を殺したあの男へは憎悪の念しか残すべきではないのに
……」

天幕の内は、間近にいても面輪しかわからない暗さである。それでも、ファリザードの憔悴した様子は見て取れた。

彼女がそれ以上話さなくなると、気詰まりな空気が天幕を満たした。ペレウスは闇を見つめて考えていた。彼女の弱音を、どう受け止めればいいのかわからなかった。

慰めの言葉を吐くべきか、叱咤激励するべきか、気にするべきではないとまたも論すべきか　どれも適切とは思われず、かれはただ話題を変えた。

「ホラーサーン軍の動向だけれど、いま　剣　は……」

そこで話を一度切ったのは、（しまった、この話題を選んだのはまずいかもしれない）と気がついたからである。ところが、

「バグダードの門前、落としたクテシフォンの町に軍を続々合流させはじめたのだろう」

鬱々した声のファリザードが、こちらが伝えるはずだった情報を先取りしたことにペレウスは瞠目した。

「あれ、ユルドウズさんに先に聞いてた？」

ファリザードは首を振った。

「……伯父御はこれまで、散らばった狼の群れのごとく軍を分散させていた。それによってイスファハーン公領諸侯を野戦におびき出し、細かい勝利を積み重ねた。」

だが帝都バグダードの大円城の、堅牢無比なる城壁を攻めるためには、巨象の体当たりが必要だ。ホラーサーン軍は結集し、本来の力で攻めるはずだ。クテシフォンを落としたと聞いたときから、そ

れは予想がついていた」

ひざに顔を埋め、取り憑かれたようにファリザードは語りつづけた。

「ホラーサーン全軍が伯父の統率のもとにまとまれば、もはや正面から戦えはしない。

こちらが取りうる戦略は……昔、伯父自身が言ったことがある。

『巨大な敵軍を退ける方策の常道は、飢えさせることだ』と。小部隊による四六時中の襲撃で敵軍の後方を悩まし、わたしたちみずからの畑と村々の倉を焼いて敵の補給を断ち、反転した敵に攻められれば各地の城に拠って執拗に粘る。それしかない。

けれど伯父はそうした抵抗に対し、身の毛もよだつ報復を行うだろう。町を破壊し、城市をまるごと屠ることを何度もしてきた男だ。イスファハーン公領は流血の巷と化すだろう。

そして、そういう戦い方であがいたとしても、最後には制圧される光景しかわたしには思い浮かばないんだ」

鮮烈な驚きに知らず息を殺してペレウスは聞き入っていた。理解したのである。

（この子は、ただ怯えていたのではない。ぼくよりよほど考えているかもしれない）

だが、おそらくそれゆえに……明るい未来が見えないがゆえに彼女ががんじがらめになったのだ。

「わたしの側についてくれる領主や民がいたとしても、最後にはみんな殺される……やると言ったら、伯父はかならずやる。民を巻き添えにして苦しめた末、勝ちも得られず犬死にさせるくらいなら、

最初から抵抗しないほうがいとすら思えてきてしまう」

気鬱に囚われた少女の声が天幕の内にかそけく響く。

「意気地なしとわたしを軽蔑するだろう。けれど、心が萎えてしま
うんだ……」

「……わかったよ。きみの言いたいことは」

ペレウスは言い、目を閉じて心に面影を浮かべた 故国ミュケ
ナイの懐かしい風景を、貧しくも誇り高い人々を。

それから転じて、ファールス人を。生きているかどうかもわから
ないゾバイダをはじめ、出会った数多の異国人たちを。

（かれらはファリザードにとっては、ぼくにとってのミュケナイの
人々と同じなんだ。

戦ったほうがいいなどとぼくは言った。けれどあれは無責任な言
葉だったかもしれない。領民を殺すことになっても最後まで戦えだ
なんて、彼女に強い権利はぼくにはない）

肺の底から漏れてきたため息を、ペレウスは途中で噛み切り、

「それならばくの国へ行こう、ファリザード」

前々から考えていたことを静かに言った。

「きみが戦いたくないなら、それでいい。きみを客分としてミュケ
ナイへ連れていく。なんとかして戦火の及んでいないヘラスまで逃
げよう。兄君たちが望むなら、かれらもミュケナイに亡命すればい
い」

横の彼女の体がこわばるのが感じられた。

「それは……でも……」

「問題が？」

短く問えば、負い目を感じて萎縮した声が返ってくる。

「……そうまでイスファーン公家のためにしてくれても、もうおまえに何の得もない……伯父の敵意を買うだけだ」

「ぼく個人は、剣から敵意以外のものを受け取るつもりはない。あいつが矛を納めないかぎり」ペレウスは本能的な恐怖をねじふせて言った。「ユルドウスさんたちだって同じだ」

「……ペレウスは、立場がまた別だろう。だって王族だ。ヘラスの利益が第一なんじゃないのか……おまえの国ミューケナイに、迷惑がかかってしまう」

「そのことも、きみが気に病む必要はない。」

どうせ 剣 はヘラス諸都市を征服しようとするだろう。だからもう、ヘラスはかれとの戦いは避けられない。きみたち一族を亡命させたところで結果は変わらないんだ」

もちろん実際はそんな簡単なものではない。亡命受け入れは難航するかもしれない。だが、ペレウスはあえて事を単純化した。

奥歯を噛み締め、決意を固くする。

（ぼくはとうとうイスファーン公の力になることができなかった。

せめてその遺児だけでも、 剣 に殺されるままにしておけるものか)

近視眼的な軽拳と言われるだろう。公私混同とそしられることも間違いない。

ヘラスの伝説には、一人の美女のために故国を滅ぼすことになった都市トロイの王子パリスの先例がある。ペレウスはパリス二世と揶揄されるかもしれない。

それでも、と触れ合う肩から伝わる体温を思う。

喧嘩と和解があった。温もりを分かち合った。命を助けた。助けられた。

笑いを交わして、涙を拭いて、想いを告げられて この友人の苦境を見捨てるには、あまりに心を通わせすぎた。

(王位継承権を放棄してでも、父上とミュケナイの元老院を説き伏せてみせる)

「提供できる安寧はほんの数年かもしれないけれど、きみたちをミュケナイ宮廷の庇護下に迎えるつもりだ」

「……手をつないで、ほしい」

顔をひざに伏せたファリザードが唐突にいった。その手がおずおずとペレウスの腕に触れてきた。

明確な返答がなかったことにペレウスは当惑したが、口をつぐみ黙って手のひらを出した。指をからめ、もどかしげに何かを訴えるようにファリザードの小さな手が握りしめてくる 熱い手のひらだった。イスファハーンに帰った日、寝台で嗚咽しながらかれの手を求めたときと同じ熱さだった。

ファリザードがつぶやいた。

「ペレウスの国は、海が近いんだっただな」

「島の都市だからね」

「海を見たことはないんだ……砂漠より広いのかな」

「広いよ。広いだけじゃなく、紺碧の海は美しい。西日が水平線に落ちるときは、天も水も燃えているみたいなた夕紅に染まるんだ」

「見たいな」

言つて、少女が身を寄せてきた。柔らかい頬がかれの肩にもたせかけられる。

「わたし、今月で十三歳になったんだ」また、ファリザードの話が飛んだ。

「もう大人になることにする。しばらくひどい有り様だったけれど、これからはあんな甘ったれた姿はだれにも見せない。

「だけど……ときどき、おまえにだけはこうさせて」

頬が肩にすりつけられる。その頬は濡れていたのかもしれない。返事に少々困ったが、ペレウスは握り返すことで承諾を示した。

しめやかな息づかいが、夜の静寂に響いていた。

同じ毛布にくるまって眠るまでずっと、手は離されなかった。身を寄せ合い、まどろみの中でペレウスは朦朧と考えた。

(結局ファリザードがどうするのか、はっきりさせ損ねた)

.....
.....
.....

次の朝にそれは明らかになった。

「すこし前に聞いたところでは、イスファハーン公領南部、西部の大部分はすでにホラーサーン軍の軍門に降ったが、北部はまだ旗幟を鮮明にしていなという話だったな。

ユルドウズ、その状況に変化はないか？」

「あ……ああ、斥候が聞き込んできた範囲ではね」

「ならばこのまま北上を続けよう。目指すは都市テヘラーンだ。ここからなら三日と要しない距離にある」

当惑顔のユルドウズを尻目に、砂上に広げた地図の一点をファリザードが指す。

「テヘラーンの領主アーガー卿は、イスファハーン公家に仕えるもつとも誠実な将と名高い。かれならばわたしの力になってくれるはずだ」

「……力ね。その後どうするかは決まっているのかい」

「兵の決起を宣言し、南下しながらイスファハーン公領諸侯に檄文を飛ばす。 剣 の徴発を拒み、食料は可能なかぎり城壁に運びこ

んで残りは奪われぬよう焼けと呼びかける」

昨夜、「民を苦しめてそこまでしても勝ちがおぼつかない」と弱音を吐いたことなど無かったように、ファリザードは明確に方針を告げた。

彼女の表情はどちらかといえばまだ曇っており、ふるまいも以前の快活さを取り戻したとはとてもいえない。だが、幽鬼じみてどんよりしていた昨夜までに比べれば雲泥の差である。

「ホラーサーン軍の主力はすでに帝都バグダードの門前に集結し、腰をすえて攻める構えだ。だが、その補給はいま、穀倉地帯であるイスファハーン領南部および西部を後背地とすることでまかなっている。ゆえにまず、やつらに奪われたその地一帯をわが薔薇の一族の元に取り戻す。それによってホラーサーン軍を飢餓の窮地に落としこみ、さらに上帝の軍と挟み撃ちできる。そうなれば持久戦に持ちこむか決戦を挑むかはこちらの自由だ。」
どう思う、クタラムシュ卿？」

ファリザードに問いかけられた近衛隊の元隊長は薄く笑んだ。

「剣 がバグダードの攻略に手間取っているあいだに総決起してホラーサーン軍の後方を断つというわけだな。簡潔明瞭でよい。」

ただし 剣 がイスファハーン領に打ち込んだ恐怖のくさびを考慮に入れるべきだな。“反抗すれば報復する”との脅しは諸侯を怯えさせている。総決起に二の足を踏む者がいるだろう」

「たしかに。それにバグダードが落とされれば士気はますます低下するよ」

ユルドウズの指摘に、ファリザードはてきぱきと地図を丸めて立

ち上がった。

「ではさっさと動くべきだな。バグダードを伯父御が落としてしま
う前に。」

できれば兄上たちや他の諸公家と議論を重ねたいが、その時間も
手段もなければ独断での決起もやむを得まい」

「……よし、出立を急ごう。ところで嬢ちゃん……」

ユルドウズがためらいがちに声をかけたのは、おそらく少女の心
境の変化について聞きたかったのである。が、老女がその直後に
口にしたのは、「軍学を学んだのかい？」だった。

「伯父に少し」

振り向かずそれだけを言い、ファリザードは黎明号のもとへ歩い
ていった。意識してそうしているのかペレウスを一瞥もせず、一度
も言葉を交わさず、近くに寄りもしなかった。

移動が始まってすぐ、クタラムシュがペレウスの鞍に鞍を寄
せてきた。

「君か？ ファリザード殿に活を入れたのは」

「……違います。ファリザードが一人で立ち直りました」

実のところペレウスには本当にびんどこなかった。かれがしたの
は、亡命するなら受け入れると申し出ただけだ。それでどうし
て彼女がこんなにも敢然と抗戦を決めたのだろう。

しかし、かれの話す詳細を聞いたクタラムシュは「なるほど」と
納得した様子になり、離れていこうとした。あわててペレウスは呼

び止めた。

「なるほどって、どういふことですか？」

振り向いたクタラムシユのまなざしは、優しげだった。

「君は刃の心金になったのだよ」

「心金……？」

「彼女は刃になる決意を固めた。その心の支えが君だ。

そんなことがあってもこの人は味方になってくれるだろう。そう信じられる相手にジンは報いる」

かれの指がペレウスの胸を指した。

「フアリザード殿にとっては君が大事であり、君にとっては故国が大事だ。

剣を放置すればいつかは君と、君の大事な故郷が傷つく。彼女はそれを考えたのだろう」

天啓のごとく理解の稲妻が降り、少年を打った。ペレウスは舌の上に実際に焦げたような苦味すら感じ、ぎゅっと眉を寄せた。

「イスファハーン公家が抵抗を断念すれば、この地の民は当面はたしかに戦に巻き込まれずにすむだろう。だがそれは剣に、それだけ容易にファールス帝国を制圧し、すぐにでも他国侵略の準備を始めることを許すだろう。戦火はついにはより大きく広がり、君の国を含めて大地を呑むだろう」

この内乱に 剣 が勝利を収めれば、かのジンはいつかペレウスの故郷に攻めてくる。それは疑いない。

ヘラスにとつて最善の道は、帝国の内で 剣 が討たれ、ヘラス本土に飛び火する前に戦が終息することである。そのためには帝国諸家には反 剣 の旗をかがげて起つてもらうのが望ましいのだ。

（そつだ、ぼくはそれも望んだ……ヘラスのために望んでいた。争いが帝国内部で終始することを）

急に息苦しさを覚え、ペレウスは知らず自分の胸元をつかんだ。

ヘラスに災いが及んでほしくないという願いと、ファリザードを亡命させて危険から遠ざけておきたいという想い。相矛盾するふたつの望みが、胸中で渦巻いていた。

（ヘラスさえ無事ならどれだけ帝国の民が死んでもいいなんて思っていたわけじゃない。少し前までのぼくならそう思っていたかもしれないけれど、いまは違う。

でも結果として、ぼくのためファリザードが戦いを決めた……）

「……ペレウス君がそう気にすることではない。

屈服か闘争か、ファリザード殿はもともと迷っていたはずだ。領民の命を救うか、復仇と大義と広い世界のために戦うかという選択だった。たしかに君への想いが決め手になって彼女は後者を選んだのだろつが、それは天秤の一方に載せられた最後のおもりだったのだろつ。

誇りのため、愛憎のため、公益のため、私益のため ひとつの選択の陰にはしばしば複数の動機があり、それらは薔薇の茂みのようにもつれている。人それぞれだ。君は君の迷いに答えを出すことだ」

「……迷ってはいません」

後ろめたいだけである。

ペレウスの葛藤をクタラムシユは正確に汲み取ったようで、「では、彼女が望むとおり支えになつてやるがいい」と告げてきた。

「ファリザード殿は切れ味鋭い剣になれるかもしれないが、まだ余裕がなさそうだ。

硬いだけの刃は折れやすい。良質の鋼は柔軟でなければならないのだ。折れぬよう、君が守つてやるがいい」

かれの馬が離れていく。ペレウスは軽く吐息し、馬群の行く彼方を見やった。はるか北の地平線に、アルボルズ山脈という峰々の、雪冠をかぶつた姿が見えはじめていた。都市テヘラーンはその山脈のふもとにあるのだという。

（内乱が終わるまでは、この砂漠と高山の大地に留まることになりそうだな）

無論、かれはそうするつもりだった。

「よし……ぼくもやるべきことをやらないと」

もともとペレウスが手をつけるべき根本方針は、ファリザードがどういう選択をしようと思わなかった。

都市テヘラーンへ着いたら、他のヘラス人使節たちを探す。

本国と連絡を取つて 剣 に対抗して帝国諸家と同盟するように具申する。

その二点であった。

2・3・尋問 上（前書き）

一同、都市テヘラーンの対応に不審を覚え
かの捕虜を問い詰めて打開策を講ずること

武装した三百名ほどの一部隊が接近してくる。

その報せが斥候から入ったのは、都市テヘラーンまで道のり一日を残すばかりの頃合いだった。すわ 剣 の軍の部隊かと一行は動揺したが、それがイスファハーン領の兵、おそらくはテヘラーンからの迎えの軍と知ってひとまず心を落ち着けた。

やがて人族の兵士を背後にしたがえて現われたのは、引き締まった体を鎧で固めたジン族の男だった。

「テヘラーンの警備隊長カースイムと申します。領主アーガーはわが岳父でございます」

かれは乗っていたラクダから下りて地に片膝をついた。「おお、フアリザード様。家紋の黄金の薔薇さながらに美しい御方」カースイムは仰々しいほどの修辞を伸べ、形ばかりはうやうやしく切り出した。

「申し上げるはまことに心苦しゅうございますが……わが岳父アーガーはフアリザード様をテヘラーンにお迎えすることはできぬと申しております」

言葉は静寂をもたらす矢となってひとりひとりの胸を貫いた。

そんな、まさか だれよりも信じられぬという反応を示したのはフアリザードとクタラムシュのジン族二人であった。

「……関わらず、どこへなりと行ってくれということか」

数拍の後、真っ青になりながらもフアリザードが瞳をカースイム

にひたと据えた。

「至誠をうたわれた武人であるアーガー卿にして、イスファハーン公家を見限るのか」

彼女が封じ込めようとしていた絶望が、食いしばった歯のあいだから声となってにじんだ。ペレウスは不安をかきたてられてファリザードを声なく見つめた。アーガー卿の協力をたのむことが大前提であった彼女の戦略には、これは痛撃なのである。

だが、

「いいえ、見限るなどと。唯一の神にかけて、わが岳父のイスファハーン公家の方々への忠誠心はこれまでと変わるところはありませんぬ。」

ですが、お許しいただきたい。
疫病が発生しているのです」

「……疫病？ 人族のか」

「ジン族をも冒しております」

「ジンを。はて。ジンは人より傷病には強い種族じゃなかったかい」
抑揚なくつぶやいたユルドウズに、カーシムは首をめぐらして答えた。

「常ならばそのとおりだが、実際に、ジン族の間でも猛威を奮っているのだ。」

おまえたち、あれを運んでこい」

カースイムが振り返ってみずからの部下に命じた。驟馬が引く荷台から何かが抱え上げられ、ペレウスたちの前に置かれる。それを覆っていた布が払われた瞬間、勇においてははけっして人後に落ちぬ白羊族の戦士たちでさえ首をのけぞらせた。

それは死体のおさめられた透明な水晶の棺であった。

中に入っているのは裸になったジン族の男の屍であり、その顔から胸元にいたるまで、皮膚にぶどう粒のような肉腫がぼこぼこ盛り上がっていた。病魔が漏れ出ないように、棺のふたは固く閉じられていた。

「今朝死んだジンだ。」

……この病に岳父アーガーまで倒れ、意識不明のありさまとなった。今回の疫病は異様だ」

言い切ってファリザードに向きなおり、カースイムの口舌は一気になめらかさを増した。

「ファリザード様、どうかご寛恕を。このような強力な疫病が猖獗を極めていくがゆえに、あなたやお供の方々を市内に入れることはできないのです」

「……せめて、アーガー卿を見舞いたい」

「岳父は意識を失う前に『市を封鎖せよ、決して外の者を入れるな』と私に言い置きました。それを破ることはできません。市内の者を外へ出すことも。」

繰り返しますがわかっていただきたい。いまはホラーサーン軍との戦いに力をお貸しできる状態にはないのです」

譲る意思のないことが伝わる、厳然とした拒否であった。

動揺と迷いを表情にはりつけてファリザードがうつむいた。かろうじて彼女は苦渋の声で答えた。

「……事情はわかった、カースイム卿。

ここで少し考えさせてもらいたい。こちらの方針を決定するための日数をもらえないだろうか」

「日数？ 風向き次第でこちらにも病が訪れないとは限りませんぞ。別の都市を頼るならば早めの決断をされたほうが」

「そうせつつくものじゃないよ、カースイム卿」ユルドウズの静かな声には極めて辛辣なものがあった。「まるで一刻も早く追い払いたがっているように見えてしまっからね」

ユルドウズをもう一度見やったカースイムの面に、不快感を通りこして悪意に近い色が現われた。傍で見ていたペレウスは気づいた。それは人族を蔑むジン族がたびたび見せる顔だと。

しかしそれは一瞬のことで、かれは結局引き下がった。

「では、お急ぎいただきたい。ここに野言されるならば、われわれは二日後にまた訪れるとしましょう」

やって来た三百名が去り、百五十数名の仲間内だけになると、ファリザードは目まいをこらえるように手をひたいに当て、切羽詰った声を吐き出した。

「出だしから盛大につまずいたようだ」

だが、と続ける。

「たとえば疫病で都市機能が麻痺してしようと、一兵も出せなからうと、テヘラーンの支持はなければならぬ。わたしへの支持声明だけは公布してもらわなければ」

ユルドウズが深刻な顔でうなずいた。

「イスファハーン公領北部の最大の都市であるテヘラーンが助力を拒めば、他の都市も同調して門を閉ざす恐れがある。そういうことだろ？」

でも、どうやるのさ。カースイムとやらは、どう見ても疫病を盾にして一切の助力を拒もうとしていたよ」

難問に困じはてている一同に、ペレウスは「それですけど」と手を挙げた。

「ほんとうにカースイム卿の言うことを信じていいものでしょうか？」

「坊や、それは、あいつの言葉のどこかが嘘だということかい？」

「胡散臭く感じたというだけの薄弱な根拠ですけど……」

カースイムの受け答えはよどむところなく明瞭であった。だがそのあまりにも事務的な態度ゆえに、ペレウスの胸中には（このジン、内心を悟られまいと気を張っていないか）という疑念がかすめたのである。テヘラーンに寄せ付けまいとする態度もあからさますぎた。何かがあるような気がするのだ。

クタルムシュが、「それなら、専門家に話を訊くべきだ」と提案した。

「専門家？」

「詐術と疫病の専門家だよ。暗黒の神アンラマンユは、疫病をつかさどる神でもあった」

「……あいつですか」

ペレウスは嫌な顔をしたが、他に妙案もなかった。

……

……

……

夕暮れ前の食事時、ユルドウズの天幕の前

「嘘だな」

縄で縛られた賊の首領、ジオルジロスは、話を聞かや一刀両断した。

「ジン族は先天的に病に強い。ジンをも殺すような流行病が過去に例がないわけではないが、それなら先に人族に大被害が出る。ジンの最初の死者が出るころにはその都市内の人族は千人規模で死に、疫病発生の際が帝国中を駆けめぐっているはずだ。ところが、そのような話は一切聞かえてきていないのだろうか？」

加えてその病状だ。ぶどうの房のごとき肉腫が表皮に現れるだとか？ そんな流行病は、この帝国に存在せぬ。私の知る十七種の流行病のどれでも無い」

「新種の病魔という可能性は？」

ペレウスの問いに「可能性ならある。しかし私はこの場合それよりも留意すべき事実を知っている」と暗黒神の司祭は答えた。

「ぶどう状の肉腫は疫病の症例では思い当たりにないが、毒物でならば別だ。

たしか古代ファールスにおいて“ポフ・シャル悪しき膨れ”と呼ばれた、材料の稀少さと調合の難しさゆえにはなはだ珍しい劇毒がある。経口ではなく経皮吸収によって死にいたらしめることができる……早い話が、肌にかかれば死ぬ。

大小の球状肉腫が毒を浴びた箇所に短時間で盛り上がって、屍体の見た目は無惨なものとなる。ただし元々の屍体にかけてもそうはならない」

にわかに、空気が張りつめた。ファリザードがすつと瞳を細めた。

「毒……カースイム卿の運んできたあの屍体は、その“悪しき膨れ”とかいう劇毒をもって殺され、疫病の屍体のように見せかけられたものというのか」

「十中八九、そう考えてよかろう」

こともなげにジオルジロスが断定する。座るかから離れ、一同はひたいを寄せ集めた。声をひそめて懐疑的に質したのはペレウスである。

「本当だと思いますか？」

「カースイムの言ったことに嘘があると言ったのはもともと坊や、

あんたじゃないか。あの捕虜がいま言ったことはあんたの推論を全面的に裏付けるものだと思っけどね」

ユルドウズに指摘されて不本意そうにペレウスは口を引き結んだ。カースイムはかれにとつてたしかに胡散臭さを感じさせるジンであったが、ジオルジロスのことはもつと信用できないのだった。しかし、それを言い募ってもしかたがない。

「病の市内蔓延が嘘だと仮定すると、アーガー卿は病魔には倒れていないことになる。だがそれだとおかしい」

クタルムシュがあごに手を当てた。

「私はアーガー卿とは多少の面識がある。あれは苦境の主家に対し、疫病が発生したと嘘をついてまで助力を拒むような男ではない。まして毒薬を使った小細工で主家をあざむく真似を認めるはずもない。そう、アーガー卿が無事であるかぎりはだ」

一同の脳裏に、好ましからざる想像が黒雲のように広がりはじめた。これはカースイムの独断、少なくともアーガー卿の関与しないところであろう。だが都市の封鎖といい兵を動かす権能といい、警備隊長とはいえカースイムが自由にしていよいことでは無論ないはずなのだ。

それがあえてこの拳に出ているということとは、アーガー卿は口を挟めない状態にあるのだろう。ことによると力づくで実権を奪われないとも限らない。実権どころか命をも。

誰もが一つの打開策を想定していながら、互いに目配せしあつてなかなか口に出せない。

とうとうペレウスがそれを提案した。

「まずは都市テヘラーンの内部で何が起こっているか、真実をひそかに探る必要があるのでは」

打てば響くようにクタルムシュが応じる。

「よし。市壁を乗り越えて内側を探るのは私がやってみよう。潜入ならば隠形の術の本領だ。」

しかし……なんとということだ。ことの成り行きによると、われわれは 剣 と戦うより先に、離反しようとするイスファハーン領の都市を敵にまわすことになるかもしれない」

2 - 4 尋問 下 (前書き)

妖術師ジオルジロス、伝説の魔具の存在を告げ
ペレウス、ファリザードの冷淡さに心乱される

2 - 4 尋問 下

クタラムシユの慨嘆に、天幕の前は静まり返った。
だが、

「イスファハーン公家から離反する領主たちを打ち倒すか。やればよいではないか」

ジオルジロスが背後からかけてきた声が宵風に乗って流れる。これは一同の耳目を惹きつけておいて、舌をなめらかに動かした。

「だいたいイスファハーン公家は文弱の家柄とみなされてきた。それゆえ、乱世に入るやいなや臣下らがたやすく動揺するのだ。力量を示すしか離反を防ぐ道はないぞ、姫。イスファハーン公領を再征服するがいい。悔りに報いを、裏切りに罰を与えてやるがいい。恐ろしい怪物に臣下をけしかけたくば、自らが怪物より恐ろしい主人となるがよい」

「勝手な発言を許可してはいないぞ、賊」

意識してか陶器めいた冷たい無表情と厳しい声をつくり、ファリザードが向きなおった。

「貴様は質問にだけ答えている。ジオルジロス、この際尋ねておくことがまだある」

「ほお、姫よ、帰依するためにわが神の教義を聞く気にもなつたかな」

「貴様の奉じる邪な神に用はない。現世の凶つ神と成り果てたジンへの対策だけで手一杯だ」

「ほほう、現世の……今度訊きたいのは 剣 に関する事だな？」

「そつだ。 剣 の持つ呪印の能力を言え。征服時代から生きている貴様なら見聞きしたことがあるだろう」

「さつきの情報の礼もまだ受け取っていないのだがな。この身のいましめを解いてくれてもよいだろう？ そつすれば知識を分かち与えよう」

「この期に及んでとぼけたことを言う豪胆さだけは褒めてやる」

ファリザードは言い、束ねた縄を投げ出した。彼女は今宵、それを腰に付けて尋問の場に持ってきていたのである。

「貴様は数多の無辜の民を殺し、邪神への供物とした。縄をほどいてやる気はない。

だが、役に立つなら新しい縄を追加するのを待ってやる。これは首にかける縄だ。本来ならばとうに貴様に下っているはずだった裁きのための道具だ。

貴様から得るものが何もなければ、縛ったままその首にこれを巻きつけ、縄のもう一方の端を馬につないで砂漠に放つだけのことだ」

努めて冷酷にふるまおうとする少女に、

「それは恐ろしい。ところで自分では気づいていないのか。

震えずに言えたならもつと脅す相手を怖れさせられるものを」

ジオルジロスは薄笑いで嘲弄を返した。

びくつとファリザードの肩が動いたのは、反射的に体が固まって震慄を止めようとしたのだとペレウスには察せられた。実のところ彼女は身震いしてはいなかった。が、自分が無意識に震えているかもしれないと一瞬信じさせられたのだろう。

口先でなぶられた少女の顔が屈辱にかつと燃える。が、その怒りが噴出する前にジオルジロスは「剣の能力の詳細は知らぬ」と速やかに答えた。

「征服時代、剣の力に間近に接した敵は生き残っていない。それを知っているならば教えている。お前らに協力するつもりがまったくないわけではない」

今度は本当にぶるぶると憤激に震えていたファリザードが、「嘘だ」と吐き捨てた。

「まあ、容易には信じられまいが、今回は嘘ではない。

わたしにとつても剣は古い敵だ。奴をかばう義理など砂粒ほどもないし、お前らが剣と咬み合ってくれるのは実に都合のいい展開だ。現状ではどうにもお前らが弱すぎて共食いというところまで行きそうにないので、多少の手助けをしてやるうとさえ思うのだよ」

ジオルジロスの飄々としたうそぶきに、ファリザードは満腔の怒気をどうにか追い出すように息を大きく吐いた。

「可能なかぎり貴様の力を借りるつもりはない。これで今夜の尋問は終わりだ」

「そうか。遠慮せず、これからも質問があればいつでも聞くがいい」

「……では最後にもうひとつだけ教える。
そもそも貴様は、なんのために手下を率いて、イスファーン領
深くまで侵入して荒らしていたのだ。無道を働き、良民を害するた
めだけか」

その質問は、核心を突いた。問いかけたファリザードが意図した
よりもはるかに。

薄い笑みを刻んでいたジオルジロスの唇が完全につぐまれ、両端
が下向きにひくりと歪んだ。その脳裏で計算が渦巻いて、やがて答
えを出したようだった。

次に口を開いたとき、かれの双眸は底光りをたたえていた。

「探し物をしていたのだよ」

「探し物？」聞いていたペレウスは、知らず身を乗り出していた。

興味を惹かれたのは、それがサー・ウィリアムの言っていたことと
同じであつたからかもしれない。

(そう言えば最初にだまし討ちを食らったとき、聞いていたじゃな
いか。捕まえたファリザード相手に、『……薔薇の公家と剣の公家
のかけあわせとは面白い。本来の探し物は片鱗もみつからなかった
が、この地に来た甲斐はまずまずあつたな。最後にこんな戦利品を
手に入れるとは……』こいつは、そんなことを言っていた)

「なにを探していたんだ、ジオルジロス？」

「力の塊だ」

即座に告げられた答えは、指すところがあまりに漠然としていた

が、ジンの古老はより明瞭にすぐ告げた。

「支配の道具だ。つまり兵器だ。

使いこなせば、この上ない恐怖をもたらす魔具だ」

冷涼な夕闇に影が溶けゆく砂上で、その名は紡がれた。

「すなわち“スライマーン王の書”と“スライマーン王の首飾り”だ」

.....

二千六百年前、ただ一人、人の身にして数多のジンに忠誠を誓わせた王がいた。

スライマーン・ベン・ダーウド（ダヴィデの子ソロモン）その魔術師としての力量は天下に冠絶したのみならず、後にも先にも並ぶ者現れずと伝わる、生あるうちからすでに伝説となっていた人物である。

「スライマーン王が現われた二千六百年前は、ジン族もまた強大であった。いまの世のジンの能力は、せいぜいが口も利けぬ獣に变じ、五人力十人力程度の腕力を誇るのみに衰微している。しかし昔日のジンはルフ鳥や竜などの神獣ロックに変化し、力をふるえば一晩で山を築くほどの異能を持っていたと伝承は語る。

その上古の世の叡智とジンの力は、それぞれ“スライマーンの書”と“スライマーンの首飾り”に封じこめられて蔵された。前者は人族に、後者はジン族に贈られたという。

書と首飾りは、大河ティグリスとユーフラテスを渡った東の地に蔵された。すなわち、おそらくはこのイスファハーン公領のどこかだ」

語り部となったジオルジロスの舌が回転するたび、低まった陰性の声音がすべり出てくる。

脳髓をひたひたと侵す妖しき語り口。

「それらはこの世の魔具の最上位にあるといつてよい。もう一度言うが、書にはスライマン王みずから記した魔導の知識がたくわえられている。首飾りには、王の従えた古のジンのうち最強の七十二体がみずからの血をもって魔術刻印してあるのだ。

手に入れたならばきつとスライマンのように世界を統べることが叶うだろう。どうだ、お前も探してみないか？」

誘う台詞を投げかけて、ジオルジロスが語り止む。

ペレウスはうなり声をのどの奥に押し込めた。

なにを荒唐無稽な与太話を、と言い放つことが出来なかったのは、伝説のスライマン王の名と、いまに伝わるかれの業績のことを知っていたからだだった。

その神話めいた話は遠くヘラスにまで響いていたのだ。

スライマン王は、無数のジンを自在に使役した。

当時の地上に君臨していたジン族の帝国の君主が人族に従うことを拒んだため、これを打ち負かした。

自分の死後に国を襲うであろう蛮族の来襲を防ぐため、大地に新しく山脈を築いて長城となした などの、まさに荒唐無稽な「実話」が。

(もし本当に、そのスライマンが残した強力な魔具があるならば……)

「 剣 を倒せるぞ」

ジオルじロスの精神にからみつくような囁きは、場の全員が話を聞いて真っ先に考えたことを煽り立てた。

が、クタラムシユが咳払いして惑わしの妖言を断ち切った。

「話は聞いたことがある。だが」

その沈着な表情はすでに常と変りなかった。

「肝心なところを省くものではない。スライマーンの残した魔具はいくつかあるが、かつて発見され、また紛失した“首飾り”には、ジン族は誰ひとり触れることすらできなかったというではないか。

人族に与えられた“書”に至っては二千六百年間、存在が語られるばかりで見つかっていない。それだけの歳月見つからなかったものが、本腰入れて探したところで今日明日に見つかるわけもあるまい。

われわれが急いでとりかかるべきは、幻想の詰まった魔具の探索ではない。目の前の都市テヘランを手に入れることだ。

最後に無駄な時間を取られたが、今宵の尋問は今度こそ終わりだな」

終幕の確認はファリザードに向けて言われたものである。夢から醒めた表情になった少女がうなずき、「クタラムシユ卿、ユルドウス、少し話がある」身をひるがえしてその場から離れた。

その後をついていく大人ふたりを自分も追おうとして、あることに気づいたペレウスは立ち止まった。

ファリザードはかれの名前だけ省いた。

それなのに、行っていいのだろうか。

(……何を細かいことを気にしているんだ。ぼくはファリザードの

家臣じゃない 呼ばれなかったのがどうしたっていうんだ。それよりこれからのことを決める重要な会話に、途中からのけ者にされてたまるもんか)

だが、気にせずにはいられなかった。ファリザードに避けられているのは気のせいではなかったからである。

この状態は一昨日の朝、ファリザードが立ち直ってからだった。彼女はペレウスと会話どころか目を合わせず、近くに来ることもなくなった。それまでは、際限なく意気消沈し続けていたときも、無意識にかペレウスのそばに寄ってきていたのに。

無視されているわけではない。こちらから馬を寄せて話しかければ受け答えくらいはあった。……それも最低限のものだったが。

その、明白にかれを遠ざけようとする態度に、ペレウスはもやもやした心情を覚えていた。

(ファリザードのことは時々さっぱりわからなくなる 気まぐれなのか? それなら理不尽すぎるだろう。なんだよ……三日前には「おまえにだけはこうさせて」なんて言っておきながら)

こぶしを固く握る。三日前の夜、天幕の中で握り合った手だった。あときは頼られていることを実感できたのだが。こうも素っ気ない対応が続くと、なにかの幻だったような気さえしてくる。

(それとも、ぼくは今のところ役に立たないと彼女に判断されているんだろうか。頼ってもどうしようもないから巻き込むまいとでも考えているのか?)

そうではないとはペレウスには言い切れなかった。

(でも……ぼくだって、大人の戦士と完全に同等とはいかないけれ

ど、戦えるじゃないか。ファリザードのほうがちよつと先に十三歳の誕生日が来たみたいだけれど、子供扱いされるいわれはないぞ)

白羊族とくつわを並べて行動するようになってから、ペレウスはクタルムシユに習った武術を修練していた。夕食後から就寝前の時間にかけて、刀術の型をなぞる単演にはげみ、手首を極めて投げる技をクタルムシユに指導してもらっている。うぬぼれかもしれないが、自分がさほどまずい兵士だとはペレウスは思っていないかった。

ぼくは役に立てるはずだ。あぶられるような焦慮にペレウスは歯噛みした。

だが突然、熱くなっていた頭が冷えた。

(……だめだ、現実を見なきゃ)

鉄の味を感じるほどに下唇を噛み、かれは足を止めたまま結局動かなかった。かれが行って話を聞こうとしてもおそらくファリザードは表立っては拒まないであろう。だが、かれが話を聞いたところで、どんな大した貢献ができるというのか？

(彼女が正しい。ぼくはいまはお荷物に近い、頼ってほしいだなんて虫がよすぎる)

かれは思いつめ始めていた。まもなく十三歳になる子供にすぎない自分が、クタルムシユやユルドウスほどファリザードの力にはなれていないことを。

クタルムシユは近衛隊長の地位にいたほどの卓越した武人であり、ユルドウスは族長として百五十人の配下を従えている。両名共に世故に通じ、おのおの武力をファリザードに提供していた。

現状、ペレウスがもっとも役に立てる道は直接戦うことではない。かれの価値は近い将来に、ヘラスをして 剣 との戦いに参陣せし

める政略で示されるはずだった。それでも……

(じつとしているなんていやだ、無力も無為も耐えられない。もっと、いつだって、仲間の力になりたい。

役に立つための力がもつとあれば)

欲求を強烈に自覚したときだった。

「何ぞ悩みがあるようだな、子供」

縛られたジオルジロスの声が背筋をまさぐるように這い上がった。
きた。

こいつがいたのを忘れていた、とペレウスは眉をしかめて振り向いた。一瞥して去るつもりだったが、ふと、心が動くのをかれは感じた。スライマーンの魔具についてももう少しわしく聞いておこうか、と。

「クタラムシュ卿、ユルドウズ、よろしく頼む。

ふたりとも無事で帰ってくるのだぞ。そうでないとなわたしは何も為さないまま両翼を失ったも同然だ」

白羊族の者二十名をともなつて進発直前となった馬上のふたりを見上げ、ファリザードは真摯に言った。

日が落ちてすぐにテヘラーンへと向かってほしい　ファリザードはかれらにそれを頼んだのである。「テヘラーンへは通常の行軍速度で行けばあと一日の道程だが、単騎急げば夜のうちに潜入できるだろう。やや拙速のきらいはあるが、わたしたちには猶予はない」
彼女は速断したのであった。

「ああ、わかってるさ。ま、実際に市壁内に忍びこむのはクタルムシユ一人だろうけど。あたしらがいない間はこの隊は禿げのウルグのやつに委ねてあるから、敵襲か何かあったときは全部あいつの判断に任せな」

ユルドウズは砂漠へ散策にでも行くような調子で受け答えし、

「あと、坊やに含みでもあるのかい？　なんだか過剰に避けてなかつたかい」

予想外の指摘でファリザードを狼狽させた。

「ふ、含むところなんかあるわけないだろう」

「それならあの態度はなんなのさ。坊や相手にだけやたら素っ気ないじゃないか。あんたに冷たくされるたびに坊や、とても微妙な表情になってたよ」

「だから冷たくしてなんか　……え？　ほんと？　本当に？」

「戸惑いと苛立ちのはざままで慥然とする顔だったな」

クタルムシユが可笑しそうに証言し、その妻が手綱を握ったまま肩をすくめた。

「あんたがなんであんな態度してるのか、理由はいくらか予想はつくけどね。坊やもそう余裕のある子じゃないんだから、変にこじれないうちにさっさと話しときなよ。」

……おい、聞けよ」

「あまり話さなかっただけで気にしたんだ……そうか、ペレウス、
わたしが素っ気ないと気にしてくれるんだ」

「……もついいや。行ってくる」

2 - 5 潜入 上 (前書き)

ユルドウズの夫クタルムシユ、都市テヘラインに侵入し
町中で狼を助けること

2 - 5 潜入 上

この夜は月は細く、その光は弱かった。

都市テヘラーンの市壁の上には一定間隔で灯火がかかげられているとはいえ、照らしきれない闇は存在する。その明かりの影になる部分で、黒衣をまとったクタルムシユは高さ八ガズメートルの市壁をなでまわした。指に引っかかる石壁のかすかな凸凹の感触を確かめる。ややあつて影がへばりつくように壁に身を寄せ、上へと這い登りはじめた。

トカゲか、もしくは岩山羊のように。

テヘラーンの内情を、かれは探るために来たのだった。

“大力”の呪印が、血の色をもってクタルムシユの肌に浮き出る。右鎖骨部から衣服下の胸肌にかけて浮かびあがったのは、洗練された書体のような、美しい赤蛇を象るような、優美な曲線によって成る印である。軽く柔軟な筋肉が熊の膂力を宿して張りつめる。宿る力は敵との闘争のときのみならず、さまざまな形で発揮されるのだ。

その体重の軽さに加え、“大力”を持つ一部のジン族にとっては、壁や崖を登る程度のことは造作もないことだった。

(登りやすいな……せつかく滑り石で壁面を覆っているのに、長く手入れされていない)

指先のわずかな引っかかりだけで体を上方へ引き上げながらクタルムシユは思う。通常、かれのような能力に習熟したジン兵の登攀を防ぐため、レンガの市壁を覆う大理石の表面には磨きをかけるものだ。だが、イスファハーン公領ではそのような戦への備えは長く怠られていたようで、指をかける細かい傷には不自由しなかった。

剣の脅威に接した今、こうした平和ぼけの有り様は憂慮すべきことではあるう。だが、この壁を越えねばならないクタルムシユにとつては、それはこの局面に限りありがたい話だった。

レンガがむき出しの上部までたどり着くと、登るのは一層楽になった。

市壁の上にとどり着きかけたころ、かれは人族のにおいを感じて壁に張り付いた状態で動きを止めた。

壁上の通路には、灯火のない箇所にもかかわらず いや、だからこそか 歩哨がいるようだった。それも二名。まだこちらには気付いていないが、このまま壁の上に顔を出せばさすがに発見されるだろう。こう至近距離だと“隠形”の術で姿を誤魔化することも難しかった。

酒で酔わせてぐったりさせたコウモリをクタルムシユは懐から取り出す。

小さな獣を、歩哨の気配がする場所から少し離れた市壁上へ投げ入れた。転がったコウモリが鳴いて、歩哨二人のざわめきが聞こえ始める。何か音がしたか。おっ、見る、これが鳴いたんだ。飛んできて落ちたようだな。病気かな、生きているがふらついているぜ。

その隙にクタルムシユは矢狭間を乗り越えて音なく市壁上に降り立つ。歩哨たちが酔ったコウモリを足先でつつく数瞬の間にその後をよぎり、こんどは市壁内側へ張り付いて身を隠す。気づかれた場合は黙らせる必要があったが、幸いにしてそうはならなかった。

するすると壁を下り、なんなく都市の地面に降り立って、かれはひとりごちた。

少々、たわいなさ過ぎる。

“隠形”があるとはいえ城壁にやすやす近づけたことといい、兵の数が少ないとクタルムシュは感じた。カースイム卿はまだ帰ってきていないらしい。

（それにしても、寡兵であること以上に、夜目がきき、耳も鼻も人族より鋭いジン兵が歩哨に立っていないのが妙だ）

思えば警備隊長を名乗るカースイムが現われた時から違和感があった。かれが引き連れていたのは人族の兵が三百人　カースイム当人以外にジン族の姿はなかった。

そのときは都市テヘラーンにジン兵を残してきたのかと思っ
たが……

マドラサ
学院や修道場の荘厳な建物のそばは避けて街路を行く。居住区に
リハート
入り、らくだ二頭がかるうじて横並びで入れる程度の小路についと
立ち入る。黒いマントをたなびかせながら、かれは嗅いだ。

静まり返った夜半の都市の臭いを。

小路をはさんで立ち並ぶレンガの高層建築の中で息をひそめる、
市民たちのよどんだ感情の臭いを。濃い闇を満たす、恐怖と反感の
臭いを。

その一方で、屍が腐る臭気はほとんどない。

疫病の流行はやはり嘘であった。しかし、それならば街中に満ちた
暗い雰囲気はなんなのだろう。カースイムが実権者となっているの
のなら、かれの統治は好意をもっては受け入れられていないという
ことだろうか。

（まずは市民に実情を聞くことにしよう）

話さえ聞けるなら善人でも悪人でもいい。

むしろ、尋問するなら、適度に絞り上げてもよさそうな相手が望ましい。聞くだけ聞いて始末しても誰からも文句のでない悪党なら言うことはない。

もちろん、善良な市民で、都市の内実がどうなっているかを進んでしゃべってくれる協力者が現れるのもよいのだが、そんな人間を夜更けに探すのは難しそうだった。

クタルムシユはじくざぐに配置された小路をぐりぬけつつ、探す。

または、待つ。

いずれ現れるであろう夜遊びの輩か、追い剥ぎを。どちらも見つからなければ、街角に必ずいる抜け目のない情報屋、つまり乞食を。しかし、かれに情報をもたらすことになったのは、そのうちの誰でもなかった。

鼻腔に届いた香りに、クタルムシユは立ち止まる。

血のおいが夜風に乗って路地に香っていた。それも極めて新しい、ジンと人の双方の血のにおい。かれは向きを変え、血臭が導く方へ向かった。

私道である袋小路の奥　争いの音がそこでしていた。

猿ぐつわをかまされかけた獣のうなり声。

傷だらけの大きな狼が、人族の兵二人によって仰向けに押さえこまれていた。

兵のひとりは狼の腹の上に座り込んで手で首を絞めている。狼の三本の足　右の前足が欠けていた　が、のしかかってくる敵を懸命にかきむしろうとしている。銀の毛皮のそこかしこが赤く染み、暴れるほどに血が飛び散っていた。

「絞め続ける。“変化”できなくなるまで弱らせるんだ。この畜生がジンの姿に戻ったら、意識朦朧としているうちに呪印を肌ごと刀でこそぎ取れ」

三本足の狼の口に布を噛ませて頭ごと押さえつけている兵が、荒い息とともに同僚であるう兵に命令している。

クタルムシユはさほど悩まなかった。狼を絞めることに熱中している兵の背後に歩み寄り、右腕を静かにかれの首に巻きつける。同時に、猿ぐつわを噛ませていた兵ののどを伸ばした左手でつかむ。そして二人ともを狼の上からどかさようにひよいと持ち上げ、絞め続けた。

たちまち兵たちの顔色が赤黒く変わる。目を丸く剥き、万力のごときクタルムシユの腕と手を外そうともがいて暴れる。それも長くは続かなかった。

……気管と頸動脈を的確に圧迫されると、意識が落ちるのは意外に早い。

失神した人族二人を下ろしたとき、クタルムシユは喘鳴混じりの声が地面から届くのを聞いた。

「おぬしはいずれのジンだ、テヘラーンの兵ではないな……」

狼　ではもはやない。組み敷かれていたその姿は、右腕のない満身創痍のジン兵に戻っていた。兵士であることはその身にまとう軍衣でわかった。ところどころ切り裂かれて血と塵埃にまみれ、いつから着替えていないのかやたら汚い軍衣であったが。

「だが、誰かは知らねども、礼を言おう……おぬしはおれの恩人だ」

長身を地面に弱々しく這わせるそのジン兵は、血が気管に入ったのか咳き込みはじめ。クタルムシユはかがみこんで訊いた。

「どういづことかな。身なりを見れば、あなたはテヘラーン兵のよ
うだが」

「いかにも……アーガー様に忠誠を誓った……」

「どうして人族の兵とこうなっている？ この者たちは種族こそ違
え、同じテヘラーンの兵ではないのか」

「違う……こいつらは、市民から募った兵ではない、よそから来た
傭兵だ」

「その傭兵がなぜ市内で幅をきかせている。カースイム卿が雇った
のか」

その名を出したとき、

「カースイム……そうだ、奴こそが元凶だ。あの毒虫に神の呪いあ
れ」

それまでは血泡と細い声しか出さなかった口が、怨念もあらわに
ぎりつと齒を鳴らした。

……
……
……

隻腕のジン兵の赤銅色をした長髪が、地面に落ちかかって流麗な
筋を作っている。

「おれはルカイヤだ。恩人殿、名を教えてください」

名乗ったジン兵は、座って路地の壁にぐったり寄りかかりながら問うてきた。人ならば瀕死になっていておかしくないところだが、ジンの生命力は平均的に人よりいくらか強い。傷だらけとはいえ、ルカイヤの呼吸は落ち着きはじめていた。

「クタルムシユ。傭兵だ」

「クタルムシユ卿……傭兵……」

ルカイヤのまなざしに疑いと警戒の光がわずかながら揺れるのを見て、クタルムシユは「むろんアーガー卿に雇われてはいないぞ」と付け足した。どうもイスファハーン公領では、傭兵というだけで十把一絡げに見られるきらいがある。無理もないことではあったが。

「高名なアーガー卿によってテヘラーンは治まっていると思っただのだが、どうも様子がおかしいので事情を探っているところだ。よければ教えてくださいまいか、ルカイヤ殿」

申し出ると、ルカイヤは暫時ためらったのち、そうだな、と洩らして話しはじめた。

「アーガー様は裏切られたのだ。娘婿であり右腕とたのんでいたカーシムめによってな」

ルカイヤの話によれば次のような次第であった。

……カーシムの反逆がいつから計画されていたのかはわからない。だがその実行は、しばらく前に、ルカイヤたちアーガー卿に忠誠を誓う兵を無力化することから始まったのである。

カースイムは兵舎の井戸水に、効果が一日遅れで現れるしびれ薬を入れたのだ。

そしてジン兵の大部分が倒れて身動きもなくなつたところで、人族の傭兵を都市に引き入れ、兵の呻吟する病床ごと兵舎を押し包んだ。ルカイヤ含め、水をたまたまあまり飲まなかつた少数の者はどうにか動けたが、逃げるだけで精一杯であつた。カースイムが雇つた傭兵の囲みを切り開くときに何人のジン兵が死んだかわからな
い……

「動くこともできなかつた同僚たちは、今は兵舎近くの、酒を冷やす地下の岩室に閉じ込められているときく」

「……カースイム卿がそのような仕儀に及んだ理由はなんだ？」

「おれは奴の心は知らず、実際になしたことを知るのみだ。だがそれで足りる」闇に齒噛みが軋る。「カースイムは 剣 のイスファハーン領侵攻に合わせ、このテヘラーンを乗っ取つた。つまりはそうしたかつたのだらうよ……主の地位を奪うには最適の時期だとい
うわけだ。いずれ 剣 に忠誠を誓う旨を宣言するだらう」

怒気燃えるかと思えたルカイヤの瞳が、ふいにクタルムシュを見て深みを増した。かれのひととなりを探り、一方でそろばんを弾く目付き。

「……おれはアーガー様の安否を知らねばならぬ。兵舎の仲間を助けねばならぬ。毒虫カースイムめを誅せねばならぬ。」

しかしいま、市中をうろつくジン兵は問答無用でさっきのように誰何を受ける。じつとしてはおれぬと潜伏場所を捨てて街に出たはいいが、口惜しきことに“隠形”の使い手ならぬこの身、しかもいまだ本復もあたわぬ。ふらつくうちに間抜けにも見つかつてしまつ

ただ。

しかし至高なる唯一神は、善き信徒を忘れず見そなわしたもう」

ルカイヤは隻腕を伸ばしてクタラムシユの袖をとり、親しみをこめるように軽く揺すぶった。

「こうしておぬしに救けられたのだからな。

クタラムシユ卿、正式に雇ったことはないので作法は知らぬが申し出る。おれに手を貸していただけまいか。すべてが片付いてからおぬしの功をアーガー様に言上しよう……いいや」

声がふいに甘みを帯び、眉が太めの凛々しい美貌が官能的な秋波を送る。

彼女はクタラムシユの腕を隻腕でからめるように抱き取り、豊満な胸に抱きしめた。切り裂かれた生地の裂け目からむちりと柔肌がはみ出るほどに実った乳房が、ぼろぼろの軍衣の胸部を張り詰めさせている。

「尽力してもらえらなら、たとえ結果がどうあれ、最低限の報酬は確実に払う。それは日輪と月輪にかけて誓おう」

やつれてもなお肉感的な肢体を寄せて、そのルカイヤという女性のジン兵はささやいてきた。ぽつてり厚めの唇からすべりである甘みを帯びた声とは裏腹に、妖しく輝く瞳の奥には、見つけた利用できそうな相手を逃がしてはならないという必死の決意が見え隠れしていた。

傭兵によほど先入観があるのだな、とクタラムシユは苦笑しかけた。これだけはユルドウズに報告できんなと胸中につぶやき、「妻帯者でな。触れられるのは困る」言って腕を引き剥がした。色仕掛けをあしらわれたことでルカイヤの面に、しくじったかと悔やむ色

が浮かんだが、

「それでは後からアーガー卿への口利きをよろしく頼もう」

クタラムシユの台詞に彼女の目は丸くなった。喜びよりも先に、あまりにもあつさり承諾されたことに戸惑いを覚えたようだった。

「……迷いが無いな。おれが言うのもなんだが、本当にかまわぬのか」

「すでに潜入している以上、危険はいまさらだからな」

それに、と内心でつぶやく。都市テヘラーンをファリザードのため獲得するという目的に、ルカイヤの申し出は合致しているのであった。

「ルカイヤ殿、同僚がたが軟禁されているという岩室はどちらか？ さっそくだが案内してもらおう」

「東の市壁に沿ったところに……待て、いきなりどうする気だ。岩室の前には兵の番屋がある。何度か見てきたが、そこで見張る人族の兵は常時二十人以上いるぞ」

「テヘラーン出身の市民兵でないならば始末しても問題はあるまい」

話が簡単になったな、と思いつつクタラムシユは手袋をはめる。気を失っている傭兵ふたりの首をあらためてつかみ、東に足を向けた。

足を引きずりながらついてくるルカイヤが戸惑い声で訴える。

「それは、殺せるなら問題はむろんないが……恥ずかしながらおれはこのざまだし、ふたりで二十人は手に余る。第一、兵舎周辺が騒ぎになればすぐに奴らは市壁の上の救援を呼ぶぞ。そうなければなます斬りだ、慎重にやらねば」

「救援を呼ばせるつもりはない」

かれは歩きながら、傭兵二人の首をつかんだ両手に力をこめる。頸骨の碎ける手応えを得て、屍体二つを暗い側溝に放りこんだ。

2 - 6 潜入 下 (前書き)

クタルムシユ、都市テヘライン奪取の道しるべをつけ
その合間に奇縁の存在を目の当たりにすること

2 - 6 潜入 下

……二十二人目の見張りの口を手のひらで覆い、短剣を背に刺してぐりつとねじる。正確に腎臓を裂けば人体はショック状態に陥り、声をあげずにほぼ即死に至る。剥いた眼球から指先に至るまで痙攣し、刺された兵は虫のように死んでいった。

最後の二十三人目は、先刻から異様に静かすぎることにようやく気づいて、周囲を見回し始めていた。くずおれる二十二人目に突き立った短剣はそのままに残し、クタルムシユはついと手を伸べてかれの首を片手でつかんだ。頸骨のへし折れる音がして、最後の見張りも闇を騒がすことなく永久に黙った。

背後から忍び寄って刃物で殺すとき、主な狙いは喉、延髄、腎臓の三箇所である。

喉をかき切る殺し方は多人数を連続して殺すには向かない。噴き出る血が多いため一人殺せば気づかれやすくなり、加えて刃の切れ味は血糊で鈍くなってゆく。

延髄を穿つのも、錐状^{きり}の得物を使うならともかく、短剣では骨に当たって刃こぼれしやすい。

ゆえに、短剣しか持っていなかったクタルムシユがこの夜選んだ方法は、腎臓を刺すことであった。

監獄となった岩室周辺をうろつく傭兵たちの後ろから無造作に歩み寄り、口をふさいで一刺し一捻りで殺し、屍体はほかの兵から遠ざけておいて次に移る。

ごく短時間で終わったこともあるが、最後の一人にいたるまで、カーシムの雇った兵たちは自分たちが殺されていつていることに

気付かなかった。

「……こんなにも静かに速やかに殺すジンは初めて見た」

一連の殺戮を流れるように行ったかれの手際に、離れた物陰で待機していた女兵士ルカイヤが感服しきつた声を出した。

「歩けば十歩に一人を殺す　その表現が誇張でない者がいるとはな。おぬしは傭兵ということだが、妖士級イブリストの手練ではないか」

妖士だった　と言おうとして、クタルムシユはやめた。かつては近衛隊の長、のちには太守に昇進した身であったが、人族と結婚したときにすべての称号は剥奪されている。

なにか言うかわりに、かれは岩室の前に立った。地下に通じる入り口を閉じる扉には、^{かし}樫の板が幾重にも打ちつけられていた。クタルムシユは板に手をかけ、足を扉に置いて、扉を封じる板を引き裂きはじめた。

「……固い樫板を、ちよつと厚いだけの紙のように破るのだな」

ルカイヤが感嘆を通りこして呆れに近い表情を浮かべたときだった。

扉の内側から、かすれた声が響いた。

「よせ……この扉には毒が塗られ、板にも毒を溶いた水が染みこませてあるとのことだ。うかつに触れてはならん」

「そんなことだろうと思った。手袋をしている」クタルムシユは答えた。

“大力”はジン族の呪印の力のなかでは最もありふれた能力である。クタルムシュに並ぶ力量の者は稀だが、それでも扉を破ることくらいはできるはずであった。それが出てこないのなら、相応の理由があると見当はつけてあった。

使われている毒物が、ジオルジロスに語らせた例の経皮吸収の毒ほど強力なものかは知らないが。

「……外の方、面目無い……わずかでも内側から封鎖を破ろうとする気配があれば、毒水毒煙を扉の穴から注ぎ込むと言われて、動けなかったのだ。それがなければ毒の扉もなんとかしてとっに出ていたのだが」

申し開きをするジン兵の声に、ルカイヤが扉に駆け寄り、扉の裏側へと声をしみとおらせた。

「その声はカイスか？　みなは無事なのか！？　助けに来たぞ！」

ややあつて、

「……ルカイヤか。井戸水の毒のほか、三人が板の猛毒に触れて倒れた……」

地下室の壁に穴を穿って逃げようとしたのだが、岩盤に当たってそれもならなかった。岩盤の隙間から地下水がにじみ出てきたため、幸いにして渴きだけは味わわずにすんでいるが、みな食もなく衰弱してろくに動けない。

だが、弱ってはいるが、地下で七十六名が生き残っている」

「十分な兵数だ」クタルムシュは言葉を差し挟んだ。「カースイムの雇った兵は何人だった？」

「え……ああ、五百名はおらなんだが、四百名以上はいたような……」

戸惑いを含んだカイスの答えに、ルカイヤが嬉々として言った。

「カイス、朗報だぞ。そいつらの大方はどういうわけか市門を出て、いずこかに消えた。奴らの姿が減ったゆえおれも市中に這い出てこられたのだ」

傍らで聞くクタルムシュは、思いをめぐらした。かれは傭兵たちの行き先を知っている。カースイムが砂漠に伴ってきたのは三百名ほどであった。

となればテヘラーンに残っている敵兵はだいたい人族が百名。それも今しがた多少減って、この中のジン兵たちとはほぼ同数になったわけである。

「ルカイヤ殿、それにカイス殿」クタルムシュは呼びかけた。「体調万全といかぬところを悪いが、この夜のうちにあなた方はテヘラーンを奪還したほうがよい」

「なっ……」

扉の内外で言葉を失うかれらに、クタルムシュはたたみかけた。

「時間を置けば敵が防備を固めるだけだ。いまにもカースイムが兵を連れて戻ってくるかもしれぬ。そうなれば都市奪還は難しくなるぞ」

悠揚とかまえてはいられなくなったことをクタルムシュは感じていた。

カースイムはすでに完全な反逆に手を染めた。あの男は最初、フアリザードの一行をテヘラインに寄せ付けず追い払おうとした。しかし目論見は外れ、追い払うべき彼女は足を止めたのみで、テヘラインの近郊から離れていかなかった。となれば、カースイムは次はいよいよ実力行使によって、自分にとって危険な少女の排斥にかかるかもしれないのだ。

（戻ってくる途中でないのならば、カースイムはあの引き連れていた三百人をもって、フアリザード殿のいる野営を襲おうとしているかもしれない）

百戦錬磨の白羊族ならば、同じ人族の傭兵の襲撃には対応できるであろう。しかし早く戻るに越したことはないのだ。

重ねて確認する。

「やれるか？」

静寂ののち、カイスの声が、「……やろう、外のお方」と返事した。

「やれる。閉じ込めおった奴らに、一太刀浴びせねば気がすまぬ」

「そうか……テヘライン市民の力も借りたほうがよいな。火と適当な武器をもって駆けつけさせるだけでよからう」

群衆が蜂起するのを見れば、傭兵たちの士気は下がり下がるだろう。

が、クタラムシュの提言に、ルカイヤは太いが形のよいくつきりした眉を寄せた

「市民は……役に立つのだろうか」

「うむ？」

「このテヘラーンの市民は二十万人に達する。だがそれだけ人数がいながら、かれらはカースイムの呼び入れたわずか四百名の傭兵の暴力に怯えて、今にいたるまで形ばかりの反抗もできないでいた。毒を飲まされて早々に半病人のていたらくとなつたおれたちが言えた義理ではないかもしれんが、市民は不甲斐なさ過ぎる」

彼女の声と表情には単なる不満ではなく、人族に対する不信と、かれらに手を借りたくないという隔意が色濃く浮かんでいた。その暗い色は、なにか事情があることを伺わせた。

クタラムシユはしかし、時間をかけて丁寧に説き伏せるつもりはなかった。

このあと、かれは市壁をふたたび越えて、外に待機するユルドウズたちに事の成り行きを説明しなければならぬ。それからさらに市壁の内側へ戻り、城門を開いて白羊族の兵たちの突撃入城を手引きせねばならない。無駄にしている時間はなく、市民の蜂起を煽る役は自分以外の誰かにやつてもらわねばならなかった。

「やらないよりはましだ、ルカイヤ殿。それにおそらく大丈夫だ。市民たちに、かれらをおびやかしていた傭兵は、市内にもう百名も残っていないと伝えてやるがいい。先頭に立って戦うのは主にジン兵であり、市民は灯火をかがけて叫びながらそれに続くだけで良いと教えてやるがいい。傭兵を引き連れて城壁外に出たカースイムを締めだす好機は今をおいてないと煽れ。」

そして、なにより肝心なことは、この知らせを聞いた男は今すぐ戸外に出て、まだ聞いていなかった別の市民五人以上に教えるようにと必ず伝えることだ」

そのやり方ならば、東の空が明るくなるまでに二十万市民の全員が事態を知る。そして武器をとって駆けつける者が百人に一人であったとしても、二千人が傭兵たちを押し包むことになる。

熊が樹の皮を剥ぐようにはりばりと音を立てて板を破り捨てるか、それをルカイヤは見つめていたが、やがてため息をついた。

「……わかった。クタルムシュ卿、おぬしに従う。おぬしはおれたちの誰よりはるかに戦に慣れているようだから」

きびすを返して市街地に向かうルカイヤの背に、最後の板を剥がしながらクタルムシュは呼びかけた。

「城門のすぐ外には、イスファハーン公家の者に属する軍がカースイムを断罪するため近付いている。そのことも言つてやるがいい」

去りかけていたルカイヤの足がびたりと止まった。

「イスファハーン公家の？ それは事実か」

「正確にはイスファハーン公家に雇われた私の仲間の兵だ。近くにいるのは二十騎足らずだが、その能力には全幅の信頼をおいてよい」と

「さえぎって悪いが待ってくれ。

知りたいのは、イスファハーン公家の誰がおぬしらを雇ったのか、そのことなのだ」

足早に戻ってきたルカイヤが訊く。全身の傷も忘れたような剣幕であった。詰め寄られて不審に思いながらクタルムシュは答えた。

「薔薇の姫君、フェアリザード殿だ」

その瞬間、隻腕のジンの女は「あの子が！」と叫び、それから半開きの口を覆って呆然と立ち尽くした。

「フェアリザード様が……」

驚嘆、喜悦、旧懐、情愛、憂慮　いくつもの感情が混然となつてその面をよぎる。

その様子にクタラムシユはおやと眉根を上げた。

「もしかや知り合いなのか」

ルカイヤの、わずかにはにかんだ表情での返答は、クタラムシユをしてこの夜はじめて絶句させた。

「……おれはフェアリザード様の乳母だった」

2・7・奇襲（前書き）

ペレウス、ファリザードに気迫で納得させられ
夕食を分けて食べること

「襲撃はあるかもしれんな」

夕食に出た薄焼きの固いビスケットをほおばりながら、仲間の白羊族たちと座り込んだ“禿げのウルグ”はそうペレウスに答えた。ウルドウズが後を託していったその男は、いかにも戦士といった風貌のたくましい壮年である。頭髪はないが眉とあごひげは濃く、瞳は青かった。

羨望をこめてペレウスはかれを見つめる。自分がこういう屈強で頼りになりそうな外見をしていれば、とつくづく思いながら。

少女のようだと言われる自分のこの顔を取り替えられたらどんなによいだろうか。

（男できれいな顔なんて、軟弱に見えてなめられるばかりだ）

憂鬱の小道にさまよいこみかけた思考を引き戻し、ペレウスは簡素な食事中のウルグにまた問いかけた。

「では、その場合どうするんですか？ 戦うんですか。でも、あなた方はジン相手には戦えない呪いがかかっているんでしょう。カー・スィム卿はジン族です」

「慌てるな。筋道立てて話す。

族長もクタルムシュ卿もいないときはおれが指揮をとるならわしだ。

ひとつ言っておく、ヘラス人の坊や。何かあればおまえにもフリザード様にも、白羊族の采配に従ってもらわねばならん」

「わかっています」

「よし。馬には鞍をおき、いつでも逃げられる用意をしておくのだ。おまえが尋ねてきたとおり、カースイムが襲撃してくるかもしれないからな」

それを聞いて、やはり逃げるのだ、とペレウスはちょっと失望に似た思いを味わった。それは面に出たようで、ウルグはあごひげをしごいて「勘違いするなよ」と釘を刺してきた。

「騎馬の民だけの軍では、目の前の敵を恐れることは恥だが、とりあえず逃げることはなんら恥ではない。」

なぜならわれらにとっては、それは敵の優勢をくつがえす反撃の用意であり、敵を誘う罠であり、戦場を移動するだけのことだからだ。

おまえたち砦を築いてその中に閉じこもる民にとっては、土地はしがみつくものであり、戦場は限定されたものだ。ゆえに、背を向けて逃げることを敗けと考える。だが、われら騎馬の民は、野を駆けながら矢を撃ち、追いつがる敵を反転して押し包むすべを知っている。

カースイム本人はジンだが、その連れていた兵は大部分が徒歩の人族だった。こちらの二倍の人数であれ、白羊族が奴らを恐れる要素はない。追ってくるようならば、砂漠でカースイムの軍を引き回しながらがりがり削ってやる」

そこまで豪語したのち、厳しく引き締まった表情をふとゆるめ、かれはペレウスを前に「案ずるな。少なくとも、知らぬ間に襲われることはないのだ」と確約してみた。

「奇襲は受けない。」

四十名を斥候として八方に散らしている。数に勝る敵や、われらが戦えぬジン兵が来ようと、かなり早くそれを察知できる。余裕をじゅうぶんにもってほとんど犠牲を出さず逃げられるだろう。そこは安心してよいぞ」

「奇襲はない……んですね」

「うむ。ここは平野であり、騎馬の民がもつとも能力を発揮できる場所だ。猫であろうとも、われらの哨戒網をくぐりぬけてくることはありえない」

「敵にクタルムシユさんのような“隠形”の使い手がいてもですか？」

ペレウスは疑問をはさんでみたが、

「われらはみな、クタルムシユ卿の血を薄めた目薬をいただき、斥候を務めるときは眼に点すようにしている。」

そうすることで“隠形”を見破りやすくなるのだ、ジンの魔法の根源は血だからな。本隊がクタルムシユ卿の力で隠されていても、斥候たちは本隊を見つけて戻ってきていただろう？　そしてクタルムシユ卿ほどの“隠形”の使い手は、この帝国にはいない」

それに、と禿げのウルグはみずからの青い瞳を指した。

「この瞳が敵を見る。幼児のころから馬に乗せられて羊の番をし、草原や砂漠の彼方を見つめていた瞳だ。羊を狙う狼や泥棒が現れないか気を配ってきた。」

われらはこの視力をもって、相手がこちらを見つける前にこちらが相手を見つけてみせる。

完全な闇のなかでないかぎり、目の良さでわれらを凌駕できるのは空の猛禽くらいだ」

「へえ……」

「わかったか、坊や。必要以上に思いわずらうことはない。おまえも男ならばどっしり構えている」

そのなだめと激励の台詞に悪意はなかったろう。

ウルグの周りで「そうとも、おれたちが守ってやるよ」「若いうちから苦労性だな」と笑う白羊族の兵たちも、ペレウスにどちらかといえば好意的な視線を向けてきていた。

しかしペレウスは、こちらをまるきり子供扱いするウルグたちにむっとした。

（ぼくは怯えているんじゃない。もしもの時どうするのか確認しておきたかっただけだ）

しかしそれをむきになって言い立てれば、余計に子供っぽく見えてしまうだろう。文句を口にするのはこらえてかれはきびすを返したが、無性に腹が立ってたまらなかった。

「剣 に一矢報いたいか。仲間の役に立ちたいか。」

子ねずみの気負いだな、ヘラス人の小僧」

ジョルジロスの嘲り声が鼓膜によみがえった。

昨夜、あの賊の首領を尋問したのち、短い時間だがペレウスはひとりだけかれのそばに残っていた。そのとき、言葉を交わしたのである。

『なるほど、おまえは勇なき者ではない。
しかしながらこの現実ではおまえは非力だ、無力だ、足手まとい
だ。』

「気炎をあげるほど失笑され、軽侮される、弱き者であるのみだ」

「なんであんな挑発がずっと心に残るんだ　ペレウスはほぞを噛む。」

（あいつは人を惑わす舌の持ち主だ。気の迷いで耳を傾けるべきじゃなかった）

けれど……大切なことをかれに話そうとしないファリザードや、ウルグたちの悪意なき侮りの態度が胸を刺す。その傷口からさらにジオルジロスの言葉が這い出てくる。

『力さえあればよいのだよ。』

「誰もおまえを侮らぬ。誰もおまえを軽んぜぬ。」

力が加われば加わるほど、おまえは心そのままにより多くの善きことをなし、より多くの愛すべきものを破滅から拾い上げることができようになる……

「スライマーンの魔具についてもっと知りたげだな。そう、それが正解だ。力を手に入れたいならば、素直にわが知識を　」

「ペレウス？」

数日ぶりの呼びかけに、いつしか立ち止まって真剣に考えていたペレウスは顔を上げた。

「ファリザードが緊張した面持ちで立っていた。両手にそれぞれ盛った円盤状の小麦パン二枚に、焼けた肉の串や果物を載せている。ぶっきらぼうにかれは応じた。」

「……なに」

「あの、ご飯にしないか。夕食時だし、もうみんな食べるはじめている」

せっかくだけどもいまは食欲がない　とそっけなく断りかけてから、ペレウスは手を上げてしかめた眉間を揉んだ。

「……そうだね。食べよう」

岩陰にサソリがないことを確かめて座る。ファリザードがそろそろとかれの膝にパンを乗せてきた。ありがとう、とペレウスは礼を言っつて串の肉をほおばった。鳥の肉だった。口中にはじける熱い脂はニワトリに比べていくらか野趣が強い。隣に座ったファリザードが口をはさんできた。

「それは矢で射止めた鳩だ。向こうで焼いている羊ももうすぐ食べられる」

「ふうん……いままで野営で火は避けてきたのに」

「みんな熱い食事がほしかったみたいだから火を使うことを許可したんだ。一日くらいいいだろうと思って」

それだけではないだろう、とペレウスは裏を読んだ。

白羊族は、襲撃があることを覚悟している。何かあれば天幕すらも放り捨てて即座の行動に移る用意を整えている。足の遅い羊はここでつぶしてしまおうということだろう。

(……そういつ突き詰めたところを、ファリザードはやっぱりぼくには話してくれないんだな。当たり前障りのないことばかりだ)

実際役に立たないのだから、女々しくひがむようなことはもうするまいとペレウスは思いかけていた。だが、どうしても疎外感はぬぐえない。

黙々と咀嚼するペレウスの不機嫌な横顔を、ファリザードがちらちらと見てくる。話しかけようとして何度も直前で止める彼女の雰囲気、かれはふたたび苛立ちはじめた。

「話したいことがあるなら言ったら、ファリザード？」

(いまさら、なんの気まぐれだ)

いままでこつちを避けておいて、なんで脈絡なくまた接近してくるんだ。その不満が、声をとげとげしいものにした。ファリザードは彼の機嫌の悪さにおろおろ狼狽え、長い耳を上げ下げし、

「おまえが……そのう、誤解してないかなと思って」

「誤解？」縦じわを眉の間にきざみ、目をつぶって食物を嚥下したペレウスのものだから、低温の音がすべり出た。自分でも思わなかったほどの冷たくねじれた声。

「きみは立ち直って以来、ぼくになにも話してくれなくなった。ユルドウズさんたちとは語らう内容をぼくにだけ共有させてくれない。彼女らが出立したことをぼくが知ったのは朝になってからだっただし、この残った本隊の作戦案も、ウルグさんに聞いてこなければならなかった。

その現状のどこに誤解があるんだ」

やはり一度は言わねば気がすまなくなったのである。口にしたあとには予想通り、自分の格好悪さにうんざりしただけであったが、
だが、

「や、やっぱり誤解してるっ！ 違う！ 違うからなっ」

ファリザードがぶんぶん首を振り始めた。これ以上言うつもりはなかったペレウスもつい続けてしまう。

「だから、なにが誤解なんだよ」

「話さなかったのは悪かった、ただ、わけがあつて……」

「そのわけって？」

「そ、それは……とにかく、おまえに含みがあつたわけじゃないんだ！」

「ああ、そう、具体的なわけも言えないなら」 完全に意固地になつてそっぽを向いたペレウスだったが、

「わたしが、」

ぐいとファリザードが身を乗り出して距離をつめてきた。膝の上にあつたパンがひっくり返つたことにもかまわず、声と眼に力をこめて彼女は言った。

「わたしがおまえを信頼しないなんて絶対にないっ！」

間近で真剣に断言されて、その勢いにペレウスは息を呑む。

「……わかった」

やっとのことでそれだけ言った。一拍置いてから、なぜか頬が熱くなる。「……そ、そういうことだ」力説したファリザードもたちまち同様に赤らみ、

「あ」

ひっくり返った自分のパンに気づいて、その表情がしまったと言いたげに歪む。肉や果物を載せていた部分が下になって落ちたため、それらの具はことごとく砂まみれである。

やるせなさに具を拾い始めたファリザードに、ペレウスは黙って自分のパンを二つに割って半分差し出した。ぎこちない礼とともにパンが受け取られる。

黙々と食事が再開される。

(……なんだこれ)

手にした串の先が微妙に震える。むずむずした感覚を覚えながら、ペレウスは自らを罵った。悩んでいたはずなのに、ぼくはなんで論理もなにもないファリザードの言葉にあっさり胸を軽くしているんだ。単純な馬鹿め、と。

それにさっきからの一連の会話の内容ときたら。

(これじゃまるで……)

しばらく構われなくてすねていただけみたいではないか。

「違うからな」自分はもう少しましなことで悩んでいたはずであると焦るあまり、うっかり口に出してしまった。

「何が？」

「なんでもないよ！」

きよとんと小首をかしげていたファリザードが、ふと理解の色を面に浮かべ、どういうわけかゆるんだ笑みを「えへへ」と浮かべた。幸せそうに半分のパンにかぶりつく彼女に、（なにを納得したものやら）とむずがゆさ九割の新たな腹立ちを感じながらも、ペレウスはすっきりした気分になっていた。

自分の無力という問題も、なぜ作戦案を共有させてもらえないのかの疑問も解決したわけではないが、焦る気持ちは薄れていた。

次の瞬間が来るまでは。

まずファリザードが咀嚼を止め、その顔からゆるんだ微笑が消えた。

ついでペレウスもそれを感じた。

圧迫感。そして聞こえる風切り音。白羊族の驚きの声。

ふたりはそろって姿勢を変え、岩陰から注意してそろそろと顔を出した。

一目、見た。

ぶわりと、ひたいが汗を噴いた。

総立ちになった白羊族の戦士たちも凍りついて、かれらのただ中に降り立ったジンを遠巻きにしている。

対して、やって来たジンはかれらを見せず、羊の丸焼きがかけら

れた焚き火に歩み寄っていた。炎にかけられた羊の後ろ足を素手でつかみ、関節をやすやすとねじり切る。信じがたい力で羊の股を裂いて、生焼けの肉にかぶりつき、獣じみた勢いで食いちぎりはじめた。

黒褐色の肌の下に盛り上がる獰猛な筋肉の層。

高い背、広い肩幅、ひとつまみのたるみすらない攻撃のための肉体。

最低限の急所のみを守る、簡素なダマスカス鋼の胴鎧。

(あいつだ)

動転しきって、ペレウスは知らず左耳の痕を手で押さえていた。

かつて耳朶をちぎられたときの古傷が、いまになつてずきずきと痛みを伝える。

白羊族は奇襲は受けないと言ったじゃないか　ペレウスは内心でつぶやいた。

だが、ウルグを責めることは酷だともわかつていた。自分とも因縁があるそのジンの能力については、　剣　が乱を起こしたこの一ヶ月間でたびたび聞かされていたのだから。

止められないのだ。そのジンは。

高い城壁がかれをさえぎることができないのと同じように、どれだけ優秀な地上の哨戒網も、かれの前では無意味なのだ。

こちらの斥候が地を見張るだけではかれに気づき得ない。仮に見つけたところで、斥候が本隊に知らせる前にかれは本隊に届くのだ。

なぜならかれは、

空から来る。

「追いつかれた……」

頭をひっこめて岩にぺたりと貼りつき、震えながらファリザードが口にした。 剣 直属のそのホラーサーン将の名を。

「アスマンギール 虚空の覇者 イルバルス……」

2 - 8 犬、獵犬、狼（前書き）

ファリザード、みずからの腕を大いに恥じ入り
ジオルジロス甘言をふたたびささやく

2 - 8 . 犬、獵犬、狼

高く、疾く、遠く飛ぶ

かれは数百年前、遠い西南の地にある小国の王だった。

百歳にもならないうちに、その力量をもって故郷を荒廃させた戦乱を勝ち抜き、ジンのひとつの部族の長から国の支配者へと飛躍した。

だがその小国の玉座などは取るに足らない。

たいして広くもない土地の王と呼ばれていたことなど、この雄大な天空にあつてかれが占めていた覇者の座と比べれば取るに足りない。

砂漠の上空、両翼で乾いた空気を切りながら思う

どんなジンも虚空ではこの己に勝てぬ。 “^{マスクー}変化” の能力中で最も

希少で最も使いこなすことが難しい飛翔型　それを完璧に統御する己の才にだれも勝てぬ。この高みには誰も手が届くまい。

天空を支配する己こそ武において他者の追隨を許さぬ戦士である。

……かつては、そう本気で信じていたのだ。

増上慢が極まって、同じジン族の国であるファールズ帝国に手を出したあの日までは。

残照に赤らむ夕雲の下を飛び、砂まじりの突風を突っ切る

よりもよって、と思うことはある。

そのとき、かれがみずから飛翔部隊を率いて侵したのは、ファールズ帝国西南のヒジャーズ公領であった。

それなのに、よりもよって、そのときのヒジャーズ公領には、

帝国の東部を領する妖王マイスターが客として招かれていたのだ。

数百年を経ているにもかかわらず、鮮烈によみがえる記憶がある。忘れられない恐怖がある。

大地を歩くしかない虫のような者どもを蔑んでいた己が、味方の屍散らばる地面をまさに芋虫のように瀕死で這いずらされる。首も起こせないかれを、異様な音が出迎える。ごりごりと、ジン兵の屍の胸からえぐりとった魔石を噛み砕く音。まるで石臼にかけるような。

それから、畏怖おそろしき声がぼそぼそと降ってきて重くかれを打つ。

『アビシニアの王イルバルス』

思いだす。あらゆる他者の武を粉碎する巨大な石臼の存在感。現在の主君の声。

『わしに服従を誓うなら一度かぎり命を助ける。しかし帝国を侵せと自国の民を煽ったその舌は許さぬ。』

帰順するつもりがあるならば、今すぐみずから舌を引きちぎれ。それを立て板に釘付けて、貴様が罪をあがなったことを満天下に知らしめる』

聞くなり理解した。そうしなければ、板に釘付けられるのはかれの首か全身の皮だと。

かれは“鷹爪”と称されてきた大力の指をもって、自分の舌を引きちぎった。

ためらいはなかった。精銳の二十数人よりなるかれの飛翔部隊を、蠅でも叩くように無造作に殺し尽くしたそのジンの武に接したあとでは。

砂漠に燃えている騎馬部族の野営の火をめがけて滑空する

かれは 剣 に屈した。

だがかれは、恐ろしさがゆえに帰順を選んだのではなかった。
肌^はに走る戦慄も、

骨まで沁み通る恐怖も、

心臓を握りつぶされるような威圧感も、絶望と同義の澄明な悟りには及ばなかった。

生きていくかぎりけっして勝てない。武の高みにいたはずの己がまったく届かない。いいや、そうではない、高低の差でさえない武の次元が違う。

剣 一人だけが他のジンと次元が違う。

だからかれは 剣 だけは、明確に己の上位者であると認めた。

だがそこまでだ ほかの誰かが武においてかれの上にいることは我慢がならない。敵の誰かであれ、同僚のホラーサーン将であれ、かれより高みに立つ者は容認できない。

ゆえに 剣 と同じ血の流れる者たち、すなわち 剣 の妹の子らであるイスファーン公家の次世代の者どもは生かしておかぬ。なぜなら、その者たちに将来、万一にも 剣 と同じ力がそなわれれば、この世界の武におけるかれの順位はおびやかされることになるから。

よって、かれはみずから志願して狩人の役を務めている。 剣 の血が混じった若造どもを、一人残らず狩りたてるつもりだった。

タカの姿の変化を解き、羊を焼く焚き火のそばに着陸すると、下界の塵芥^{ちりあか}どもが総立ちになってかれを驚愕の目で見つめた。

一切を黙殺し、かれイルバルスは羊の脚を火から拾いあげて食む^は。長距離の飛翔によって失った体力を補うために。

むさぼり食って人心地がついてから、イルバルスはようやく周囲

を見回す。

見定める。かれにこの焼けた羊を提供することになった人族の男
たち 白羊族なる遊牧騎馬民族 剣 の刻印によって未来永
劫、ジンの脅威にはなりえぬ一族。

イルバルスは白羊族の指揮官らしき禿頭の大男をさしまねいた。

かれが追っているイスファハーン公家の生き残りたちの行方を知らないか、尋ねるつもりだった。

ウルグがイルバルスに手招きされて、顔をひきつらせながらお
おず寄っていく。

その光景を岩陰にはりついでたのぞき見ながら、ペレウスは舌を打ちたくなつた。

(なんてことだ、まったく)

ホラーサーン将イルバルス 味方の中に降り立ったその相手はただ一人である。

それでいながら、ペレウスたちがのっぴきならない窮地におちいつたことは明らかであった。白羊族は呪いによってジンに手を出せないのだから。

横でファリザードが打ちのめされた声を出した。

「なんで……:よりによってクタラムシュ卿をテヘラーンに向かわせたこのときに！」

彼女の言うとおり、仲間内でイルバルスと渡り合うことができるのはクタラムシュくらいだったろう。そして、かれはここにはいな

い。

(……いざとなれば、ぼくらがやるしかない)

勝てる勝てないを度外視すれば、この場でイルバルスに武器を向けることができるのは、ペレウスとファリザードの二人のみだ。

「ファリザード、弓矢を」

「……え？」

「どこに置いてある？」

「馬の鞍につけて……なにをするつもりだ、ペレウス？」

「もちろん、あいつがぼくらを探すようなら、見つかる前にあいつを物陰から射て片をつけてしまうつもりだ」

「だめ」

怯えきつた瞳で、ファリザードが唇から制止の言葉を出そうとした。

が、彼女は急にまぶたをかたく閉じ、震えながらうなずいた。

イスファハーンに 剣 とともに訪れていたイルバルスが、父親の仇の一人であることを思い出したのかもしれない。

四つん這いで岩陰に隠れたまま、ふたりは音を立てぬように移動する。地下水を組み上げた水場の周りに群がった、予備馬を含めた百五十頭超の馬群の中へと。そこまで行くと馬体が少年と少女の姿を隠してくれた。

馬の一頭一頭の鞍に、弓矢は置かれてあった。

「……わ、わたしが射る。おまえは弓に触るな。ぜったいにだ」

ペレウスに背を向けて弓を取りながら、ファリザードが硬い声を出した。ここ数日の、ペレウスを避けていたときのようにかたくなな態度。

(土壇場でなにを言うんだ)

ペレウスはむっとしたが、弓射の腕は彼女がかれを圧倒している。言い争いはせず、かれはおとなしく引き下がろうとした。

しかし、水場の近くの大岩に縛り付けられていたジオルジロスが声をかけてきたのはその時だった。

「やめろ、馬鹿なことを考えるな。イルバルスに皆殺しにされるのがおちだ」

かれの言葉には、いつものふてぶてしい余裕はなかった。皆殺しにされる者のなかにかれ自身が含まれるからであろう。

硬直したファリザードとペレウスに、ジオルジロスは愚か者めとしいたげに吐き捨てた。

「ここは平原で、相手は飛翔能力者だ。一撃で戦闘能力を奪えねば悲惨な結果が待つのみだ。

しかして姫よ、そのわななきのおさまらぬ手でまともに矢を射つことができるのか？」

指摘にファリザードが一言もなくうつむいた。

ぎょっとしてペレウスは彼女の手元を見やる。弓を握りしめた手

は、酒毒に侵された者の手のようにぶるぶると震えていた。

嘲りの声もあげずただ冷やかな視線を送っていたジオルジロスが、「縄を解け」と唐突に要求した。

「わたしを解き放つて武器を寄せ。今すぐに」

意表をつかれてペレウスはそのジンをまじまじと見た。言われて気づいた。自分とファリザードだけではなかった。この腹黒い男はいざとなればイルバルスと戦える三人目であり、おそらくは自分たち二人よりは戦闘能力において上回るだろう。

だが、この男を解き放つのは……

「……おまえは昨夜ぼくを子ねずみと呼んだな、ジオルジロス」

ペレウスの言葉に、その男は片眉を上げた。ペレウスは不信の念をありありと面に出して言葉を叩きつける。

「タカと戦わせるために蛇を解き放つようなものだ。

奇跡が起きて蛇がタカに勝ったとしても、ねずみたちがそのあと蛇に食われない保証がないんだが」

「……はっ、用心深いことだ。では絶対に射つな。このまま馬の腹の下にでも隠れてやりすごせ。

それでも射ようとするならば小僧、貴様が射ったほうがまだましだと忠告しておく。

今のファリザード姫では駄目だ。その小娘は本質的なところで、戦士としての資質が無い。それを克服する訓練も受けておらぬ」

「……っ！」

その痛烈な否定は、おそらくファリザードの胸をえぐったのだらう。

弓を持つ左腕の震慄を止めようと同じく震える右腕でつかんで必死に力をこめていた少女が、喉の奥でうめきをあげた。それは少女の矜持が押しつぶされる音に聞こえた。

震える彼女の肩に手を置いて、ペレウスはジオルジロスに怒りの目を改めて向けた。

「ファリザードの武芸の技量を知らないくせに、知ったふうなことを。この子は並みの人族の大人よりはるかに武器をうまく扱えるぞ」

「技量以前の問題だ。」

小僧、貴様を子ねずみと呼んだことは訂正してやる。その姫に比べれば、貴様のほうがよほど殺しには向いている。

問題は心の領域なのだ。気づいていなかったのか？ その姫は、臆病者だ」

間近に迫った生命の危機に余裕をかなぐりすてたジオルジロスの言葉には、微塵の斟酌も含まれていなかった。

「新兵にはよくあることだ。わめく敵兵が間近に殺到し、自分たちが戦わねばならないと頭でわかつてはいても、体が麻痺したように動かずそのまま殺されるといふ現象はな。練習や遊びでは抜群の成績を残しても、みずからの身に敵意を浴びて生命のやりとりをする実戦に投入されれば……」

その姫がそれだ。見てのとおりだ。

体が拒否している。最初の矢を外せば殺されるといふ恐怖と向きあうことだけではなく、みずから同種殺しに手を染めることにもだ。むろん戦士としては致命的だ」

「ちがう！　なにを的はずれな……好き勝手な、ことを……！」

フアリザードが否定した。あまりにも必死な声で。

父の仇を間近にしていながら震えを止められない少女には答えず、ジオルジロスはペレウスに視線をめぐらせた。

「小僧、貴様はわたしの人族の手下を殺したことがあったろう。首や腹に刀を叩き込んで命を取ったろう。それをそのあと後悔したか？」

質問の意図がとっさにつかめず、眉をひそめながらペレウスは即答した。

「する訳がないだろう。罪のない人々を殺して回っていたあんな連中、死んで当然だ」

「それだ。お前は義や信念のためであれば同種殺しを気に病まぬ者だ。

聞け。ジンと人とを問わず、この世の生まれてくる者は戦場において三種に分かれる。

第一は、戦場においては駄犬である者たち。殺しの適性がもともと無く、訓練と経験によってどうにか獵犬の心を身につける者たちだ。

第二が、生まれながらの獵犬だ。天性の兵士であり、おのれの正義に従って殺しに手を染める。良心の呵責に悩まされることは少ない。

第三は狼だ。これは殺戮者だ。殺戮をどうとも思わぬ、または殺戮を好む。

お前は“獵犬”だ、小僧。信じる正義のためならば、人を殺して気に病まぬ。だが、その姫はあいにく」

そこでファリザードに視線を戻し、ジオルジロスはあごをしゃくった。

「犬だ。駄犬だ。」

絹の褥で育てられ毛並みは麗しいが、自分の牙を敵の血に染めたことのない美しい役立たずだ。

平和の中であれば驕慢にふるまい、武芸をもてあそんで大言壮語を吐いていられたらう。あいにくそれが現実だ、小娘。おまえは獵犬や狼の獲物、戦の賞品にしかならぬ」

総身を震わせるファリザードは、もう何も答えなかった。役に立たなくなつた腕を見る瞳から、ぼろつと大粒の悔し涙がこぼれた。

ペレウスはまなざしを険悪にしてジオルジロスにつめよつた。

「こんなときに、おまえはなにがしたいんだ。口先でファリザードをいたぶるだけか。だいたいおまえがつ……」

ジオルジロスに囚われかけたとき、反抗したファリザードは腹を殴打され、辱めを受けかけた。

（もしかしたら、あれがファリザードの心に、強い立場の相手への恐怖を刻みつけてしまったのかもしれないのに）

しかし、ジオルジロスはかれの怒りをいなすように首をふって申し出てきた。

「その逆だ。姫にその気があるならば、わたしは姫を助けてやらぬでもないのだ」

「……なに？」

「生まれながらの駄犬は、長く厳しい調練や環境によってようやく
獵犬となる。」

壊れることによつて、まれに狼となりうる。

殺戮を忌む心の一部を壊す方法は、古来より幾例がある」

ジオルジロスの上下の唇がにちゃりと糸を引いて開閉し、妖言を
つむぐ。

「“扉の宝玉”とともにおまえたちが取り上げたわが荷の中に、ひ
とつの薬がある。緑色の玻璃の小瓶だ。麻薬を基として幾種もの生
薬を合わせ、調えたものだ。」

飲めばたちまち、その手の震えは止まるぞ。

姫よ、おまえは一時的に狼の心を持つだろう。身にそなわった武
芸の技能を、殺しのために無駄なく使えるようになるだろう。おま
えの伯父である 剣 のように」

2 - 9 ・ 鳩の塔 (前書き)

イルバルスの来訪ファリザードを思いつめさせ
運命は転がって奇妙なる状況に陥ること

2 - 9 ・ 鳩の塔

ジオルジロスの誘いかけに、ファリザードは顔を上げた。

何か、おそらくは拒絶の言葉を言おうとして、
黙る。その沈黙にペレウスは胸騒ぎを感じた。

「惑わされちゃだめだ、ファリザード。心を操る薬なんていかがわしすぎる」

「自分勝手な小僧だ。姫に自ら考えることもさせてやらないとは
言い立てるジオルジロスをペレウスは強烈な敵意をこめてにらんだ。

しかし、舌戦が再開することはなかった。
翼持つ者が飛び立つ気配に、全員が上方をふりあおいだ。
暮色の濃い空へと一羽のタカが舞い上がっていく。

(上から探す気か?)

魂が消し飛びそうになり、ペレウスはファリザードの軽い体を抱え込むと、手近な馬の腹の下にもぐりこむようにして彼女に覆いかぶさった。ジオルジロスについてはどうしようもない。上空のイルバスの目に、このジンたちが見つからないことを祈るしか無かった。

実際より長く感じる恐怖の時間
ファリザードの手が背中に回されて、きつくすがってくる。

やがて、「……やつは去ったぞ」ウルグの声が響いた。

馬の腹の下から這いでたふたりの目に、げっそりしきつたウルグが戦慄いまだ去らぬ表情の白羊族たちとともにしゃがみこんでいた。

「やつは別の者を探す途中で、たまたまわれらの野営を補給のために利用しただけのようだ。水と情報を要求された」

ウルグは真つ青な顔にふと笑みを浮かべた。

「あの間抜けめ、われらがファリザード様をかくまっているとは気付かなかつた。白羊族がホラーサーン軍に逆らおうとしているとは思ってもいない様子だつた。

まあ……それもそうか、こちらからは手も出せないのだからな」

自嘲気味のそらぞらしい笑い　そのあと、「畜生め」とウルグはうなつた。屈辱と悲憤がこもつた声で。

「やつはしばらくこの近辺を捜し回るようだ。我々はここに留まつて火を絶やさず、水と糧食を提供せよと命じられた。

人族をあごで使おうとするジンには慣れているが……よりによつて仇にまで、下僕のように扱われるとはな」

一様に蒼白な顔の白羊族から、怨念が陽炎のように立ち上る。

ペレウスは黙然としているファリザードの髪から砂を払い落としつつ、「仇……白羊族全体のですか？」と尋ねた。

「むろんだ。

個人としては初対面だが、やつのは白羊族の言い伝えに残っている。“変化”術使いのジンのうちでも希少な飛翔型であり、当代でもっともそれを生かした戦闘に長けている男……元はアビシニアの王で、ファールス帝国を攻めて　剣　に舌を抜かれて以来、か

れの臣下に加えられている男……残忍さでは主に劣らない戦士だといふ。

遠い昔、われら白羊族が 剣 の支配に逆らって決起したとき、戦闘能力と残酷な気質をあのイルバルスは証明してみせたのだ」

言葉がいったん切られる。乾いた砂がさらさらと風に鳴っていた。長嘆して、ウルグは焚き火のほうを指さした。

「……それにしても、言い伝えどおり口が利けないのだな、あの男は。羊の骨で砂に文字を書いて我々に伝えてきた」

ファリザードがそれを見に行く間、ファールス文字の読めないペレウスは留まってウルグに話しかけた。

「これからどうしますか。ここはイルバルスの行動範囲内に入ったんでしょう」

「どつもどつもない。

平野で戦うかぎりわれらはカースイムとその兵三百名など恐ろしくはないが、ホラーサーン将が相手だと話がまったく別になる。

一度目はよくても、二度目でファリザード様が見つからないという保証はない」

ウルグは髪のない頭をかきむしるかわりにか、毛虫のような眉毛を神経質にいじっている。

白羊族の一人が発言した。

「こうなった以上、いつそ平原を捨てて、早急にファリザード様を堅固な屋根の下に隠したほうがよい。

我らの天幕ぐらいでは心もとないし、騎馬の民の最大の武器にし

て身を守る術である『地を駆ける速さ』はイルバルスには通じん。呪いのことがなくとも相性が悪すぎる」

「空を駆ける敵に対し、相性のよい戦いができる者がいるのかは疑問だがな」

別の一人が皮肉ったのち、「だが逃げるのは賛同だ」と意見を述べはじめた。

「今すぐ動くべきだ、ウルグ。やつがすぐ戻ってこないとも限らん。“変化”はそのジンの能力を変化した肉体のものに置き換えると聞いた。逆を言えば、変化したものの肉体上の弱点も備わってしまふそうではないか。」

通常、ジンは夜目が利くが、鳥は逆に夜に視力を失う。そしてまもなく夜になる。ゆえにすぐ移動するべきだ。

広大なイルバルスの索敵圏から逃れるのはむずかしいが、夜のうちに屋根のあるところにフアリザード様をお移しすることはできるはずだ」

斥候から戻ってきたばかりの若者が手を挙げた。

「ここからニファルサング（約10km）ほど西へ行ったそう遠くない場所に一つ塔を見つけています。」

“鳩の塔”です」

ウルグがぼんと手を叩いた。

「“鳩の塔”！ そうか、それがあつた。イスファーン領ならどこにでもあるが、あれならば扉を封鎖すれば即席の防護施設になる」

そこまで聞き届けてから、ペレウスはファリザードに近寄った。弓を引けず、ジオルジロスに「臆病者」そう言われて屈辱の涙をこぼしていた彼女が気にかかっていた。

ファリザードは、凝然と立ち尽くして砂の上の文章の一部を見つめている。ペレウスは慎重に話しかけた。

「その文字、なんて書いてあるの？」

「……“イスファハーン公家第十一子エラム”

イルバルスが追いかけてきて探し回っているのはかれらしい」

振り向いたファリザードは、焦燥とどうにもできないもどかしさを面に宿していた。

「わたしの、末の兄上だ」

「……きみの兄君」

「……どこにいるかわからないエラムを助けるためにも、早急にテヘラインを手に入れなければならなくなった。

いまの勢力ではクタラムシュ卿を含めても、イルバルスに対抗できるかは心もとない。ホラーサーン将を討てるだけの兵をかき集めてから、早急にかれを探して保護しなければ」

噛み締めるように彼女はつぶやく。ぶつぶつと。

「向く向かないなんて関係あるものか。一族が殺されていく……わたしは戦わなきゃいけない」

「……………」

「さっきのような失敗は、二度と繰り返さない」

思いつめた声。

彼女は戦意を失ってはいない　が、ペレウスはその孤影悄然とした立ち姿にどうしたわけか痛ましさを感じた。

「……ファリザード。きみはいまから鳩の塔というところへ移されるそうだ。

それと、蛇の言葉は気にしたらいけない。ジオルジロスの妖言なんか耳を素通りさせときなよ」

ふりむき、ファリザードは明らかに無理の混じった笑いをかれに見せた。

「鳩の塔か。快適とはいいがたい場所だがやむをえないな。……気にしていない、もちろん」

「ファリザード様をここから離し“鳩の塔”へ隠す。おれ含めて三十名ほどがその任を負う。残りは陽動をかねてここに留まり、焚き火を絶やすな。

斥候たち及び族長が戻ってきたら伝えよ、われらは鳩の塔へ移動したと」

ウルグの声が響き、白羊族が支度にいそしむ。喧騒をぼんやり聴き過ぎしながら、ファリザードは手に握りしめたものを見た。

みなが慌ただしい中、ジオルジロスから押収した荷を探ってみ付けた、緑色の玻璃の小瓶。

中で揺れるのはどろりとした液薬。

“飲めば狼の心を持てるだろう”

蛇の声が鼓膜に反響する。

ぐつと握りしめる。飲まない。こんなものを飲むつもりはない。

ただ、持っておくだけだ。

三十名で一団となって馬を駆る　暗くとも上空からの視線を気にして松明は持たず。

ウルグの差配にしたがってひどい緊張のなかで黙々と馬を飛ばし、ついに騎行の速度が緩められたときはペレウスは汗びっしょりになっていた。

だが、ともかくにも速度を落とさずついていくことはできた。それには満足である。

以前はお世辞にも巧いとは言えなかったかれの馬術だが、騎馬部族と行動をともししているうちに人並み程度には近付いてきたのである。

そばにいる二名のジンと比べると自信を喪失しそうになるのだが。

「ふん、鳩の塔か。明日の朝食には卵をつけてもらおうか」

手首を縛られたまま平然と馬を駆けさせたジオルジロスがうそぶいている。

迅速な騎行で息も切らせていないファリザードが、「ここの鳩や卵を捕るのは禁じられていることを忘れるな、犯罪者」と釘をさしていた。

(これがイスファハーン領各地にあるという鳩の塔)

黒くるとそびえ立つ塔影が、かれらの目の前にあった。興味を覚え、馬から下りながらペレウスはこの施設の意義について尋ねた。

鳩はファールス帝国の重要な家禽である。

肉や卵が食卓に供されるばかりではない。

ある意味で肉や卵より重要なのは「糞」だ。

ハルボゼというメロンをはじめ、西瓜、ざくろ、ぶどう、アンズ、桃、リンゴ 帝国の土地で収穫されるあらゆる果物は、鳩の糞を肥料として育つのだ。

その糞を集めるために、イスファハーン領各地に、「鳩の塔」と呼ばれる施設がある。

「内部の壁には鳩の巣穴が無数にあつて、床は鳩の糞を貯める場所になっている。

何千羽、ときには万を超す数の鳩がねぐらにしているんだ」

塔の門に向けて歩きながらのファリザードの説明に、ペレウスは感心した。ヘラスにはこのような肥料生産のための専門施設はないのである。

(ミュケナイにも導入できるかな)

ペレウスは貧しい祖国のことをなんとはなしに考えながら、「ここで過ごすの？」と尋ねた。

「しょうがない。ここならば平野の真ん中よりは安全なんだ。屋根があるし壁は厚いし扉もそこそこ頑丈だ。」

鳩は天井近くの金網の目から入れるが、鳩を捕食する大型の夕力は体がつつかえて入ってこれない。

なにより、こんな臭うところにわざわざ近づく奴はいない。しかし……」

渋面をつくつて少女がぼやく。

「できれば一生、こんなところに避難するのはごめんごつむりたかつたけど」

「たしかに……臭いが身を守るといっても、身をひそめるには辛いものがある」

ちよつと離れていてもぷんと鳩の糞の臭いが鼻をつく。内部がもつと臭うであろうことは想像に難くない。

辟易気味の二人を置いてけぼりにして、白羊族たちがさつさと扉を押し開けた。

中にいたカースイムとその兵達が一斉に振り返った。

「
な」

双方が金縛りとなり、驚愕の視線を突き刺しあう。なぜこのようなどころにこいつらが、その思いを面に出して。

鳩の塔の中にいた傭兵たちは二、三十名。ひとりが松明を手にし
ている。

かれらのそばをすり抜けて、白羊族側の目が、あるものに吸い付
けられた。

いつから放置されているのか鳩の糞にまみれて、背もたれのある椅子に半裸の男が縛り付けられていた。

右肩から右胸にかけて皮を剥がされ、血が足元に溜まってすでに乾いている。目隠しをされ、口には鳩の死骸が突っ込まれていた。明らかに拷問で責めさいなまれた様子。

そして、種族はジンだった。

「……………ア……………アーガー卿……………？」

都市テヘラーンの正当な領主の名を、ファリザードがかろうじてつぶやく。

ファリザードがアーガーの顔を認めたと知って、カースイムが黙りこくりに、瞳を底光りさせた。

遭遇戦というものがある。

敵味方のどちらの指揮官も歓迎しない、叡慮や戦術とは無縁の、無秩序に支配されがちな戦闘。

だがそれが、戦場においてはしばしば起きる。

2・10・毒虫 上 (前書き)

都市テヘラーンの領主アーガー卿、カースイムを逆徒と名指しし
カースイム、決闘裁判をファリザードに申しこむこと

「カースイム卿、これはどうしたわけか。その椅子に座っているのはアーガー卿ではないか。おぬしは直接の主君を幽閉して、拷問していたのか！」

そして都市テヘラーンを奪いとり、それを知られぬためわたしたちを遠ざけようとしたのだな!？」

眉を怒らせて詰問するファリザードが前に出、白羊族がそれを包んで塔内に入りこむと、場の雰囲気はたちまち変わった。

驚愕は険悪な敵意に代わり、両陣営のにらみ合いは空間をぎりぎりと張り詰めさせてゆく。

カースイムの連れていた傭兵たちが齒を剥いて挑発の表情をする。白羊族、ことに血気にはやる若者たちはそれを見て鼻頭にしわを寄せ、矢の羽に指を起き始めた。

都市テヘラーンの警備隊長ことカースイムは、ファリザードに難詰されても無表情であったが、唐突にじわりと殺意がにじんだ。その手がそろそろとベルトに差した剣の柄頭をまさぐっているのを見て、ペレウスは戦慄した。

ほぼ同時に禿げのウルグが、ファリザードおよび鬨気をふくらませた白羊族の者たちへと注意を促す叫びをあげた。

「待て、刺激するな！」

ファリザードがはっと息を呑む。彼女もすぐに理解したのだ。まずい状況だった。

人数には大きな差はない。こちらは捕虜のジオルジロスを除き三

十名、カースイムたちのほうはそれより若干少ない二十五人前後であるうか。

だが、こちらの主力を占める白羊族はジンには手を出せないのだとなれば問題は、カースイムの武力がどの程度のものであるかになつてしまふ。

冷静に考えればカースイムと戦えるのはファリザードとペレウスしかいないのだから。

(でも……イルバルスと違い、カースイムは白羊族が戦えないことを知らないようだ。だとしたら、あちらもこんな状況で戦いたくないはずだ)

奇妙にして両者とも望まざる状況であつた。

どちらもできれば、戦うなら原野で戦いたかつたであろう。

ここは白羊族にとっては、騎馬戦術を駆使する余地がない場所である。

カースイム側にとっては、本来なら傭兵の人数では優っていたのに、遭遇戦の成り行きで寡兵の立場に置かれていくという状況である。

(カースイムがここにいたのはなんのためだ？ 幽閉したアーガー卿の息の根を止めておこうという判断だったのか。だから少人数でひそかに訪れていたのか。

いずれにしても……相手が白羊族の実情を知らない以上、仕切り直すことは交渉次第で可能なはずだ。アーガー卿を殺さないように取引していったん引き下がれば)

しかし、そのときだつた。

気絶していたかに見えた椅子の捕囚が、鳩の白い糞でにかわのように塗りつぶされていたまぶたをかつと見開いた。満身創痍のアー

ガー卿はもがき、口に押し込められた鳩の死骸を吐き出した。

「告発する！」

今こそ機とばかりの絶叫が放たれる。

その怨念は鳩の塔の内部に轟きわたり、無数の巣穴を揺るがした。

「イスファハーン公家のファリザードよ、このアーガーは御身の臣下として告発する！ その男カースイムは逆徒なり！」

幾千羽もの眠れる鳩が目を覚まし、飛び立って乱舞し、翼で空気を叩いた。

自らへの告発にあくまで無言を通し、カースイムは鬱陶しそうに天井を見上げている。

「その逆徒は私に毒を盛って四肢の自由を奪い、ここに監禁し、拷問し、いずれは殺すつもりだと語った。剣に膝をつき、その裏切りの代償としてテヘラーンを己のものとして受け取るつもりであった。」

公領全土を統べる正当な大領主の子ファリザードよ、一族の責務である裁定を行われよ。私に対する、イスファハーン公家に対する、帝国に対する反逆の罪を裁くべし！」

「鳩を拾い、その患者ののどに突っ込め。窒息死してもかまわん」

ようやく口を開いたカースイムが平然と傭兵たちに命じる。それはかれが仮面を完全に投げ捨てたことを示していた。

ざわめきの中で、ペレウスは目を閉じて蒼白になっていた。

戦うしかなくなった　カースイムの罪は完全に確定したといつてよいのだから。

「こちらはおれを捕らえねばならず、おれはこちらをどうあつても口封じするしかなくなつた。」

（疑いようもなく、これは正義だ。正義だけれど……アーガー卿、ぼくらは大軍勢でこの地に来たわけじゃないんだ）

「話があります、ファリザード様。いえ、申し出ですが」

カースイムが口を開き、さりげない調子で言った。

「な、何だ」ファリザードが身構えた。ペレウスは祈つた。どうかカースイムの申し出というのが“お互い兵を引きませぬか”というものであるようにと。

もちろん、そんな話にはならなかつた。

「決闘裁判を受けていただけでしょうや」

ペレウスを含めこちら側の全員が、耳を疑つた。

（決闘裁判だと？）

「いったい何を考えている。集中する視線を浴び、「ジン族古来の法により」カースイムはふたたび口を開いた。」

「裁判官の前で、原告の名指した者と戦い、決闘の勝敗によって身の無実の証を立てることは、訴えられた者の権利として認められております。」

大陸諸国のジンのみならず、西方諸蛮国の白のジンどもにすら残る古法。知らぬとは言いますまいな、ファリザード様^{エルフ}」

「知っている」慎重にファリザードは答えた。「だがそれでなぜ、

わたしとの決闘に話が飛躍するのだ」

「なぜなら、もはやそれ以外に無罪を手に入れられそうにないからです。

アーガーは、あなたに私を訴えました。われらは公領の都市テヘラインの領主と警備隊長。われらの直接の上位者は、^{スルターン}上帝を別にすればイスファハーン公のみ。

そしてイスファハーン公が死んだ今、その嫡子であるあなたは、われらの争いを裁定すべき立場にありません。しかもアーガーはあなたを名指しした……ゆえに、この場では、裁定者と原告の立てた戦士役、双方をあなたに代行していただくことにしましょう。

さて、ファリザード様」

ふてぶてしくカースイムは口角をつりあげた。

「裁定者としてのあなたは私を有罪としますか、無罪としますか？ あなたの答えは決まっているのではないですか？ そら、私は破壊を避けるために最後の手段として決闘裁判に訴えるしかない。むしろあなたが私の無実を証明してくれるならそのようなことは起こす必要もありませんが」

「ばかな……有罪無罪を論ずる段階か。貴様は反逆の現行犯だぞ」

理解できず目を丸くしたファリザードに、カースイムは声を低く沈めた。

「呑み込みの悪い姫君だ。

殺されたくなければイスファハーン公家の名にかけて私の無罪を宣告しろと言っている。決闘に応じずともよいのだぞ。そうなれば、互いの兵を動かして殺しあい、無用の犠牲をそちらが増やすだ

けのこと」

冷たい泥水のごとき粘る殺気を浴びせられて、ファリザードがびくりと一歩退いた。

ペレウスは理性とは別に、かちんと来るものを覚えた。かれはファリザードの前に出て、カースイムに対峙した。

「開き直るな、逆臣」

にらみあげるペレウスを、カースイムは排水路のドブネズミを見るがごとき目で一瞥した。

「……なんだ、お前は」

「イスファハーン公家の食客だ。

あなたは岳父アーガーを鳩の塔に幽閉し、拷問を加え、都市テヘランを篡奪し、そして実情を知られないためにファリザードを追いはらおうとした。

明々白々なその罪状を逃れるために、ファリザードみたいな女の子一人に、大の大人が決闘を申しこむという形で脅すなど、みつともないと思わないのか」

「言葉をしゃべる害獣よ、その舌は正論らしきものを吐く術を知っているようだ。だがそれがどうした？」

鼻先でカースイムは嗤った。

「いまは力の世だ。

本当を言えばファリザード様がどう裁きを下すかすら関係ない。私が反逆したからといって、イスファハーン公家に私に罰を下す力

などもうないのだからな。

わが身の無実を証言してもらおうとしたのは、うむ、言われてみればわが心の弱さだな。私としたことが慌てていたようだ。うむ、うむ……それに、どうやらくだらぬ忠義心のかけらが、私の奥にもまだあったようだな。それもここで消そう。

姫の身柄を押さえ、 剣 に突き出そう。最初からその選択肢を選ぼうとしなかったのは、無用の気後れというものであった」

言いつつ一步を進めたカースイムに、ペレウスは鞘から三日月刀を抜いた。対峙する二人以外の全員が、身をこわばらせてぎくりとした。

白羊族のウルグが、「よせ、坊や」と驚愕の声をあげ、ファリザードが思わずといった調子でペレウスの袖をつかんだ。

カースイムの面に、はつきりと不快感が現われた。自分の引き連れている傭兵たちも人族であることなど意にも介しない様子で、かれはうんざりとペレウスに訊ねる。

「なんのつもりだ、害獣」

「わかった、決闘すればいいんだろう。

ぼくらが負けたらそっちの無罪を認めてやる。ぼくらが勝ったらぼくらを黙って逃がせ。悪い話じゃないはずだ」

良い話だとも悪い話だとも、カースイムは評しなかった。ただ醒めた声でつぶやいた。

「……『ぼくら』？」

「そつだ。決闘するにしろ一対一は不公平すぎる。ぼくが彼女に味方する」

(カースイムは正しいことをひとつ言った。『無用の犠牲をそちらが増やすだけ』 そうだ、たしかにそのとおりだ。

ジンと戦えない白羊族のみんなはカースイムとは戦えない。ジオルジロスは解き放つのは危険だ。集団戦にしろ決闘にしろ、この男と戦えるのはぼくとファリザードの二人だけ)

ならば、決闘のほうがまだましだ。

「……二対一？ なぜ、そのような変則的な決闘に、私が応じねばならんのだ？ これでは茶番でしかないな」

「最初から茶番だろう。古来の法だなどと言って、単にファリザードを脅すための手口だったじゃないか。

それとも怖いか、カースイム。戦う子供が二人に増えただけで怖じけづいているのか。廉恥心というものはおまえにないのか？」

自らへの鼓舞をかねて、ペレウスは相手を挑発した。

かれは、ファリザードとかつて決闘したときの戦略を鮮やかに覚えていた。挑発し、格下相手と侮る敵を猛攻させて、敵手の体力が尽きたときに反攻して勝利をおさめた。今度もそれが通用するかどうかはわからないが、無策よりはましだろう。

「怯えているのだとすればおまえなんて、ホラーサーン将に比べて怖くもなんともない」

鳩の白糞がみぞれのように降って両者の間にびちゃと落ちた。

滑稽でそして恐ろしい間の後、カースイムがふたたび歩を進めた。

「……まあ、ホラーサーンの歴戦の猛者どもと比べられても困るな。

兵を動かす体裁を整えるために都市警備隊長の役職を名乗ってはいるが、もともと私は書記官だからな。

“ 大力 ” の能力もせいぜいが五人前 ー

その露出した首元の地肌に、不意に赤く呪印が浮かび上がった。

呪印は伸び、^{ツタカスラ} 蔦蔓のようにジンの肌身を覆っていく。

戦闘準備が整ってゆく。

「だが、生粋の武官ではないとはいえ、私もジンだ。

悔りは己のちっぽけな生命であがなえ、愚かな幼獣」

カースイムはついにペレウスに向けて腰を落とし、しゃらりと剣を抜きつれた。それは通常の鋼の剣で、刃渡りは肘から手指の先までと短め、しかし十分に鋭かった。

「ペレウス、だめだ、下がってるっ」ファリザードがぐいぐいと袖を引っ張る。

「きみこそ下がってる」

ファリザードの狼狽に聞く耳を貸さず、つかまれた袖を振り切り、ペレウスは刀をかまえた。背後の彼女にささやく。

「防御なら多少は心得がある。盾がないのが残念だけど……ぼくが受けに専念して持ちこたえるから、きみはその間に攻撃しろ。役割分担だ」

言いながらペレウスは、カースイムの姿に目を凝らした。サー・ウィリアムに叩き込まれたとおり、まずは間合いを目測する。

(八歩)

相手はジン、しかも大人である。この距離でも軽々と詰めてくるだろう。わずかな動きも見逃さないつもりだった。

(やつが飛び込んできたら即応する)

微塵も、ペレウスは油断はしていなかった。ただ、甘かった。甘く見積もり過ぎていた。成体に達したジンの速度を。唐突に、剣尖が目の前にあつた。

(?)

一瞬きの数分の一 死生のはざまに気がつけば、いた。時間が奇妙にゆっくり流れ、生存本能がいきなり最大限の警鐘を鳴らし、

(???!)

予想をはるかに超える速度で刺突が顔面に来たのだと認識するより先に、ペレウスは刀をはねあげてそれをかるうじて払いのけていた。

それによって胸ががら空きとなった次の瞬間、迅雷のごときカーシムの蹴りがかれの腹に炸裂した。

少年が宙を舞う。

前触れなく一跳びで八歩の距離を無にしたカーシムに、すくいあげられるように蹴られてペレウスが吹っ飛んだのだった。突進す

る牡牛にはねとばされたがごとく、数ガズモ。^{メートル}

かれの身体は回転しながらアーガー卿の縛り付けられていた椅子にぶつかり、ばきばきと破砕音を響かせて、半壊した椅子とアーガー卿もろとも床に転倒した。

「ペ……ペレウス！」

フアリザードは絶叫した。

しかし、駆け寄るより早くカースイムが彼女に向き直り、逆手で斬りつけてきた。

転瞬、フアリザードの腰間から黒い光が手走った。相討ち必至の一撃にぎよっとした表情のカースイムがみずからの斬撃をひっこめ、フアリザードの刃をのけぞってかわす。

名刀“七彩”^{ハフト・ラング}を抜いたフアリザードが横に跳ぶ。彼女は敵の体を回りこんで倒れたペレウスのもとへ行こうとしたのである。だが、カースイムはそれを逃避行動と勘違いしたようだった。

同じく地を蹴って横跳びに進路をふさいできたカースイムに、フアリザードはきつと目を据えた。

彼女の手元から鞭がしなるように、三日月刀の斬撃が放たれる。

余裕しゃくしゃくで剣をかざして受け止めようとしたカースイムの前で、その一刀の軌道がぐにやりとねじ曲がった。袈裟斬りが刃を寝かせた首薙ぎに変じ、泡をくって身を沈めたかれの頭上を黒い刃が通過する。肝を冷やされたカースイムが吠えた。

「小娘、存外にやるな！」

ぱっと双方が跳びすさり、向かい合ったまま円を描いて高速で廻りはじめた。独楽の反対側の縁のように一定の距離を保って。

その距離が双方ともに埋められて縮まり、円が急速に収斂する。近づいた一瞬で数合刃を噛みあわせるやまたも跳びすぎる。

もはやカースイムはうかつに近寄ってはこないが、ファリザードのほうもペレウスのほうへ走りたくても走れない。足を止めたり背を向ければ致命的な斬撃を食らうだろう。

敵味方の人族が後ずさって壁ぎわへと退避し、息を詰めてジン同士の決闘を見守っていた。

ジオルジロスは戦うファリザードを見ている。奇異なものを見たようにまなじりを開いたが、やがて、く、と片頬をゆがめて笑いを漏らした。

「臆病な犬も

」

主人が目の前で傷つけられれば、恐怖を忘れて無我夢中で噛みにかかるといふらしい。

その独り言に、白羊族の者たちがちらりとかれを振り向く。気にせず、かれは笑壺に入ったようにくつくつ横隔膜を震わせつづけた。

ファリザードにはジオルジロスの言葉を聞きとめるどころか、一瞥する余裕もない。

大人のジンの嵐のような手数と速度と斬撃の威力を前に、吹っ飛ばされぬよう巧みにさばくだけで精一杯である。

身体能力で圧倒され、ただ剣技という一点においてのみ、彼女はカースイムより上位にあった。カースイムが武官ではないという言葉はとうやら本当のようだった。

……それを含めていくつもの幸運が、まだ彼女を生かしている。

剣技に加え、もうひとつは得物の違い。フェアザードの愛刀ダマスラス鋼の“七彩”は、鋭さ軽さ頑丈さ、しなりの柔らかさと、性能においてカースイムの剣を遠く引き離す。

さらにひとつは、カースイムの斬撃に彼女を殺す意図がさほどないこと。剣に差し出すと言ったとおり、かれはフェアザードを生け捕りにするつもりの方だった。

だがそのどれよりも大きな理由は、足場だった。周囲で見守る人間の観客たちにとっては大小どちらのジンも目にも留まらぬ速さであるうが、駆け巡る速度は本来なら大人がはるかに勝り、比べ物にならないはずなのだ。それがどうにか拮抗しているのは、塔の床は鳩の糞で覆われ、滑りやすくなっているからだ。ここでは転倒を恐れるカースイムの足は鈍るが、より体が小さくより軽く小回りのきくフェアザードは、足場の悪さの制約をさほど受けなかった。

円が縮まる。残像、余光、鋼のきらめきが乱舞する。

一刀。一剣。また一刀。受けられる。返される。受け止める。返す。斬撃の応酬に火花が散り、無数の手数のもとでつかの間の均衡が成り立ち……

刀と剣とが強烈に噛みあった瞬間、小さく鋭い音が居並ぶ観衆の耳を突き刺した。

驚愕もあらわに何度目かの背後跳躍を行ったカースイムの手には、柄元から断たれた剣が残っている。

「……驚いた。鋼の剣を斬られるとは。腕力でやすやす押し切れるはずと真っ向から噛みあわせたのがまずかったな」

剣の断面を指でなぞり、カースイムが嘆声を発した。

だが、せいぜい息を荒げながら動かず立ち尽くしているファリザードの目は、かれに向いていない。

彼女の見ているのは、その斜め後方だった。横に倒れたアーガー卿と半壊した椅子とその破片の傍らで、ペレウスがうめきながらよろよろ上体を起こしていた。見たところ生命に関わる大怪我もなさそうである。アーガー卿の体が衝撃を受け止めたのかもしれない。それを視認してようやくファリザードが心底からほっとしたとき、

「認めて進ぜよう、ファリザード様」

すぐさま顔を戻したファリザードに、そのジンはうなずく。

「あなたは豊かな天稟を持っている。類まれな宝刀を使ったとはいえ、呪印の浮かんだ大人のジンに剣技で渡り合うとはな。

よろしい。革袋を持ってこい」

命令は、背後の傭兵たちへのものだった。

大きな革袋を肩にかついでいた一人の傭兵が進み出、カースイムへとそれを差し出した。

「ファリザード様、残念だ。まったく残念だ。あなたの生け捕りを諦めなければならぬとは。あたら若い才能を無惨な屍に変えねばならないとは。

だがそれもあなたの運命というものだ」

革袋を受け取り、その中に手を突っこんで、拳ほどの大きさの玉をカースイムは取り出した。玉の中には、透ける薄膜に包まれた黄色く濁った液体が満たされている。

「この先はわが本来の戦い方でやらせてもらおう」

2・10・毒虫 上 (後書き)

次回(来週)は、前回の連絡のとおりお休みさせていただきます。

2・11・毒虫 下 (前書き)

都市テヘラーン奪回の戦いにひとまずの決着つくこと

革袋から半透明の膜でできたぶよぶよの球体を取り出し、

「斬ってみるがよろしい。それだけの技量があればだが」

言うなりカースイムは手から放った。

飛石のごとく顔面を狙ってきたそれを、ファリザードはあわてて身をかがめて避けた。

挑発に乗って反射的にその飛来する球体を斬らなかつたのは、賢明というものであった。

液体が詰まつた破れやすそうな球体であることを、ファリザードは見取っていたのである。

凄惨な絶叫が彼女の背後から聞こえた。肩越しにちらりと視線を向けたファリザードは、瞬時に顔色を変えて息をつめた。

カースイムの投擲した球体の直撃を食らつたのは、かれの連れてきた傭兵の一人であった。ファリザードがかわしたために代わって災難をこうむつたその男は、叫びながらがりがり顔の皮膚を掻きむしつた。鳥がひつかくような傷が幾筋も刻まれて、頬が血まみれになっていく。男は、倒れ伏して瀕死となつてもまだ顔を掻いており、赤い掻き傷のはざまから見える肌には青黒い斑点がぼつぼつと浮かび……

「ポフ・シャル 悪しき膨れ” だったか……変わった闘い方だな、カースイム卿。猛毒の液体を投擲して使うか」

ファリザードはカースイムから視線を外さず言った。

生命をかけた戦闘に臨みながら、いま自分でも不思議なほど彼女は集中できていた。ペレウスが殺されかけた瞬間に戦闘意欲が爆発

的に膨らみ、圧縮されて冷え固まっていたのである。それは本能的な怯えを上回るもう一つのジンの本能だった。

それでも、背後でびくびく痙攣している傭兵の無惨な死に様はなるべく考えないようにしていたが。周囲の人間たちも、みずからが巻きこまれる可能性に直面して、一人残らず戦慄の面持ちである。

「西南の大陸には巨大な蛙が住みます。その膀胱を加工し、毒をそそぎ入れました。

この“珠毒”、姫には存分に堪能していただく。」

たつたいま結果として部下を殺したにも関わらずカースイムは気にした様子もない。彼はあらためて肘まである革の手袋を右腕にはめながら、フアリザードに平然と答えた。

「汚い武器を使いやがって！」

恐々として塔の壁にはりついた白羊族の一人が罵る。次の珠を取^{たま}り出したカースイムが罵声に応じる。

「なんということもないお笑いぐさの武器だ。手投げの毒矢に比べれば鋭さに欠け、毒刃に比べれば軌道も単純。ただそれらと比して利点があるなら」

悠々うそぶきながら、かれは毒の珠をにぎった腕を後ろに引いた。

「触れれば弾ける膜の薄さゆえに、斬ることも受け止めることも能わぬことかな！」

たちまち飛来する猛毒をフアリザードは体の軸を回転させてかわした。続けて跳びかかるために足をたわめる。

だがすぐさまカースイムは、彼女と自分の間の床に毒珠を投げつけた。

珠が潰れて猛毒のしぶきが飛び散る。浴びればそれは衣服にしみこみ、肌に付着するだろう。突っ込もうとしていたファリザードは驚愕して真上に跳躍することでかろうじて逃れた。着地して体勢をととのえる暇もなく、第三、第四、第五弾が次々と彼女を追って放たれる。

「連珠爛毒」ご覧し候えそつひ」

革袋を足元に置いたカースイムの両手には、お手玉を投げ上げることがごとく数個の球体が常に巡っており、それが続けて宙を舞う。

刀術の歩法をつかつて間一髪で即死の毒をすべてかわしきるが、ファリザードは余裕のかけらもない状態に突入させられていた。

カースイムの言うとおり、珠がぶつかって弾ければ中身の毒が浴びせられる。直前で斬るなりはねのけるなりしてもしぶきが飛び散る。

液体相手に、刀では防御のしようがない。

床や壁で投げつけられる珠が弾け、鼻をつく毒気が鳩の糞の臭いに混じる。

右に左に飛び跳ね、塔の壁を蹴ってとんぼを切り、ひしゃくの水撒きから逃れる猫のように、ファリザードは逃げまどわざるをえないう。きりきり舞いしているのは彼女の背後にいる人族たちも同じであった。敵味方の区別なくファリザードの後ろに位置せぬよう壁際を右往左往し、外れた毒珠を食らうまいと血相を変えていた。

「布の靴でいつまでもつかない？」

カースイムが嘲る。壁際の床には毒水の溜りがそこかしこに出来

ており、たしかにうかつに踏めば足から毒に浸されるだろう。フリザードが逃げまわれる空間が狭まっていく。

「カースイム卿、貴殿のような男は類まれだな！」

少女の形勢危うしと見た白羊族のウルグが突如として大音声を発した。

「これまで忠武の人アーガー卿の配下として、婿として薰陶を受けてきたことだろう。

それでいながら主たるアーガー卿も、主の主たるイスファハーン公家の方も弑逆しようとするそのねじ曲がった反逆者根性は、どうやって身についたのかね！ 蟻の巣にサソリが生まれようとは！」

痛罵をもつてせめてカースイムの注意を惹きつけようという意図それは成功した。

にわかに、

「ほざくな、害獣！」

カースイムは気色ばんで雷喝した。一瞬、珠毒をウルグの方へと投擲しようとして、もつたいたいと思いついた腕を引っ込めた。

その間に、毒の飛沫を避けて跳ね回らされていたフリザードがようやく一息つく。その呼吸は胸が破れそうなほどに荒くなっていた。

だが彼女に追い打ちをかけることなく、カースイムは横を向いていた。

その視線の先にいる床に転がったアーガー卿は、散らばった毒水を浴びることもなくまだ生きている。

「……こやつが忠武の人か。そうとも」

かれを見つめるカースイムの目ににわかには毒が燃えるが、とき鬼火が揺れた。

「そうだな。まぎれもなく忠義者といえる。

こやつは主家のためにみずからの娘を……私の愛しい妻であったアーミナを見捨てたくらいの忠義者だ。

百二十年前、帝国を騒がせた背信帝による内乱のとき、わが妻はバグダードにいて背信帝に質にとられた。背信帝からアーミナを手中にしていると告げられ、奴への服従を名指しで呼びかけられたにもかかわらず、その男アーガーはイスファハン公家から離反しなかった。兵を主家に提供し、都市テヘラーンが薔薇の公家の旗の元にあることを公布した。それが背信帝の激怒を買い、娘であるアーミナにどういう結果をもたらすか知っていながらだ」

鬼火がしたたる。ぼたぼたと。

「わが妻は呪印を削がれ、バグダードの牢獄送りとなった。ジンの貴族の身でありながら、人族の男の罪人どもが群れる牢に投げ込まれた。そして鳩の糞にうずまるよりおぞましい五十日間ののちに引き出されて広場で処刑されたのだ。剣の軍を中核とした四つの公家の連合軍が背信帝の軍を打ち破ったのはその直後のことだ。

すべてが終わった後、世人はアーガーの選択を褒めた。娘を捨てても主家を選んだその男を忠義なるアーガー卿と礼賛した。

だが私は、その男と、その信ずる忠義とやらに思う存分唾をかけてやれる日をずっと待っていた。このように汚物に沈めてやれる日々を待っていた」

ジンは愛する。激しく長く。

ジンは復讐する。執念深く。

「背信帝は 剣 が殺してくれた。

残ったアーミナの仇らにも 剣 が私に代わって復讐してくれる。

剣 はわが妻の死の遠因となったイスファーン公家を滅ぼし、わが妻を汚した人族のすべてを永久に鎖につないでくれるだろう。素晴らしい。私は諸手をあげて新帝となったかれを支持しよう。

ただアーガーのみはどうでも私の手で殺さねば気がすまなかった」

「……それが反逆の理由か、カースイム卿」

ファリザードはようやく口を開いた。だがすぐに言葉に詰まる。言うべき台詞が見つからなかった。

（この男は敵……裏切りをはじめ卑劣な行いに手を染めた敵だ。歪んだ理由がなんであれ、同情など論外だ……それなのに）

ファリザードの胸の奥に、小さなしこりが生まれていた。それは憐れみかもしれなかったし、共感かもしれなかった。

愛する者を見つけないまでは彼女にもわかる。これがジン族なのだ。

カースイムがややあつてうつすらと微笑した。

「おや、私を憐れんでくださるのですな、ファリザード様？」

「……なにをばかな」

しかし、カースイムの悪意は微塵も揺らく気配を見せなかった。

「優柔なる家風のイスファーン公家の生まれにふさわしく、なん

と慈悲深い薔薇姫であることよ。

あなたがたはやはり、 剣 には勝てぬ。 兎が獅子を食い殺すと信じられる者がいようか」

かれは嘲弄する。 イスファハーン公家の未来を否定し、 戦うといふ彼女の決断を否定する。

「それに、その慈悲深さがあるならば、なぜ臣下のことを考えて賢明な降伏を選ばなかったのか？

ホラーサーン軍はひざまずかない者を容赦せぬ。そして過去の罪をゆるがせにすることもない。もしもあなたがたの全員が捕虜にされた場合、そして過去にホラーサーン軍に敵対する行動をとっていたことが明らかになった場合、あなたに付き従った者には裁きが下されることになる。処刑されずにすむのは先に戦場で殺された者だけとなるうぞ」

その脅しは、フアリザードの痛いところを的確に突いた。まさにそれこそ彼女を日夜苦しめていた懊悩であった。カースイムがかさにかかつて非難する。

「臣下を守らぬ主君には、それだけで主たる資格なし。守る力もないくせに戦いを選ぶのも同じことだ。守れぬならばひざをなぜ屈さぬのだ。」

百二十年前、アーガーが私のアーミナを死に追いやったように、あなたは幾人もの妻を失った夫、夫を失った妻、そして親を失った子をイスファハーン公領全体に生み出そうとしているのだぞ。

そうなる前に私が貴様を断罪してやる。 イスファハーン公家のフアリザードよ、ここで毒に爛れて死ぬがいい。今よりとどめをくれてやる」

もはや形すらも敬つ口ぶりなく、カースイムは革袋を抱え上げ、毒の珠をつかみ出した。

だがそれが投擲される直前のことだった。

「戦う理由なら『誇りある自由のため』で十分だ！」

叫ぶやアーガー卿の横たわるそばから床を蹴って、横合いからかれめがけて走りだした影があった。カースイムの表情がぎよっと強張るが、いかに虚をつこうとその少年の突進はジン族の反射速度からすればいかにも鈍いものでしかなく……

「やめてえっ！」

フアリザードが制止の悲鳴をほとばしらせた。

姿勢を低くして突っこむペレウスにカースイムは即座に向き直っている。叩きつけるように珠毒を少年にぶつけた。

だがペレウスは、走りながらそれを手にしていた方形の盾で受け止めた。

一目見て誰もが気がついた　革張りのそれは、アーガー卿が座らされていた椅子の背もたれであった。蹴り飛ばされて吹っ飛んだペレウスは、かれにぶつかってばらばらになった椅子から即席の盾となりうる背もたれ部分をつかみ出したのだった。

……武器防具には相性というものがある。

刀はカースイムの珠毒を防ぐことはできなかった。鎧であっても、まともに浴びせられれば毒の液は鎧の隙間から流れこんだだろう。だがペレウスが手にした即席の盾は、液体の攻撃を防ぎきったのである。

とっさに蹴りを放とうとしたカースイムへ、“七彩”が飛刀と化

してファリザードの手から放たれた。氣勢を刀身に凝し刀尖は敵の心臓を指す、これぞ絶技“飛棘”である。だが刀を手放すがゆえに後のない一手でもあった。

少年を守ろうとする飛刀の勢いに、連続して不意をつかれたカースイムは狼狽して防ごうと左腕をかかけ

瞳目、驚愕、そして絶叫。

それが一瞬後のカースイムの反応だった。

ファリザードの飛刀はカースイムの左腕を貫いて止まっていたが、それは致命的なものではなかった。それと同時のペレウスの盾での体当たりが、革袋を中身の毒の珠ごと押しつぶし、猛毒のしぶきでカースイムの右腕を濡らしていたのだった。手袋で守られていないところまでを、ぐっしょりと。

革袋を投げ捨ててよろよろと後ろによろめき、左腕に突き立った刀の背をカースイムはくわえ、口で引き抜いた。次の行動は果断さを褒められるべきだったろう。

かれは抜いたばかりの“七彩”を左手でふるい、毒を浴びた自分の右腕を切り落としたのである。

「やってくれたな、幼獣」

おびただしい鮮血を右腕の断面から噴き上げながら、カースイムは急速に血の気を失ってゆく顔でペレウスをねめつけた。かれをペレウスは真っ向からにらみ返している。鏡合わせの純粋な敵意。

ファリザードはカースイムとにらみ合う少年に駆け寄り、背中にかばった。

辟易したように少年が言う。「よせ。あまりぼくを守ろうとするな、ファリザード」と。

「……舐めおって」

刀を手にカースイムが一步を踏み出そうとした。しかし、限界に達していたらしくがくりとひざが沈み、“七彩”がその手からこぼれ落ちかけた。人族より生命力の強いジン族とはいえ、付け根近くから片腕を失えば急激な失血で朦朧とした状態に陥る。踏ん張って倒れ伏すことだけは寸前で回避したかれに、ペレウスが指摘した。

「あなたの右腕は無くなった。左腕も傷ついている」

戦うのはもう無理だ。言外にその意味が含められているのは明らかだった。

カースイムは歯ぎしりし、それでも認めざるをえなかったようで、よるめきながら下がった。かと思えば、連れてきた傭兵たちへと振り向いて叫んだ。

「こやつらを殺せ！」

人族の傭兵たちは、その命令に互いに顔を見合わせた。幾人かが刀を抜きつれて前へ出てくる。

対抗するように、これみよがしに三日月刀や半弓をかまえた白羊族がずいとしてファリザードとペレウスの周囲についた。

しかし、傭兵たちの大部分は動かなかった。前へ出た者たちも、仲間が動かないのを見て取ると黙ってひっこんだ。

「何をしている、命令を出したぞ！」

流れる血で半身を赤く染めたカースイムが続けて怒鳴る。

白けた顔をした傭兵たちの中央で、熊のような濃いひげ面の男があごをこすって発言した。

「決闘で負けたじゃないですか、あなた。逃がすくらいしてやれば
どうです」

色が悪くなりつつあるカースイムの顔に焦燥が浮かんだ。続いて
それが憤怒に変わる。

「貴様らになんの関係がある！？ 報酬しだいでもするとい
うのが貴様らの売りだったろうが！」

「じゃあ言わせてもらいますが、カースイムの命の落とし前をどう
つけてくれる気で」

「何だと？」ぽかんとしたカースイムに、

「あなたと同名なんですよ、そのそいつ」

熊ひげの男は、毒を浴びて床に倒れ伏し、無惨な死骸となった男
を指さした。

声に、抜き差しならない剣呑さが含まれ始めていた。

「ええ、金と契約は大事ですよ。ですがそれより重んじるものもあ
るんでしてね。仲間の命もその一つなんで」

冷ややかな傭兵たちの視線がカースイムに突き刺さる。

熊ひげの男が、あごを撫でながら不気味に静まった声を出す。

「山で一緒に育った連中とやってる稼業なんで……雇い主が人族
への悪口を言うくらいはどうってこたあないんですが、気心の知れ
た同郷のもんを殺されればさすがに、ねえ」

「なんだ、あつちも部族でやってるのか」白羊族の側からそこはかとなくつぶやきが漏れた。少しだけ親近感が含まれていなくもない。山ということは都市テヘラン北のアルボルズ山脈に住む山岳民か、とフアリザードは考えを巡らせている。

カースイムたちの仲間割れの様子に、なんとなく静観の構えとなつた一行だったが、ペレウスがフアリザードに届く小声で指示してきた。

「あつちの傭兵たちに、全てを許すとこの場で約束するべきだ、フアリザード」

え、と振り向きかけて、フアリザードはかれの言わんとすることに気がついた。

声を高らかにあげる。

「カースイムに雇われた山岳民よ！」

傭兵たちが一斉に彼女を見つめた。緊張を感じながら彼女は宣言した。

「ここでカースイムと縁を切るなら、おまえたちがかれの反逆の罪に加担したことは忘れる。イスファハーン公家の名において約束する、いまならばだれも罪には問わない！」

熊ひげがちょっと考えるそぶりをして、肩をすくめた。

「あんたらに味方してこのジンを殺したところで、剣が勝てばどうなる？ 剣は、ジン族を殺した人族を許しやしねえ。仲間の仇を討ちたいという気持ちもあるが、俺たちは一族ごと皮を剥が

れるのはごめんだ」

「イスファハーン公家に味方せよとは言っていない。これ以上カー
スイムに手を貸さない、いまはそれだけで十分だ。カースイムは…
…この場では殺さない。かれはいつたん追放する。

後々わたしたちがかれを捕殺しようと、それならおまえたちの咎
にはなるまい」

「いいでしょう」

至極あっさり、熊ひげはうなずいた。苦痛と怒りで口も利けな
いほどになっているカースイムへと言い放つ。

「そういうことで。大金はもらったが契約はこれで終わりだ、カー
スイム殿」

「……貴様らすべて呪われてあれ」

全てを失ったカースイムは吐き捨てた。かれはよろよるとアーガ
ー卿の元へ向かい……殺意を察したファリザードとペレウスにさえ
ぎられて憎悪に顔を歪ませつつ、向きを変えて塔から出て行った。
それを見届け、熊ひげが言った。

「俺たちもこれで。砂漠で待機している仲間がこれ以上カースイム
の命令に従わんように伝えねばならんからな」

山岳民たちが列をなして戸に向かう。かれの背に、ファリザード
は短く呼びかけた。

「聞き入れてくれて礼を言う」

熊ひげが肩越しにファリザードを見た。

「さっきの話は聞いていたろ。里に帰れば、死んだやつの子供がいる。まったく落とし前をつけずあのジンに協力し続けるとなれば、おめおめと遺族に顔を合わせられるものかよ」

それから熊ひげの視線が、ファリザードからペレウスに向いた。目が笑みを含む。

「やるじゃねえか、坊や。ジン相手に大した度胸だ、個人的には溜飲が下がったぜ。

客として山に来るなら酒宴を張って歓迎しようじゃねえか……もうちよつと慎重にならんと、おまえは次会うまで生きていないだろうがね」

山岳民もまた消えていった。

一行はアーガー卿をそつと動かして鳩の塔からかつぎ出し、星々がまたたく清浄な空気の下に連れだした。

アーガー卿の手当てを白羊族が始める。ウルグ曰く、「拷問で心身を削られ、おそらく障害が残るだろうが、命には別状ない」との見立てだった。

うなずいて、ファリザードは静かな声で「ペレウス」と呼びかけた。戦いの興奮が醒めはじめた顔つきのペレウスは、彼女のきつい視線に気まずそうに顔をそらした。

「何だよ。……助けってくれたことはありがたいと思ってるけれど、守ろうとなんて今後はほんとにしなくて」

その胸にファリザードは思いきり頭突きした。

「ぐふっ」と呼気を漏らす少年を抱きしめる。周囲の目が気にならないほど怒りと安堵がこみ上げていた。

床に一度蹴転がされたペレウスが鳩の汚物まみれなのも気にとめず、かれの胸にぐりぐりと額を押し当てた。

「向こう見ずのばか、無茶ばかり、もし死んだらっ……っ！」

大げさではない。死んでもおかしくはなかったのだ。

もっとなじってやるつもりだったが、涙声は喉に詰まった。

ペレウスの困惑した声が降ってくる。

「……たしかに向こう見ずだったかもしれないが、ぼくはあのくらい体を張らなければ役に立ちそうもない。

それに、ぼくが死んだとしても、後のことはきみに託すことができるし」

「ばかあ！」

頭に来てファリザードはとうとう怒鳴った。涙で視界がぐちゃぐちゃだった。

こいつはやっぱりわかっていない。ジンのことをわかっていない。

「おまえが死んだら、わたしはっ……っ！」

自分はおそらく、カースイムのように狂ってゆく。 剣 への復讐しか心に残らなくなる。その未来がファリザードにははっきり見えなかった。

「もう、危ないことはしないで……おまえを危険に晒したくない……」

……」

本心だった。

ペレウスを、作戦会議はじめ、具体的な軍事行動になるべく関わらせようとしなかったのはそのためだった。

剣 ににらまれることを、かれにさせたくない。せめてテヘラーンを奪取して、北の地に勢力を確保するまでは。ホラーサーン軍に攻められてもすぐにペレウスだけはヘラスへ送り帰すことができる態勢を整えるまでは。

浅ましいとは自覚があった。いかに 剣 と因縁があるとはいえずルドウズたち白羊族は巻きこんでいるのに、最も大切な者の安全だけは図るのだから。

それでも、決して死なせたくないのだ。

父の屍を見た直後、かれが手を握っていてくれた。やっとのことで立ち直れた夜もそうだった。それ以前からもかれに恋心を感じていたけれど、あの日以降は……

「おまえがいなくなったら、後のことなんか引き受けてやらない」
かれの胸にひたいをつけたままファリザードは鼻をすすった。「死んでやる」

ペレウスの体がこわばれるのがわかった。

……しばらくしてから、かれの手が彼女の髪を撫でてきた。

「……ぼくは守られる一方ではいたくない、断じて」

優しい手つきの一方で、不満を押し殺すこわばった声でかれは尋ねてきた。

「簡単には死なずにすむだけの力がぼくにあれば、きみを心配させ

ずにすむのか」

強くなかつていい、とファリザードはぼんやり思ったが、かれは今後も庇護を屈辱と感じて強硬にはねつけるだろう。やむをえず、彼女はうなずいた。

ペレウスが約束する声が聞こえた。

「わかつた。必ず強くなる」

僭主カーシムの支配下にあつた都市テヘライン、イスファハーン公家のファリザードの元に奪還さる。

これによってイスファハーン公領北部に反撃のための拠点確立。

2・11・毒虫 下 (後書き)

投稿が長く空いてすみません(；、
盆の週はまたちよつと休みますが、あとは元通りのペースに戻れそ
うです。もともとそんな早くもなかったですが……

2・12・乳母 上 (前書き)

ファリザードの乳母ルカイヤ大浴場に少女を誘い
ともに杯を乾して憩うこと

傷に湯が沁みた。

顔をしかめ、ルカイヤは巨大な浴槽から立ち上がる。

ジン族の傷の治りはきわめて早いが、さすがに十日そこらでは力
ースイムの手勢に付けられた深手は本復していない。

一本きりの手で長い髪をわずらわしげにうなじにかきあげ、彼女は紫紋大理石の浴槽のへりに腰を下ろした。

ここはテヘラーン市内にある大浴場の温浴室　高いアーチ状天井の、彩色された玻璃ガラスの窓から赤や紫の光がさしこんでくる。光は渦巻く蒸気に弱められながら、成熟したジン族の女の裸身を妖しく照らします。隻腕であることは、ルカイヤの彫刻的な肉体の美を損ないはしていない。

背後には白布を体に巻き付けた女たちがかしまつてたたずんでいる。都市テヘラーンが所有する専門技能を持った奴隷　浴室での按摩や香油塗りの技をもって仕える人族の女奴隷たちであった。

「お靴を？」

奴隷たちをたばねる解放奴隷である中年の女が、短く尋ねてくる。浴場の石床は熱く、木靴やサンダルを履いて移動するのが一般的なものである。上がって按摩を受けますか、御髪を洗いますかと訊いてきているのだった。

「今は無用」

素っ気なく答え、ルカイヤは振り向きもしない。ことさらに尊大にふるまっているわけではなく、それが人族の下僕に対するジン族

のごく一般的な態度であった。

彼女は湯気の薄膜の向こうを見透かそうとしている。そちらに熱気で満たされた発汗室があるのだ。

やがて木戸が開き、揺らめく熱気とともにジンの少女の裸が現れた。なめらかな小麦色の肌が汗で輝き、すっかり上気している。フアリザードの足には少々大きい木靴が履かされており、歩を進めるとがばがば鳴った。

その後ろからついて出てきた、銀器の水差しを持った女奴隷が三人、彼女に歩み寄り、

「お汗を流しますわ」

「うん。やってもらおう」

「心得ました」

薔薇水をフアリザードの頭からちよろちよろとかけて汗を洗い流した。猫が顔を撫でるような手つきでフアリザードは顔面を洗っている。かと思うと目を閉じて顔を上げ、注がれる薔薇水の一筋を口で受けて飲み始めた。

妖王の娘にあるまじきそのはしたなさにルカイヤは眉間を押さえながら、笑壺に入ったらしく歳若い女奴隷たちは笑いさざめいた。

「いやだ、フアリザード様、そんなにのどが乾いていらしたんですか」

短時間ですいぶん打ち解けたものだな、とルカイヤは少し驚いた。カーシムの乱が起きる前、この大浴場には毎日のように来ていたルカイヤは知っている。奴隷たちは同じ人族の客相手ならともかく、ジン族を相手にしては談笑することなどほとんどないことを。それ

は当然で、ジン族のほうとて命令を出すとき以外は人族と話さないのが普通だ。

(あの子は相変わらず、人族の召使にまで気安く接しているのか)

ルカイヤは危ぶんだ。そうだとすれば、あまり褒められたことではない。ジン族と人族の関係は、互いの分をわきまえたものであるべきだ。

(……まあ、逆に残酷に扱うよりはよほどよいが)

数歳年上の少女たちに笑われたファリザードは、発汗室でとつくに肌を紅潮させていたが、さらに赤くなったように見えた。あわててこぶしでぬぐった口元を彼女は尖らせる。

「なにか飲みたいと訴えたら、薔薇水を持ってくるとおまえたちさつき言っただろう。これを飲めつてことかと思うじゃないか」

「それは別に用意しておりますよ。氷砂糖を溶いて、レモンの果汁をちよつと搾って、高山の上から取ってきた雪片を入れてお出しますわ」

「それ、すぐに欲しいな。ルカイヤは飲み物はどうする？」

ファリザードが首をめぐらせて、彼女の乳母であるルカイヤに聞いてきた。

「そうだな……おれはいつもの酒を」

ルカイヤの注文に、背後の中年女が感情の通わぬ声で「承りまし

た」と厳肅な口を利く。

ほどなくして、玻璃の夜光杯が二つ持ってこられた。ルカイヤが手にしたのはサマルカンド公領産の蒸留されたぶどう酒である。

雪片を入れてはいるが原酒のきつさはのどを焼かんばかりである。杯をちびちび傾けながら、ルカイヤは眼前のファリザードを見つめた。

巨大な浴槽には新しく沸かされた湯が満たされ、季節外れのはずのジャスミンや薔薇の花弁が浮かべられて香気がたちのぼっている。ファリザードは浅めの寝風呂で、設置された石枕に頭をあずけ、脚を伸ばしてお湯に浸かっている。

冷たい薔薇水の杯を持ち、水に浮かぶカワウソのごとくくつろいだ調子である。

「あ……………生き返る……………」

ゆるんで間延びしたファリザードの声にルカイヤはおかしみを感じた。

「古老のようなことを言う。まだ赤ん坊のくせに」

「しょうがないだろ、しばらく風呂を楽しむどころじゃなかったんだから。ひどい臭いのするところに入りもしたし。鳩の塔なんか二度とのぞくものか」

鳩の塔と言ったときファリザードは嫌そうな顔をした。

その話は何回か聞いているため、ルカイヤは黙ってうなづく。カーシムによってアーガー卿がそこに囚われていたのをファリザードが助けたのだ。奇しき実話であった。

と、ファリザードがルカイヤをふりあおいでにっこりした。

「アーガー卿を見つけたときもびっくりしたが、おまえがテヘラーンにいるのを見たときも驚いたぞ。

でも、こういう驚きのほうがずっといい」

「おれもだ」

ルカイヤは微笑した。彼女にとって、フェアリザードは娘のようなものだった。

かつて彼女は、自らの片腕とともに、結婚して二十年もたっていない夫と生まれたばかりの實の娘をいっぺんに失った。そのあとに、イスファハーン公が乳の出るジンの女を探し、彼女に赤子のフェアリザードの世話を任せてくれたのである。

『この子は母親を失った。貴女は娘を失った。どうかこの子に母の愛を与えてくれないか』

当時、茫然自失して廃人のようになっていたルカイヤは、フェアリザードに死んだ娘の面影を重ねた。娘が生まれ変わって目の前にいるように感じ、その世話に心を砕くことによって生きる意味と意欲を取り戻したのである。

愛しい娘が、「そういえば、ルカイヤ」と彼女を呼んでいる。

「なんで北のテヘラーンにいるんだ？ おまえの領地の村に行ったのに、いかなかったから会えなくて不満だったんだぞ」

「まあ……おれはもともとテヘラーン軍属で、この傷ゆえに療養させられていただけだからな。今回は直接の主であるアーガー卿に頼みごとがあつて北上していたのだ」

それはもういいんだが、とルカイヤは話題をそらした。

「それよりその小生意気な言葉づかい、そろそろどうにかならぬのか。あなたの立場にそぐわないと何度注意させる気だ」

微笑を苦笑に変えたルカイヤに、ファリザードは杯を手の中で回しながら親愛の情のこもった笑みを返した。

「おまえのほうがよほど武張った口調じゃないか。だいたい、だれから伝染つっったと思ってるんだ、ルカイヤ」

「だから困っているのだろうが……おれのこの口調は兵として男の同僚と言い合ううちに染み付いたものだ。あなたとは立場が違う」

支配層のジン族であることは同じとはいえ、ルカイヤとファリザードでは地位に天地の開きがある。

ファールス帝国のジン族戦士階級は、ルカイヤのような妖兵ジャーンと呼ばれる一般的なジン兵と、妖士イフリートと呼ばれる一握りの強者に振り分けられる。妖兵や妖士はそれぞれ領地を持つジンの貴族であることが多い。都市や一地方をまるごと統べるような者は大諸侯と呼ばれ、たいていは妖士である。

さらにその上に立つ帝国五公家は、戦士にして領主であるジンたちをまとめあげる。おのおのの当主が妖王マイリトの位を持ち、一公家のみで富の豊かさ、領地の広大さ、動員できる軍の規模のいずれにおいても、帝国外の小国の王を笑殺してのける。ファリザードは五公家のひとつであるイスファハーン公家の嫡流であるのに、乳母とはいえたかが一兵卒で小貴族のルカイヤの口調を真似するなど……

(エラム様からも怒られたな、妹に悪影響を与えるなど)

ファリザードの末の兄のことを思い出し、ルカイヤは苦笑を徐々に消した。

(捜索隊がかれを早く見つけられればよいが)

ファリザードの兄エラムが現在、ホラーサーン将イルバルスに追われてこの近辺に逃げてきているのだという。おそらく山岳部にも身をひそめているのだろう。

味方のだれにとっても気がかりな話であった。無事ならば都市部へと逃げこんでくるはずなのだ。

音沙汰がないということは、身動きがとれない状況にあるということだ。怪我を負っているのかもしれないし、イルバルスの監視網をかいくぐることができないのかもしれない。

(あるいは、すでに討たれたか)

「ルカイヤ？」

彼女の憂い顔で勘違いしたらしきファリザードが少し不安そうに見上げてくる。

「わたしがおまえに似た口調だと、そんなに困るか？」

ルカイヤは頬がゆるむのを感じた。赤子のファリザードが口を利くようになったころの記憶がよみがえる。物心ついた最初から、ファリザードはルカイヤの言葉をまねようとしていたのだった。

「……もう十年以上、あなたはその口調で通してきただろう。いまさらこちらの顔色をうかがうふりなどせず、話したいように話すがいい」

兵の話し言葉を使うなど、ファリザードの立場上、むろん良くない。良くないのだが、ルカイヤは乳を含ませた子に対してつい甘いことを言ってしまう。

ファリザードが喜んだ。

「じゃ、この先もこのままです」

「まったく……そのうち周囲に寄ってたかって矯正されてもおれは知らぬぞ」

再度温かい微笑みを浮かべ、ルカイヤは、エラムがすでに死んでいるかもしれないという先刻の懸念は心の裏に押しこんだ。

口にする意味はない。ファリザードの眉がまた曇るところを見たくはない。

ファリザードはここ数日、仲のよい末の兄のことを心配していた。エラムを搜索、保護するために早急に一部隊を山岳部へ遣わし、それでもなお日夜気を揉んでいる。そんな彼女をルカイヤは慰めるべく、アーガー卿に頼んで一時貸し切りにしてもらった市内の大浴場に連れだしたのであった。身体がほぐれば心も幾分かは安らぐだろうと考えたのである。

現在のところ、その思惑はまずまず功を奏したといえる。

（奴隷たちの借り出し費用はすでに市に支払ったが、あとで一人につき銀貨一枚を直接与えてもよいな）

ここの女奴隷たちの貴人に奉仕する腕は確かである。ましてそれが今日はファリザードの愁眉を解かせたのなら、異例の報酬を弾もうという気にもなる。

たいていのジン族は人族と親しく交わりはしないが、技能にはそ

れなりの対価を払う。

2 - 1 2 ・乳母 上 (後書き)

来週は前に告知したとおりお休みします。
その代わり、一挙二話掲載します。

2・13 乳母 下 (前書き)

ルカイヤ、ファリザードの成長に「喜」憂させられること

残念ながら、特別な報酬を払う気は失せつつあった。

着付けのためだけに存在する奴隷も一人か二人手配すべきだったと、ルカイヤは後悔している。

(着付け専門の奴隷ならば黙って本分を尽くすだろうに)

ルカイヤ自身はすでに軍衣を身につけているが、ファリザードはまだ裸だった。

浴室では専門職として文句なしの働きぶりを見せた浴室奴隷たちは、脱衣場上がるやいなや目も当てられない有り様となった。ファリザードの衣装を手には彼女らは議論を戦わせている。

「この首飾りに合わせるなら断然こちらの服よ。開いた胸元がほどよく強調されて、そこで首飾りの宝石が官能的な輝きを見せつけるわ」

「だめよ。ファリザード様のお体の寸法なら、お胸を強調するのは誤りよ。こちらの衣装ならば体型の優美さが引き立てられるはずだわ」

「そもそも、なんで首飾りに合わせるのよ。服に合わせて装飾品を変えるべきよ。その首飾りはファリザード様には大きすぎて不恰好だわ」

百人でもいちどきに入れる広い脱衣場だが、白い漆喰の壁に声が反射してかまびすしいことこの上ない。

彼女らの手にある何枚もの衣装は、アーガー卿がファリザードの

ために手配した品である。生地は絹や仔羊毛。装飾品は耳飾りや首飾りなど無数に取り揃えられており、金銀をはじめとして翡翠ヤシユム・サマキにトパールクト・サルド、ルビーヤクト・サルにサファイアヤクト・カブド、星のように貴金属が輝いている。

自分が身につけるわけではなくとも、これだけ贅美を凝らした衣装で、極上の素材を着飾らせるのは楽しいものらしい。ああでもないこうでもないとい互いに言い合いまでして熱心に選定している。

ルカイヤは苛々した。早くしろ、この子の体が冷えたらどうする
と、体を拭く布でフアリザードをとりあえず包みながら考える。

(おれが着付けをやったほうがよさそうだ)

そう考え始めたとき、ルカイヤと同じく苛立った表情で、まとめ役の解放奴隷の女が「早くしなさい」と一喝した。我に返った奴隷たちが慌てて口をつぐみ、ときはきと服を選び出す。

解放奴隷の中年女は深々と嘆息し、言い訳した。

「フアリザード様に近い年齢の者をということで若い子たちを選んだのですが、技術はともかく細かいところでの教育が行き届かず…」

「では、以後はよく仕込め。他の公領であれば、今しがた無駄口を叩いていた者らはそろって罰されてもおかしくないのだぞ」

ルカイヤが冷ややかに言うところ中年女は青ざめて口をつぐんだ。フアリザードに服を着せ始めていた奴隷たちもルカイヤに怯える目を向けた。

忌々しいのは、萎縮した奴隷たちが救いを求めるように一斉にフアリザードをふりあおいだことだった。

「ルカイヤ、そこまで厳しく言わずとも。わたしのために熱心に選んでくれてたんだ」

ファリザードがルカイヤの袖を引いて取りなしてくる。

先ほどの解放奴隷より深いため息をルカイヤはついた。そのようにあなたが甘やかすから奴隷があなたの前で増長するのだ。そう言いたくなる。

(こつした甘さは御父君そっくりだ)

先ほどのルカイヤの叱責は脅しではなく事実である。奴隷に沈黙と能率を求めるホラーサーン公領であれば、間違いなくこの女奴隷たちは舌を切り取られているだろう。剣 ほど酷烈でなくとも、このような失態には何がしかの罰が下されるのが通常だ。

それがイスファハーン公領では大目に見られてしまう。公領法の手定めるところにより、奴隷を罰するには持ち主であっても煩雑な手続きを踏まねばならないからである。

人族の平民や奴隷に対し、イスファハーン公領は帝国のうちでもっとも慈愛に満ちた土地なのだ。それもこれも大領主のイスファハーン公家の溫柔な家風ゆえである。

(慈悲の濫用は力の濫用とおなじく間違いだ。ファリザード様にはそのうち、もっと支配者らしくふるまうことを説かねば)

不機嫌に腕を組んだルカイヤだったが、服を着せられるファリザードを見るうち、徐々にその険しいまなざしはゆるんでいった。

薔薇の刺繍をあしらった薄手のシャツとスカート。

黒ビロードの腰帯になめし革の赤い胴衣。

細い手首には黄金の腕輪。

鳩の卵ほどもあるオニキスジャスを象嵌した黄金のひたい飾りが、秀麗な眉目の上に輝いている。

首巻きをふわりとまとって、ファリザードは久々に少女らしい装いである。

大鏡の前で体をひねって服装を確かめているファリザードを、ルカイヤは満足気に眺める。美しく育った娘を見つめる母の目で。

(まだ十三歳だが、この子ほどの佳人はジン族にもそうはいるまい)

親馬鹿気味にルカイヤがそう思ったところで、

「まともに着飾るのはひさしぶりだ。ルカイヤ、似合うか？」

そう問いながらファリザードはつま先を立て、スカートのすそをつまんで楽しげにくるくる回りだした。ルカイヤは微笑ましくなる。

(中身はいかんせんまだまだ落ち着きのない子供か)

ファリザードのふるまいに現れるのは色香よりも稚気である。

だが、もう数年もすればその比率も逆転するはずだ。ルカイヤはファリザードの両肩に後ろから手を置いて回転を止め、かがみこんで耳にささやいた。

「似合うとも。どんな男でも、そいつに定まった相手がない限りあなたに見惚れることだろう。」

回ったりせず慎重深くしていれば、だが」

とたんに

ファリザードがかあつと首筋まで血を上らせた。首根っこをつまみあげられた猫の子のようにおとなしくなつて、うつむいて呼吸音並みの小声でつぶやく。

「そ、そうか？ うん、じゃあ回らない」

(おや)

これまで見たことのない反応にルカイヤは目をみはった。このおてんば娘が、異性の目を意識するようになっていたとは。

ファリザードが大人になるのは、思っていたより早いかもしれない。

どういうわけか、今度は満足ではなく感傷的なうずきがルカイヤの胸にこみあげた。彼女は首を振ってそれを否定した。

(……悪いことではない。まるきり子供のまま嫁ぐことになるよりは)

戦の流れによっては、ファリザードはまもなく結婚せねばならなくなる。その流れはルカイヤにもはっきり読めるのだ。

イスファハーン公領における薔薇の公家の支配権は、ここ北部のそれも一部をのぞいて崩壊状態にある。独力でホラーサーン軍を打倒できる望みはない。

必然的に、現帝室のダマスカス公家をはじめ、帝国全土の諸家と手を組むことになるだろう。

そして結婚は同盟を強める手段だ。

イスファハーン公家のまだ生き残っている子らはあと三人。そのうち末弟であるエラムは行方不明で生死も知れない。

確実に結婚の道具として使えるのは、上帝のもとにいる長男イブ

ン・ムラードと、わずか十三歳の女兒ファリザードである。

それを理由にして、諸家はここぞとばかりに眼の色を変えて彼女を求めるだろう。剣のことがなくとも、諸家はのどから手が出るほどファリザードを欲しがるはずだ。イスファーン公家の女兒は「濃い血を受け渡す」。優秀な子を産んで嫁ぎ先の家系を強化するという特殊性を持つものだから。

求められて早晚ファリザードは、だれかを選ばねばならなくなるだろう。

ふと、ファリザードの恥じらいの様子を思い出し、ルカイヤはまた胸が締め付けられるような思いを味わった。

（あの反応　まさかとは思いが、すでに好きな男がいるのだろうか。そいつにこの服を見せることを考えていたのでは）

知らずルカイヤは手に汗を握った。

あとでよくファリザードに訊いておかねばならない。相手のジンが身分の低い小貴族などであれば厄介なことになるだろう。

（『そこらの貴族程度ではイスファーン公家の姫に釣り合いはしない』求婚者たちの一部は納得せずそう言いだすこと必定だ。

最終的に小貴族は排除され、ダマスカス公家かサマルカンド公家か……イスファーン公家と同格の身分、最低でもそれに準ずる大諸侯の家柄の男がご夫君になることだろう。

……感情に従った末でのジンらしい自然な結婚とは言えぬが）

このような時代でなければ自由に相手を選ぶことも出来たかもしれない、と嘆く一方で、しかしとルカイヤは思う。

（しかし、もともと進んでいた結婚の話よりはました。

亡きイスファハーン公ムラード様には悪いが、ファリザード様とヘラス人との結婚がうやむやになったことだけは幸いであった)

ルカイヤが領地として所有していた村を離れたのも、実はその結婚が大いに関係していた。

彼女は、ファリザードの結婚を潰すべく都市テヘラーンに出向いたのである。

ヘラス人の結婚をファリザードが嫌がっていることをルカイヤは聞きつけていた。それゆえ、イスファハーン公を説得してくれるよう大諸侯のアーガー卿に懇請するために、北部に来ていたのだ。アーガー卿は彼女の親戚筋であり、兵役を退くまでは直接の主君でもあった。

(イスファハーン公はよいお方であったが、あの件だけはまったく狂気の沙汰だった。人族、それも敵にファリザード様をめあわせるなど)

ルカイヤの夫と娘は、ダマスカス公領において“十字軍”の襲撃で殺されている。

.....

女奴隷たちを従えて外に出る。

浴場の前ですでに列を作っている一般の客が、視線を向けてきた。本日は先刻までファリザードのために新湯を貸し切りになっていたが、その後に誰かが入ることまで禁じた覚えはない。が、

「.....しまった、いまは男湯の時間か」

ルカイヤは思わず毒づいた。男どもが入る時間をやり過ごしてから出ればよかった。

テヘラーンの公衆浴場に男湯女湯の区別はなく、時間を決めて交互に入るのである。ジンの美少女と美女の後に入ることになった人種の男の市民たちが、妙に嬉しそうなのが気色悪い。

だが、眺め渡すうちに見知った顔を男たちの中に見つけてルカイヤは目を丸くした。相手もルカイヤに気づいたようで声をかけてくる。

「なんだ、ファリザード殿とルカイヤ殿ではないか」

「クタルムシュ卿」

クタルムシュに気さくに手を振られ、いささかぎこちなくルカイヤは手を上げて挨拶し返した。いかに呑気な笑顔をしていようと、自分を助けたこのジンが凄腕であることをルカイヤは知っている。

「卿は湯に……」

言いかけたルカイヤの視線がすーっとクタルムシュの脇に泳いだ。かれは汗の臭いのするぼろ雑巾のようなものを小脇に抱えていた。

「……卿、なんだ、その人族の子供は？」

「うむ。この子の特訓に付き合っていたのだが、無茶をしすぎて気絶したのでな。冷たい水をかければ起きるだろうが、どうせなら浴場の冷浴室にでも連れて行ってやろうと思った次第だ」

「卿自身が武術を教えているのか？」

ルカイヤは解せぬ思いである。クタルムシユほどに実力のあるジンが、どうして人族の子の鍛錬にそこまで手間をかけるのか。正直もつたない。しかもこれから周囲の有象無象とともに入浴しようとしているらしい。

物好きなことだと思ったところで、

「ペレウス!？」

もう一名、物好きなジンがルカイヤの後ろから飛び出した。

ファリザードの声で気がついたらしく、クタルムシユに抱えられた少年がうめき声を発して顔を上げた。人族にしてはなかなか端正な面であるが、朦朧としていても傲岸不遜な眼光がルカイヤには気にいらなかった。

「ファリザード? こ……ここはどこだ」

少年は自分の足で地面に立ち、意識が混濁しているのか頭を押さえる。ぐらつとふらついたところで、ファリザードがそばに駆け寄って手で体を支えた。

男に触れるなどはしたなさの極みとルカイヤは長嘆息する。その前でファリザードは少年をぽんぽん叱りつけはじめた。

「カースイムに蹴られたあばらの骨にひびが入っているかもしれないと医師に言われたじゃないか! テヘラーンに入った日は歩くだけで痛いと呻吟していたのに、なんで鍛錬なんてしてるんだ。おまえに必要なのは安静だ! 医師の許可が出るまで運動するなっ」

「し、死にやしない。十日もたってるんだ、ちょっとくらいで文句言うなよ。」

だいたいひびが入っているとしたら、そいつはきみが決闘直後にぼくの胸に頭突きしたせいで大きくなったのかもしれないんだが」

「は、話がすりかわってるじゃないかっ！」

ぎゃーぎゃーやかましい言い合いが始まる。

(ファリザード様が気にかけてやっているというのに、なんという無礼な小僧だ)

少年にルカイヤは怒りを抱いたが、寄ってきたクタラムシュが「……この子は他国の王族で、ファリザード殿の友人でな」となだめるように言った。

「友人？」

ルカイヤは当惑してクタラムシュの顔を見返した。

「うむ。それゆえにファリザード殿とは対等な立場で話している」

「それは……いくらなんでも」

行き過ぎではないだろうか。懸念をありありと顔に出すルカイヤに、クタラムシュが「問題ない、問題ない」となぜか妙に早口になる。

「ときにルカイヤ殿、我々はそろそろ入浴して汗を流さねばならない。」

貴女も市営の宿舎に奴隷たちを返さねばならないのではないかな。立ち話はこのあたりにしてまた後日にゆるりと」

たしかに笑顔のクタルムシユの頬に汗が伝っている。気のせいかもしれないが、その笑顔はこわばっている気がした。

得体の知れない不安をルカイヤは抱いたが、恩人相手に強いことは言えない。

「……そうか。では、ファリザード様と一緒にこれで失礼させてもら」

「と、ところで、ペレウス。今日のわたしを見てなにか言うことはないか」

ファリザードの声が響いた。決して大きくはない声だが、ジン族の鋭い聴覚はそれを確かに捉えた。

ルカイヤは愕然としてファリザードに顔を向け直した。

ファリザードが少年の前に向い合って立っていた。体の後ろで手を組み、胸を反らして衣装を見せつけながら批評を待っている。高揚して頬を染め、期待と不安に満ちた上目づかい。

傍から見る誰もが一目で気づくほどに、少女が少年に向ける感情はあからさまだった。

クタルムシユが天を仰ぎ、手で目を覆っている。その傍ら、ルカイヤはあまりのことに自分の顔から血の気がざあっと引く音を聞いた。

2 - 1 3 乳母 下 (後書き)

一挙二話掲載の後編です。

2 - 1 4 ・空戦力(前書き)

イスファハーン公子エラム救出隊、敵に逆襲されるも
その隊長、死地にて希望を見出すこと

2 - 14 ・空戦力

風は凍てつき、白い山腹を駆け抜けている。

都市テヘラーンの北、アルボルズ山脈につらなるひとつの山。そこは海拔三千ガズを超える高峰であり、溶けることのない雪に覆われていた。

旋回していたタカが舞い降りる。

高みから投げつけられたナイフのごとく、死を伴って飛鳥の影は急降下する。迎え撃つべく弓を手に雪原からはね起きたジン兵の頭上で、その影が姿を変ずる。タカの身が転じて屈強な肉体と化し、ホラーサーン将イルバルスの姿が顕現する。

イルバルスの鎧の胸甲に埋め込まれた、半月形の魔具が赤く輝く。

世界がまたも傾ぐ。

足場は斜めに、それから垂直に近づき、大地は絶壁となる。

積もっていた雪がざあつと鳴り、水流のように地平へ向けて流れ落ちる。

縦横が倒転したことで、今まさに空中の敵を迎え撃とうとしていたジン兵の体勢も大きく崩れる。叫びかけた兵の顔を飛来したイルバルスが勢いのままに踏み砕く。爆発同然に兵の頭が吹き飛び、脳漿が雪原を彩る。

ジン兵の死体が横へと落下していく。

殺された兵の仲間である都市テヘラーンのジン兵たちは猛る。囲むように殺到し、イルバルスに前後左右から斬りつけたいとかれらは願う。しかしそれは叶わない。動けないからだ。かれらも血眼と成って腹ばいになり、横へと落ちぬよう岩やまばらな木にしがみつ

くだけで精一杯だからだ。

自身の魔力の力で自らも雪原を滑り落ちつつ、イルバルスは雪煙を蹴立てて飛び出した。タカに変じて羽ばたき、空へと戻ってゆく。

怒りに震え、ジン兵の隊長は身を起こす。イルバルスがジンの姿から変わるやいなや、世界を傾けていた力は消えている。

次の獲物を見定めるかのように頭上を舞うタカを見つめながら、隊長は煮えたぎる憎しみの中で現実を直視する。部下たちは戦意を失ってはいないがあと十六名しか残っていない。

(われわれの戦力ではあやつに勝てはしない)

かれらはファリザードに遣わされたイスファーン公子エラム救出隊、もしくは敵将イルバルス討伐隊だった。都市テヘラーンのジン兵のうちから選ばれたのが三十名。同じく選りすぐられた人族の兵が五十名。といっても、行動をともにしていたわけではない。

身軽なジン兵は山に分け入ってエラムもしくはイルバルスを探す。人族の兵は、白羊族とやらいふ傭兵どもになりきって砂漠に留まる。その場所は、白羊族が留まっておくようイルバルスに命じられた場所だそうで、そこに兵は罫をはり、彼奴が来たならばだまし討ちでもなんでもとにかく討ってしまえばよい。

それが当初の計画だった。

その計画は、数日たたぬうちに破綻した。

(判断を誤った。愚かにも)

奇襲は、それがあることを敵に看破された時点で成立しなくなる。いつのまにかかれらは狩る側でなく狩られる側となり、発見され、追跡され、攻撃されていた。

おそらく罫をはっていた人族側がしくじったのだろう。日に一度の、煙を利用した安否報告が昨日から途絶えていた。

イルバルスの力量のほどを知りたいまでは、それも仕方ないと思える。人族の戦士五十名に取り囲まれても、イルバルスはなんの動揺も覚えるまい。襲われたと認識した瞬間、魔具の力で世界を傾けることでいっぺんに片をつけてしまったのだろう。体が重い人族は数ガズを落下しただけで簡単に死傷する。

だが、誤ったというのはそこではない。

こちらの攻撃の意図がイルバルスに漏れた時点で、一目散に下山して逃げるべきであったのだ。索敵範囲も追撃速度も圧倒的なこの敵から逃げ切れたかは別として。

(エラム様を探すことに固執するべきではなかった)

かつてエラムに会ったことのあるかれは、それゆえにこの即席の救出部隊の長に抜擢されていた。またそれゆえに、引き時を見失ってエラム救出にこだわりすぎたのである。

(早めの撤退を決断していれば、部隊を半壊させずに済んだかも知れないのに)

半壊どころか全滅がちらついている。

雪嶺を横切るときにイルバルスにととう襲撃され、追いたてられはじめたのはつい先ほどのことだ。三十対一であったにもかかわらず、もう半数近くが討ち取られた。しかもホラーサーン将は明らかに面白半分で狩猟に興じている。そうでなければ戦闘とも呼べぬこの一方的な殺戮がさらさら引き伸ばされているはずがない。

「あいつの使う魔具、話に聞いていたあれですか。対軍級」

隣で雪にまみれて身を起こした副官のジンが吐き捨てる。対軍級魔具“^{アスマンギール}虚空の覇者”　イルバルスの二つ名ともなっているその魔具は、スライマーン王がジンに鍛えさせたと伝わる伝説的な魔具のひとつだった。

飛翔能力を有するジンが持つことで最大限に力を発揮する代物。こちらの平衡感覚と、実際の大地の吸引力をねじ曲げる力。

当代の数学者、地理学者、それに占星術師をかねる天文学者の言うことによれば、この世界は丸く、大地の中心にはあらゆる物体を引きつける力があるのだという。その力が垂直に物体を引くがゆえに、物は「落下」する。イルバルスの“虚空の覇者”は、半径数十ガズにわたって、その引く力を地と並行にねじ曲げる。それは現在、ここで死戦する部隊が確かめさせられている。

（鳥に変化する力だけでも手に余るのに、はた迷惑なものを使いおつて）

イルバルスが縦横倒転の魔具を使うだけで、こちらは部隊行動が阻害される。羽のない虫が木の幹にとりつくように、絶壁となった大地にしがみつくことしかできなくなる。

個々の距離はそう離れていないのにまともに動けず、空中から捕食者に襲われて各個撃破されてゆくのだ。

副官が決断を求めてくる。

「どうします、隊長？　イルバルスを陰から討ち取るにはすでに機を逸しました。ここに踏みとどまれば、あの野郎にわれわれを狩る楽しみを提供するだけです」

（エラム様のことは諦めよう。どうにか生きてテヘラーンに戻り、イルバルスは奇襲が通じる相手ではないと報告することが第一だ。

やつを討つためにもっと強力な部隊、いや、軍を送りこむようフアリザード様とアーガー様に具申せねば……)

屈辱を胸の奥に押しこみ、隊長は命令を下した。

「抗戦はあきらめるぞ。森か洞窟、せめて岩場に逃げこめば助かるはずだ。縦が横になっても足場がある地形だからな」

「承知しました……ですが、そこにたどり着くまでにひとりずつ潰されそうですね」

「俺が残って奴の遊び相手になる。その間にお前が指揮をとって皆を逃がせ」

言いながら隊長は合図用の呼子を副隊長に渡した。

そして自分の呪印の力を巡らせはじめた。魔石を織り込んだ布の服が毛皮と同化し、四肢が獣のそれとなってゆく。

最初は雪豹に変わるこの力を冬の山地で存分に役立てられるだろうと思っていたのだが、あいにく甘い考えであった。敵の能力はこちらを歯牙にもかけていない。それでも、部下たちを逃がす間の困程度にはなれるだろう。

なにか言いかけた副官が口をつぐみ、呼子を加えて三度鋭く鳴らした。撤退の符牒である。戸惑った表情で振り返る部下たちの顔に次々理解が浮かび、かれを口々に制止しようとする。副官がそれを抑え、かれの毛を生やし始めた耳にささやいた。

「あなたではなくわれわれのほうにやつが来たら、あなたはそのまま逃げてください。

テヘラーンに報告するためには誰かひとりが逃げられればよいのですから」

副官は振り向いてジン兵たちを叱咤し、山麓へと向けて走り始めた。ためらいながらも兵がその後ろに続く。動かない数名に対し、雪豹は早く行けと牙の間からうなりを上げた。

(この死地は俺の責任だ)

……ようやく部下の全員が走りだす。雪豹は天空を旋回する敵を見上げ、俺のほうに來いと強烈に願った。

イルバルスの呪印の力は“変化”と“大力” 厄介なのは変化によってもたらされる飛翔能力だが、大力においても、鉄の棒を両手でねじ切るといふ。接近戦ではほとんどのジンはまず勝てまい。

それでも殿しんがりとして、命あるかぎり抗って時間を稼ぐ必要がある。

死が降ってくるのを待ちながら、俺ではなくクタルムシュ卿に指揮をとってもらえばよかったのではないか、と雪豹は思う。あの元近衛隊長を務めたほどのジンは、まさに奇襲向きの人材だった。その手練のほどは助けられたことでつぶさに見せられている。

(次があるなら、相手が客分などということに頓着せず、是が非でもクタルムシュ卿に頼むべきだ。

イルバルスを討てるとするならクタルムシュ卿くらいだ。あやつは、必ず討たねばならない)

剣 本人は言うに及ばず、その幕僚であるアルプ・アルスラーン、ザイヤーンやウルジェイトウなどほかのホラーサーン軍のジン将も、イルバルスに負けず劣らず怪物めいた能力を持つ連中だとは聞く。

だがその中でもイルバルスは、生かしておいては厄介すぎる。そう、厄介なのだ。斥候としても通信兵としても暗殺者としても。むろん戦場における遊撃の将としても。

呪印と魔具の力で、山岳戦を、平野戦を、騎馬戦を、船団をもつてする水上戦を制されてしまう。

ホラーサーン将イルバルスは、空戦力をまるで持たないイスファーン公領の軍とは相性が悪い。空戦力を抑えこめるのは空戦力なのだ。こちらに飛翔できるジンさえいれば、討てずともやつが自在に飛び回るのを牽制することができるのに……

沈思から我に返り、雪豹は空を見上げる目を細めていぶかしんだ。

(なぜ降りてこない?)

鳥影は落下せず、部下たちのほうを追うわけでもなく、ただ頭上に円を描いているだけである。

見定めているようにも見えた　だが、何を？

それが明らかになったのは、夕力がとうとう雪豹の頭上の高みからついと離れ、峰の一つへと舞い降りたときだった。

大敵が離れていったにもかかわらず、雪豹は困惑し、見つづけていた。ひどく嫌な胸騒ぎがしていたのである。

一本きり雪中から突きでたかのような大木に、ジンの姿となったイルバルスが片腕でつかまる。

鎧の胸甲の魔具が光る。

イルバルスの周囲の雪が横に落ち始め

突如、雪豹の脳裏でがちんと理解の歯車が噛みあつた。

視線の先、雪の瀑布の中で、イルバルスが大きく口を開ける。舌のない口腔が火のように獰猛に赤い。がッ、がッ、がッと濁った音が赤い口からほとばしる。

それが嗤笑だと、雪豹は理解した。敵がなにをしようとしている

のかも。

(あやつ、魔具の力で雪崩を起こすつもりか)

横に落ちる雪は連鎖を呼び起こし、イルバルスの“虚空の覇者”の効力範囲を出てもとどまらず、そのまま激流となるだろう。

その流れの向かう先が雪豹には予見できた。雪崩は戦場から離れつつある部下たちを襲うはずだ。

(やめる)

やめろ、と叫ぶ。声は焦った咆哮となった。

雪豹は敵めざして駆けた。接近すれば殺されることはわかっていても、今すぐに敵を止めなければならなかった。全速力で雪原を滑るように走る。

赤い笑いが、愉悦混じりの殺意をもって待ちかまえている。

だがその時に、声がする。

谷をはさんだ向かいの峰から、峨々たる山間に反響する叫び。

「こつちだああああ　くそ野郎　！」

そしてその直後に小さな飛鳥の影が、向かいの山頂から飛び立ち、見る間に雲海に姿を消した。

雪豹は啞然とすることになった。笑みを浮かべていたイルバルスがさまざまの形相に変わってばつと身をひるがえたのである。奔雷のごとき勢いで宙に飛び出し、変化して向かいの峰をまっしぐらに目指す。半ばまで討ち取った敵の部隊をかえりみることなく、こちらへの一切の興味を投げ捨てて、ホラーサーン将が空の彼方に遠ざかっていく。

命を拾ったと思うより先に、雪豹は呆然として目撃したものを判断しようとした。

こちらを救ったあの声の主は、

(……エラム様?)

それに、遠すぎてはつきり見えはしなかったが 声の直後に飛び立った影は、明らかに飛鳥のものだった。

(それが理由なのか? イルバルス)

まだイルバルスがエラムを仕留めきれていないのも、これほどまでに執拗に追っているのも。

(エラム様はお若く、前にお会いしたとき呪印の力はまだ目覚めていなかったが)

興奮に雪豹の尻尾がくねる。

もしかしたら。

もしかしたら、空を制することのできる貴重な戦力が、イスファハーン公家側にも備わるかもしれない。

雪豹は尾をめぐらせて駆け出す。あえて部下たちの後は追わない。死ぬわけにはなおさらいかなかった。

救われたこの命をもって、絶対にテヘラーンに帰還し報告せねばならなかった。次の救出部隊こそ必ず成功させねばならない。

2・15 嵐の前の安寧 上 (前書き)

ペレウス弾き語りにて不本意にも名をあげること

2 - 15 ・嵐の前の安寧 上

透き通った独唱と独奏が人々を魅了する。

豎琴の弦を弾き鳴らしながら、市街の路傍に座りこんだペレウスが歌をつむいでいる。

冥王豎琴の音に感じ入りて死のりおきての法掟を曲げ

召めし出せるエウリュディケの手をオルペウスにとらせしも

欣喜せるオルペウスに畏怖おそき声もて告ぎたり

豎琴弾きゆめゆめ禁を忘れたもうな

冥界のいやはてに至るまで背後の妻をかえりみることなかれ

もし冥府を出でぬうちエウリュディケを振り向くことあらば

汝なが妻は二度と汝が胸に戻ることなかるべしと

ヘラスの神話に題材をとったその歌は嬋々うつくしとして哀調を帯び、聴衆の胸をしめつける。忍び音のごとくすすり泣きが調べに混じって流れるのは、居並ぶ大衆のうち、涙もろい者たちが感極まっているのだった。

本来ならばありえないことである。

なぜというに、ペレウスが弾き語りしている歌はヘラス語でつむがれている。都市テヘラーンの聴衆が異国の歌詞を解するはずもないのだ。

それにもかかわらず、少年の歌と弦奏は評判を呼んでいた。ペレウスがこの街路で豎琴を手に歌うようになってからまだ七日もたっていないが、かれの前で耳を傾ける者は日に日に倍加し、今ではすっかり街角の名物となってしまうていた。

「もう帰るのか？ もっと歌ってくれないか、幼いヘラスの楽士よ。

歌の意味はわからぬが素晴らしい、おぬしは類まれな奏者だ」

ペレウスが歌と弾奏を終わらせて立ち上がるやいなや、万雷の拍手のなかで、町民の代表とみられる裕福そうな老人が切り出した。さすがにペレウスは辟易した表情を見せた。

立ち上がるうとするたびにもう一回もう一回と引き止められつつ、今日だけですでに二十回は弾いているのだ。正直、指が痛い。

「いえ、そろそろ夕刻ですので、宿に帰らないと……」

「宿を引き払ってわが屋敷に来てはどうかね。羊と鶏を屠らせて夕食としよう。案ずるな、ここにいるおぬしの仲間の者たちもともに歓迎しようではないか」

老人はちらりと視線を地に落とし、ペレウスの周囲で酒を頭から浴びるように呑んだくれている白羊族の若者十数名を示した。「え？ほんと？ご馳走してくれるの？俺行く！」へべれけとなった白羊族の若者たちが肩を組んでふらふらしながら立ち上がる。ペレウスは渋い顔になった。どうやらこの酔いどれ共と一緒に旅芸人かなにかをやっていると思われるらしい。

「誤解があるようですが、ぼくもこの人たちも、芸人というわけではなく……」

裕福そうな老人は聞く耳を持たず強引に誘いに出てきた。

「いつそしばらく滞在せんかね。わが家で弾いてくれるならば、食費も宿賃もいらぬ。それどころか滞在一日につき、おぬしには銅貨五枚を払うぞ」

老人がひげをしごきつつ申し出た誘いに、町民たちのうちから不満の声が次々上がった。

「汚いぞ、ご隠居。楽士を客として独りじめする気だな」

「そのようなことは意図しておらぬ」文句を言われ、老人は悠揚迫らぬ態度で手を振った。「むろん、みなも来てわが家の座敷や庭でこの者の至芸を心ゆくまで楽しむがよいぞ」

「わざわざ移動せずともここでいいだろう。この楽士はしつかり稼げる腕があるんだ、銅貨五枚ぼちでそっちの家になんか行く道理がないだろ」

「このような街角などより、もっと落ち着けるとところで演奏してもらうのがよいではないか」

「どうせその楽士のべっぴんっぷりに惚れ込んで家に困おうってんだろう。目付きがあやしいぞ、助平じじい。四六時中狙われてたらてめえの家なんて落ち着くどころかい」

「なんと申したな。わしに少年趣味はないわ。たわごとをぬかすと承知せんで、唯一神が貴様の呪われた舌を腐らせますように」

品のないやじを飛ばされた老人がいたく憤激し、やじった者に向けて大声で言い返す。

べっぴん呼ばわりされたペレウスも機嫌を損じたが、眼前で喧嘩を始められると自分の不満は飲み込むしかない。口汚い応酬をあわててさえぎり、ペレウスは「お金が欲しいわけではないので」と否定した。

が、町民たちはそろっていぶかしむように首をかしげ、「だが銭

を集めているではないか」と指さした。

「お代はこちら。お代はこちら」

指された方向では、酔っ払って足取り定かならぬ白羊族の若者たちが碗を持って人垣を歩いている。放り込まれる貨幣がちやりんちやりんと涼やかに鳴り、どの碗もたちまち満杯になってゆく。

ペレウスの眉が吊り上がった。

「い、護衛と称してあの連中……」

ついできた白羊族のかれらがいつのまにか酒を飲みだしていたのは気づいていた。小遣いがないと常日頃からぼやくすかんぴん共がどこに酒代を貯めていたのだろうと演奏しながら不思議に思っていたが、どうやらペレウスの弾き語りを利用して代金を勝手に聴衆から集め、酒に替えていたらしい。

ペレウスの形相に気づいた若者のひとりが、「まあ、まあ、まあ」と寄ってきてばんばんとかれの背中を叩いた。ははははと笑いが酒臭い。

「殿下、ここはひとつ、これが護衛料代わりってことでどうですかね」

「護衛なら泥酔するのはどうかと思いますが!？」

「だっていい音楽をそばで聞くときはいい酒を合わせたいじゃないですか」

わかるようなわからないような理屈で堂々と開き直られ、ペレウスはあきれ果てて怒気を削がれた。

「……あのですね、ぼくが弾いているのはお金を取るためじゃないんです。仲間を探すためなんですから」

ペレウスは同じヘラス人の少年使節たちの行方を探していた。

すでにフアリザードやアーガー卿を通じ、使節たちの情報を集めてもらっている。だが、ひとり手をこまねいているのは性に合わず、悩んだ末にかれは自らの特技を使うことを考えたのである。

ヘラスの音楽を街角で奏でていれば、ヘラス人とゆかりのある者が興味を覚えて寄ってくるかもしれない。その中には帝国じゅうを歩きまわる旅人や貿易商がいて、どこかにいる少年使節たちの情報を持っているかもしれないのだ。

また、それだけでなく、こちらから所在を明らかにして目立つておくことで、こっちの情報が逆に仲間たちに伝わるかもしれないという心算もあった。なお、ヘラスと帝国の長い戦争状態にもかかわらず貿易は完全には途絶えておらず、ヘラス式の豎琴は市場で買うことができた。

が、計算は狂った。人目を引くことができなかつたのではなく、その逆である。受けに受け、目立ちすぎているのだ。

目論見通り情報を発信できているのは喜ばしいが……ペレウスは複雑な心境であった。

もともと、ミュケナイの王族の一人として神殿兼王宮で研鑽させられてきた神聖な芸を利用するのは、ただでさえ忸怩たるものがあったのに。この上、金まで取るともはや大道芸ではないか。

「とにかく、お金を勝手に集めないでください」

ペレウスの念押しに、白羊族の若者は歯を剥きだして笑み崩れた

酔顔を見せた。

「固いこといわないいわない。代わりにこっちの言葉での知るかぎりの口説き文句を教えてあげますって」

「な、なんですかその交換条件はっ！ 断じてけっこうです！」

「だって殿下、テヘラーンじゅうの町女に人気出てますよ。この場を注意して見渡したらどうです。」

この聴衆の半分以上は若い女ですぜ。はしたないってんで男の前にでてこないし、大声でおおっぴらに褒めたり野次ったりしないから目立たないけど」

言われてペレウスは気づいた。たしかに妙齡の女性が多い。頬を染めてくすくす笑いながらかれをちら見し、息を弾ませるようにして仲間内でひそひそ話をしている少女たち。歌の余韻が冷めやらないのか、木陰からぼんやりと熱っぽい目でペレウスを見ている婦人。明らかに娼婦風の服装をした者たちまでいて、目が合うとからかい半ばの蠱惑的な笑みを投げかけてきた。

口元をこわばらせて赤面したペレウスに、にやついた若者はさらに言ってきた。

「よりどりみどりじゃないですかあ、え？ 俺たちに感謝してもらいたいところですよ、『あの楽士は優男に見えるがああ見えてカースイムを倒したジン殺しの勇士だ』って歌の合間に触れ込んだから、ますます殿下に興味示す女が増えたわけで」

「ちよつと、な、なにを事実からほど遠いでたらめを……！」

かれはカースイムを殺していないし大部分はファリザードが戦っ

ていたのである。ペレウスは抗議したが、

「まるきり事実根ざしてないわけじゃないし、問題ないですって。これでも俺含めて白羊族の若い奴らみんな、ジン族と決闘なんて無茶ができる殿下の度胸には感心してるんですよ。あれ以来、みんな殿下には丁寧な態度取ってるでしょ」

急に真面目な顔で言われ、いよいよ返答に困ったペレウスだったが、

「……っても、まだガキすぎて自分から女をひっかけに行く度胸はなさそうですね。」

あ、でも、ほんとに手を出すなら慎重にやるくらいでちょうどいいか。女の旦那や父親にばれたとき血を見ますし」

一転して軽薄な馬鹿笑いを轟かせる若者に、ペレウスは怒気をよみがえらせて脳天から立ち昇らせた。

「そつちの度胸はいらぬし身につけるつもりもない！
というか、丁寧な態度になつたつてどのへんがだ！」

「ジン殺しは嘘でも女殺しの素質はたつぷりなのにもつたいないなあ。吟遊詩人なんて浮き名流すのが商売の半分みたいなもんなんですぜ。」

ああそっか、心配無用ですよ。ファリザード様には黙るとききますって」

「ちっ、違う、別にファリザードを理由に言ってるわけじゃ………！」

陶器の酒瓶さけがめを手にからかう若者と、豎琴を抱いたままむきになるペレウスだったが、

「わたしがどうかしたのか、ペレウス？」

きよとんとした少女の声と、

「おい、ホジャ。あんたらがいい気分できこしめしてる酒の出どころについてちよつくら説明してもらおうかね」

霜のおりた老女の声が路地に響き渡り、ペレウスと若者双方の赤面が急冷して蒼白に固まった。

ねじ切れそうな勢いで首をめぐらせたかれらの前に、予想通りの二人が聴衆のざわめきを浴びて立っている。質素な服装のフアリザードと、背をまっすぐに伸ばした隻眼の老女ユルドウスである。

「宿にいないから探したぞ、ペレウス。ところでなんでこんなに町の人が集まっているんだ？」

首をめぐらせるフアリザードの周囲から、虎から逃げる胡狼ジャッカルのように素早く人垣が引いていく。かれら町民は、ジン殺しと噂されている少年に喝采しているところを、少女とはいえ支配層のジン族に踏み込まれて、驚愕と緊張を覚えたようだった。

そうした類の畏れとは無縁であるペレウスだが、現在は別の理由で微妙にフアリザードにびくびくしている。

「い、言つとくけど不埒な目論見でやっているわけじゃないぞ」

「？ なにをだ？ 豎琴を持っているが、おまえそんなものが弾けたのか？」

首をかしげるファリザードは幸いにして、ペレウスが（若い女中心に）評判となつてゐることを知らないようである。人族の社会と、その上層にあるジン族の社会とでは、噂のめぐり方が違つのかもしれなかつた。

ユルドウズが離れたところからファリザードに教えた。

「ああ、その坊や、最近はそれを弾いて歌うことで有名人になつてゐるらしいのさ」

彼女はそれから若者に向き直つて無表情となり、じつとねめつけた。ホジャと呼ばれた若者が「ぞ……族長。こんな狭い路地にお越しで」とおののき混じりにつぶやく。ユルドウズは佩いた刀の柄をとんとんと指で叩きながら追求を始めた。

「あんたらここにいる連中は、たしか、今月の給料を全て博打ですつた組だつたね。ふんふん、この匂いは上等のぶどう酒じゃないか。酸っぱい馬乳酒やらくだの乳の酒みたいな安酒じゃあない。こんないい酒を飲めるとはどういうわけだい、あん？ 博打で大勝ちでもしたのかい？」

「……そう、そうです、目をつけていた鶏が、闘鶏で素晴らしい勝ち方をしまして！」

「ペレウスと名前がついている若い雄鶏かい」

ユルドウズが瞳を細めて鼻先で笑う。はははとひきつり笑いをこぼす若者に、老女は剣呑な眼光で応えた。

「どうも近頃、若い連中は元気が有り余つてるようだね。ウルグも

兵を訓練したがっていたし、明日あたり久々に城外に出て数日ぶつ
続いで訓練といこうか。いつも通り死人が出るすれすれくらいでや
るから、今晚はぐっすり寝てせめてもの精気を養つときな」

「あ、ありがとうございます……」

ほうほうの体で若者が逃げ出す。銭を集めていたほかの白羊族の
青年たちも、いつのまにか姿を消している。あたりに散乱するつま
みの食べ残しや空の酒の瓶を見てユルドウズが嘆息した。

「つとにもう、若い奴らの阿呆さ加減ときたら……あれでも戦士と
しては優秀な者を選抜してきたんだけどねえ。

ま、それはそうと」

どっかりとその場に腰をすえ、ユルドウズはペレウスにあごをし
やくつてうながした。

「よければあなたの豎琴、あたしにも聞かせとくれ」

「あ、それはわたしも聞きたいな」

ファリザードまで興味を示してくる。もう帰るつもりだったのに
と思いながら、ペレウスはしぶしぶ座り込んで豎琴の弦に手を添え
た。

一度は遠巻きに離れた町民が、かれが奏で始めたのを見てそろそ
ろと近寄ってきていた。

2 - 1 5 ・嵐の前の安寧 上 (後書き)

ペレウスが演奏スキル持ちなのは、序盤で武芸スキル皆無の文弱少年だったことと関係があります。そのあたり詳しくは次回に書きませんが。

2 - 1 6 ・嵐の前の安寧 下 (前書き)

ペレウス腹蔵せる政略を打ち明け
直後にろくでなしであったことが発覚すること

2 - 16 ・嵐の前の安寧 下

あたりに薫くんず衣の香 ともしび揺れて消え失せぬ

声帯と豎琴の弦を細く震わせながらちらりと見てみれば、予想通りファリザードが真っ赤になっている。

官能的な旋律を奏でつつ、選曲を間違えた、とペレウスはつくづく自分のうかつさを呪った。

おぼろの影のゆらめきて 夢まぼろしの時は過ぎ
濃こまやかなりし小夜更けて 甘き疲れにまどろめば

路上で弾くようになって以来、かれは一曲弾くことに歌を変え、同じ歌を一日のうちにつけて二回繰り返し返さないようにしてきた。かれの奏でられる曲は百通り以上あり、そのような芸当が可能なのである。

が、多くの曲から適当に選んだ結果、よりによって途中から愛の場面が入る歌を弾いてしまうとは。

何方いづち去いにけむ 愛いしき人
帳とほり離れて 足音遠く……

これまでのファールス人聴衆はヘラス語の歌詞の意味など解しないので、ペレウスもあまり気にしなかったのだが、ファリザードはヘラス語がわかるのである。それを失念していた。

妖しげな雰囲気ふんぎの箇所をまるまる飛ばそうかとも考えたが、伝統の古歌への侮辱である。それはできない。というわけでペレウスは自身もくすぐったい恥ずかしさに奥歯を噛み締めながらも、手を抜くことなく弾ききった。またも聴衆の拍手が雨のように降り注ぐ。

「む、む。良かったけど、その、大胆な歌だな……」

茹だったフアリザードが、敷き布の上に座った体をもぞつかせながら視線を落としている。恥ずかしさで没頭しきれずにいたようだった。

あぐらをかいたユルドウズが長い沈黙ののち、首をふってしみじみと感嘆の声をあげた。

「いや、これは驚いた。こっちが予想していたよりもずっと巧いじゃないか。そんな特技隠していたとはね」

そう言われ、ペレウスは苦い気分になった。

べつに隠していたわけではないが、この一年半ほどは豎琴を疎んじ、遠ざかっていた。それには理由があったのである。そうとも知らずユルドウズが話しかけてくる。

「真面目な話さ、坊や、あんた、こっちに才能があったんだね。

武術の筋も悪かはないけどさ、異国人の耳で聞いたって弾き語りのほうが百倍も優れてるよ……どうした、そんな顔して。嫌なのか
い」

「……あまり嬉しくはないです」

故国からこの帝国に使節として送りこまれたとき、ペレウスは長く愛用してきた豎琴を持ってきた。

だが、その豎琴はかれの眼前で笑いながら壊された。かれが対立した都市アテーナイの使節セレウコスとその一派によってである。

ペレウスがその次に手にしたのが豎琴ではなく剣であったのは、必然であった。

あの頃はとにかく力が欲しかったのだ。豎琴は一転して無力の象徴となり、もう手にしたいとは思えなかったのである。

（もっと強くなりたいのは今もか）

しかし、力を欲する理由がセレウコスたちへの憎しみであったあの頃と比べると、今はだいぶ事情が違う。

長く遠ざかっていた豎琴をふたたび手に取ったのは、その憎悪を克服するためでもあった。さりとて完全に苦い思いが消えたわけではなく、ペレウスは内心を反映させたぶっくらばうな口調で言った。

「五歳のころから一日の半ばを音楽の練習に費やしていれば、豎琴なんてだれでも弾けるようになります」

その言葉に、少女と老女がちらりと目を見交わした。さっそくユルドウズが疑問を呈する。

「変な話だねえ。あんたは王子だろ？　なんでそんな教育受けさせられてたんだい。ほんとに楽士を育てようっていうんじゃないかあるまいし」

「……ミケナイの王はある意味、楽士みたいなものです。王は大神官を兼ね、王宮は神殿を兼ね、神官は祭祀の一部として音楽を学びます。次代の王である太子も神官として育てられ、豎琴の稽古と神話の暗記が必須です」

ペレウスは国の事情を説明した。

「政治の実務は家臣団、立法は元老院にまかせてしまいます。王は古い歌を語り伝え、歌によって神々に奉仕し、また民に神話や歴史

を説くんです。

音楽における調和が、^{ハルモニア}気まぐれな神々をなだめ、国の調和につながるという古来の教えですから」

調和。

そう、調和だ。

これからは自国のみならず、ヘラス諸都市の調和と結束をこそ、奏でる歌にこめよう。そうペレウスは決心した。

「ぼくは本国に連絡をとりたいんです」

長く考えてきたことを、ペレウスはふたりに打ち明けた。

「ヘラス諸都市は、自分たちのためにも 剣 を討つこの戦いに参加し、帝国諸家を支援しなければならぬ。それを本国に具申するつもりです。すでに書信はしたためてあります。」

それはアーガー卿に頼んでなんとかミュケナイに届けてもらおうつもりですが……私信とは別に、使節たちの総意としてもヘラス諸都市に報告を送りたいんです。」

正式な手順を踏むのと踏まないのでは大きな差がありますから」

となれば、ペレウスのやることは決まっていた。どこにいるかわからない使節団員をなるべく多く見つけ、報告書への署名を募ることである。全員でなくとも、主要都市の代表使節が数人いるだけで要請の重みが違う。

(……連絡役がよりによってあいつらというのが心配だけれど)

『ヘラスへの報告書は、「代表団の監督役」「書記官」を勝手に名乗っているセレウコスたちを通さなきゃならないんだぜ』 賊に

殺された都市クレイトールのパウサニアスが言ったことを思い出す。都市アテーナイのセレウコスはじめとする民主政都市の一派は、ペレウスたち王政都市の使節たちへ陰険な圧迫を加えてきていたのである。特に目の敵にされたのはペレウスで、うんざりする扱いを受けていた。豎琴を壊されるなど序の口だったのである。

しかし、首を振ってペレウスは不快な過去の記憶を頭から押しやった。民主政都市の者たちも、同じヘラス文明を共有する同胞なのだ。セレウコスに受けた屈辱のことはけっして忘れてはいないが、

（もう民主政都市も王政都市もない。ヘラス全体の存亡の危機なんだ。私的ながみ合いをひきずっている場合ではないと、あんな奴らでもそのくらいはわかっているはずだ）

ペレウスはそう心に言い聞かせ、「だから、ひとりでも多くヘラス人使節を見つけないんです」ときっぱり言った。

「ふうむ」と興味深そうにユルドウズがうなり、

「あんたもいろいろ考えてるんだね。やらしい稼ぎしてるだけじゃなかったんだ」

と、あさつての方向へ話を飛ばした。

「やらし……なんですそれ!？」

憤然と噛み付くペレウスに、「だってねえ」ユルドウズは肩をすくめて、聴衆をあごで示した。

「若い女多いじゃないか」

ユルドウズのその指摘に、ファリザードがはつとして慌てて聴衆を見回す。せつかくファリザードが気づいてなかったのに余計なことを、とペレウスはのどの奥でうめいた。

案の定、顔を前に戻した少女がにらみつけてくる。

「おまえ、こゝこんな歌を公衆の面前ですつとやってたのかッ」

「やってちゃ悪いか」

無然としてペレウスは言い返したが、

「まあ、弾き語りって昔から女ひっかける手口の常套だしな」

「それ不思議なんだが、なんで弦楽器なんだよ？ 太鼓叩きやラッパ吹きはなぜ豎琴弾きよりもてないんだ」

「お前、飲み食いに夢中で殿下の弾き語り見てなかったのかよ。見てたらわかっているはずだつて、半端じゃなく様になつてるんだよ。

指も舌も繊細かつなめらかに操れるんだよ、ちゃんとした豎琴弾きつてのは。そりゃあ女の扱いもうまいと古来言われてるわけよ。笛だつて指で笛穴押さえながら吹く種類のやつはもてるだろ」

「おお、なんだか色っぽい理由だな。納得した」

いつのまに戻ってきたのかホジャ含む白羊族の若者たちが、聴衆の一角に混じつてどうしようもない会話を始めていた。

あつち行つてくれないかなとペレウスは真剣に念じるが、そんなかれの突き刺す視線にも気づかず酔っぱらいたちの馬鹿話は続く。

「演奏する姿に色気感じるなんてもてる理由としては二の次だろ。やっぱり音そのものだよ。」

殿下の奏でる調べ、気品のある音色だけどこか誑たらしっぱいだろ。あれが女を吸い寄せるとみたね」

「ああ、あの音色には媚びのかけらもない清らかな色香を感じるよな」

「清らかっていうか、女に媚びず技術で酔わせる部類の女たらしの清々しさだよな」

「なんだかかつこいいな。でもよく考えたらやっぱり最悪だな」

「そういえば殿下がこれまでの旅中の護衛料や宿賃や水、食料の代金払ったことって一回もないな。俺らもこの都市の上層部も、ファリザード様と親しい殿下に普通に食い物分けて寄宿させてきたわけだけど、イスファハーン公家の家中の者じゃないなら厳密には別計算にすべきだよな。なし崩しになってるけど。」

それ考えると殿下ってファリザード様の威光でただ食いしてるみたいなものじゃねえの」

「女のおかげで食えてる……つまりひもか」

「おいおい、そいつあ事実誤認だぞ。なし崩しじゃねえ。前に隊内の会計官に聞いたけど、殿下にかかるもろもろの費用は、ファリザード様が一括して支払う護衛料に含めることで話がついてるんだよ。あれ、それってやっぱりどう考えても」

「生活にかかる金を女に全部出させてるならひも確定だろ。あの若さで外道だな」

「ばっか、あれよ、寄進で食ってても権力や大衆に媚びない神官と同じことだよ。超然として突き抜けてればひもでも気品が宿るもんなんだよ、きつと」

「それだ。殿下は養われてても一点の恥じることもないとばかりに図太く胸張って生きてるからな。小国の出といえどさすが王族、高貴なひもの資質があるな」

わざと聞かせるのかと疑いたくなるほど、好き勝手な論評が言い放題に垂れ流される。ペレウスの胸中で産声を上げるのは殺意である。

ユルドウズが若者たちを意外そうな目で見やりながら言った。

「ほお……あの馬鹿どもは戦と酒だけが能かと思っていたが、音楽を聞く耳もちゃんとあるじゃないか。音色の評価が当を得てる」

「ユルドウズさん、ぼくそろそろ怒り出していいですか」

「ペレウス、話は終わってないぞっ」

憤慨した様子のファリザードがばんばんと敷き布を両手で叩く。

「街中の豎琴演奏は禁止だ禁止！ たしかにあばらの怪我が本復するまで武術の訓練はするなどは言ったが、だからといって、こ、こんな……歌で四方八方の女を惑わす破廉恥な真似に手を染めてはいけないっ！」

「ぼくが妖術で街の風紀乱しにかかっているみたいなの言われようだな。女性に限らず男の人だって豎琴を聞きにきてるだろ」

「お金も、欲しければわたしが工面してやるから！ 手広くほかの女からちゅーちゅー吸い上げるのはよせ！」

「人聞き悪すぎる言い出すな！ さっきのぼくの話で悟ってくれよ、仲間の使節たちを探すために始めたんであつて他意はないよ！ きみまでぼくをどんな男だと思ってるんだ！？ ……あ、えつと、これまで出してもらつた諸費用については感謝する……考えてなかつた、今まで凶太く生きててごめん……」

「嬢ちゃん、嬢ちゃん」ユルドウズがファリザードの肩にそつと手を置く。「ひもをあまり甘やかすな……じゃなかつた、坊やにも男の沽券があるんだからそこを考えてやらなきゃ」

にやにやを含んだわざとらしい言い間違いが腹立たしいことこの上ない。

ペレウスはむすつとしてヘラスのある西方の空を見上げた。ファールス帝国が内乱に陥つて以来、故国ミュケナイからの仕送りは絶えている。連絡さえついていないのだから当たり前だが、とにかくペレウスは懐に無一文の身なかつた。

（豎琴の芸で金を取るのは嫌だ、なんて甘いこと言つてられなくなつてきたかも……）

気は進まない。進まないのだが、このままイスファーン公家つまりファリザードの財布に頼りっぱなしのほうがペレウスにとつては気まずいのであつた。

ヘラス人を喚ぶ狙いの演奏の効果は、数日後に出た。

2・16 嵐の前の安寧 下 (後書き)

時系列に沿って読む場合はEX3にお進みください。

EX1・小夜の寝覚め（前書き）

これは番外編として本編とは別に連載していたのですが、感想欄やWEB拍手感想で「本編とまとめたほうがよい」と複数の要望が寄せられたためこのたび本編に統合することにしました。

主にラブコメです。微妙に変態ちっくだったりするので、お色気や恋愛強めの話が苦手な方はご遠慮ください。

このEX1は、本編第18話「奔流 下」と第19話「ふたり旅」のあいだのお話です。

EX1・小夜の寢覚め

ジン族の大貴族の娘、ファリザードは薄目をあけた。

意識がもどったとき彼女に最初に見えたものは、闇だった。

小麦色肌の美貌のなかで、琥珀のような金の瞳がぼんやりと焦点をさまよわせる。十二歳の少女は、半醒状態で疑問をいだいた。

(ここは……どこ？　なんで前がみえないの？)

ただ暗い場所というだけならば、彼女の視界はさほどさまたげられないはずだ。

人族からは「ダークエルフ」「砂漠エルフ」とも呼ばれるジン族は、もともと夜に順応した種族だったのだから。酷暑の昼間をさけて活動する、砂漠のほかの夜行性の動物とおなじように。

つぎに知覚したのは、床の冷たさであった。よこたわっている岩肌の感触はごつごつした氷も同然で、骨まで冷えがしみてくる。明け方の砂漠は寒い　ファリザードは尖った長い耳をぶるつと震わせた。

けれど肌に触れてくるのは、岩と冴えた夜気ばかりではなかった。ぬくもりをもった何かがファリザードのきやしやな肢体に寄り添っている。

(温かいな……そうか、なにか目の前にあるから見えないんだ……)

とろとろと夢ごこちで、唯一のぬくもりにもっとくつつこうと肌身をすりよせ　ファリザードは気がついた。

これは生命のぬくみだ。人肌だ。

(あれ、……え、)

もやが晴れるように眠気が急速に減退していく　少女は状況を確認しようと顔をうわむけた。

まぶたを閉じたペレウスの顔があった。

片耳をちぎられた少年　　同い年の、異文明の地ヘラスの王子
かれの女の子のように整った白皙の顔は、起きているときには強情そうに食いしばっている唇をゆるませている。その唇がファリザードのそれにかするほどの至近距離で、ペレウスは浅い寝息をたてていた。

腰布を巻いただけの裸のペレウスに添い寝されており、かれの腕がファリザードの繊美な胴にまわされている。

そしてファリザード自身も一糸まとわぬ姿で、美しくつやめいた褐色肌が余すところなくあらわになっていた。

「~~~~~!!?」

“少年に裸で抱きしめられて、その胸に顔をうずめていた”ことを認識したとたん思考が飛び散った。

反射的に背をそらしてファリザードはのけぞりかけた。だが意外にしっかり腕にかかえられていて身を離せなかった　彼女の狼狽の拳措で、ペレウスがぱちりと目を開けた。

「起きたんだ……ファリザード」

「お、おまえ、なんだこれっ……どういう……」

「大きな声をあげるんじゃない。あの賊たちはきつとぼくらを探している。川からはだいたい離れたつもりだけど、こうしているいまも

斥候がそばにきているかもしれない」

はりつめた危機感がかれの口調にはある。はっと記憶がよみがえり、フアリザードは青ざめた。

そうだ。砂漠の賊に襲われたのだ。フアリザードの一行は眼前のこの少年以外、全員が殺された。ペレウスが助けられなければ、彼女自身もどんなひどいことになっていたかわからなかった。

短めのはちみつ色の髪をかれの鼻先で振るように、首をすばやくまわしてフアリザードは周囲をみてとった。

壁も天井もごつごつした岩であるところからして、洞窟内だろう。すこし離れたところに、フアリザードの愛馬である黎明号が腹ばいに寝そべっていた。彼女の視線をたどったペレウスが「黎明に礼をいうんだね」と告げた。

「そのかしこい馬がいなければ、ぼくらふたりともいまごろ川に流されるまま冥界に下っていた。

黎明は、ぼくらがとびこんだあの濁流が勢いを弱める場所にきたとき、必死に泳いでぼくらを対岸にとどけてくれたんだよ。そのあとぼくがきみを連れてこの洞窟まで逃げてくれたのも、黎明が疲弊をいとわず走ってくれたからだ。いまはさすがにへばってるけど」

「お……おぼえてないぞ。川に入って水を飲んだあたりから」

「それはそうだ。きみは完全に溺れていた。

応急処置で心臓はすぐ動いてくれたけれど、手足がすっかり冷たくなっていて、ここに運び入れたときは意識がないまま震えはじめていたんだ」

はなはだしい疲労を声ににじませながら説明するペレウスに、フアリザードはなにもいえなくなった。

たしかに濡れた服を脱がせなければ体温がどんどん下がる。砂漠の夜は霜がおりるほど寒いのだ。火をおこすわけにはいかなかったのだろうし、そうなるのと温める手段は原始的な素肌以外にない。すっかり抱きしめるのは、肌の触れ合う面積をなるべく多くするためだ。ペレウスがこの状況でできうるかぎり最善の処置をしたただけだということとは納得せざるをえなかった。

だが、だからといって、こんな……紅潮しきって、ファリザードは目を回しそうになった。

裸と裸 同年齢の子供相手とはいえ、こんなふうに男の肌に密着するのははじめてだった。

少年のにおいが鼻腔を満たしている。青い牧草のような若々しいにおい。

少年の落ちついた心音が胸板から伝わってくる こちらのどんどん早くなる鼓動も相手に伝わってしまっているだろう。

(どうして?)

ファリザードは相手の胸にひたいをくっつけるようにして再度、顔を埋めた。赤らみきった表情を見つめられるよりそのほうがましだった。人族であるペレウスは彼女とちがい闇中ではよく見えないだろうとわかっていても、耐えられなかった。

(どうしてここまで恥ずかしいんだ? ちょっと前まで、こいつらヘラス人の視線なんて無視できていたのに)

犬に裸を見せても羞恥心を覚えないのとおなじで、ファリザードはペレウスをふくむ異国人 彼女の父が館にとどめているヘラス人の少年たち に肌をさらすことなどなんとも思っていないかった。透ける薄衣や、装身具だけつけた半裸は、ジンの女性の邸宅内で

の格好としては珍しくない。ファリザードはそれらの姿で悠然とふるまい、異国人の目などさらさら考慮しなかった。かりに相手の目に欲情が浮かべば、嫌悪感を覚えてさげすみの念をあらたにするだけだ。犬の発情を気にしてこちらが衣装をあらためる必要があるところがある。

……などと気張って、大嫌いなヘラス人たちのまえでことさら傲然とふるまっていたのに。

緊張に体の芯から震えながら、ファリザードは気づいた。いつのまにか、相手は汚らわしい異国の犬だと見下げることができなくなっている。

恥ずかしいのは、いつしかこの相手を対等とみとめてしまっているからなのだ。

決闘でかれに負けたからか。

求婚者がいれば彼女がはねつける側だったはずなのに、かれには「ぼくに触るな」と逆にはねつけられたからか。

ヘラス語ではなく彼女の国の言葉で「友達になろう」と正面から言われたからか。

そのすぐあと、窮地を救ってもらったからか。

救われたときの状況を思うと、さすがに異国人がどうのと言う前に恩を感じざるをえない。あそこからふたりして生きて逃げられたのは奇跡だ。

(なんで危険をかえりみず出てきてくれたんだろ……)

いまになってそのことが気になりはじめ、ファリザードはためらいがちにそっとたずねた。

「……死ぬかもしれないのに、なんで飛び出してきたんだ？」

とたん、それまで疲れきった様子だったペレウスが雰囲気を一変させ、彼女の頬に手をそえて顔をあげさせてきた。厳しくひきしまった表情。強い意思を宿した少年の瞳に間近からみつめられて、フアリザードは息を呑んだ。

「ぼくにはきみが必要だからだ」

低い声で告げられて、心臓がどきんとひときわ強くはねた。が、
「……生き延びるために」と続けられてなんとか落ち着く。まだ鳴っている胸を少しでもしずめようとおうむ返しにつぶやいた。

「生き延びるため、わたしが必要……？」

「ぼくらは賊の出没する地域から一刻も早く離れなければならないけれど、水の入る革袋は小さなものをひとつしか見つけられなかった。

水が足りないなら来た道へは戻れない。雨がやんで砂漠の川はいまごろまた涸れているだろうし、途中の泉は死んでいて飲めないから。

しかし先へ進むにしろ水をどこかで補充するにしろ、ぼくには知識がない。きみがもともと目指していた村への道筋を知らないし、このあたりにある湧き水の場所も知らない。

きみという砂漠の案内人が必要なんだ」

らんらんとぎらつく少年の瞳。強烈な復仇の決意がそこにはある。

「かならず無事なところまで逃げ延びて、賊の情報をきみのお父上

に知らしめる。

あの賊どもは許しておくわけにはいかない。ぜったいこの目であいつらが縛り首になるのをみとどけてやる」

鮮烈な激情を伝えられ、ファリザードの脳裏にも、衛兵や人夫たちの死に様がありありとよみがえってきた。

（わたしは卑劣な賊の口車にのって、父上の臣下や領民たちを死なせてしまった）

われ知らず少年の齒噛みに同調する　そうだ、あの嘘つきの邪教徒どもだけは許さない。裏切られた誓いと与えられた屈辱の数々を思い出し、ファリザードの瞳はペレウスのそれと同じ種類の光を帯びた。口をひらいて、かれにしずかな声で約束する。

「　血の貸しは利息ごと取り立てるのがジン族の古いならわしだ。わたしの一族は、殺された忠義者たちの仇をかならずとる」

「復讐はきみたちジン族の専売特許ではない。ぼくだってせっかく親しくなった仲間を殺された。

きみのお父上には、かなうことならぼくを討伐隊にくわえてもらいたいと申し出るつもりだ。

でもそのためにはまず、生きて安全なところまで行かないと」

とりまとめてから、かれは「あと……」と微妙に齒切れわるく言葉を追加した。

照れくささで緊張したのかその腕にわずかに力がこもる。かれははじめて含羞を感じさせる声で、

「……もう不毛な喧嘩はやめて仲良くやることにしただろうか？　友

達だからってだけでも助ける理由にはじゅうぶんだと思うけど」

(だから不意打ちでそんなこと言うな！ やだ、だ、抱き寄せるみたいにするなっ……！)

少年の腕のなかにいることをいやでも思い出させられ、ファリザードは顔から火が出そうになって内心で悲鳴をあげた。復讐の話でせつかくこの状況を忘れていられたのに。

体の前面に意識が集中してしまう ファリザードの成長途上の乳房、すべらかな腹、下腹から太ももは、少年のいまでは意外にひきしまった体と密着してしまっていた。

かれの胸板にこすれるためか意識しすぎたためか、乳首が固くなりはじめたことに気がついて頭が煮えた。ペレウスにそれを気づかれたらと思うとこのまま消え入りたくなる。

ファリザードは泣きそうになって祈った。

(気づくな。気づかないで)

幸いにしてというべきか、ペレウスは死にそうなほど疲労困憊しており、彼女の胸中にも胸の尖端にも興味を向けるどころではないようだった。「……寝る」とかれはつぶやき、唐突に体の力をぬいてぐったりした。

いそいでファリザードは自分とかれの体のあいだに腕を入れ、胸をかばうようにしてわずかに距離をあけた。

が、急速にまどろみに入りつつあるペレウスが、眠たげな声をかけてくる。

「ファリザード……」

「な、なんだ」

「もつとちゃんどくつついて……すきまを作られたら寒いよ」

「ばっ、ばか、調子にのるんじゃ……」

狼狽しながら言いかけたが、少女の恥じらいゆえの文句を最後まで聞くことなく、ペレウスはことごと眠りに落ちてしまった。

寝入りの冗談のような早さにファリザードは絶句したが、考えれば無理もなかった。

かれは血路をひらいて賊の集団から彼女を救い、洪水の川をわたりにきつて、乗り慣れない馬を駆ってここに彼女を連れてきたのだ。死の瀬戸際から脱出することで緊張が切れたとたん、極限の疲労で長く意識をたもてなくなってもおかしくない。

（わたしを助けたから疲れてるんだよな）

さんざんためらったのち、おずおずとファリザードは言われたとおり身を寄せた。かれの背に片腕をまわし、思いきってぴったり肌を合わせなおす。

熱い頬をかれにくつつけ、凜々しげな形のよい眉を下げ、うう、とうなる。

（これはしょうがないんだから）

体温を分け合うためだ、生き延びるため　自分にそうは言い聞かせてみても、羞恥はどうしても薄れてくれなかった。美貌は完全に真っ赤になってしばらく戻りそうもない。

「眠れなかったらおまえのせいだから……ペレウス」

八つ当たりもこめて、かれの名前をつぶやいてみた。
いままでまともに名を呼んだことはほとんどなかったが、

(これからはちゃんと名前では呼ばないと……ともだち、……になっ
たことだし)

「ペレウス、ミュケナイのペレウス」

それにしても妙だった。くりかえし小さく呼んでみるたび、へんにむずがゆい高揚感がこみあげるのだ。速まった血流が全身を火照らせて、ファリザード自身はもう温まる必要を感じないくらいだった。

急に、ぎゅっときつく抱かれた。あえぎに似たかすれ声が喉から出てしまう。

「あっ……」

無意識ながら、名前を呼ばれたことに反応してか少女の体温の高さを感じてか、昏々と眠るペレウスが強く抱擁してきたのである。

濃い果実酒の杯でも唇にふくんではいる心地がした。ひどく甘酸っぱくて、酩酊したように夢々ユキユキさせられる。初めての感覚と顔の熱をもてあまして、ファリザードは目をぎゅっとつぶった。

ほんとに眠れないかも、と干々にふるえる愁い半ばのため息をつきながら。

EX1 小夜の寢覚め（後書き）

このEX1は、本編第18話「奔流 下」と第19話「ふたり旅」のあいだのお話です。

EX2・手袋（前書き）

本編26部「クタラムシュとユルドウズ」で省いた村滞在中の話です。

EX2・手袋

山脈がかなたにみえる村　途中で出会った騎馬部族を新しい護衛隊として、ペレウスとファリザードは旅の終着地にようやく至っていた。

村は湧き水に恵まれ、周辺は砂漠というより草原である。

畑には水路がはりめぐらされ、葉が青々としたアズノの木が植えられている。漆喰とレンガで建てられた茶色い家々が点在していた。ファリザードたちが滞在する村長の家は石造りになっており、日中でもひんやりとしてここちよかった。

旅装を解いたファリザードは、へそを出す長袖の赤い胴衣と、ゆつたりした草色のスカートを身につけた姿になっていた。

窓ぎわにクッションをおいて編み棒をたゆみなく動かしている……といたいのだが、しばしばその手は止まり、そのあいだ彼女は窓の外をながめている。

庭先で、ジン族の男が、人族の少年ペレウスに体術を教えているのである。

「相手の手首をこうやってとらえ、外側へねじるのだ。やってみなさい」

「こ、こうですか？」

「だめだ、つかみの時点で力みすぎだ。

指先に力を入れようとすると、そのひらを相手の手の甲に吸いつかせるように密着させて握るのだ。

そして腕ではなく腰の力でねじって投げる。このように」

「あいたたたっ！」

庭を闊歩するニワトリや羊の鳴き声に、少年の悲鳴が混じっている。

（怪我したばかりなのにあんなことに夢中になって、ペレウスの右手はだいじょうぶかな。無茶をいいたしたらほんとうに自分を曲げないんだから）

フアリザードは眉を下げたため息をついた。とはいえ口の端には微笑が浮いているのだが。

彼女の前で向い合って同じくクッションに腰かけている老女が、「いちいち気にしなさんな、嬢ちゃん」と編み棒をかざしていった。動作のきびきびとした、姿勢のよい隻眼の老女である。騎馬部族の女族長ユルドウスであり、庭にいるジン族の男はその夫クタルムシュだった。

「うちのクタルムシュはあれでも三百年の齢を重ねたジンだ。教える方も坊やの怪我の程度もこころえているよ。ほら、教えているのは左手の技だろ？」

それよりあんだだ、いちいち手を休めるんじゃない。あたしがここで編み棒なんかにぎっているのはあんだが『教えてくれ』って頼んできたからだろうが」

「う……すまない。だって、頼るはずだったわたしの乳母が巡礼中で村にいないとは思いませんでしたんだ」

「だからあたしを村内に呼んだわけかい。

まったく、人に似合わないことさせといて、自分はぼけっと恋し

い男にみとれてんじゃないよ」

「こ、恋しくない！ みとれてないっ！」

「五歳児すらたばかれそうにない嘘をつくんじゃないよ。説得力をもたせたかったら窓の外を熱っぽい目でみるのをやめな。

だいたい編んでいるその手袋からして、坊やにあげるために編んでいるじゃないのかい」

「たしかにそうだけど、これはお礼みたいなもので……」

往生際悪く言い訳するファリザードの声が、尻すぼみに小さくなる。

手袋をあげたいとはじめて思ったのは、砂漠でふたりきりだった数日前の夜のことだ。寝ているかれの手におすおす触れてみて、冷たさに気づいたときだった。

状況に緊張してこぶしを胸元にちぢめていた彼女のほうは、手が冷えることはなかった。

相手の体に腕をまわして抱きしめてくるのは、いつもペレウスからだったのである。指を広げた手が冷涼な外気にさらされるため、かれの手は起きるころにはこわばるほど冷たくなっていた。

（眠るときも、わたしが冷えないように守ってくれていたんだろうか）

考えすぎだろう、単に彼自身がぬくみを求めていただけだ　とわかってはいるのだが、そう夢想するだけで胸奥に桜色の熱がじんわりしみこんでくる。

いつしか視線がまたふらふら庭へと流れていた。

「坊やの姿がみえるところだとどうしても気が散るようだねえ」

不機嫌そうにユルドウズが鼻を鳴らし、ファリザードはあわてて顔を前に戻した。

すこし暗くなるけど場所を窓辺から離すかね　といわれそうな
ことを見てとり、「気になったんだがっ」とつさに質問をもちかけ
て強引に話を変える。

「ユルドウズは人族なのになんでジン族と結婚したんだ？」

「よくよく集中の続かない子だね……いや、なるほどね、最初から
それが聞いたかったわけかい」

ユルドウズがますます顔をしかめて再度鼻を鳴らす。ファリザードは首をすくめて赤くなった……が、否定はしなかった。

編み物を教えてほしいというのは彼女を呼ぶ口実だった。乳母が不在でも、編み物を手ほどきしてくれる女くらいはこの村じゅうにいるのだ。あえてユルドウズを、村外に設営された彼女の部族の野営から呼んだのは、異種族間結婚の話を知りたいがためだった。

「だってその、ジンと人の夫婦なんて変……いやすまない、あんまりないことだろう？」

「変でいいって。じっさいかなり妙ちきりんな取り合わせだと思っし。猫と犬が夫婦になるようなもんだからね。」

「いやはや、自分たちのことながら四十年前は頭がどうかしてたんじゃないかってたまに思うね」

「そ、そこまでは変じゃないはずだ！」

つい前のめりになってクッションから腰を浮かせ、否定の声をあげてしまった。

「ほう」してやったりとユルドウズがにやりと片頬をつりあげる。われにかえってファリザードは頬を燃やしたが、気を取りなおし、なかったことにして次の問いに進む。

「子供はできなかったのか？」

「できなかったね。といつても、人族の女とジン族の男の組み合わせだからかもしれないけど。人族の男とジン族の女ならたしか前例があつたんじゃないかい」

「そ、そうか……うん、そうか……」

その、まわりの反応はどうだった？ 一緒になつたとき反対されなかったのか」

「そりやもう、されたに決まつてら。あたしゃクタルムシユの親戚から何度か殺されかけたよ。この左目はあいつの弟につぶされたのさ。」

おしまいにはクタルムシユは一族と絶縁しちまつたよ」

ファリザードは息をのんだ 自身の兄たちのことを考えた。彼女とヘラス人との結婚に反対してきたかれらのことを。「このような結婚を受け入れることはないぞ、いま父上は少しおかしいのだ」といちばん歳若い兄が慰めてくれたことを思いだす。ファリザードがペレウスに惹かれているなどと知れば、かれらはどうするだろうか。妹もおかしくなつたと蔑むだろうか。

「……まわりに祝福されなかったのに、そこまでしてなんで一緒になつたんだ？」

「んなもんクタルムシュに押し切られたからに決まってる。あいつしつこいの何のって」

なんだかはぐらかされた気がして、ファリザードは眉を寄せた。ユルドウズは微妙な顔をしたファリザードをみて鼻で笑った。「あんたみたいな色気づきはじめて子供は好いた惚れたの話聞いたいんだろうがね」とからかう調子でいう。

「あたしや気に入ったお宝ほどしまいこんでひそかに愛でるたちなんでね。」

うちの人のそのういう思い出の詳細は、なるべくふたりの秘密にしたまま墓に入りたいのさ」

のろけと話題の封殺が同時に行われて、ファリザードは話の続けようがなくなった。

そのうえにユルドウズがおつかぶせるように、一転してそっけない言葉を発した。

「あんたがこの先どうするかはあんたが悩みな。」

悪いがあたしや部族に責任をもつ族長だよ。ジンの大貴族であるあんたの家がこのことでごたごたするなら深入りはしたくない。『騎馬部族め、ファリザードによけいな入れ知恵を』とだれかの恨みを買うなんてごめんだからね」

ぐうの音も出ない。

それでも、ファリザードはあとひとつだけと訊いてみた。

「……幸せになれた？」

問うようなものではない愚かしい質問であることはわかっていた。それでも答えを聞いたかったのだ。

「そうさね。望んだ道を選べてとくに後悔もないから、ぼちぼちだろっね」

編み棒を止めて編み目を検分しながら、ひとごとのように淡白な口調でユルドウズはいった。

それから、

「どのみちあたしがいえることはないよ。嬢ちゃん、あんたのなかで答えはもう決まっちゃってしまっているんだろっ」

唐突に看破されてファリザードは固まる。

顔を上げたユルドウズがふふと笑いかけた。若かりし日の凜とした美しさを残す面立ちのなかで、隻眼がふと優しい光を帯びた。

「ジンの恋だものねえ、転がりだしたら歯止めなんてきかないだろ。これでも連れ合いがジン族だから、多少はわかっているのさ」

うまくいくといいね。

そう声をかけられて顔を伏せ、ほんのりと頬を染めて「……」

うん「ファリザードは小さくうなずいた。虫の羽ばたき音並みに小さな声だった。」

……

……

……

フアリザードの編んでいた手袋は、翌朝に完成した。
完成したものをしげしげと眺めた末に、開口一番彼女はいった。

「これは捨てる」

「捨てるんじゃない、お馬鹿！」

「こんなみつともないものを渡せるもんかつ」

若干情けなさそうなフアリザードの手に、赤い毛糸のかたまりがある。分厚いそれには指がついており、かるうじて手袋だとわかる程度の出来である。

呆れ顔でユルドウズは首をふった。

「夜のうちに一気に進めたのかい？ 集中したら速いじゃないか。
でも初めてなんだから、焦らずやればよかったのに」

「いいんだ。実をいうとこれは最初から練習用として編んでいたんだから。もう一枚、今度は丁寧に編もうと思っている」

「いいじゃないか、初めての作品だから下手だけどといって渡せば」

「いやだ。こんなのペレウスにみせられない。もっと上手にできたものを渡す」

フアリザードはぐっと両手をにぎりしめて大真面目にいった。

「わたしが作ったものにふさわしい出来でないと、ペレウスのなかで、なにごとにも完璧な美少女というわたしの印象が傷ついてしま

うじゃないか」

「ははは、このガキ、なかなか自己評価が高めにかっ飛んでるようだね」

乾いた笑いをして半目になったユルドウスだったが、ややあつて肩をすくめた。

「ま、あんたがそういうならいいけど。捨てるのはもったいないよ。」

あたしによしな。この村に雑貨を取り扱ってる小さな店があったね。ちよっくらその店主にこの習作を引きわたしてやる。

製作者を伏せておくからそれでいいだろ」

.....

その日の夕食前。

第二の手袋をせっせと編んでいたファリザードが、ぷるぷると震えはじめた。

彼女が凝視しているのは、クタラムシユとともに村長の家に入ってきたペレウスの手にしたものである。

陶器でらくだの乳の酒をすすっていたユルドウスが、思わず破顔した。口をぬぐい、笑いにひくひくと口の端を歪めながらユルドウスはいった。

「おやまあ、個性的な手袋」

持ち帰ってきたものに言及されたペレウスが、にこりとして高々と戦利品をかかげた。

「体術修練の合間に、クタラムシユさんに雑貨屋で蜂蜜入りの薔薇水を買ってもらいました。

その雑貨屋でこれを見つけました。ちょうど手袋欲しかったですよ！」

「ぷつ、く、くひひ、いやしかし、不恰好な手袋だね」

「笑うほどですか？ まあ不恰好なのは確かですけど、ちょっと形が崩れているのはしょうがないですよ。由来を聞いたら、なんでも編み物初心者の女の子がはじめて作ったものらしいですから。

でもそのおかげでただ同然に安かったんですよ！ もったいないと思いませんか？ 素材は新品同然なのに」

腹を抱えて笑いの発作をこらえているユルドウズが、そばのフリザードにしか聞こえない程度につぶやいた。

「きひひひ、ああ、そついや雑貨屋に引き渡すとき適当にそつ説明したね……」

笑顔でペレウスが手袋をぶらぶら振っている。

「でも心をこめて編んでくれたみたいで、編み目はしっかり詰まっていますから保温には問題なさそうです。

ほくにとつては掘り出し物ですよ。銅貨一枚で買えました」

「だめーっ！」

「うわっ!？」

限界に達したファリザードが編み棒を放り出し、かけよって手袋をもぎとろうとした。

目を白黒させながらも手袋を奪われまいと背にかばったペレウスが、おっかなびっくり訊く。

「な、なんだよ、ファリザード」

「それをよこせ! そんな手袋だめだ!」

ファリザードはペレウスの背中側に回りこんで手袋を奪取しようとする。ペレウスがむっとした表情になった。

めまぐるしく伸びてくる彼女の腕から手袋を防御しつつ、かれは訊いた。

「だめと叫ばれても……なんだか知らないけど、頭ごなしにぼくの買い物に文句つけられるいわれはないんだけど。

それともなにか理由があるの?」

「だって、もつと形がきれいなもののほうがいいだろ!？」

「ちょっとばかり崩れてたからなんだというんだ。ぼくはこの手袋が気に入ったんだ」

「き、気にいった、って……」

ファリザードがどもり、急速に腰砕けになった。

初めて編んだものが結果として好きな人に褒められている状況に気がついたのである。

「こういう実用的なのが趣味に合うんだよ。ぼくの国の現在の主流文化は儉約と質実剛健を旨とするんだ」

笑いをようやくおさめたユルドウズが「それって単に貧乏なのでケチってるってことじゃないのかい」とつぶやいている。その声を気にしないペレウスは天地に恥じるころはないとばかりに胸をさらした。

「とにかく、このモコモコした感じも含めて好きになったんだからいまさら手放さないぞ」

「好つ……!?!?」

フアリザードが絶句した。尖った耳の先まで熱を運び、焼きリンゴのようになった両頬を押さえる。湯気が頭頂から出そうである。いきなり彼女が半泣きで静かになったために、ペレウスは意固地な態度を大幅にゆるめた。「え……そんなにこの手袋が気に入らない?」とこわごわ尋ねはじめている。

ユルドウズとクタルムシユの夫婦が、すこし離れた炉端から面白そうにそれを眺めているのだった。妻が夫の腕をつついた。

「ところで、嬢ちゃんのほうはみでの通りだが、坊やのほうは嬢ちゃんをどう思ってるんだい?」

腕を組んだクタルムシユがあごをつまんで「ふむ」と声を洩らした。

「どうも判然としない。あれはまだ体を動かすことのほうが楽しい

時期だな。

そうなるとファリザード殿のほうから動かねばならんだろうが、あの娘はまず赤面症を治したほうがいいな。好機がくるたびあのように固まっついてはどうか進展しようもないぞ」

「まあそのうちどうにか勇気をしぼりだすだろ。

それにしても、色恋沙汰は自分が話の種にされるとなると真っ平御免だが、他人のはみてるだけで楽しいもんだねえ」

「悪趣味だぞ、ユルドウズ。しかしまったく同感だ」

EX3 贈り物 (前書き)

時系列的には2 - 16 嵐の前の安寧 下 の直後の話です。

EX3・贈り物

ファリザードに誘われ、ペレウスはテヘラーン市内に遊びに出てきていた。

大市場は、バーザール昼なお薄暗い。通りにかぶさったアーチ状の天蓋が太陽の光を遮断しているからである。しかしうら寂しい感じはまったくない。歩けば体と体がこすれずにはすまないほどに人が密集しているのだ。

にぎやかな薄闇には香りが満ちている。居並ぶ店の入口に吊るさ
れている角灯から漂うごま油の臭い。占い師が炊く乳香や麝香の香、
鉄板で炒められる香辛料入の米、ざるに積み上げられた熟れた果物、
それに麻薬呑みのくゆらせる妖しい煙の匂いである。人々の体臭も
ハシーシュ濃厚に鼻をつく。

一歩先を歩くファリザードの甘い匂いがペレウスの鼻をかすめる。
衣服に香を焚きしめてあるのだろう。

その匂いを嗅ぎながら、ペレウスは列柱が支えるアーチ天蓋をあ
おいだ。

(ここなら空からの危険も心配しなくていいな)

ひそかに安堵する。

テヘラーン近辺に来ているホラーサーン将イルバルスは、イスフ
アハーン公家の嫡子たちの首を刎って回っているという。市壁など
軽々飛び越えてくる相手である以上、街中とはいえ完全には安心で
きない……だが、天井のあるここならば上空から見てもファリザ
ードの存在には気付かれないだろう。

「ペレウス、あそこだ、見つけたっ」

目的の屋台を発見したファリザードが足を速め、人の隙間を縫って快活に駆けていく。ジンの少女が走るのを見たテヘラーン市民が奇異の目を向ける。市場をちよるちよる走りまわって趣味の面白い食いに励むファリザードの姿は、都市イスファハーンの界限では珍しくもない情景だったろうが、このテヘラーンでは衆目の見慣れぬところである。もっともファリザードはあまり視線を気にするふうもなく情報を聞き集め、新天地を開拓しているようだった。

「兵のひとりから聞いたんだ。この串焼きと揚げ物の屋台は、珍しい肉をつかってやっているそうさ。らくだのかかと肉やヤマネの蜜漬フラスムけ、紅鶴の舌や白鳥の水かき、ツグミの脳髓なんかだな」

仕入れた知識をファリザードが得意げに話す。言われてみれば串刺しになって炉のまわりであぶられ、または鍋で揚げられている肉片は、大半が見慣れない形状である。

「紅鶴の舌にツグミの脳？ 珍味だって話に聞いたことはあるけど……食べられるのかい？」

「試してみるか？」

「そ、それは今度でいい。もうちょっと口にするのが易しめのを」
高級食材だそうだがさすがに異文化の人間からすると食欲をそそらない。

「じゃあ、これなんてどうだ」鍋の横に置かれて揚げられるのを待つ肉片のうちのひとつをファリザードが指す。ペレウスは少し警戒しつつも物珍しげに眺めた。

「なんの部位、それ？」

と、屋台の太った主人が丸々した顔を上げ、愛想よく説明してくれた。

「羊のしっぽだよ。椰子の実の汁と塩と砂糖で下味を付けて、砕いたナッツの衣をつけて揚げるんだ。買って食べてみないかい」

「そうですね……じゃあ、二つください」

金を渡して揚げた羊尾を椰子の葉に包んでもらう。ペレウスはその場でかぶりついた。濃厚な旨味をともなった熱い脂が口内に弾けたが、少々熱すぎた。「あちちちっ」ペレウスは目を白黒させて口を離した。

「おや、いけない。これを使いな」

店主がのんびりと言ってなにかを手につかみ、炉越しに身を乗り出す。口を押さえて火傷に悶絶するペレウスの眼前に、黒ずんだ硬貨のような小さな円盤を差し出してきた。

「火傷した口に当てて待つんだよ。ほら、早く」

わけがわからないが、言われるままペレウスは親指の爪ほどしかない円盤を取り、唇にそれを押し付けた。

驚くべきことに、徐々に火傷の痛みが引いてゆく。ペレウスは目を丸くした。

心配そうにしていたフェアリザードが、「魔法をこめたダマスカス鋼か」と目をみはる。

店主が顔をほころばせた。

「効くだろう。こいつは“治癒石”という便利な代物でね。ほんのちよつとした傷にしか効かないんだが、ごらんのとおりすぐに治してくれるんだよ。こんな商売していると小さな火傷が多くてねえ。重宝するんだね、これが」

「どこで手にいれられますか」

ぺらぺら自慢気に話す店主に向け、ペレウスはつい言い出していた。たとえ小さな傷しか治せないにしろ、武芸や馬術の修練で生傷の絶えない身としてはこれは垂涎の品である。

店主は「なんだ、欲しいのかい」と眉を上げた。

「いまとなつちや簡単に手には入らないよ。」

これはダマスカス公領産だよ。向こうじゃ魔石を加工してこういうものを作る技術が発達しているみたいだね。この治癒石は効果が小さい失敗作で、通常の値の十分の一以下で売り払われたそうだけど、それでもかなりのお値段なんだよ。

もつとも私は、この使い方を知らないでこねくり回していたお大尽からただ同然で譲り受けたんだけどね。いや、ついてるよ。ダマスカス公領に行ったことがあるから使い方を知ってたのさ。

欲しいとしたら気の毒だね。皮剥ぎ公の軍がダマスカス公領へと通じる西への道を塞いじやったから、あっちに行くこともできないしこうした貴重品が入ってくることももうないんだ」

店主はおしゃべりな男のようだった。察するに自分がうまくやったことを自慢したくてたまらないらしい。ペレウスは少し考えてから言った。

「売るとしたらいくらで売ります？」

突如として店主は黙りこんだ。かれはいささか警戒したようにペレウスの持つ治癒石に手を伸ばして取り戻した。

「売らないよ」

「そうですよね。すみません」

「まあ、待ちなよ。売らないけどね……そうだな、ディーナール金貨五枚。はは、そんな大金払えないだろ」

店主に言われ、ペレウスは固唾を呑んだ。

（金貨一枚でディルハム銀貨十四枚分。金貨五枚なら銀貨で七十枚か）

今日のペレウスは無一文ではなかった。ずしりと重い大金の袋が懷中にある。

フアリザードに誘われて出てきたときに、ユルドウズに銀貨の入った袋を渡されていた。『ホジャたち馬鹿どもが、あんたが豎琴で稼いだ金を勝手に酒代に使ったからね。残っていたお金に加えて弁償してある。ちよつとは嬢ちゃんに甲斐性を見せなくちゃだろっ』

そう白羊族の族長は言ったのである。袋の中の銀貨は、六十一枚だった。ペレウスは思い切って切り出した。

「まけてくれませんか？」銀貨六十枚くらいにと言おうとして、

「銀貨四十枚くらいに」

「帰んな」店主が表情を消して冷淡な声を出す。あわててペレウスは食い下がった。

「銀貨五十五枚！ もとはただなんでしょう」

「私がただで手に入れたからって、あんたにまけてやる義理はないね。だが、銀貨六十五枚なら考えてやってもいいね」

「銀貨五十八枚でどうです」熱心に交渉するペレウスを、横でファリザードが目をぱちくりさせて呆れ顔で見ている。

「銀貨六十二枚。これ以上は一枚も……」

「一枚まけてください！」

鼻息の荒い店主に拝みこむようにしてペレウスは値切った。

.....

「宝石商の言うところでは、安いものではないが、いいところ金貨二枚だそうぞぞ。」

値切り交渉は市場で買い物するときの醍醐味だから止めなかったけど……値切ったつもりが見事にぼったくられてて残念だったな、ペレウス」

ファリザードがにやにやしている。彼女は市場の一角にある宝石商の店舗に立ち寄って、効果の弱い治癒石の値段を聞いてきたのである。

ペレウスはうなり、腹立ちまぎれに手にした羊尾に食いついた。かなり脂っこい味だったが、若い胃袋にとっては気になるほどのものではなく、なによりも美味だった。ペロりと平らげてしまい、道端の犬に残った骨を投げてやる。親指についた脂を舐めながらペレウスは考えた。

(この国に来て二年か。こっちの料理にも慣れちゃったな)

極端な珍味だとさすがに手を出しづらいが、基本的な味付けには順応してしまっていた。言葉もいつしか、生粋のファールス人に比べても遜色ないまでに熟達している。ひっかけられたとはいえ、値切り交渉ができるくらいなのだから。

まったく、来たばかりのころと比べると隔世の感があった。

あのころは、隣にいる少女を含め、この帝国のほとんど全てが嫌いだったのだ。

「あの屋台は表通りの肉料理屋が親戚を雇ってやらせてるそうだ。本店では仔羊の骨付き肉料理が有名だそうだから、また今度はユルドウズたちも誘って食べに行こう」

楽しげに語っているファリザードに、ペレウスは呼びかけた。

「ちょっと待って、ファリザード」

「なんだ、どうした？」

「これ、受け取ってほしいんだけど」

治癒石を差し出すと、ファリザードがぼかんと口をあけた。

「……おまえが？ わたしに？ どうして？」

「どうしてって……贈りたいからだよ、それでいいだろ」慣れないことをする羞恥と緊張で声に力みが入ってしまう。

最初は自分が治癒石を欲しかったのだが、ペレウスは途中から、これをファリザードへの贈り物にしようと思っていたのだった。最初、それはいい思いつきに感じられた。贈るにしても並みの宝石などであれば、たとえ金貨百枚分のもだろうとファリザードは不自由しない。イスファハーン公家の所有する動産は、手形や宝石という形でテヘラーンにも保管されているからだ。入手困難となつたこの治癒石のような魔具は、希少性という点でこれらの宝石より勝るかもしれない。そうペレウスは考えたのである。

『ちよつとは嬢ちゃんに甲斐性を見せなくちゃだろう』　というウルドゥズの声が頭に残っており、ペレウスは有り金全てをはたいたのだった。

だが、いま見てみれば、黒ずんだ治癒石はさほど魅力的なものにも思えなかった。

（失敗したかな）

息をつめたペレウスの前で、ファリザードの表情がゆっくり笑みへとほころんでいった。

……

……

治癒石には穴が開いており、紐か鎖を通せるようになっていた。

無粋極まりないとわかっていてもそんなことを言ってしまう。ちやちなおもちゃでも喜んでくれたなら嬉しいと割り切れるものではない。

が、顔をあげたファリザードは、首をふってきっぱり言った。

「そんなの気に病むことじゃない。おまえはもともと使節でイスファーン公家の客分だ。わたしは使節の響応役を父上から任されていたんだから、わたしが公家の財産でペレウスの生活を保障するのは当然なんだ。

……対してこれは、おまえが自分で稼いだ金で個人的に買ってくれたものだ。だから、わたしのほうが多く受け取ってる」

台詞の後半は温かい幸福感の響く声だった。ペレウスは先刻にも増して甘酸っぱい困惑がつのるのを感じた。「……そう」としか言えない。

戸惑いに似た疑問を抱く。かれとてまんざら木石ではなく、ファリザードに深い好意を寄せられていることは今ではよくわかっているのだが、

ぼくはこの先、この子とどう接したらいいんだろう。

ファリザードの想いを垣間見せられるたびに戸惑ってしまう。それがペレウスの悩みだった。

初めて彼女の恋心に気づかされたとき、ペレウスは約束していた結婚については「ちゃんとときに気持ちに向いてから、こっちから申しこむ」と。

そのことは、帝国がひっくりかえるような事態になったためにうやむやになってしまっているが、律儀な性さがのペレウスは忘れたわけではなかった。

でも、ファリザードが示してくれるほどの好意をばくはまだ彼女に抱いていない。こんなはつきり定まらない心境で、うかつに応えることはできない。

なまじ深い想いに接してしまっているだけに、二の足を踏んでしまう。ふとしたはずみにファリザードが垣間見せるそれは、ペレウスがいまだ持ったことのないものだった。

とはいえむろん、彼女を嫌っているということはありません。

いまや内戦状態となったこの国にとどまるのも、ひとつには彼女の抱えているであろう苦悩を少しでも減らしたいからだ。愛着、友情、そう呼ばれる何らかの情をファリザードに対して抱いているのは確かだった。

けれどそこに、ファリザードがかれに向けてくる想いと同じ種類の熱さはない。依然としてかれは、胸を焦がすほどの情熱を彼女に感じてはいないのだ。こんな息苦しくなりそうなほどの慕情は……

(ゾバイダに対してはどうだったろう)

イスファハーン公の館にいた奴隷娘ゾバイダと接していたときにかつて抱いた、漠然とした高揚感を思い返してみる。

(でも、あれも違うような……)

あれはかれの初恋ではあった。だが、いわゆる「ジンの愛」に比べれば取るに足らない、ほのかな憧れにすぎなかった。今にしてわかることだが。

「言っとくけどペレウス、だからといってもう街中の豎琴弾きをさせる気はないぞ」かれの沈思をどう勘違いしたのか、ファリザード

がかれの袖をちよつとつかんで拗ねた表情で口を尖らせる。「どうせ奏でるならアーガー卿の館に来て、わたしのところでやればいいだろう。そうしたら、わたしがお代を払うから」

それをやると「一層ひも化が進んだ」と白羊族にからかいの種を提供すること確実である。まつぴらごめんだった。ペレウスは眉を寄せて口の両端を下向きにひんまげた。

「天然で言ってるのか、それ」

「て、天然って、おまえには言われたくないぞ！ この朴念仁！」

真つ赤になったファリザードがぽかぽかと肩を殴ってくる。速度があり手数が多いため防ごうとしても防ぎ切れないが、拳は軽く大して痛痒はない。そうなるとじゃれあいにはかならない。

彼女の拳をつかもうと試みながらも、ペレウスは思考に立ち戻った。どうも自分とファリザードの会話は完全には噛み合わないが、

(……この子の相手をしていて、居心地は悪くない。それだけは確かだ)

妹がいたらこんな感じだろうかとか、かつてファリザードを見て思ったことがある。あれもいまと似た感じでじゃれているときだった。ファリザードに感じている愛しさは、肉親の情に近いのではないだろうか。

後日談。

市場の屋台とつながりがあるという、仔羊骨付き肉が名物の料理

屋。

久々にクタルムシユおよびユルドウズの夫婦を誘い、同席した昼食の場だった。

「……家内がすまないね、なんだか」

「いえ……」

呆れと嘆きを声に五分ずつこめて、ペレウスとクタルムシユは食卓の上につつむいている。かれらの嘆息の理由は、横で食卓に身を乗り出して争う女組だった。

「族長の身分で意地汚くがつつくのはどうかと思うぞ、ユルドウズ。ここは若い者に譲るべきだろう。わたしに譲れ」

「老いてなお健啖であるところを見せないと族長の威厳を保てないからね。嬢ちゃんこそ育ちを疑いたくなる行為はつつしんで年長者に譲りな」

ファリザードが両手で、ユルドウズが片手でそれぞれ肉切りナイフを最後の骨付き肉に突きたて、自分の前に確保しようとしているのだった。膠着状態に陥りながら、相手の手を引かせようと舌戦中である。

それはどちらのナイフが先に肉に食い込んだかの主張から始まり、それがほぼ同時だったと双方がしぶしぶ認めたとはいえ、「先に肉を取ろうと動いたのはあたしだよ。あんたがナイフふりかざしたのはその後じゃないか」「わたしは心の片隅でこの肉を常に気にかけていたのだ。それゆえ即応して後の先をとることが可能だった」「だからナイフ突き立てたのは同時だろ、後の先とれてないだろ。だいたいあんたは坊やと出かけたときにこの系統の料理を食ったんだろ。」

じゃあもういいだろうが、手をひきな欲深娘」「ボケたかユルドウス。以前の肉は以前の肉、今日の肉は今日の肉だ」と、一步も譲らず泥沼の争いを続けている。同席しているのが恥ずかしい。

「嬢ちゃんは果物が好きなんじゃなかったのかい。この肉はあたしに渡し、その皿の干しブドウでも頬袋に詰め込んでな」

「果物やお菓子はたしかに好物だが、わたしは乳製品も肉も魚もまんべんなく好きだつ。偏食という欠点はわたしに存在しない。ゲテモノ料理でないかぎりどんな食品も愛する度量の広さがあるぞ」

「とことん食い意地張ってるだけだろうが。肉一切れにそこまでこだわるとは度量の狭いこつて」

ふたりともだよと突っ込みたくなってくるのは下手に会話に耳を傾けてしまうからだろう。ペレウスはクタラムシユと目線で示し合わせ、女性陣からそつと自分たちの椅子を遠ざけて卓の端に座った。食後の白湯を運んできた店主の笑顔が微妙にひきつっているが、その程度でもう心は乱さない。男二人で静かに白湯をすすする。

（ファリザードがたまに大人びて見えるのは、やっぱりなにかの気の迷いだろうな）

ペレウスがおかしな安堵を覚えたときだった。

「……………ん？」

醜い争い真つ最中のユルドウスが口論を中断し、片眉をあげていぶかしげにした。

「嬢ちゃん、その胸……」

「え、な、なんだっ」

町娘の格好をしたファリザードはこの日、ペレウスの贈った首飾りをつけてきていた。治癒石の揺れる胸元をまじまじ見られた少女が動揺の面持ちになる。だが肉は離さない。

ユルドウズが邪悪な笑みを浮かべた。

「……ふーん。ちょっと、坊や。嬢ちゃんの胸のそこだけど」

ペレウスはとうに覚悟を決めていた。うるたえればからかわれるだけだ。なるべく心を波立たせずにさらっと認める。

「ええ、その飾りはぼくが贈ったものですが、それがどうかしたんですか」

「いいから見てみな。ほら、気づかないかい」

言われてペレウスはファリザードの胸元に視線をそそいだ。治癒石に特に変わったところは見られない。

「別段、何もありませんが……」

「飾りじゃなくてその下。飾りののっかってるとこ。ほら、明らかにおっぱいが大きくなってる」

「ぎゃ　っ……」

ナイフを放り出して両腕で胸を隠したファリザードの叫び声が響

く。硬直したペレウスは白湯を手にごぼして「熱っ！」と悲鳴をあげた。

その隙に素早く肉を引き寄せてユルドウズががつがつ貪りだす。

「ユルドウズ……」面を下に向け、いたたまれなさに手で目元を覆ったのはクタルムシユである。

「さっ、ささ、最悪だこの女！」背を丸めて胸を抱くフアリザードが真っ赤になって喚いた。勝ち取った肉にかぶりつくユルドウズが悠々うそぶく。

「けっこうけっこう、食欲旺盛なだけあって順調に大人の体に育っているようじゃないか。いかんせんおつむのほうがてんでガキだけど」

「なっ、なっ、なにをぬけぬけとっ、それはユルドウズのことだろうが！これが部族を背負う族長のやることか!？」

「動揺するほうが悪いのさ。これ見よがしな露出の多い服装を好むジン族のくせに、なにをいまさら隠してんだい」

「ふざけるな死ね、そういう衣装はジンの伝統だから着てるんであって、見ると喧伝してるわけじゃない！知ってるだろうが！だいたいペレウスに凝視させといて動揺するなとか無茶言っな！」

「店内の人に凝視されているよ。この話題いいかげんにしてくれなйдらうか」首筋に汗を伝わらせつつペレウスはさすがに苦言を呈した。と、かれを見たフアリザードがいよいよ胸を抱いて赤面を強める。

「待って、ペレウス、こっちを見ないでくれ」

ぼくがどこを見ると思ってるんだと言いそうになったが、胸うんぬんの話に巻き込まれたくない。口を出さないほうが得策であろう。ペレウスは不機嫌に口角をぴくつかせつつ、顔ごと目をそむける。しかし静かな時間は戻ってこない。ユルドウズのファリザードおちよくりが止まないからである。

「おうおう、ちょっとふくらんだくらいで過敏なこって。不格好なふくらみ方なのかい」

「そんなわけあるかッ」

「でも恥ずかしくて坊やにはとても見せられないんだろ。自分の体に自信がないなんて、美に優れる種族と自分たちで豪語するジンには珍しいねえ」

「だ、誰が恥ずかしいなどと言った！ これは不意打ちだからうるたえただけでっ……！」

「じゃあそろそろ心の覚悟くらいできただろ。背を丸めて隠すのをやめて堂々としてればいいじゃないか。おーい坊や、いいからこっち向いて育ち具合を検分してやんな」

「やめ、ペレウス……む、むっ……」制止しかけたファリザードが呻き、涙目ながら開き直って服に包まれた胸を張った。「いいだろう、たしかにこのわたしの体に隠さねばならない箇所など本来ない！ 検分でも観察でもしたければするがいい！」

「お断りします」無表情になったペレウスはつい反射的に答えてしまった。

「え！？ どういうことだその言い方！？ わたしの胸なんて見る価値もないということか！？ たしかにまだ小さいけどひどい！」

「き、きみはたまに絶句するほどアホな方向へ話をかつ飛ばすな！ ユルドウズさんにのせられるのはやめろ、それと二度目の懇願だがこの話題いいかげんにしてくれないだろうか！」

ペレウスは我慢しきれず突っ込みを入れた。

クタルムシユが静かに移動してユルドウズの横に戻る。かれはけらけら笑いつばなしの妻にぼそりとつぶやいた。

「骨付き肉をもう一皿頼めば良かっただけでは……？」

帝国地図（話ではありません）

以前に要望があった地図を作りましたのでとりあえず載せておきます。

縮尺がちよつと大きすぎるうえにいろいろ大雑把ですが、もう少し範囲を絞った地図はまた作るつもりです。

同じく要望の寄せられている設定集や人物紹介はそのうちに。

お絵かき用フリーソフトをいじること数時間。

地図を一回クリックでみてみんへ飛びます。みてみんなからさらにクリックすると地図がちよつと大きくなります。

> i 3 2 1 2 7 — 3 0 0 5 <

いっしょうけんめつくだよ！ でもどうしようもなく雑な出来だよ！

………そのうちもうちよつとマシな出来のものを造るか、いっその人に頼んでそれに差し替えたいところです。

リアルな地図を描ける職人がどこかにいたら正式に依頼を考えるのに、あいにく思い当たらない。

話を待っていてくれた人、肩透かしさせてすみません。さっさと最新話書いてきます。

おまけ・現代イラン図。(フリー素材)

> i 3 2 1 2 8 | 3 0 0 5 ^

近寄ったネズミが素早く踏み潰された。

それまで身動きひとつせず黙坐していたジオルジロスは、ひざを立てて獣をぐりぐりと踏み潰し、足の下で血と肉に変えながら牢内の闇に呼びかける。

「六つの腐った卵を産む神よ」

テヘラーンの地下牢は凍えんばかりに寒い。

息を吸えば肺に沁みるような冷気のなかで、暗黒の神の司祭は唱える。

「ザリチユ “ 渴欲 ” …… タルウイ “ 熱 ” …… サルワ “ 無秩序 ” 、 ドウルジユ “ 虚偽 ” 、 タローマテイ “ 背信 ” 。 そしてわが守護霊たる悪思^{アカ・マナフ}。」

暗黒の六霊を従える方、万象を呪う闇を司る方よ」

岩の隙間から水が染み出る地下牢の中は、冷湿の悪環境だ。いかに生命力の高いジン族といえども病を得てしまうほどに過酷である。だからこそかれはここに閉じ込められたのである。ファリザードたちの心に、かれに対する哀れみはなかった。

にもかかわらず、閉じ込められてすでに一月近くを経過しながら、ジオルジロスに衰弱した様子は微塵もなかった。

「アンラ・マンユ アチシュタ・マナフ “ 最悪思 ” よ、御身のためにここに供物を捧げる。」

御呪あまねく腐らせ給え」

ジオルジロスの革靴の下で、踏み潰された小動物の屍が突如とし

て融けた。

融けた血肉は水たまりのように薄く広がり、毒煙のごとき猛烈な腐臭をたてる。

完全な闇のなかのその光景は、ただ奇怪きわまるというだけではなかった。急速に腐る屍からは、さざ波のようにゆっくり力が広がってゆく。牢番はたまたまこの時不在であつたが、もしもこの場にいたとすれば、得体の知れないゆらめきを精神に直接感じたであろう。その無形の波は、岩壁という物理的な障壁を無視して外の世界へと突き抜けていったのである。

満足気に唇を舐め、ジオルジロスはひとりごちた。

「狼煙のろしとしてはまずまずか」

衛兵を兼ね、ルカイヤはファリザードとアーガー卿の後ろにひっそり立っていた。

アーガー卿の館の大広間のじゅうたんには、狩猟の風景が文様となつて入っている。その上で、クッションにあぐらをかいて雁首をそろえたのは、武張った軍服や貴人の服に身を包んだジンたちであつた。

北部イスファハーン公領に領地を持つ諸侯たちである。

かれらの前には大皿小皿に入った山海の珍味が並べられている。「海」の食材といつても、北部の巨大な湖であるハザール海カスピのものが主であるが。

……しかしかれらは皿に手をつけようとしなかつた。重苦しい顔を見交わして隣の者と暗い声でささやき交わすのみである。

それでもかれら北部諸侯は出席するだけましであつたらう。都市

カーシャーンや都市バードなど南部よりの領主は、誰一人この会合の呼びかけに応じず顔を見せていない。

居並ぶジンの貴族たちへと、麗しく着飾った少女の声が上座から響いた。

「呼びかけに伝えてくれて感謝する」

諸侯たちはいつせいに上座のファリザードに視線を注いだ。といても、全員ではない。

髪はぼさぼさ、服も食べこぼしの染みのついたジンがいる。かれは周囲の諸侯と違って不安の色を見せず、ファリザードを見てもいなかった。すでに泥酔して後ろにひっくり返り、いびきをかいているからであったが。

ファリザードが可能なかぎりその男を気にしないように努めているのが、ルカイヤにはわかった。

「まずはゆるりと杯を交わして久闊を叙し、その後に議題に入ろう」
手にしていたざくろのジュースの入った杯をファリザードがかかげたが、

「そのバハラーム卿はすでに杯を重ねておりますがね。時間がたつほどそいつの言うことは支離滅裂になりますから、そいつか議題のどちらかをさっさと片付けたほうがよいでしょう、ファリザード様」

酔っ払った男の向かいに座ったひとりのジンが、あごでかれを示し、冷ややかな笑みを片頬に刻んだ。

ファリザードはぐつと言葉をこらえたようである。彼女が何か言

いたくなるのも、何を言うべきか戸惑うのも無理はなかった。

なぜとって、発言したジンの前では、歳をとった雄鶏が皿に盛られた焼き飯をつついている。

困惑するファリザードに代わり、その左手側の席を占めるアーガ―卿が咳払いした。場をもたせる発言をしようとしたのだろうが、はずみで咳が止まらなくなり、うつむいてごほごほと苦しげに咳き込む。あわててルカイヤが合図すると給仕がすつとんできて、蜂蜜湯で解いた薬をかれに飲ませた。アーガ―卿はつい先日まで反乱を起こしたカースィムに幽閉され、拷問を受けていた身であり、まだ本復していないのだった。

アーガ―卿に場の視線が集まっている間に、

「……ルカイヤ、おい、ルカイヤ」

すぐ後ろに控えていたルカイヤに向け、ファリザードが周囲に聞こえない小声をかけてきた。

片膝についてルカイヤが少女に耳を寄せると、ファリザードは「なんだ、あの変な奴らは」と聞いてきた。

北部の辺境の諸侯について年若いファリザードが知らないのは無理もない。ルカイヤは彼女にささやいて教える。

「さつき発言したのは、トウグリル卿。北の蛮国グルジア王国イムレッツティ候国と境を接する北辺の領主だ。

“雄鶏公”と呼ばれている男だ」

「それはいいあだ名だな、一目で由来がわかる。で、由来であろうあの雄鶏はなんだ。こんなところに連れてきているのはただの酔狂

か」

「いや、誓いの産物だ。

トウグリル卿は数年前、同格の近隣諸侯との抗争で、部下たちを前に約束した。『唯一神の両眼にかけて誓う。この戦いで大功を立てた者をこの先、わが食卓に招き、われと同じ物を口にし、同じ話を耳にする栄誉を与える』と」

執拗な敵の数次に渡る攻撃を迎え撃ち、完全にそれを打ち払ったと信じたトウグリルの軍は、そこで不覚をとった。激戦続きで上から下まで軍は疲れはてており、夜の見張りに立つはずの兵までが気絶するように寝入ってしまったのである。全軍撤退したかに見えた敵は、夜討ちのための一隊を付近に潜ませており、陣が寝静まったところに猛攻をしかけてきた。

ところが、たまたま、トウグリル軍が糧食として農家から徴収していた雄鶏の一羽が、まれに夜鳴くことのある変わり種だったのだ。夜討ちされる寸前にその鶏鳴によって兵の多くが目覚めており、応戦がぎりぎり間に合ってトウグリルは命を拾ったのである。

公領北部では知らぬ者のいないそうした事情をルカイヤは要約して話し、

「その後、恥じ入った部下たち含めて、『最大の功をあげた者は鶏である』と意見が一致し、誓いは守らねばということとトウグリル卿は以降、かの雄鶏を食卓に必ず伴うそうだ」

事情を聞いたファリザードがいわく言いがたい表情となった。彼女はゆっくりと首をめぐらせ、今度は卓に上体をつつぷしたジンに目を止めた。

「それで、あっちの酔いつぶれている汚い格好の男は？」

「“断水公”ことバハラーム卿。サマルカンド公領と境を接する北東辺の都市の領主。

実はかれがかつてトウグリル卿と干戈を交えたジンだ。

『日輪と月輪にかけて誓う。あん畜生に負ければこのバハラーム、二度と真水を飲まぬわ』と言ったものの敗北を喫してしまい、それから水の代わりに酒を飲むようになったそうだ」

「……その二人以上の馬鹿はさすがにこの場にはいないだろうな？」

半目になってつぶやいたファリザードを、ルカイヤはたしなめる。

「ファリザード様、うかつなことを言うな。雄鶏公と断水公はどちらもイスファハーン公領屈指の戦巧者だ。

二人ともがあなたのお父上に辺境の防衛を任されたのは偶然ではないし、だからこそ私戦を起こした罪も、バハラーム卿の領地がハザール海をへだてた東の対岸に移されるだけで済んだのだ」

「それにしたつて……雄鶏を旗印にするくらいで満足しておけばいいだろ。酔っ払つての軍議参加はもつとたちが悪い」

ぶつくさ毒づくファリザードを、ルカイヤは眉を寄せて見つめた。変わったジンということでは、人族好みのあなたも同様だぞ

その言葉は、腹の底にしまい込んだ。

(この子はあの人族の小僧に本気だ。たしなめても効果はあるまい)

一時の気の迷いなどということとはジンの恋には存在しないのだ。

ルカイヤは色香をたたえた厚めの唇をきつく噛み締めた。

人知れず早いうちに、この問題にはすっぱりとけりをつけてしま

わなければならぬ。たとえフアリザードに数十年ほど泣かれることになったとしても、どうにかして諦めさせなければならぬのだ。

（小僧を説くほうが易しいのは間違いないだろう。理を説いても聞かねば、脅すか餌で釣るか）

ルカイヤの思案のかたわら、ようやく咳をおさめたアーガー卿が、まだ苦しげながら胸をさすって語りだした。

「では軍議は後にするとしても、食事前にひとまず情報を共有しておこう。バハラーム卿を起こしてくれ」

人族の老人のごとくやつれた顔ではあるが、面持ちは厳しく声には威がそなわり、北部第一の長者の名に恥じない。

その声をもって、かれは告げた。

「まず諸將の奉公に感謝する。おのおのがたがテヘラーン近郊へ率いてきた兵は、合わせて四万に達しよう。」

次にこのことを伝える。ダマスカス公家が、ヘラス諸都市との休戦を無期限延期し、さらには急ぎよ都市アレツポの十字軍とも休戦交渉をとりまとめたという」

一座にどよめきが走った。ダマスカス公家は十字軍に国土を荒らされてきた。ヘラスはともかく、十字軍にかれらが妥協するなどという話は、だれにとっても信じがたい成り行きであったのだ。

「十字軍との休戦によって、背後や横腹をおびやかされることなくダマスカス公家軍はその矛先を東に向けることができるようになる。また、“盾の峠”を通過するべく、東進はすぐにも始まるだろう。もとよりダマスカス公家は戦争状態にあり、大軍を動かす用意は整つ

ていたのだ。

ダマスカス公家軍は、練度ではさすがにホラーサーン軍に及ぶまいが、それでも長年の対ヘラス・対十字軍の戦争に鍛え上げられた帝国二位の軍。同数でも必ず負けるとは限らぬ。まして今この時ダマスカス公家が全力をあげれば、動員できる総兵力は二十万。これが上帝ダーマード様ご自身の保持する七万の近衛軍と合わされば、兵数において 剣 の十倍近くとなる」

アーガー卿の報告が続くほど、諸侯の瞳に宿った輝きは明るさを増していった。上帝の実家であり、帝国二位の強国であるダマスカス公領がついに起ったという知らせは、これ以上ない朗報だ。

しかし、諸侯の面には喜色に混じって微量の不満も混じる。だれかが低い声を出した。

「ヴァンダル人の十字軍ども、それにヘラス人どもめ、処刑執行が棚上げとなって歓喜に踊り狂っていることだろうよ。

まったく、十年以上も侵略者と戦ってきて、ようやく完勝を目前にしながらこちらが戦場を放り捨てることになるとはな」

アーガー卿が「やむを得まい」とそのジンに伝える。

「最終的な敵の危険度が比較にならぬ。

十字軍がたとえ戦場の勝利を幾度あげようと、かの蛮族どもは大を荒らして民心を離すだけだ。公領の一国を支配下に置く能力すらない。まして“盾の峠”を越えて帝国の東に入ってくる力は持ちえぬ。

だが 剣 は違う。十字軍の残虐さは規律なきがゆえであり、無道の賊がごとしの一言で片付けられるが、 剣 の軍の統制のとれた酷烈さは、恐怖による一種の秩序を築きあげてしまう。

もしもホラーサーン軍が竜骨山脈の東側を制圧し、帝国の五分の

三を手に入れれば、 剣 は力を養ってから必ず竜骨山脈をまたぎにかかる。ダマスカス公家のある帝国の西側も、やつの靴の下に踏みしめられることになるだろう」

しんと広間が静まり返る。アーガー卿は安心させるように言葉を継いだ。

「心配はいらぬ、 剣 に余裕を与えればそうなるというだけだ。いまのうちならば 剣 に勝てる。

バハラーム卿、おぬしの携えてきた知らせをこの場でもう一度語ってくれまいか」

「ああ……うん……おう……」

身を起こして酔眼をしばたいたいたバハラームは、さぞ酒臭かろうと思われるげつぷをひとつとして両隣の諸侯に眉をひそめさせたあと、物憂げに報告した。

「サマルカンド公家が大軍を動員しつつある。あの東方のくそつたれどもは対ホラーサーン公家戦に参加する旨を伝書鳩で伝えてきた。兵力十万は下るまい」

おお、と再度のどよめきに座が沸いた。

雄鶏公トウグリルが、旧敵の報告に目を細め、「ほつ」と洩らす。次にアーガー卿はかれに目を向けた。

「トウグリル卿、北方の蛮族どもの動きはどうかな。白羊族はこちらに協力する姿勢を示しておるが、その他の諸部族は今回の国内乱にいかなる動きを見せておるか」

「グルジア王家をはじめ、蛮族どもはひとまず静観のかまえですが、われらと 剣 とどちらかを選ばされれば、おそらくこちらに付くでしょう。あやつは帝国の周辺国にとってつねに災いそのものでしたから。」

ふむ……アーガー卿、あなたの言わんとすることはわかりました。剣 はたしかに、常識で考えればこの戦争に勝てますまい。敵が多すぎますから」

「然りだ、トウグリル卿。どれだけ強くともしよせん、現在のきやつに従える軍は三万のみだ。その兵数はこれよりじわじわと損耗していくだろう」

ここにいたって、だれもがアーガーの意を了解した。ルカイヤは目を閉じて思う。

(……おれの生まれるその前から、ずっと昔からホラーサーン公家は強かった。味方にすら恐怖と警戒を抱かせるほどに強すぎた)

バグダードがホラーサーンの方角をつねに注視してきたことは、帝国のだれも口にこそしないが薄々感づいていた。

現にホラーサーン軍が戦わされるのはつねに大陸の北方か東方から来る侵略者相手であった。もしも 剣 が西へ、つまり帝国中央部へ向けて十万に迫る大軍を進めるような真似をすれば、即座にそれを止めるべく上帝による処置がとられただろう。

剣 が大軍を帝都へ向けて西進させた数少ない例外は、背信帝との戦いときである。それを除けば、ヘラスへ攻めいった“第二次ファールス戦役”とヘラス側でいわれる遠い昔の戦いにおいてすら、ホラーサーン軍は参陣を断られたのだ。そうでなければヘラスはとうに帝国の一地方と化していたであろう。

（だから 剣 は謀反を起こすと決意しても、絞りに絞った三万の精兵しか自領から連れ出さなかったのだな）

そのうえ、繰り出された三万は、最初は兵力を細かく分散して進軍していた。そうまでして自らの軍を弱く見せたがゆえに、誰もが油断させられたのだ。あの兵数にあの行軍隊形なら万一にも滅多なことは起こすまい、と。

そのせいでこちらは見事に奇襲を食らった形になったが……

（ホラーサーンの皮剥ぎ公よ、その苦肉の策の代償は高くついたぞ。あなたは寡兵で敵地深くに孤立することになった）

アーガー卿が二度三度と咳きこみ、「まとめさせていただく」と喘鳴混じりの声をしぼりだした。

「ダマスカス公家がついに起った。サマルカンド公家もまもなくだ。ヒジャーズ公家もこのまま沈黙を続けはするまい。 剣 は上帝のおわします帝都バグダートの三重の城壁を攻略しよう」と猛攻をくわえているが、しばらくは攻めあぐねるだろう。奴らは大がかりな攻城用の兵器を持ってきていないのだからな。

われらの側は参戦する諸侯や部族によってどんどん兵力を増すだろう。対して 剣 の軍は、少しずつであつても精鋭たちを失って弱まってゆく。いや、四公家連合軍数十万対ホラーサーン公家軍三万の戦いであれば、正面決戦でも負けるとは思えぬ。早ければ三ヶ月以内に、われわれは 剣 の首を叩き落としていることだろう。われらイスファハーン公家は約束された勝利にどう乗りに行くべきか？ 諸侯諸將よ、それがわれらの議題だ。そのあとは、ファリザード様の婚礼の話でもしようではないか」

アーガー卿が口にした景気づけの台詞の最後で、ファリザードが

ぴくっと思じろぎしたのをルカイヤは見落とさなかった。

2・18・風向きくるくる(前書き)

ペレウス街中に花の香を嗅ぐこと

2 - 18 ・ 風向きくるくる

勝利をアーガー卿に確約されて、諸侯は晴れ晴れとした笑みを交わし、口々に言い合いはじめた。「は、は、勝てるではないか。これまで浮き足立っていた自分が恥ずかしいわ」「まったく、われらは何を過度に案じていたのでしょうか。すでにわかっていたことですのに。ホラーサーン公はいまや反逆の徒であり、自領をのぞく帝国全土を敵に回しているとすれば、自滅は必至であろうと」「そうよ、われらイスファーン公家は他家と協調して進めば良いのだ。すでに必勝の態勢が出来上がっており」

(目に見えて雰囲気は緩んだな)

ルカイヤも肩の力を抜いた。怯えていたくせに調子のいいことだと諸侯を見下げるつもりはない。

かれらは兵を動かして馳せ参じてくれたのである。それはとりもなおさず以降 剣 の直接の怒りを買うということであり、ここに集った者たちはその圧迫にこれまで耐えてきたのだ。精神の重荷が取り払われた反動で浮かれても無理はなかった。

ルカイヤがもう少しよく見れば、喜悦をかけらも見せていない者たちもいることに気がついただろう。

雄鷄公トウグリルは内心をはかりがたい無表情であり、断水公バハラームはあからさまな嘲笑をうつむかせた面にのぞかせていた。そしてファリザードは押し黙っており……

と、雄鷄公が肩の力をふつと抜いた。

「……では無理をすることもありませんまい。他家の力をたのむことにしましょう。腰をすえ、機を待ち、そうですね、西でサマルカン

ド公家軍が動き出してから、歩調を合わせてわれらの軍を南下させましょう」

「それが適当だろうな」「うむ。先走る必要もないことだ」と、諸侯の賛意を示す声が続々上がる。うなずいて雄鷄公は「それを待つ間、ひとつ提案したい」と続けた。

「提案はこうです。集まった兵力を無為に過ごさせないために、軍を北部の治安回復に投入するべきです。」

聞けばこの前までここテヘランを騒がしたカースイムの造反には、アルボルズ山脈をねぐらとする山賊どもが傭兵として手を貸したとのこと。

山地を攻めてみませんか」

「……山地を？」とファリザードが顔をあげ、はつきりと懐疑的な声を出した。ルカイヤは少女に視線を当て、そして思い出す。

（そういえばファリザード様は、軍が集まりしだい急いで南下するという方針であったな）

雄鷄公は直視してくるファリザードのほうを向き、流ちょうに説明しはじめた。

「山地を攻める意義は三つあります。第一に山賊どもがカースイムに協力したことへの罰。」

第二に、山地にはイルバルスに追い回されるエラム様が隠れておられる。お救い申し上げねばなりません。

第三にですが、昨今、許可を受けておらぬ奴隷商人が北部に跋扈しているのですよ。困窮した民の身を安く買い叩くだけでも違法ですが、その上にかどわかしまで行うとか。

山の無頼漢どもははたして一連の拉致事件に無関係でしょうか？」

雄鷄公の提案に、ほかの北部諸侯らもこれまた雷同する。

「その問題があつた。わが領地でも女子供がつぎつぎ行方不明になつておる」

「世相が乱れておる昨今、そのような賊が増えてもおかしくはない」「おかしくはないが、放置しておけるかという話が別だな。トゥグリル卿の言やよし、軍の引き締めをかねて軽く山賊の掃討におもむいてみるか。なに、拉致とは無関係でも、本物の違法奴隷商どもへの示威になろう」

ルカイヤは（これは雲行きが怪しいのではないかと危ぶみ始めた。ファリザードは困り気味のしかめっ面になりはじめている。

雄鷄公の誘導に諸侯はやすやすと乗った。かれが指摘した治安の悪化は、この場のおのおのが元から頭を悩ませていた事柄だったのである。

戦略会議はひとつの結論に傾きつつあつた。“集めた軍をもつて北部に留まり、一帯の治安を回復しながら他家の参戦を待つ”と。場はすでに方針は決まつたといわんばかりの雰囲気である。

その証拠に、諸侯のひとりがふとしんみりした口調で言った。

「一息つけますな……しかしまあ、勝利確定と気付かされたあとで考えてみれば、 剣 も敵の首魁ながら哀れなもの。一公領の大君主でありながら、命と帝国を賭した戦いに臨むときに三万程度の兵力しか連れてこれなかつたとは。

やれやれ、そのことを思えば、他の四公家の 剣 への遇し方が不当であつたというホラーサーン公家の非難は一理あるかもしれま

せぬ。剣の力を疎んじ、警戒し、抑えつけようとしすぎた面があったやも。あれは誇り高きジンゆえに、不快を感じても無理はない」

それもまた緊張の糸が切れた直後がゆえの台詞であつたらう。

しかしさすがに軽率であつた。すぐに別の諸侯が「何を言う。野心に満ちた獣を警戒するは当然であらう」とたしなめの声をあげた。「実際にその危惧が正しかったことはすでに明らかではないか。むしろ警戒が足りなかつたがために貪欲な牙をして喰らいつかれたのだ、哀れみなど無用よ」

「もちろん謀反人に哀れみをかけるつもりはないが、しかし一片の同情の余地があると……」

反論しかけた諸侯の声は、横合いからの大声の嘲弄に粉碎された。

「剣に同情だと。貴様は阿呆か」

場から言葉がかき消えた。叫んだ断水公バハラムは酔眼で座を睥睨すると、瓶に入った強いナツメヤシ酒をあおった。「なんと申した、バハラム卿」と気色ばむ男をせせら笑い、かれはまたも言い放つ。

「兵数が少ないことで油断させ、剣は奇襲によつて存分に戦果を拡大した。未来は知らず現在われらは負けているのだぞ。連敗している側が連勝中の敵に同情だと、こっけいすぎて涙すら出るわ。

「だいたい、あのホラーサーン軍三万は……」

「先鋒だ、おそろくは」

そこで視線を引きとる声をあげたのは、ファリザードであった。強い光を瞳に宿した少女がすつくと立ち上がると、羊毛の肩掛けがぱさりと足元に落ちた。

「諸侯よ、考えてみてほしい。イスファーン公領をぶち抜くように横断し、恐怖を刻みつけていったあの三万が、攪乱かくらんの役目を果たす先鋒だったとしたら？ 敵陣に最初に突入してかき乱すのが役目の騎馬隊のようなものだったとしたら？ 本隊があとから押し寄せ、穴だらけとなつたわが領地を完全に掌握にかかるとしたらどうなる？

思い出せ。十三年しか生きていないわたしですら知っている歴史を。伯父がこれまで六百年間、ただの一度たりとも敗北したことがない怪物だということ。剣はこのまま少ない手数で消耗戦に持ち込まれて、順当に削り殺されてくれるような生やさしい敵ではない。

伯父の手元の兵が三万しかいないからといって、それがすべてのホラーサーン軍ではない。後発の軍が来ないとは限らない。いいや、きつと来るだろう。

それを断じて合流させてはならないのだ。わたしたちは南下する
！
」

ルカイヤは見た。諸侯ごとくがファリザードの凜冽たる声に啞然とし、思わずといった様子で背筋を正すのを。断水公が目を丸くし、雄鶏公が誤算だったというように苦い顔をするのを。ルカイヤはそつとため息をつく。

（この子はもう、ただのいとけない子供とはいえなくなってしまう。すべて戦のせいだ）

ルカイヤは知っている。床に臥せっていたアーガー卿の代わりにファリザードが書記官たちを監督し、来援を乞う数十通もの手紙を

諸将や他公家にしたためさせたことを。北部諸侯軍の結集を待ちながら、「こつちも遅くては南下の機を逸してしまう」と焦れに焦れていたことを。

それは成長なのかもしれない。それでも変化をルカイヤは哀しく思うのだ。

乳母が胸を痛めるあいだにも少女の演説は広間に響きわたっている。

「他の公家の着陣を待つ？ いいや、わたしたちは常に伯父の先手をとるつもりで戦わねばならない。伯父の軍の後背地にされてしまったイスファハーン公領すべてを奪還し、ここにいない諸侯にわが家の威を示さねばならない。伯父の軍とホラーサーン本国を結ぶ線を断ち切り、かれをほんとうの意味で孤立させてしまわなければならない！」

何度でもいう、わたしたちは南下しなければならないのだ」

ファリザードが演説を終えたとき、断水公バハラームが吠えるように笑って賛成の声をあげた。

「はっは、あんた、やるべきことをよくわかっているではないか！ そつとも南下だ。おれはあんたについていくぞ、薔薇の姫よ。南の港を取り返さなきゃナツメヤシの酒が北部に入ってこない……いや、そんなことより。」

姫にひきかえ、さつきから聞いていればトゥグリル、おのれの知恵は雄鶏並みに退化したのか」

断水公は首をめぐらせて旧敵を痛罵しはじめる。

「なにが山地攻めだ？ 聞くに堪えぬたわごとを口走りおつて、アルボルズ山脈が天然の要害であることを知らぬわけでもあるまいに。」

一年攻めても山岳民を屈服させられるか怪しいものだ。エラム殿を救うなら山岳戦に慣れた部隊を動かすだけでよかるうが。奴隷商人の一扫？ そんなものしばらくうつつちゃっておけ、戦時には優先順位というものがある。

……おう、そうか読めたぞ。さてはわが軍を北部に足止めさせておこうとするのがおのれの目論見か。ホラーサーン軍がさぞ喜ばうて。

「いったい貴様は裏切り者か愚か者か、どっちなのだ？」

悪意たつぷりの皮肉に、雄鷄公は断水公を射抜くような目で見据えた。「酒毒が頭に回りつつある痴愚者に言われたくはないな。空気を読まぬ戦馬鹿が」軋るような声を出したのち、雄鷄公トウグリルは向き直り、うやうやしげに頭を下げた。黙ってかれを見つめるフアリザードへと。

「お許しください、フアリザード様。私はあなたを見誤っていたようです。戦略のことはなにもわからぬ小娘であろうと。それは間違이었다とたつたいま知りました……」

……しかし、こうなつたからにはあえて諫言させていただきます。他家の準備が整うまで、南下は思いとどまるべきです。そして、どうか理由の詳細はこの場でおたずねにならないでください」

諸侯たちが息を飲む。「はっ、話にならぬわ。薔薇姫、こいつをほんとうに謀反罪で牢にでも放り込んだほうがよくないか」吐き捨てたのは断水公だった。「これは時間との勝負だ。剣とてすぐにはバグダードは落とせまいが、その援軍がホラーサーンから来る危険があるとトウグリル、貴様も気づいていたのだからうが。薔薇姫のいうとおりすぐにも南下を行わねば、遅きに失する怖れがあるのだぞ。それを阻害して、しかも理由は尋ねるなだと！」

「待て、バハラーム卿。……トウグリル卿、貴殿の望みどおり後で話そう。」

だがよほどのことでないかぎり、即時南下は行わねばならない。それは譲らない。貴殿もわたしに協力してもらおう」

フアリザードの揺るぎない言葉によって、重みのある静寂が場を支配した。

だが、雰囲気は緊張はしてもふたたび暗くなることはなかった。雄鷄公に代わって場を主導する少女の、小さな姿と高い声とに満ちる英気が、諸侯の心に芯を入れたかのようにだった。

ややあつて、

「是非もなし、この小さな薔薇にはたしかに 剣 の血が入っているようだ。かくなれば微力を尽くして奉公いたします」

深々と嘆息した雄鷄公の肩に、羽ばたきとともに雄鷄が飛びのる。「罰なしでは甘すぎるぞ」うなったのは断水公だが、その手の酒瓶をフアリザードが鋭く一瞥するとかれはびたりと口をつぐんだ。

「バハラーム卿、トウグリル卿、はっきり言っておく。能力と忠義さえ示してもらえらなら多少のことは多めにみよう。だが同僚との角の突き合わせだけは以降、許さない。両名ともに、否、ここにいる全員がわが家に仕えてもらわねば困るのだ」

釘を刺してフアリザードがあぐらに戻る。ルカイヤは落ちていた肩掛けをフアリザードの後ろからそっとかけなおした。小さな体が冷えぬように。

どれだけ成長を見せても、ルカイヤにとっては愛し子なのだった。ましてルカイヤは知っている。急な成長の陰には癒えない傷がある。フアリザードは夜に悪夢にうなされるのだ。「車輪の姿をした

多神教の悪魔が追いかけてくる夢だ」と、起こしたルカイヤにしがみついて少女が震えながら打ち明けたのはたった数日前のことだった。

(いましがたの威厳だって、八割は虚勢を張りとおしただけのことだろう。まだまだ、この子はおれが守ってやらなければ)

そのルカイヤにとって、もっとも気になるのは……

「ところで……アーガー卿、さきほどのファリザード様の婚約の話がありましたか、相手はいずれこの誰なのですか？」

ルカイヤは手のひらの下のファリザードの肩がぎくりと固くなるのを感じた。

発言したのは諸侯の一人であった。厳粛に引き締まった場の空気を変える気遣いでもあったろうが、瞳に好奇心と懸念が光っている。懸念はルカイヤも同じで、彼女はすぐに耳に神経を集中させた。

(そうだ、誰なのだ?)

問われたアーガー卿は病み衰えた面立ちにうつすらと誇らしげな色を浮かばせた。

「そうだな……それも説明しておかずばなるまい。

ファリザード様の相手は、上帝の嫡子だ」

ジンたちの眼の色がさらに変わった。興味から歓喜を混じえた興奮へと。「詳しくお聞かせ願えましょうか」一座を代表する声に、アーガー卿は手元から一枚の紙を取り出した。

「われらの若き主である新イスファハーン公イブン・ムラード様は、帝都バグダードにあって上帝と行動をともししておられる。そのかれが、 剣 の軍に帝都が完全包囲される直前に、伝書鳩を飛ばしてテヘラーンに重要な文書を送ってきた。

それがこれだ。すなわち公領全土に抵抗をうながす檄文であるが、そのなかでイスファハーン公家と、現帝室であるダマスカス公家との縁組を告げられている。これは公的な決定である。なにしろこの文書には上帝ご自身の認可の印が押されているのだ。

書かれていることによればまずイブン・ムラード様ご自身が上帝の長女であるライラ姫と。

そしてここにおられる御妹のファリザード様を、上帝の長男であるセリム太子と娶^{めあわ}せることになっている。

イスファハーン公家とダマスカス公家の同盟はこれでいよいよ強固なものとなった。内乱が終わればわれらは大円城で二組同時の結婚の宴に参加することになるう。いや、エラム様が無事に戻られれば、三組となるかもしれん」

これはたしかに驚喜に値する話であった。帝室の長男長女がどちらもイスファハーン公家の子らと婚約したというのだ。

「なんと喜ばしい！ これ以上の良縁はない」

「ああ。時勢が時勢でなければ三日三晩の宴を開いて慶事を祝うところだ」

諸侯らがはばかりのない歓声をあげる。ルカイヤはファリザードにそつとささやいた。

「ファリザード様、婚約のことは……」

「知っていた。あの文書はテヘラインに入ったときに見た」

ぼそつと答え、ファリザードはうつむいた。物思いに沈む面持ちであった。しかしながら立って異を唱える様子はないのを見て、ルカイヤはひとまず胸をなでおろした。

（よかった。この子はやはり成長している。ことの軽重をわきまえているようだ）

もしもファリザードが人族の愛人にこだわって、そのことを理由に兄の決めた婚約に逆らうような運びになっていれば、単なる醜聞ではすまないところだった。

幸いにもルカイヤが乳を含ませた子は、思っていたよりずっとものの道理をわかっていたとみえる。

（完全に安堵はできないが……）

うつむくファリザードは無意識なのか胸の前に左手をやり、そこに下がった首飾りの石を握りしめている。治癒石はしよせん道具であって装身具ではなく、大事な席にふさわしい飾りとは言えないのに、彼女はそれを身につけてきていた。

それを見るとルカイヤは不安に胸がうずくのである。

館の主人であるアーガー卿が手を叩いて、召使を呼んだ。料理を温め直すようにとの命令である。

「話が長引いてすっかり料理が冷めてしまったな。諸卿よ、われらの南下作戦については昼餐ののち細部を煮詰めようではないか」

.....

急報が入ったのはその日の午後だった。南下する軍の補給経路・編成・万一の場合の方針などの大枠を決める話し合いが終盤にかかったところである。

館の中庭に乗り付けた馬から転がりおちるように伝令兵が下り立ち、会合の席へ激しい勢いで乗りこんできたのである。その荒々しいほどの余裕のなさ、よもや伝令をよそおった刺客かとルカイヤが警戒したくらいだった。

「馬鹿者、なにを慌てている。諸侯会合だぞ。緊急の報せでももう少し穏やかに踏み込め」叱咤して伝令兵を恐縮させたのは断水公バハラームであった。

「失礼、なにか変わったことがあればいつでも報告を持ってこいと命じていたもので……それで、なにがあった」

伝令兵がすぐにかねのもとに駆け寄り、ささやいた。広間の中の者たちは、杯を傾けながら報告を聞くそのジンが突如としていっさいの動きを止めたのを見て、不安にかられた。

かつかつと、トゥグリル卿の雄鶏が皿の炒り豆をつつく音がする。それから、「……わが領地からの報だが、良き報せかどうかはなんともしかねるな」断水公は鼻にしわを寄せてうなった。

「サマルカンド公家軍が予定を早めて進発した。十万には満たないが総勢四、五万、その先触れはすでにわが領地を通過したとのことだ。その進路は南西、明らかにここを目指している」

「なんだと？」

「ファリザードが解せないとはかりに眉根を寄せた。

「ちよつと待て、サマルカンド公家はなぜそんな決定をした？　すぐにも援軍が来るのはありがたいが、遠方のかれらにとっては長駆せず南のホラーサーン公領に攻め入るのが無理のない戦略のはずだ。

「進軍時期を早めたことといい、なぜそうまでしてここに来るんだ？」

「それが……サマルカンド公の長子ティムールが、薔薇姫、あんとダマスカス公家との婚約を知って不服を唱えているとのことだ。十中八九、やつらは直談判に来るつもりだろう」

同時刻の市場。バーザール

「ちつ、食い物の値が先週より上がってら」

「どれもこれも価格が急騰していますね」

ホジャがぶつぶつぼやき、同道していたペレウスは相槌をうつた。白羊族の食料を買い求めてその値に顔をしかめたばかりなのである。行き交う人々の顔もどこか不満げ、そこかしこの店頭で押し問答がときたま起きている。

物価高の原因はわかっていた。

「軍が招集されたからなあ」

テヘラーンの内部や郊外に滞在する、北部諸侯が連れてきた四万もの兵のせいである。必要物資を一斉に買いだめされて、ことに食料は品薄になっっているのだった。

市内の井戸から汲まれる水は尽きてはいないが、なぜか食料に追隨するように値段がじわりと上げられている。兵たちが郊外の軍営で独自に井戸を掘ろうとして騒ぎにもなった。「都市の水脈が断たれるからやめろ」と市民が抗議し、「じゃあそっちが売りつける水の値を下げる」と応酬した兵とのあいだで乱闘が起きたのである。

「『カースイムの傭兵四百人がやつと消えたと思えば、諸侯がそれを百倍にして連れてきた。さつさとテヘラーンの近くから離れてくれとみんな願っている』……そう市場の顔見知りの肉屋さんに聞きました」

「へっ。……よく覚えといたほうがいいですよ、殿下。市民のやつらは敵が迫ったら軍になんて都市を離れてるんだ、戻ってきてくれと言いますから」

「市民も軍も険悪にならずにお互い折り合いをつければいいのに……」

「なあに、こんなのはまだまだ険悪なうちには入りませんや。」

「ま、イスファーン公領は平和でしたから慣れてないんでしょうよ、大軍の動員に」

ふわりとその時、香りがかすめた。

ホジャと話しながら歩いているペレウスの鼻に、どこかで嗅いだ花のような香が。

道行くあまたの通行者の匂いのなかで、それは鮮やかにペレウスの嗅覚の記憶に訴えてきた。よみがえるのは、イスファーン公の

館の花々にあふれた庭の……

立ち止まるや振り返ったペレウスを、ホジャが怪訝そうにうかがう。「殿下、どうしましたかね」呼びかけられてもほとんど頭に入らなかった。

衝撃に指先までしびれていた。ペレウスの瞳は、雑踏のなかでかれとすれちがった少女の後ろ姿をとらえている。

(ソバイダ)

2・18・風向きくるくる(後書き)

前書き(本文の上の「」こと「」という部分)は以降、ネタバレにならない程度のことを書くつもりと思います。

2 - 19 炎と泥 (前書き)

ペレウス、不可解な謎と理不尽な壁に突き当たること

ペレウスは身を返して路上を走りだしていた。いましも道行く人々のなかに消えてしまいそうになる背を追って。

流れる黒髪。オリーブ色の肌。

彼女だ。ゾバイダ、ファールス語を覚えてくれた人。

あの日、都市イスファハーンの破壊された館にペレウスが戻ったとき、彼女の姿はそこにはなかった。ヘラス人の使節たちと同じようにゾバイダは消息を断ったのだ。

ペレウスがこれまで彼女のことは探そうとしなかったのは、ゾバイダが奴隷とはいえファールス人であるからだ。どこかに身をひそめたのなら、ゾバイダはヘラス人使節たちよりはうまく立ち回っているはずだ。また、使節たちと違い、彼女にはなんの政治的な力も義務もない。先に彼女を探さねばならない理由はなかった。

けれど個人的な情をいえば、ペレウスは仲間の使節たちよりもよほどゾバイダに会いたかった。民主政都市の者たちは言うつにおよばず、王政の都市の少年たちに比べてもはるかに。

「ゾバイダ！」

彼女は一人ではなく、ほか二人と連れ立って歩いているようだったが、ペレウスの目にはゾバイダしか入らなかった。追いつき、ペレウスは声をかけてゾバイダの腕をつかんだ。

驚いた顔で少女が振り返る。

ペレウスは息をはずませ、喜びに目を輝かせて話しかけた。

「ぼくだよ、ペレウスだ！ よかった、こうして会えて。きみはな

んでここに」

勢い良く手を振り払われた。

笑みをこわばらせ、ペレウスは固まった。

「な……何ですか、あなた」

後じさる少女が、ペレウスにつかまれていた腕を胸前に抱き、疑念と警戒のこもった声を出す。ペレウスは「え……」と立ち尽くすしかない。

（まさか別人だった？）

一瞬そう思ったが、人違いではなかった。「ゾバイダ、どうかしたの？」と口をはさんできた者がいた。栗色の長い髪をもつ肌の白い少女で、やはり奴隷の着る簡素な亜麻布の服を身につけている。彼女と連れだつて歩いてきた一人である。

北方か西方系の蛮族の血らしき栗色髪の少女は、ペレウスを認め「あら」と目を丸くした。言い方を考えるようにちよつと小首をかしげ、にっこり微笑んで、

「ゾバイダ、あなた、この子をうまく釣り上げたわね。……ほら、ちよつと前に街角で豎琴を弾いていた男の子よ」

「うまくって、なんのことですか。わたし、こんな人は知りません」

ゾバイダが振り返って連れれの少女に迷惑げに言う　ペレウスはいよいよ愕然として口を開けた。

（知らない？　な　なにを言っている？）

一歩進み出て、胸に手を当てて言いつのる。

「ゾバイダ、ぼくだつてば。ミユケナイのペレウスだよ。イスファ
ハーン公の館で、この国の言葉をきみに教わつた……！」

だが、ペレウスがどれだけ言おうと、ゾバイダはますます表情に
困惑をあらわにするばかりだつた。「知らないわ」首をふつてさら
に距離をとる。

ペレウスが追いつがるひまもなく、栗色髪の少女がゾバイダとか
れの間になつと立ちふさがつた。

「そこまでにしてね、可愛い豎琴弾きさん」

肌や髪の色こそ違えど、ゾバイダに劣らない美しさをもつ少女だ
つた。歳もまた十六、七と彼女と同じくらいである。豊かな巻き毛
がペレウスの鼻先ではね、ふわりと香りが漂つた。

笑顔で制止する彼女を押しつけるわけにもいかず、とつさに判断
に困つてペレウスは眉をひそめた。

「ぼくはゾバイダの旧知なんだ」

「そうなの。でも、彼女のほうは知らないみたいだわ」

そんなばかな。ペレウスの瞳に狂おしい焦燥が浮かぶのを見て、
何が楽しいのか少女は「うふふ」と笑つた。それから、

「ねえ、ヘラス人を探していたんでしよう、あなた」

言われて、ペレウスは「そうだ」と思ひだした。自らのなさねば

ならないことを。ヘラス本国へ連署で公式文書を送らねばならないのだ。

栗色髪の少女に通せんぼされながらも、その場からもどかしげにゾバイダに向けて叫ぶ。

「ゾバイダ、聞いてくれ！　ぼくはヘラス人を探している。きみがぼくを知らないと言いはるならそれはいい、せめて、ぼくのほかの使節たちがどうなったのか教えてくれ！」

だがいくら言ってもゾバイダは困りきった顔で黙るばかりであり、

「苦悩の先に答えが見つかるわ」

代わりに、声を小さくして間近で答えたのは栗色髪の少女だった。虚をつかれてペレウスは眼前の少女をまじまじと見た。

何を言っているのか　無視すればいいのだろうかと思ったとき、言葉を彼女が継いだ。

「悩みなさい。そうすれば、あなたの求めるものはもつすぐちよつとずつ手に入るわ。真実も力も、同郷人たちの行方も。それが喜ばしいものをあなたにもたらすとは限らないけれど。」

そのことを、いつ伝えてあげようかと思っていたの。ふふ、いい演奏だったわ、豎琴弾きさん」

吐息のみでささやく唇が妖しい笑みを含んでいる。ペレウスはぎりつと奥歯を噛み締めた。

「煙にまく気か？　あなたの言っていることは皆目意味がわからないー！」

「わからなくていいの。宣告はただありがたく受け取りなさいな」
ホクム

呆然としたペレウスの肩を、強い力で誰かがつかんだ。

「いつまでくっっちゃべっている」

さえぎったのは、黒い布を頭からすっぽりかぶった者だった。それはゾバイダに並んで歩いてきた最後の一人であり、顔すら見えなかったが、肩をつかむ手がごつごつとしているところから、男であろうと思われた。

「小僧、この奴隷たちに近寄るな」

押し殺した声は奇妙にくぐもり、伸ばせば高いであろう背は丸まっ
つている。黒づくめの男は、「今後はこいつらを見かけても話しかけるな。二度とだ！」と妙に強めに念を押し、ぐいとペレウスを押しやった。よろけるかれへと栗色髪の少女がいたずらっぽく手を振り、踵を返した。

黒づくめの男がゾバイダと栗色髪の少女をつながし、足早に去っていく。ペレウスの後ろからは、追いついてきたホジャの「どうしたんですか」という声が響いた。

.....
.....
.....

夕闇に包まれてペレウスは煙を嗅いだ。かれは白羊族の馬を借りて市壁の外に出たところであった。

その眼前では、テヘラーン郊外に広がる野営が、暗くなりつつある空に炊事の煙を充満させている。

各都市や農村から召集された兵は四万、それだけの数が集うただの野営ですら壯観だった。天幕が身を寄せ合う羊の大群のように原野を覆い、あちこちに各諸侯の旗印がひるがえっている。赤々と角灯や焚き火が燃えていた。

常ならば興味をおぼえて観察するところだが、ペレウスは馬に足を止めさせることなく天幕の前を通りすぎた。兵たちのじろじろと遠慮ない視線も気にならない。それほど少年は心をさまよわせていた。

野営地を突っ切ってからは、人をはねる心配もないとあって存分に馬を走らせだす。

人のいないところにペレウスは行きたかった。テヘラーン市内にはいたくなかったのだ。あの都市にはフアリザードがいる。彼女のいる近くで、ゾバイダのことを考えるのはためらわれた。その理由ははつきりとはわからなかったけれども……

やがて馬を止めた場所は、索漠とした大地を風が蕭々しんしんと走り抜ける場所だった。

足元の砂には、おびただしい砕けたレンガのかけらや朽ちた木材が混じっている。古い町の跡かもしれない。

(ここでならゆっくり考えを巡らせられる)

馬の背を下り、ペレウスは腰かけにちょうどいい岩に座りこんだ。

(なんだったんだ、昼間のあれは)

表情を上げらせる。

ゾバイダがかれに見せたあの反応は、理解しがたいものだった。

彼女が仮に嫌悪なり恐怖なりの感情を面に浮かべていれば、それに悲しみはしても、ペレウスはここまで困惑はしなかつたろう。なにかの事情があつたのだらうと推察することができたからだ。

直面しているのは、それよりはるかに不可解な事態だつた。ゾバイダの顔に浮かんでいたのは、知らない相手に話しかけられたときの純粋な驚きと戸惑いだつた。

「ゾバイダはぼくを記憶していない」

ふいに言葉が口をついて出た。薄々と、いや、はつきり悟つていたことが。

(そうとしか思えない。でも、そんなことがありうるのだろうか?)

まだしも、知らないふりをしたというほうが自然ではないだろうか。それにしては演技がうますぎたし、彼女がそうする理由も思いつかなかつたが。「いくら考えたつて、どうにかなりそうもない」ペレウスはつぶやく。ふと、ゾバイダのかたわらにいた栗色の髪の乙女のことには思いが及んだ。

(悩めと言つたな、あの女の人は)

ペレウスは眉をひそめた。

何かひっかかっている。

何か

馬のひづめが地を踏む音が、ペレウスの思考を中断させた。振り向くと、たたずむ騎影がすぐそこにあつた。

「貴様とはちょうど二人きりで話がしたかつた、人の子」

吹き渡る風のように冷たく刺す声だった。馬上の軍装の人影には片腕がない。よく目をこらして、相手がジン族の女性であることにペレウスは気がついた。

一回だけその女を見た覚えがあった。

「あなたはたしか、ファリザードの……」

「乳母を務めたルカイヤだ。それより貴様、ファリザード様を気安く呼び捨てにするな」

後をつけてきたらしき相手にのっけから頭ごなしに言われ、ペレウスはむかつとした。

「友人の名を口にしてはならないんですか？」

「友人か」ルカイヤは奇妙な目をしてまじまじとペレウスを見やっ
た。

「真に友情を抱いているのならば、貴様はファリザード様の名を呼ぶべきではない。今後一切あの子に近づくべきではない。貴様の存在はイスファハーン公家にとって迷惑だ」

一方的な物言いだった。

ぼかんとしてから、勃然と怒りが胸を突き上げ、ペレウスは言い返した。

「迷惑かそうでないかは、ファリザードが決めることでしょう。なぜあなたが口を突っこんでくるんですか」

一瞬、ルカイヤの切れ長の目に憎悪に近い激情が燃えた。ペレウスははっとして身を引く。ルカイヤは馬から飛び降りると、鞍に手を伸ばし、前部に結わえつけてあった手槍をつかみとったのである。

「小僧、ジンの愛がどんなものか知らぬのか。」

あの子が貴様をはねつけることはない、それを知っていながらその言を吐いたのではあるまいな。そうなら貴様は恥知らずだ」

ルカイヤの詰問に、ペレウスは言葉につまった。

たしかにそれはそうだ。ジンの愛がかつてユルドウズに説明されたとおりの代物ならば、ファリザードに選択させるといふペレウスの言い方は、相手に卑劣と受け取られてもおかしくはない。本人の自由意思による決定を尊重するのはヘラス式だが、ジンとは文化どころか種族特性が違うのだ。

槍先をかれに向けてルカイヤが言った。

「あの子をどうやってたぶらかしたか知らないが……起こってしまったことは取り返しがつかん。そのことで貴様を処断するつもりはない。」

だが、貴様の存在がファリザード様の体面に傷をつけることは受け入れがたい。誓え。あの子に別れを告げ、二度と近づかぬと。おとなしく誓うならば無事に故国に帰してやる」

ルカイヤの行動は逆効果であった。ペレウスは他人から脅迫、強要されることを何よりも嫌っている。ひるみよりも怒りが上回り、かれは月明かりに光る手槍の先端ごしにルカイヤをにらみつけて言った。

「なぜぼくがいるとファリザードの体面に傷がつくんだ。ファリザ

「ドがぼくを……その……ぼくと親しくしてくれるからといって、それが知られると問題になるのか」

「当たり前だ！ 並みのジンでも嘲笑の的になるものを、ましてやイスファハーン公家の娘だぞ。人族の愛人を飼っているなどと知られてみる、あの子の一生に取り返しがつかない汚点がこびりつく」

その侮蔑のこもった言い草は、ペレウスの怒りをさらに募らせた。拳を固く握りしめてかれは尋ねる。

「……あなたはクタルムシュさんに助けられたんだろう。かれだつて人族のユルドウズさんを選んだんだぞ」

「痛ましい話だ」沈痛な声音に変わつて、ルカイヤはそう言った。

「クタルムシュ卿には大きな恩がある。救われたおれがかれの選択を否定するのは間違いであろう。だがそれでも、おれはフアリザード様に、クタルムシュ卿の轍を踏ませるわけにはいかぬ。

クタルムシュ卿は栄達を棒に振り、親族からは縁を切られ……おれのような、否、おれ以上に人族を嫌うジンからは冷ややかな目で見られる。人に唾棄するジンの数は決して少なくはないぞ。

おれがあの子のそんな未来を見たいと思うか。

もう一方には、いずれあの子が皇后となつて帝国全土に君臨する輝かしい未来があるというのに！」

ルカイヤが言い終わればすぐさま言い返そうとしていたペレウスは、最後の台詞に殴られたような衝撃を覚えて目を見開いた。

「皇后？」

「あの子は帝室とイスファハーン公家を結びつけるために上帝の太

子と婚約した。あの子もそれを受け入れているようだが、もしも貴様が何かすれば揺らがないとは限らん。

婚約は 剣 に対する同盟ゆえの成り行きだが、同時にこれは最上の縁談だ。貴様のごときちっぽけな人の子が妨げてよいものではない。貴様がフアリザード様の子宮錠を初めて浮かせた男だろつと、絶対に邪魔はさせん。

いまならばまだ取り返しがつく。フアリザード様は悲しむだろうが別れを受け入れるだろう。時がたてば少しずつ笑顔を取り戻し、真つ当な幸せを手に入れられるはずだ」

ペレウスは言葉を失っていた。昼間の出来事よりさらに、脳裏が驚愕に塗りつぶされていた。

厳しい表情のルカイヤがかれに近づき、穂先を心臓の上にぴたりと擬した。

「われらジン族は火炎の精であり、貴様ら人族は唯一神が泥よりこねあげて造った存在だと伝わっている。

炎と泥とで釣り合いがとれるか。

もし貴様を伴侶として選ぶようなことがあればフアリザード様はジンの中で白眼視され、それは貴様が死んだそのあとも続くのだ。小僧、貴様はあと何年生きる？ 五十年か、七十年か？ ほかのすべてと引き換えにしてフアリザード様が手に入れるのは、わずかそれだけの期間の幸福なのだぞ」

手槍の穂先よりもはるかに鋭く、その言葉はペレウスの胸を刺した。

寿命の違いのことは、いままで深刻に考えていなかった。かれは本気でフアリザードとの結婚のその先を考えたことはなかった。否、この内乱の間は棚上げにするべきだとすら思っていた。

甘かった。

月明かりよりも青ざめたペレウスに対し、隻腕のルカイヤはそこで初めて罪悪感の色を瞳に浮かべた。

「……悪く思つな、どうあつても諦めてもらわねばならぬのだ。

ファリザード様に貴様自身の口から別れを告げると誓え。そのうち、今夜にも貴様を北方のイムレットイ侯国へ送り出し、そこからヘラスへと送り返してもらつことにする……」

納得できないだろうが、貴様だけに失わせるわけではない。貴様が誓うなら、おれも代わりに唯一神にかけて誓つてやる。内乱が収まったのち、おれとおれの一族が力を貸せることがあれば、ひとつだけ必ず手を尽くして叶えてやろう。殺してほしい仇敵、手に入れたい宝、あるのならば言うがいい。ジンの美女を手に入れかねたことが惜しいならば、おれの身ひとつで満足するがいい。貴様にファリザード様を自発的に諦めさせるためなら、貴様の一生程度の時間、婢女はしためとして仕えるくらいの代価は払つてやる。むろん嫌だし、わが身の名誉は綺麗さっぱり消え失せるだろうが、誓いは守る」

淡々と、味気ないくらいに静かな声でルカイヤは告げた。ペレウスの心臓に突きつけられた刃は、覚悟を示すかのようにわずかの震えもない。

それに対して、ペレウスは

顔を上げ、齒を食いしばった。

（炎と泥だと）

かつてこの帝国に感じていた敵愾心がふたたびのつてゆく。

それは眼前のルカイヤが代表する、ジンの理不尽な価値観への反発だった。再び高まった敵意が、かれに危険な言葉を言わせた。

「去ることをぼくが拒んだら？」

「ほっ」

ルカイヤの瞳がきゅっと細まった。

2・20 次から次へと（前書き）

ペレウス、まったく嬉しくない争奪戦の標的となること

2 - 20 ・次から次へと

「やむなし。その場合はここで殺す」

抑揚のない声とともに、ルカイヤの持つ手槍がじわりと進んでペレウスの肌食い込んだ。

本気の脅しかはったりか、ペレウスは時間を稼いで判断しようとした。ルカイヤをにらみつけながら舌を動かす。

「ぼくが不審死をとげたら、白羊族の人たちやファリザードは真相を究明せずにはおかないぞ」

ルカイヤは「ふん」と嘲るように鼻を鳴らした。

「……小僧、足元に散らばる瓦礫がれきに気づいているか。ここは古代都市レイの跡だ。古代ファールス崩壊時にレイの市街は完膚なきまでに破壊された。レイの住民が信仰していた神殿は崩れ落ち、市の命である地下水路は枯れた。レイは再建されることはなく、1.5フアルサング6 km離れた場所にテヘラーンが建設されたのだ。

ここは死の土地、掘ればおびただしい骨と地下水路であった空洞が出てくる。枯れた水路の中に、死体ひとつくらい隠すのはわけもないことだ」

「死体はすぐ骨になるわけじゃない。腐りかけても外傷による死は判別しやすいというぞ。ぼくのむくろが絶対に掘り返されないと思っているのか」

「掘り返されても困らぬ。自分が軍営のなかを通ってきたことを忘れたか、小僧。四万もの軍のなかには良からぬ心を抱く者が混じっ

ていよう。その者らが無用心にも一人でいたおまえを襲ったのだと、ほとんどの者は推測するだろう。

よしんば何もかも明るみに出て、おれがフアリザード様に永遠に許されなくなつたとしても、それが何だというのか？ 貴様を排除することが長い目で見てあの子のためになるなら、おれはそれでよいのだ」

自分の分が悪いことをペレウスは悟つた。

この隻腕のジンは、どうやら掛け値なしに本気のようにだった。ルカイヤの唇が開いて、決定的な一言を押し出してくる。

「死にたくなければ身を退け。これが最後の……」

しかし、その最後通牒は幸か不幸かそこで中断された。新たな闘入者によって。

耳をぴくりと動かしたルカイヤが「何奴だ！」周囲を見回した。包囲されていた。

七人がかれらふたりを取り巻いていた。黒づくめの者が三人、それからそれぞれが酒保商人、軽業師、蛇使い、荷かつぎ人夫の服装をした四人。いずれも顔に覆面を巻いている。

長い耳を不機嫌そうにぴくぴくと動かしたルカイヤが、舌打ちを響かせた。

「……本当に、軍営から後をつけてきた害虫どもがいたとはな」

いまいましてげな声に驚嘆の響きが混じっている。人でごった返す営中とはいえ、鋭敏なジんに気付かれず尾行してきたとは只者ではない。しかも複数なのだ。

悔りがたい、その敵味方さだかならぬ者たちを前に、ペレウスも慎重に身構えた。刀を持って来なかつたことがつくづく悔やまれた。

(盾を買っておけばさらによかった)

たぶん、一番いいのはうかつに市壁の外に出たりせぬことであつたらう。

しかし悔いても始まらない。まずは相手の意図を探らねばならなかつた。

「誰だ？ ぼくらにどういった用向きだ？」

ペレウスの最大限の警戒をにじませた声に、沈黙していた七人のうち黒ずくめのひとりがいかに声を発した。

「あなたが勇者ですね」

「え？」

「まだ子供のくせに、大人のジンと決闘したという勇ある者。われらの長からことの顛末は聞いております」

意外なことに、それは若い女の声だつた。見ればたしかに、肌にびつたりした黒衣をまとつた肢体は、ほっそりとしていながら線に丸みを帯び、明らかに女性のものである。

戸惑いながらも、ペレウスは微塵も気を抜かなかつた。表面だけ聞くとほめ言葉のように聞こえるが、その覆面でくぐもつた声音には擲揄ちやくの響きがあつたから。

「わたしたちが用があるのはあなたです、小さな勇者。別人だといふごまかしは通じませんよ。そこにいるわれらが同胞が」と、蛇使いや軽業師を指して、「町中に入り込み、あなたをこの数日監視し

ていたのです。どうやって連れて行くか考えていましたが、自分から市壁の外に出てくれたとは好都合。いっしょに来ていただきましょう。殺しはしませんが、騒いだらさるぐつわを噛ませて縛り上げますよ」

黒衣の女の宣告はルカイヤよりはもの柔らかだが、やはり脅迫には違いなかった。

黒衣の者たちの腰帯にはさまれた剣をペレウスは見て、にわかに警戒を一段階強めた。鞘の形状からしてそれが短めの両刃剣であることは明らかだった。

すなわち、カースイムが使っていた剣と同じものである。

「ぼくをどこへ拉致しようっていうんだ。虜囚の辱めを受けるいわれはないぞ。特に自分たちが誰であるかも名乗れないやつに」

吐き捨てたペレウスに、「ふ」と黒衣の女は今度は明確な冷笑を漏らした。「わかりました。では名乗らせていただきましょう」と慇懃な声が風に乗る。

「わたしたちは山の民です。カースイムと袂たもとを分かった傭兵たちを忘れてはいらっしゃらないでしょうね」

静かすぎる声で言われ、ペレウスはぎくりとした。

「わたしたちがカースイムと手を切ったことを、その場にいたファリザード姫は知っていたはずです。彼女はわれらが長に、山の民の罪は問わぬと約束したそうですね。」

それなのに、約束は太陽がひとつ巡らぬうちにさっそく破られました。テヘラーンに残っていた百名を超すわが同胞は、ファリザード姫の手の者と市民とによって虐殺されました」

女の話す内容に心当たりはあった。

鳩の塔で、たしかにフアリザードはカースイムと山岳民を切り離すためにかれらを免罪した。

しかしその後、迎えが来てテヘラインに入城したとき、都市内にいた山岳民がことごとく殺されていたことを一行は知ったのである。

予想以上の戦果がその行き違いをもたらしたのだ。

都市内部を探るためにフアリザードによって差し向けられたクタルムシュと白羊族は、機に乗じてただの一晩で都市を奪回してしまった。その結果、クタルムシュによって囚われの身から解放されたジン兵と、蜂起した市民とは、残っていた山岳民の傭兵たちを捕虜にも取らず八つ裂きにしてしまっていたのである。それまでの憤懣を晴らすかのように。

凍てつくほどに女の口ぶりは冷たい。

「峰々のわれらが住まいでは、遺族たちの怨嗟の声が噴き上がっております。古来のしきたりに従い、血の代価を払わせると。

みな、約定破りについてぜひ姫ご自身から弁明を聞きたいところだと息巻いております。

ですがさすがに姫に直接手をかけるのは大事になりすぎる。イスファアーン公家を後戻りがきかないほど敵に回してしまつ。

「長やわたしは、そこまでは望んでおりません」

女が何気ない動作で足を前に運ぶと、それに合わせて包囲の輪がじわりと狭まった。

「その少年はフアリザード姫と親しい様子であったと聞きました。小さな勇者よ、あなたならばちょうどいい。ともに驚ノ^{アラムト}巢城へと

同道していただきましょうか」

人質にすると告げられたのである。

ルカイヤがペレウスを見つめて思案する顔つきになった。こいつを置いてこの場から離脱するべきか、という内心の迷いが表情に表れている。

ペレウスは無然とせざるをえない。放逐か死かをルカイヤにこの場で選ばれずにはすんだが、助かったとはどうも言えない。新たな災厄に直面しただけであった。

「……誤解です。聞いてもらえませんか」

かれは手を振って説得を試みた。相手の怒りに理由があると知ればこそ、おのずと言葉が丁重になる。

「テヘラーン奪回はファリザードがあなたがたと顔を合わせている夜のうちにとうに起こっていたことです。山岳民の虐殺は、ぼくらにはどうしようもなかった」

ルカイヤもまた、山岳民たちを納得させる必要を感じたらしかった。黒衣の女へ向き直り、変わらず傲然たる口調ながら説きはじめる。

「……貴様らがカースイムと分離したという報せが入ったのは翌日のことだ。それまで山岳民は反逆者と結託してわれらを苦しめていた敵でしかなかった。先に仕掛けてきておいて、こちらは仕返しをするなどというのは筋が通らぬであろうが。これは不幸にして食い違っただけの事故だ」

黒衣の女は、ゆっくりとうなずいた。

「われらの長もそう言っていました。おそらく行き違いであろうと」
「……なんだと」ルカイヤがぼかんとして、それから頬を引きつらせた。ペレウスもそれに同調して顔色を変えた。
事故だとわかっているのなら、それでは

「それではこの包囲はなんとしたことだ」

わかっけていて囲んでいるのなら、説得の余地がないではないか。
ルカイヤの問いに、黒衣の女は濡れ濡れとした黒い瞳をきらめかせた。

「血の掟は掟です。行き違いであろうがなかるうが、払ってもらわねばなりません」

覆面からのぞく美しい双眸が細まり、眼光がいつそこの厳しさを帯びる。

「すなわち、わたしたちとあなたたちの和解の条件はひとつしかない。死者の命は生者の命によってしか贖あがなわれぬ」

物騒なことを言い出したとペレウスはひやりとした。ルカイヤが「血の掟とは、山賊風情がまるでジン族のようなことを言うのだな。それで、百人分の復讐を遂げていく気か」と強がった冷笑を見せる。だが、その女が継いだ言葉はかれら二人の予想とは違った。いきなりそれまでの冷静さをかなくなり捨て、激情を叩きつけるように黒衣の彼女は言ったのである。

「いまさらあなたがた百人を殺すとは言いません。求めたいのは、

山の民の幼子たちを無事に取り返してもらうことです。

大領主の家ならば、このあたりに跋扈する人さらいどもをどうにかしなさい！」

ルカイヤが目を丸くする。ペレウスは思わずおうむ返しに訊いた。

「ひ……人さらい？」

「わが民の子供たちが被害にあったのです。

一月前、子供たちは老人たちとともにハザール海近くの里に降りて買い付けを行なっていました。帰途に襲撃を受けて老人は殺され、子供たちの姿はかき消え……わが弟も妹も拉致されました。全力を尽くして探しても今日まで行方は杳ようとして知れません。

イスファハーン公家は幼い子供たちを守ってくれないのですか？
カースイムは、あのジンは少なくとも約束してくれました。北部の鎮定にわたしたちが手を貸せばすぐ人さらいの捜査をしよう。

剣の勝利でこの動乱を早く終わらせてしまえば、剣は犯罪者には容赦ない男だから必ず違法奴隷商を根絶するだろう、と。

わたしたちはなにも金のためだけでカースイムに協力したのではありません」

結局、カースイムの示した温情は、わたしたちを利用するための欺瞞だったようですけれども、そう黒衣の女は鬱々とつぶやく。
気まづげな表情になったルカイヤが言った。

「……テヘラーンに限らず、各都市の市政庁に訴えてみればよかつたろうに」

だが、

「何度も訴えましたよ！ どの都市も、わたしたち山の民の陳情をまともに受け付けてくれませんでした。税は平地に畑を持つ民と同じだけ取るうとするくせに。その税で平地に道路や水路を造っても、山には何も返してくれたことなどないくせに！」

聞き飽きたのです。『イスファハーン公領は現在それどころではないのだ』という言葉は。

自分の家族がさらわれたときに『それどころではない、探している余裕はない』とそう耳にしてみればいい。犬を逐おうように門前払いされてみればいい！」

積もり積もった悲憤を一気にぶちまけた女はいまや涙を浮かべていた。

「声が高い、落ち着くんだ」と山岳民のうち蛇使いに扮していた男がたしなめる。それで頭を冷やしたか、女は息をわずかに荒げながらも声の震えを消してペレウスをにらみつけた。

「少年、あなたを連れていきます。ファリザード姫も、親しい友を人質に取られることで、家族をさらわれた者の気持ち少しはわかるでしょう。彼女が人さらいの捜査に乗り出してくれるのであれば、子供たちが戻った後であなたをお帰ししましょう。」

さあ、話はもうじゅうぶんでしょう。従ってもらえなければ手荒な扱いになりますよ、どうします？」

説得はどうあがいても無理そうだとペレウスは諦めた。

とはいっても逃げることまでは諦めていない。あちらにはあちらの事情があることは理解したが、山へ引立ひきだてられて抑留されるのは願ねがい下げである。

せめてもの抵抗の武器とするため、足元のこぶし大の石を拾おうとする。

ところがしゃがみこみかけたとき、手槍の穂先がペレウスの胸元

にふたたび擬せられた。ぎよつとして動きを止める。

「この小僧を死なせたくないなら道を開ける、山の民」

表情を引き締めて黒衣の女に呼びかけるルカイヤが、ペレウスに槍を突きつけなおしていた。黒衣の女が慌てた様子で「余計なことをしないように、片腕のあなた」と呼びかけてくる。

「身の安全ならば心配しなくてかまいません。あなたはこのままフアリザード姫とアーガー卿のもとに帰らせるつもりです。わたしたちの言葉を伝える者が必要ですから」

「わが身のことは問題ではない。こいつを連れ去らせるわけにはゆかぬ。貴様らに渡すくらいならここで始末してしまつたほうがよい」

なんでそうなるんだよと目を吊り上げて言いかけ、そこでペレウスは悟つた。

ここでかれがさらわれてしまえば、フアリザードは山の民の意図するとおり交渉に応じるだろう。世間の目を顧みずかれを助けようとするはずである。そうなれば、フアリザードの想いの向く先を明るみに出したくないというルカイヤの思惑は破綻しかねない。ならばたしかにルカイヤからすれば、ペレウスを引き渡さずさつさと殺して禍根を断つてしまつほうがましだろう。

「待ちなさい。その少年を殺したらあなたを代わりに人質に取りますよ」

黒衣の女があくまで制止しようとするが、ペレウスはルカイヤの横顔を見て背筋が冷えた。ルカイヤは、凄絶な覚悟を決めた瞳をしていた。

「貴様らの言い分はわからぬでもない、みなに伝えておくと約束しよう。」

しかしこの小僧は貴様らに渡しはしない。あくまで困みを解かぬなら、小僧の心臓に穴があくぞ。おれはそれから貴様らと命尽きるまで戦つてやる。どちらが得か考えてみよ」

強気で押し切ろうとするルカイヤに、山岳民たちが顔を見合わせる。

ペレウスは悪罵を呑み込み、うんざりしきつたため息をついた。駆け引きの道具にされるのは快いとはいえない。

(なんとかどつちの手からも逃れないと)

土壇場での冷静な思考や機転で、これまでもぎりぎり何とかしてきたのである。今回も脳味噌をひねって知恵のしずくを絞りだすしかない。

さりとて、妙案とは、意識してひねり出そうとすれば簡単には浮かばないものである。ペレウスは黒衣の女とやり取りしている蛇使いに横目で視線をやりながら必死に考え

すさまじい風音がしてその蛇使いが頭から「踏み砕かれ」た。度肝を抜かれてペレウスの思考が吹っ飛んだ。

飛び出た目玉が砂にまみれて転がり、赤い飛沫が点々と一同の服に飛び散る。砕けた骨とつぶれた肉と臓物が混然となって悪夢の相を呈する。巨大なのみで脳天から股間までを削り割ればこうなるであろう。

山岳民もルカイヤも、誰もが首をめぐらしてあまりの事態に絶句している。

流星のように落ちてきて蛇使いを踏み殺したジンが、真っ赤な泥でいの中でききこきと首を鳴らしていた。

直前まで人体であったものを踏みしめ、血のぬかるみにホラーサイン将イルバルスが立っていた。

イルバルスは口も利けないでいる一同を見渡していく。

その目がペレウスの上に止まる。心臓がはねるのをペレウスは感じた。

（なんで山地にいるはずのこいつがここに。軍営への偵察？ 軍営から離れた兵を襲っているのか？）

いきなり、周囲で風が起こった。

ペレウスとルカイヤを包囲していた山岳民が、囲む対象を一瞬で変えたのである。手に手に剣を抜き放ち、仲間を殺したジンへと向けて殺到する。

前後左右から連携して、脳天、首筋、肝臓、脊柱、左腕そして右脚を狙った刃がイルバルスに急迫し、そして、すべてが空振った。

同時に山岳民のうち商人の姿をとっていた者が、血を吐いてひっくり返っている。首を殴られたか、喉仏が気管ごと陥没していた。

愕然と振り向く山岳民たちを一顧だにすることなく、イルバルスはすでにルカイヤとペレウスの前に立っている。

ホラーサイン将はタカに変化へんげすらせず、六人一組の刺突と斬撃の隙間をすり抜けたのである。駄賃とばかりに商人の首に一撃を与えながら。

体が大きいのにカースイムよりはるかに疾はやい、とペレウスは現実

逃避気味に頭の片隅で思った。

黒い筋肉の巨軀があごに手をやり、小首をかしげて少年を見下ろしてくる。何かを思い出そうとするかのような仕草だった。ほどなくペレウスの左耳の跡を見て、イルバルスは唇を引いてにたりと頬を歪めた。

(ぼくを憶えている、こいつ)

ペレウスは気丈にイルバルスをにらみ上げながらも、胃がせり上がるような恐怖を感じていた。

元よりここにいる者にペレウスの味方は皆無である。だが、その全員を合わせても、戦力においてはイルバルスの半分も危険ではないであろう。

どう転んでもこの夕方を無事に過ごすのは難しそうであった。

2 - 2 1 ・ 氷砂糖（前書き）

活路思わぬところに開けること

それは幼い日の記憶だ。

豎琴をかたわらに、母のひざの上に座らされ、ペレウスは闘技場での剣闘士たちの試合を見ている。

試合は、すでに闘いとよべるようなものではなかった。

子供の目にも明らかほど、片方の剣闘士が優勢であった。

落ちていて剣を振るうその剣闘士に比べ、敵手はすでに全身傷だらけで、回避も攻撃も動作に切れがなくなっている。

にもかかわらず試合は長引いていた。決着がつかないというより、決着が遅らせられているのだ。

優勢な剣闘士が一撃を与えるたび、もう一方は身を削がれる。血がほとばしって肌を幾筋も伝い落ちる……苦痛の呻きをあげてひざをがくりとつけば、優勢なほうは剣を引き、敵手が立ち上がるのをわざわざ待つのだ。

観客席からは、殺せ、そいつを殺せと人々の叫びが絶えず上がる。観客は敗者の命を奪うことを望んでいた。

母の指がペレウスの眉間にそつとふれた。

声が響く。ヘラス有数の美貌と弾き語りの腕をもつ高名な母の、艶やかで妖しい声が。

あら、坊や、こんなに顔をしかめて。男の子なのに剣闘を観るのが楽しくないのかしら？

楽しいどころか、血なまぐさい見世物にペレウスはとうに嫌悪感

をもよおしていた。奥歯を噛み締めてから、かれは母につぶやくように答えた。

強いほうが、弱いほうをあんなにいたぶる必要はないと思います。早く終わらせてあげたらいいのに。

母のおかしげな笑い声が、した。母の腕がペレウスを愛おしげに抱きしめる。畏にかかった餌を抱擁する蜘蛛のように。

まっすぐない子。そういうところはお父様に似たのね。でもねえ、坊や。早く終わらせてしまったら、とてももったいないじゃない？

振り上げば、ペレウスとよく似た美しい顔には笑いが浮かんでいた。とても明るく軽やかに、春の歌をつむぐ女神のように母は言った。

氷砂糖を彫ったお菓子を口に入れたら、丹念に舌の上で転がしたくなるじゃない。形が溶けて角が取れるまでずつつと舐めしゃぶって……がりつと噛み砕いて飲み下すのは、最後の最後でなくてはね。あの勝っている剣闘士はよくわかってるわ。お客の楽しませ方と、そして自分の楽しみ方を……

黒褐色の肌の下には、破壊的な暴力が筋肉とともにみちみち詰まっている。

耳の跡に触れられて、ペレウスはびくりと肩から頬までをこわばらせた。前触れもなく伸びてきたイルバルスの手が、少年の傷跡を無造作になぞりだしている。

ペレウスを見下ろす物言わぬ戦士の瞳には、愉悦が浮かんでいた。かつて自分が耳を引き千切った少年と再会し、思い出し、愉しげに笑っている。

「触るな」と、どうにかペレウスはかすれた声でつぶやいた。

これに似た感覚を少年は知っていた。

獅子の群れに襲われたときに味わった戦慄だ。こちらを獲物とみなす捕食者と対峙したときの、本能的なおののきだ。

少年は、イルバルスの手を避けなかったのではない。気がついたときには触れられていたのだ。それは速く、さらに恐ろしいことに速いとすら感じさせないなめらかな手の動きだった。

ペレウスはあらためて確信する。

(こいつはぼくを次の瞬間にも殺せるだろう)

ざらりとした傷跡を撫で回される不快感と重なって、吐き気がこみあげた。

だが観念などしてやるものか　とペレウスがイルバルスにいつそう強い視線を返したときだった。

突如として、ルカイヤの手槍がふたりの横から繰り出された。ホラーサーン将の顔面を狙う一撃。イルバルスが首をかしげてそれを難なくかわし、興味の間をペレウスの隣のジンの女に移す。

「おれと戦え、皮剥ぎ公の鳥」

ルカイヤが牝豹のように瞳を光らせて言い放った。

「ひとりで？　無茶だ」思わず止めたペレウスに、

「おれはアーガー様の妖兵^{ジャーン}であり、イスファハーン公家の陪臣でもある。奉公の義務は尽くさねばならぬ。

ホラーサーン公家はわが敵だ」

少年を押しつけてイルバルスの前に立ちふさがり、彼女は隻腕で手槍を引きつけた。対峙したホラーサーン将に向けて構えをとるたちまち槍がイルバルスの下腹部めがけて伸びた。腰をひねったイルバルスがまたもかわす。

鋭く気合一声、ルカイヤは刺突を連続して送りはじめた。手槍が鋼の蛇と化す。

ちろちろと蛇が舌を出し入れするように穂先が前後するかと思えば、一直線に跳びかかるように相手の体の軸へと攻撃が伸びてゆく。猛攻にさらされたイルバルスは後退し、身を傾け、横へななめへ半歩移動して危うい所で槍撃を外してゆく。

その攻防を見ながら、ペレウスは（やはりだめだ）と考えた。

（ぼくにもわかる、彼女の技量は並じゃない……でも）

息もつかせぬ連撃は、しかしことごとくあしらわれていた。イルバルスはわざと刺突がかすめるぎりぎりのところに身をおく余裕を保っていた。まるでルカイヤと事前に打ち合わせた演武をしているかのように。

（遊ばれるくらいに力量が離れすぎている。このままだと）

イルバルスがけりをつけにかかった瞬間、彼女も骸^{ムクム}と化すだろう。……骸、とペレウスは気がついておのれに近いところにある山岳民の死体に目をやった。より正確には、血溜まりに浸されて転がっ

ているはずの武器をである。

かれは駆け寄り、血が手や靴を汚すのに顔をしかめながらそのふところを探った。お目当てのものはすぐ見つかった。山岳民が使う短めの剣。

剣の柄をつかみ、立ち上がったとき、

「わたしたちの武器から手を離さない。それは死者のものです」

背後で黒衣の女の声がして、ひやりとした刃がペレウスの首筋に触れた。

そんな場合かと怒気が沸きかけたが、もはや憤っている余裕すらない。

振り向かず深呼吸し、声を荒げぬよう注意してペレウスは言った。不本意ながら、ジオルジロスの甘言を思い出して応用しつつ。

「ぼくにこの剣を使わせなければ、みんなそろって死者になる。

あなたたちの仲間を殺したのはあそこにいる黒い肌のジンであつて、ぼくじゃない」

「黙りなさい。あのジンは仲間の仇、わたしたちが仕留めます。

あなたは捕虜です。危険にさらす気も、その剣を使わせる気もありません」

一貫して丁寧な言葉遣いではあるが、女はどうやら融通の利かない気質のようだった。

息を吐いて、ペレウスはイルバルスとルカイヤの闘いへと顔を向けた。見るがいいとうながすように。

ちょうどルカイヤが脚を狙って稲妻のように繰り出した槍の穂先を、イルバルスが踏みつけたところだった。

焦ったルカイヤが敵の足の下から槍を引き抜こうとする。力をこめた瞬間にイルバルスが足をひよいと上げると槍がすっば抜け、ルカイヤは後ろにたたらを踏んでよろけた。彼女は激怒して言いさした。「ふざけずまじめに戦

イルバルスのつま先がルカイヤのみぞおちにめりこんだ。

無造作な前蹴りを胃と横隔膜の真上に叩きこまれ、ルカイヤの顔色が変わる。とっさに飛びすった彼女の脚がぶるぶる震え、槍にすがるようにしてがくりとひざをついた。一撃で息が正常にできなくなったのか、唇から漏らすのはよだれと、乾いた風のようなひゅうひゅうと鳴る呼吸音だった。

「足技だけで」と山岳民の誰かがあえいだ。

追撃することもなく、イルバルスは後ろに手を組んで立ち、薄い笑みでルカイヤを見下ろしている。ルカイヤの回復を待つ態勢であった。だがそれは、正々堂々たる態度というよりは……

ペレウスは記憶が刺激されるのを感じた。母の抱擁とささやき声

(あの男はいま、氷砂糖をじっくりしゃぶっているんだ)

固唾を飲んで、ペレウスは背後へと訊いた。幾分かの皮肉を交えて。

「あれを本気で仕留められると？」

黒衣の女は答えない。ペレウスはたたみかけた。

「仕留めるのは無理でも、全員で身を守れば生き延びられるかもしれない。」

共闘しよう」

「……黙りなさいと言っているでしょう」

皮膚に押し付けられる刃の圧力がわずかに増す。しかし声音には躊躇の気配があった。加えて、黒づくめの別の山岳民がペレウスの背後を一瞥し、「その小僧の言うことはもっともだ。いまは戦力を増やしたほうがいい」と忠告を發した。

ペレウスはそれを聞いて決心した。

（大丈夫だ、この人たちも道理を受け入れるはずだ）

恐怖を抑えこみ、首の横の刃を無視して歩き出したのである。

読みどおり、首を掻き切られはしなかった。ひそかに安堵したとき、黒衣の女がペレウスの横に並んできた。やや忌々しげに「……あなたの身柄はあとで押さえさせてもらいますからね」と念を押し、それから彼女は仲間たちに号令をかけた。

「片腕のひとのそばに！」

ルカイヤがよろよろと立ち上がるのに合わせ、ペレウスと残り五人の山岳民はそのかたわらを支えるように集まった。

おや、と言いたげにイルバルスが小首をかしげる。

まだ氣息奄々のルカイヤが苦しげなかなすれ声で「加勢のつもりか、おれの義務とは無縁のやつばらが。寿命を延ばしたいならさっさと散らばって逃げるのが賢明だぞ」と毒づく。

ペレウスは沈黙していた。

かれは会ったばかりのルカイヤに好感は持っていない。先刻からのやりとりを思えば、好感を持てるほうが不思議というものである

う。

それでも、友人であるジンの少女のことを考えれば、見捨てられるものではなかった。

(ここをあなたに任せて置いて行ったらファリザードの顔を直視できない)

心でそうつぶやいて、ペレウスは剣を抜く。

黒衣の女もルカイヤに「義務を果たそうとする美德はジン特有のものではありません。仲間の仇を討つ義務がわたしたちにはありません」と啖呵を切ってから、得物を構えた。

剣六本 鈍く輝く切先が、イルバルスへと向けられる。敵へと剥き出される狼の牙の列か、堅陣を組んだ山羊群の角のように。しばしためらっていたルカイヤが手槍を添えて、七本となった。

「もしあいつが誰かを狙って突っこんできたなら、最初に標的にされた者は命を諦めてください。

代わりにあいつの足をわずかでも止めてくれれば、残りの者が押し包んで手傷を負わせますから」

黒衣の女の指示は壮烈なものだったが、(そのくらいの気構えでないと討つのは無理か)とペレウスは腹をくくった。

(それにこうして防御に専念すれば容易に攻められもしないはずだ)

現にホラーサーン将は、おのれに向けられる剣尖を見ていまや笑いを消していた。ペレウスはイルバルスの表情の変化に希望を抱いた。

それがとんだ勘違いだったとすぐに気づかされるまで。

敵の笑みが消えたのは警戒からではなく、一対一に水を差されて興醒めしたがゆえだと理解させられるまで。

最初は光だった。

イルバルスの鎧の胸甲の中央で、赤光を放つものがあった。

残照の反射かと思ったが、夕陽はすでに沈んでいる。ペレウスたちがいぶかしくて目をしばたたく間にも、その光は膨れ上がっていた。

アンタレス
サソリ座の星のような赤い不吉な輝きが、突如目を灼き

次の瞬間、世界が変じた。

ペレウスの足がずるりと後ろに滑った。驚愕する間もあらばこそ体重が虚空に投げ出される。刹那の間、脳裏にいくつもの認識の火花が散る。

(倒れる)

(後ろへ引き倒される)

(ちがう、だれもぼくを引っ張っていない)

(人の手はぼくに触れていない)

(引っ張っているのは落ちる力だ、これは落とし穴だ)

(それもちがう、足元が崩れたわけではない)

(地面が縦に持ち上がっている　地平線へ向けて落ちる！)

現実を素直に認識するまで数瞬、ようやくそれができたときには、

ペレウスは地面に取りすがっていた。傾斜のきつい崖がけと変じた大地に。

他の者達と同じく地面に刃を突き立てて。滑り落ちていく馬たち同様に叫びをあげながら。

おびただしい土砂が滝となつて頭上からざあつと浴びせられる。目を開けられない砂煙の中、断末魔が骨の碎かれる音とともに間近で起こつた。

(だれか死んだ!?)

変化が唐突に急停止する。崖が大地に戻る。

呆然と身を起こしてふりむいた一同の視線の先には、頸骨をへし折られてすでに絶命した山岳民　荷かつぎ人夫の格好をした者が岩にひっかかっている。馬は三十ガズもの遠くまで滑っていて、ところどころ骨折したのか立つこともできず哀れっぽい声でいなくなっていた。

なんだこれは、とペレウスはあえいだ。

もはや共闘どころではない。まともに立つことすらできないのに戦術うんぬんもない。

視線を転じて見あげれば、暗い空に舞いあがる夕方の影があつた。いったん大地から離れたイルバルスの姿が、すぐ急降下して“変化”を解く。そのジンは岩に手をかけて自らの体を固定した。

二度目の赤い光。

またあの現象が来る、とペレウスは総毛立つた。考える間もなく、敵を刺すはずだった剣を地に突きたてて伏せる。無防備なところを襲われるとわかっていても、まず墜死しないためには他にどうしようもなかった。

地面がふたたび急峻な崖となる。土砂の滝。息さえつけない。砂煙のなかでペレウスが思ったのは、

(しゃぶるのをやめさせることはできた、でも、まとめて噛み砕きにかかれてる)

すぐ隣で「ああっ！」と悲鳴が上がった。

薄目を開けてかろうじて横を見たペレウスの目に映ったものは、黒衣の女の体がずり落ちていくところだった。刺した地面が柔らかすぎたようで流砂となっており、剣が体重を支える役に立っていない。大地の傾斜はますます垂直に近くなっており、女はまもなく落下して死ぬか大怪我を負うだろう。

反射的に片手を伸ばしてペレウスは彼女の右腕をつかみ……瞬間、しまったとほぞを噛んだ。彼女が完全に落下しはじめれば自分も支えきれずいっしょに落ちるのは目に見えている。

おまけに、女が動転して左手でペレウスの腕をばしばし叩きはじめた。

「やめて、は、放しなさい！ 触らないで、いまずぐ放してっ」

助けようとした矢先に暴漢扱いである。本人の希望だしいつそ放そうかとほんのちよつと真剣に考えたが、

「放すな、ぜつたいに放すな」

崖面にとりつく他の山岳民がペレウスへ向けて泡を食った叫びをそろえた。

「その方を落とさないでくれ！」

繰り返し懇願した山岳民の男に「落とすなっただって……」ペレウスはなにか言葉を返そうとして、顔色を激変させた。警告する。

「上から来てる、逃げて！」

男たちの頭上からイルバルスが崖面を滑り落ちてくるのが見えたのだ。

黒い巨体が片手を地面について滑落の速度を落としながら手を伸ばす。ひとりの山岳民の頭がとらえられる。首がねじられてごきごきと嫌な音が響き、顔が真後ろを向いた死体がひとつ落ちていく。「責様！」軽業師が横から蹴りを飛ばしたが、それが当たる前に自分の顔面がひじで打ち抜かれる。物言わぬ捕食者は、顔がぐしゃぐしゃになって絶息した軽業師を蹴落とした。

ペレウスとルカイヤと山岳民ふたり、残り四人。

（ぼくの番は次か、その次か？）

ペレウスは青ざめて唇を噛んだ　　が、死の翼がその場で残りの者たちを包むことはなかった。

崖となった大地が地響きを発し、突如として砕けたのである。それまでの幾倍するかわからぬほどの土砂が注ぐ。

地割れがついに起きたのは奇跡でも偶然でもなかっただろう。驚倒しながらペレウスはルカイヤが先刻語ったことを思い出していた。

（“……ここは古代都市レイの跡だ……” “……掘ればおびただしい骨と地下水路であった空洞が……”）

イルバルスの縦横倒転の力が、地下に空洞を秘めた大地に負担をかけすぎたのだ。

ホラーサーン将もさすがに意表をつかれた顔となってタカへと変じ地上を離脱する……それと同時に万物の落下する方向も通常のごとくとなる。

すなわち舞い上がるタカの後ろ姿を見ながら、ペレウスたちは暗い地下へと落ちていったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6066q/>

ジンニスタン 砂漠と海の物語

2011年11月1日00時57分発行